

# 災害復旧・復興期における臨時災害放送局の実態研究

2017年3月  
新潟大学大学院  
現代社会文化研究科  
大内斎之

# 災害復旧・復興期における臨時災害放送局の実態研究

## 目次

はじめに	5
<b>第1章 災害と情報</b>	8
<b>第1節 東日本大震災と臨時災害放送局の長期化</b>	8
<b>第2節 東日本大震災前の災害社会学の研究動向</b>	9
<b>第3節 東日本大震災前の災害情報論の研究動向</b>	11
<b>第4節 東日本大震災前の災害情報論と放送制度</b>	13
1-4-1 災害情報の伝達体制	
1-4-2 コミュニティFM制度化の経緯	
1-4-3 コミュニティFMと臨災局の相違点	
<b>第5節 東日本大震災後の災害社会学の研究動向</b>	17
<b>第6節 東日本大震災後の災害情報論の研究動向</b>	20
<b>第7節 東日本大震災後の臨災局の調査</b>	24
<b>第2章 やまもとさいがいエフエム「りんごラジオ」</b>	26
はじめに	
<b>第1節 山元町の概要</b>	27
2-1-1 東日本大震災以前の山元町	
2-1-2 東日本大震災以後の山元町	
<b>第2節 「りんごラジオ」開局までの経緯</b>	29
2-2-1 津波被害のない町	
2-2-2 震災直後の山元町	
2-2-3 開局	
<b>第3節 りんごラジオの日常</b>	37
2-3-1 朝9時から生放送	
2-3-2 送り手と受け手の距離感	

<b>第4節 りんごラジオの放送内容を分析する</b>	41
2-4-1 保存された記録ノート	
2-4-2 災害情報の区分	
2-4-3 『放送記録』の記述の仕方	
2-4-4 放送タイトルの分類	
2-4-5 分類項目による整理	
2-4-6 「行政情報」の内容調査	
2-4-7 「インタビュー」内容の調査	
2-4-7-1 リスナーの発信者としての萌芽	
2-4-7-2 インタビューされた本人（出演者）の分類	
2-4-7-3 「インタビュー」の話の内容調査	
2-4-8 「音楽」の内容調査	
<b>第5節 りんごラジオと選挙</b>	77
2-5-1 町議会中継	
2-5-2 町長選挙に絡む報道特別番組	
<b>第6節 スペース・メディアとしてのりんごラジオ</b>	86
2-6-1 音に無防備なスタジオ	
2-6-2 町民の公共空間としてのりんごラジオ	
<b>第7節 閉局</b>	91
2-7-1 2つの選択	
<b>第8節 まとめ</b>	95
<b>第3章 みなみそうまさいがいエフエム「南相馬ひばりFM」</b>	96
はじめに	
<b>第1節 南相馬市の概要</b>	96
3-1-1 東日本大震災以前の南相馬市	
3-1-2 東日本大震災以後の南相馬市	
3-1-2-1 分断された南相馬市	
<b>第2節 「ひばりエフエム」開局までの経緯</b>	99
3-2-1 震災直後の南相馬市	

3-2-2 開局	
<b>第3節 ひばりエフエムの日常</b>	<b>102</b>
3-3-1 市役所の会議室が仮設スタジオ	
3-3-2 一日3回の生放送	
3-3-3 公平が原則	
3-3-4 リスナーからのクレームでリスタート	
<b>第4節 臨災局としてのひばりエフエム</b>	<b>111</b>
3-4-1 自主制作番組	
3-4-2 市民が情報を発信する番組	
3-4-2-1 「柳美里のふたりとひとり」	
3-4-2-2 「柳美里のふたりとひとり」の分析	
3-4-2-3 生放送	
3-4-3 原発事故に伴う情報と医療に関する情報番組	
3-4-3-1 内部被ばく相談番組「わたし坪倉が、答えます」	
3-4-3-2 災害FMを象徴する番組	
<b>第5節 まとめ</b>	<b>137</b>
<b>第4章 とみおかさいがいエフエム「おだがいさまFM」</b>	<b>138</b>
はじめに	
<b>第1節 富岡町の概要</b>	<b>139</b>
4-1-1 東日本大震災以前の富岡町	
4-1-2 東日本大震災以後の富岡町	
4-1-3 全町民が避難対象	
4-1-4 町の意向調査	
<b>第2節 「おだがいさまFM」開局までの経緯</b>	<b>145</b>
4-2-1 避難所内でミニFM開局	
4-2-2 「町をもたない自治体」の臨災局が開局	
<b>第3節 おだがいさまFMの日常</b>	<b>152</b>
4-3-1 交流スペースの中にスタジオ	
4-3-2 一日3回の生放送	

4-3-3 全国どこでも聞けるタブレット端末の導入	
<b>第4節 臨災局としてのおだがいさまFM</b>	<b>155</b>
4-4-1 「町を失った町民」への情報提供	
4-4-2 方言番組が意味するところ	
4-4-3 方言という音と富岡町の風景	
4-4-4 除夜の鐘と運動会	
<b>第5節 まとめ</b>	<b>183</b>
<b>第5章 臨災局の長期化の実態</b>	<b>184</b>
<b>第1節 長期化する臨災局の段階分け</b>	<b>184</b>
5-1-1 りんごラジオ	
5-1-2 ひばりエフエム	
5-1-3 おだがいさま FM	
<b>第2節 臨災局とコミュニティの関係</b>	<b>187</b>
5-2-1 「サロン」的コミュニティ	
5-2-2 上からの復旧・復興と下からの復旧・復興	
<b>第3節 臨災局の中の双方向性（対面性）</b>	<b>192</b>
5-3-1 中間的・特殊関心のコミュニケーション	
5-3-2 社会的コミュニケーション回路からの分析	
<b>第4節 放送制度としての問題点</b>	<b>197</b>
・注	201
・引用文献	205

## はじめに

東日本大震災を振り返るとき、メディアにとっての歴史的な転換点であったと、記憶される災害だと思われる。臨時災害放送局（以下、臨災局）は、1995年の阪神・淡路大震災を契機として制度化された。当時、マス・メディアが被災者に十分な被害情報や生活情報を提供できなかつたことから、被災者向けの情報提供の放送システムとして、臨時に、一時的なラジオ局として制度化された。以来、2000年の有珠山の噴火、2004年の新潟県中越地震、2007年の新潟県中越沖地震等で臨災局は、災害直後に被害を軽減するための情報を被災者に提供してきた。いわば臨災局は災害時のみに開局できる特殊な放送制度に則つた放送局である。そして臨災局の制度化に際しては、設置条件は決めたものの、廃止に関しては法的にあいまいなままにされてきた。それは、災害が常に個々それぞれにおいてまれな出来事であり、被害の軽減の範囲をどう法的に規定するか難しさがあったからである。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、地震に加え、津波、そして原子力発電所の事故（以下、原発事故）と複合的で、しかも広範囲な、これまでに経験したことのない災害であった。被災地には、既存のメディアが充分ではない地域が多く、住民にとって重要な情報連絡の命綱ともいえる防災無線設備が津波で壊滅的打撃を受け、自治体は情報提供の手段を失った。そこで多くの自治体が情報提供システムのために設置したのが、臨災局であった。臨災局が開局したことで、流言蜚語が飛び交う被災地に正確な情報が提供され、被災者に被害情報、生活情報、避難情報等が提供された。

東日本大震災は、地震、津波、原発事故と複合的災害であり、加えて広範囲でもあるために、復旧・復興においてもこれまでの災害とは異なり、長期にわたることになった。臨災局もこうした現状を反映し、当初の正確な情報を提供するだけでなく、地域で何らかの役割を果たすことで、放送運営が長期化することになった。本稿では東日本大震災後に設置された臨災局の災害復旧・復興期におけるこうした実態を明らかにするために、聞き取り調査や参与観察だけではなく、放送内容の分析などの調査を行った。事例として、3局の臨災局を調査対象とし、災害社会学、災害情報論、メディア論、コミュニティ論と関連づけながら、臨災局の運用が長期化するメカニズムや構造を明らかにしようとするものである。その上で、臨災局の長期化に伴い、放送制度の観点からしか議論されてこなかった先行研究を批判的に捉え、放送制度の見直しといった議論ではなく、臨災局を成り立たせ

ている社会的文脈を含めたはば広い、災害情報論や災害社会学にまで視野を広げた議論の展開の必要性を指摘する。

本稿の構成であるが、第1章ではこれまで「災害と情報」についてなされてきた先行研究を概観する。また、1995年に臨災局が制度化されるに至るまでの経緯とこれまでの設置及び運用、さらに臨災局に関する先行研究の概説をとおして、本稿の研究を位置づけた。

第2章から第4章までは事例研究である。東日本大震災で設置された3局の臨災局を取り上げる。まず第2章では、宮城県山元町に設置された「やまもとまちさいがいエフエム（以下、りんごラジオ）」で、開局から半年間の放送内容を分析するとともに、臨災局では取り上げないであろう町議会の生中継や町長選挙などの特別番組を概観しながら、復興との関わりについて考察した。

続いて第3章では、福島県南相馬市の「みなみそうまいがいエフエム（以下、ひばりエフエム）」を取り上げる。南相馬市は、原発事故の影響で放射線量によって居住地域が分断された市である。そこでひばりエフエムは、これまで、医師による放射線に関する相談番組、放射線量を毎日市内120ヶ所あまりの数値だけを読み上げる番組、さらには町作りを話し合う一般市民によるトーク番組や対談番組など多種多様なプログラムを制作している。こうした番組内容を考察し、ひばりエフエムの放送内容から、従来の臨災局の役割が変容していることを論証した。

第4章では、福島県富岡町に設置された「とみおかさいがいエフエム（以下、おだがいさまFM）」の事例である。福島県富岡町は原発事故の影響で、町内全域が帰還困難地域に指定され、おだがいさまFMは被災地に設置できず、避難地に設置されるという初めてのケースとなった臨災局である。そこで、おだがいさまFMが全国に避難している町民に対し、町の情報を提供するとともに、方言番組、除夜の鐘、小中学校の運動会を放送することで、町の風景を音として発信していることを論証し、町民に提供している情報にどんな効果があるのかについて分析をおこなった。

第5章では、事例3局の臨災局の長期化の実態調査をもとに、吉原直樹が福島県双葉郡大熊町で実施したモノグラフ調査（吉原, 2013）を援用しながら、上から進められる復旧・復興事業に対して、どう被災者である地域住民の要望を臨災局がすくいあげ、対話と対峙をする場を提供しているのか、臨災局とコミュニティとの関係はどういう構造をもつているのか、さらには、こうした構造のなかで情報伝達のシステムとして一方方向を有する放送が、どのように双方向な形態を取り込んでいるのかを考察し、長期化している実態の

メカニズムを明らかにした。

なお「復興」という言葉の意味は、あいまいで多義的であるが、本稿においては復興を  
「災害によって衰えた被災者および被災地が再生すること」(宮原, 2006, 5) とする。

## 第1章 災害と情報

### 第1節 東日本大震災と臨時災害放送局の長期化

東日本大震災という未曾有の大災害を前に、これまで考えられなかつたような様々な事態、問題が生まれている。こうした問題の一つとして、臨時災害放送局（以下、臨災局）の長期化がある。

臨災局は、1995年2月に制度化されて以降、2000年の有珠山噴火、2004年の新潟県中越地震、2007年の新潟県中越沖地震、そして東日本大震災においては、岩手、宮城、福島、茨城の4県に30局が設置された。その後は2011年の新燃岳噴火、2013年の島根・山口大雨、2014年の豪雨災害、2015年の関東・東北豪雨、さらに2016年の熊本地震と毎年のように設置された。

ところで、現在、東日本大震災後に設置された臨災局のうち、岩手県釜石市のかまいしがいがいエフエム、気仙沼市のけせんぬまさいがいエフエムとけせんぬまもとよしさいがいエフエム、宮城県のやまもとさいがいエフエム、福島県の南相馬市のみなみそうまさいがいエフエム、富岡町のとみおかさいがいエフエムの6局が運用を続けている（2016年10月31日現在）。運用日数をみると、東日本大震災以前は、有珠山噴火に伴う虻田町（現洞爺湖町）の329日が最長であったが、東日本大震災で設置された臨災局は全30局中、2,000日を超える局が5局、1,999日～1,000日が10局、999日～500日が6局、499日以下が9局で、1,000日を超える局が半分あり、長期にわたって運用が続けられ、もしくは今現在も続けられている。

臨災局は、1995年1月17日におきた阪神・淡路大震災をうけ、直ちに総務省が「非常時における放送局に関する臨機の措置について」という大臣の指示により本省（旧郵政省）局長が地方機関（阪神・淡路大震災の場合は、近畿総合通信局）に発出する通達によって誕生した。第一号となった兵庫県のエフエム796 フェニックスは1995年2月15日から3月31日まで、被災地域向けに情報を発信した。もともとは被害を軽減するために被災者に被害情報や生活情報を伝達するために、という理由で設置され、一時的、短期的なものと考えられていたが、東日本大震災という大災害の中で、長期化し常態化しつつある。しかし、なぜ、特殊、一時的なものであるはずの臨災局が、長期化し一般化しているのか。そのメカニズムは何か、送り手と聞き手である被災者との関係にはどういった問題関心が、特殊なあり方があるのか、それに対する調査、研究はなされていない。

ここであらためて、臨災局の開局から閉局までを確認する。発災と同時に自治体に災害対

策本部が設置された後、臨災局の開局に向けて機材の調達など設置に必要な事柄が検討され、要員を確保できるのかどうかなど具体的な設置に向けての検討に入る。同時に、自治体管轄の総合通信局（北海道総合通信局、東北総合通信局、関東総合通信局、信越総合通信局、北陸総合通信局、東海総合通信局、近畿総合通信局、中国総合通信局、四国総合通信局、九州総合通信局、沖縄総合通信局）に開局を相談（電波割り当ての可否、無線設備の技術基準適合等を審査して予備免許、免許）し、そして機材の設置、調整の実施（周波数選定、試験電波の発射、混信有無の調査）を経て、開局となり、放送運営が始まる。ただし、すでに地域に既存のコミュニティFMがあれば、すでに機材、要員、総合通信局とのコンタクトもあるために、開局までの期間がスムーズになる。

臨災局は、災害時におけるラジオ局であり、緊急性を要するために開局にむけての書類等の提出は、開局後という措置がとられる。災害という緊急事態に対応するため、必要情報の伝達に主眼をおき、放送事業の経験や専門性は特に問われてない。そして、総務省としては災害に関するラジオということから、閉局に関しては、ラジオ局と被災者との問題であるとして、「所期（期待しているところの）の目的」が達成された時としている。つまり閉局の時期に関しては、当事者である自治体の判断にゆだねるというものである。

## 第2節 東日本大震災前の災害社会学の研究動向

ここでは、臨災局の長期化について議論する前に、まず、東日本大震災までの災害社会学の研究動向をたどってみる。

秋元津郎は、アメリカの災害研究の流れを整理し、戦後から1970年代までを4期にわたくて整理している（秋元, 1982, 222-226）。それによると、「「アメリカ戦略爆撃調査」を中心組織的に都市機能とストレス状況下における人間行動の分析が行われたのが、第1期で1940年代から1950年代初頭としている。」（秋山, 1982, 222）第1期の災害における社会の変化は、自然災害ではなく戦争による災害、つまり空爆というによる災害研究であった。

第2期の1950年代の中葉は、第一期の戦争空爆による災害とは異なり、自然災害を軸として進められた。そして災害時の人間行動の心理的反応の分析研究が中心となり、人間行動に焦点をあてながらも、同時に災害に対する組織対応を視野に入れているおり、60年代に進められる組織研究の基礎準備をした時期であった。

第3期の1960年代は、災害が起きた時の組織対応とコミュニティ変動がテーマであった。その組織対応として実施されたのは、情報伝達や組織間調整、役割の構造、組織活動であつ

た。こうした研究から、さまざまな緊急対応処置が組織化され、救急救援活動や組織的な避難活動が行われ、緊急復旧から復興に向けた取り組みがおこなわれるようになっていった。

第4期の1970年代において、最大の問題は地震予知の研究開発であり、政策と対応して繰り広げられた時代である。「新たな予知の時代を迎えることによって、災害の社会過程の分析にあっても、これまで未開拓であった「前」災害期を組み入れることになるが、これによって災害に伴う社会変動の分析が前災害期から、復旧完了にいたる長期的な局面で可能になった」(秋山, 1982, 225)。

そして、1980年代に入ると、予知や警報システムを踏まえた社会体制が構築される時期となり、組織メカニズムや政策過程とも絡んだ形で防災体制の研究が進展していく。しかし、この時期までの研究は、あくまでも災害直後を中核に据え、災害因が社会に影響を及ぼしていく過程を中心に研究が組み立てられていったといえる。すなわち、地震、洪水、火山噴火などの災害因が社会に影響を及ぼしていく過程を、地表や構造物の揺れ（その他、河川の氾濫現象、噴火による火碎流や土石流など）の発生からたどり、家屋やビルの建物破壊や構造物の家具の挙動、火災の発生・延焼、ライフラインや通信網の途絶などを通じて、人々の死傷や社会組織の分断・機能不全にフィジカル側面から影響を及ぼしていくメカニズムを描いていく方法である。この社会過程に予知や警報などを加えたとき、どのように被災シナリオが変わり、被害の軽減につながるかが、この時期における前災害期に対しての主たる関心であった。

例えば、FEMA (Federal Emergency Management Agency、連邦緊急事態管理庁) は1990年代の中頃にフロリダを襲ったハリケーンで、気象観測器でハリケーンの現状をつかみ進路と想定される各州と緊密に連絡を取り合いながら、なおかつ過去の避難行動やアンケート・データを参考にして、避難が充分に可能なタイミングでの確な時期に避難命令を出す仕組みが確立していったといわれている。このように災害時において、できるだけの情報を迅速に収集、共有し、その情報を的確に理解し活用しながら、判断をするという災害対応システムを実現させたものである。

しかし、一方でペルー地震（1970年）やグアテマラ地震（1976年）、メキシコ地震（1985年）といった大きな地震がきっかけとし、南米での地震に伴う壊滅的な地域ダメージは、災害因の直接的対応だけでなく、被害を拡大させる社会・経済・文化構造が背景に潜んでいるということが問題にされるようになった。そこで、災害をその災害因との関係でとらえるのではなく、災害が災害因をきっかけに、被害が広範に拡大し壊滅的なダメージにつながるの

は、被害拡大のメカニズムとしてヴァルネラビリティ（社会的脆弱性）があり、その解明が重要だということが問題になり、研究が再構築されることになる。

このような脆弱性の概念といっしょに語られるようになるのが、復元と回復力である。復元=回復力概念は、「いわば客観的な環境と条件を見る過程において、見逃しがちな、地域や集団の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力などに目を向けていくための概念装置」としてある。「それ故に地域を復元=回復していく原動力にその地域に埋め込まれ、育まれてきた文化のなかに見ようとする」（浦野, 2007, 40）。

このように1990年代以降の災害の社会学的研究の流れは、災害対応の直接的な制御である一方で、社会に潜む脆弱性と復元=回復力に関わる研究ともなっている。脆弱性や復元=回復力に着目する研究が盛んになる中で、社会学の災害研究のなかでの理論的な問いかけとしては、時空間の広がりのなかで災害現象をどのようにとらえるか、災害事象の時空間を超えた連鎖と広がりをどのように考えるか、そうしたことが問われる段階になってきたのだといえる（浦野, 2007, 33）。

つまり、現在、災害社会学において、災害とは災害時のみが問題になっているのではなく、災害への直接の対応から、その災害からの復旧・復興へと問題が移り、さらに復旧・復興の問題から、どう予防体制をつくり出す必要があるのか、というところへと研究のサイクルが展開しているのである。そしてそのサイクルは、研究だけではなく、防災政策そのものと直結している。吉川（2007, 38）によれば、この研究・政策サイクルは、災害の発生から始まって、緊急段階、応急段階、復旧・復興段階、予防段階という災害過程のサイクルを描く。この緊急段階とは直接被害、拡大、消化、救命等の被害を軽減することである。応急段階とは避難、仮設生活確保、ガレキ撤去等という臨時に一時的に住む避難所の開設、食料、飲料水の確保である。そして次に、生活、地域等の再建という復旧・復興段階と進み、最後は予防段階となる。つまり予防とは、災害メカニズムの解明によって災害対策を事前に施すための工夫という面での防災まちづくりや防災対策等である。このような災害過程のサイクルになる。

### 第3節 東日本大震災前の災害情報論の研究動向

こうした災害社会学の研究動向のなかで、災害情報論はどう展開してきたのだろうか。田中は災害情報論の研究動向について、4つの観点からまとめているが（田中, 2007, 102）、それを災害過程のサイクルのなかで、位置づけながら整理しておこう。

一つ目は、緊急段階・応急段階としての避難行動である。設備をいくら整えても人の命や財産を守ることは不可能であり、最後は避難が必要となる。そしてその契機を与える警報や避難勧告・指示は重要である。この避難指示情報と避難行動との関係は、災害情報研究の中でも、数多くの研究が蓄積されてきた。災害研究の最大の目的が人の命を救うことであり、また、災害情報論のアプローチ自体が地震予知情報への適切な対応行動を促すことにあつたからである。この避難行動を巡る論点について田中（2007, 102-103）は、3点を指摘している。①最も重要なのが「なぜ人は逃げないのか」という点である。この傾向は、「正常化の偏見」という文脈で議論されることが多い。つまり、異常であることを覚知しない、もしくは認めようとしない認知傾向が原因となっているのである、②警報や避難勧告・指示の空振りによる避難行動への影響である。災害発生や進展を予測することは、技術的制約が大きいため、情報の発信方法や発表あるいは表現の工夫が求められるのである、③避難勧告の発令の遅れである。避難勧告・指示の発令が遅れる直接の原因是、災害の推移が曖昧な中で多くの住民を避難させることは行政としては、大きな困難さを伴うと同時に、災害に不慣れな行政担当が多いことも指摘されている。判断がしやすくするために、判断の基準を事前から決めておくことや、災害の状況をレベルで示し、推移をわかりやすくするなどの工夫が必要である。

二つ目は予防段階としての防災知識・防災意識の向上である。防災意識を高くすることは、例えば地震災害での被害を減少するためには、住宅の耐震化が不可欠であるという点、しかし、こうした施設整備を行うこと自体は、住民の合意が必要であるため、防災意識を高めるコミュニケーションが求められる。また、防災教育については、知識が長年にわたり活用されることのないままになれば、意識レベルを高い水準に維持する必要がある。この防災知識や防災意識の向上は、災害情報と避難行動との研究において、同時にはかる必要性が示されてきた。それは、教育という意図的、長期的な情報提供であり、災害のリスクを正しく理解し、適切な行動へと導くには知識が必要だと考えられているからである。そのための論点として3点あげている。①ハザードマップの活用である。河川災害や火山災害では、事前に危険な地域を示したマップが作成され、配布されるようになった、②地域や集団レベルを対象とした防災知識や防災意識の啓発を検討する研究がほとんどなされていないことである。同研究は全般に対象を個人レベルで捉えているものが大半を占めている。もし、津波対応知識のレベルが、地域で等しく分布されているならば、避難勧告・指示が出された地域である限り、避難率に地域差は生まれないはずである。しかし実際には地域差が大きい。そのこと

は、防災知識や意識が地域で形成され、維持されていることを意味する、③関心の低い層へのアプローチである。防災教育にしても、意識啓発にしても意識も、関心もない層へのアプローチこそが重要であるが、その足がかりがないことをどのように解決していくのかが問題である。

三つ目は緊急段階・応急段階・復旧・復興段階に共通する問題として、環境変化に適応する情報の必要性についてである。災害直後の避難では、自らが直接に異常を認知できずに、情報に依存せざるを得ない場合がある。また低頻度であるために対応行動を熟知していないという点もある。ケースとして津波などがこれに当てはまる。津波災害に過去見舞われたことがない地域では、対応行動が迅速さに欠ける点がある。さらにもう少し長期的に見ると、避難生活もまた大きく環境が変化し、適応行動をとるためにには情報が必須となる、避難所での集団生活、それに伴う新たなルールの創設、仮設住宅での新たな人間関係、各種仮設施設設、仮庁舎、復興へいたる諸手続きなど新たな環境下での生活が強いられる。生活環境を理解し、行動を決定するには情報が求められる。

四つ目は、緊急段階・応急段階・復旧・復興段階に共通する問題として、IT技術の発展で災害情報の生産、表現、伝達の各側面で種々の可能性を与えていているのである。

以上のように、災害過程のサイクルからみたとき、災害情報論において、その中心は、緊急段階・応急段階、予防段階にあり、復旧・復興における問題は限られており、研究に薄さがみてとれる。

## 第4節 東日本大震災前の災害情報論と放送制度

### 1-4-1 災害情報の伝達体制

廣井は、災害情報の伝達体制を問題にし、行政情報とマス・メディアとの二つに分けている（廣井, 1991, 6）。まず行政情報であるが、行政組織や個々の住民の対応に関する、具体的な指示や示唆（例えば避難勧告）を含む場合が多く、とくに、地方自治レベルの行政情報は、比較的狭い地域を対象とした具体的な情報が多いのが特徴だ。一方、マス・メディア情報は、被害情報の報道といった事実的情報が多く、また、広範に存在する受け手に向けて伝達されることが多い。マス・メディア情報が対応行動を指示する場合も少なくないが、その場合は、一般的・抽象的指示で、しかも広域の住民への指示になる傾向がある。

情報伝達という点を自治体と住民（被災者）との関連でまとめると、行政情報は具体的な行動指示情報や狭域情報を提供するために、住民ニーズに沿った情報ということが言える

が、マス・メディア情報は、被害情報という事実的情報が多く、広範に存在する受け手に向けて伝達されるために、住民には不向きな情報であることがわかる。つまり災害直後は行政情報をいかにして住民に迅速に伝達できるかが重要であるかがこうした研究からわかる。

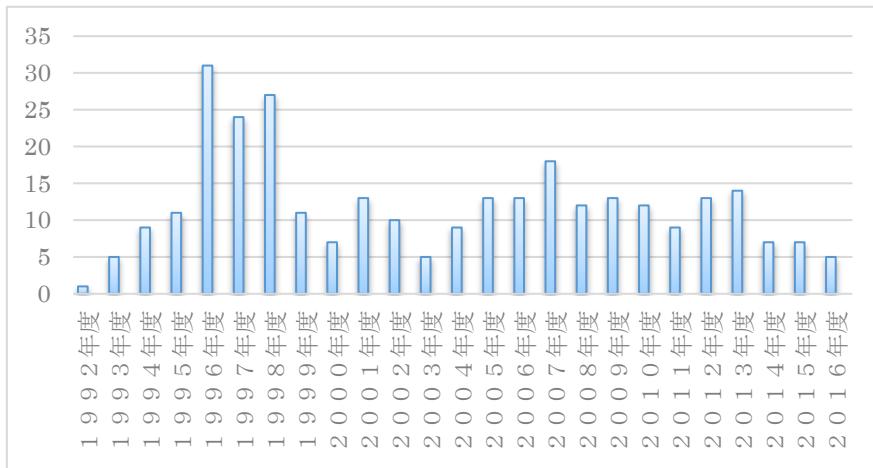
次に、事例とし阪神・淡路大震災を取り上げる。同地震は1995年1月17日午前5時46分、明石海峡下を震源とするマグニチュード7.3の地震で、神戸市などでは震度6、死者6,434人、負傷者4万人以上にのぼった大地震であるが、「マス・メディアは、被害の甚大さを視覚的に印象づける映像を連日報道し、被災者たちにとっては、こうしたマス・メディアの報道にはほとんど役に立たないものであった」(北村, 2013, 19)。このように阪神・淡路大震災では住民(被災者)に対して、マス・メディアは被害情報や生活情報など行政情報を伝達できず、批判が起きたのである。そこで、住民(被災者)に対して適格な行政情報を伝達するような、狭域の放送局の必要性が議論された。そしてこの阪神・淡路大震災の直後、旧郵政省(現総務省)から放送行政局長名で出された各地方電気通信監理局宛の通達「非常時における放送局に関する臨機の措置について」によって、臨災局は制度化されたのである。制度化された臨災局は、放送法施行規則第1条の5に「暴風、豪雨、洪水、地震、その他による災害発生した時に、その被害を軽減するために役立つ」と規定されている。制度化の背景には、住民(被災者)への行政情報の提供など、住民向けの情報を迅速に提供するシステムを構築する必要性があげられた。一方のマス・メディアは、広範に存在する受け手に向けて伝達するために、救援隊への呼びかけや支援物資調達のためには有効だが、狭域地域への情報提供は不向きである。つまり、臨災局が扱う情報は、行政情報を主とするものであり、マス・メディアの足らない部分を制度的に補おうとしたものであることは、こうした点から明らかである。

#### 1-4-2 コミュニティFM制度化の経緯

臨災局は、1995年の阪神・淡路大震災を契機に行政情報を住民(被災者)に提供するためのメディアとして制度化された。ところで、臨災局と同じように狭域な情報を提供するメディアとして、コミュニティFMがある。コミュニティFMの制度化は、1992年である。それでは、コミュニティFMはどのような経緯から制度化に至ったのであろうか。

コミュニティFMの制度化は、地域における情報格差是正という国の政策に関連している。そこで制度化に関連する戦後の「全国総合開発計画」から概観する。同計画は1962年池田内閣の時に策定されたもので、地域間の均衡ある発展を基本目標とされた。その

表 1-1 年度毎のコミュニティ FM の開局一覧



(出典) 総務省 HP (<http://www.soumu.go.jp/>)

後、同計画は鉄道や道路など交通網整備が優先課題として、順次進められていった。そして田中角栄元総理の下では、「日本列島改造論」によって、全国に高速道路網や新幹線建設計画が発表された。1985年には当時の郵政大臣の諮問機関が「市町村単位程度を放送対象とする FM 等の導入を検討する必要がある」との提言がなされた。この提言は2年あまり検討が重ねられ、1992年に「市町村内の商業・業務・行政等の機能の集積した区域、スポーツ・教養文化活動等の活動に資するための施設の整備された区域等において。コミュニティ情報、行政情報、福祉医療情報、地域経済産業情報、・観光情報等地域に密着した情報を提供することを通じて、当該地域の振興その他公共福祉の増進に寄与する」(1991年12月20日付、郵政省報道資料)として制度化されたのである。このコミュニティ FM の制度化は、臨災局が制度化される3年前のことであったが、可聴区域が市町村単位であることや地域密着情報を提供するラジオ局であり、地域の災害情報を提供することも可能なことから、阪神・淡路大震災後は災害時に迅速に災害情報が提供でき、自治体の防災無線の代替措置として注目された。

表 1-1 は、1992年から2016年10月1日までのコミュニティ FM 開局数一覧である。制度化された初年度 1992 年は 1 局のみであったが、1993 年度に 5 局、1994 年度は 9 局、1995 年度に 10 局、そして 1996 年度は前年度の阪神・淡路大震災の影響から年間で 31 局が開局し、さらに翌年度は 24 局、1998 年度も 27 局が開局するなど開局ラッシュとなった。こうした開局ラッシュは、地域密着情報を提供するラジオ局としてだけでなく、災害時に必要な災害情報等を被災者に提供できるラジオ局という位置

表1-2 コミュニティFMと臨災局の比較一覧		
	コミュニティFM	臨災局
開局時	平常時	災害時
出力	原則20W	原則無制限
周波数の電波	超短波（FM）	超短波（FM）
可聴区域	市町村単位	市町村単位
免許交付	事前の書類提出	臨機の措置
免許主体	民間&三セク	自治体
放送期間	5年間（再免許可能）	必要な時
開局目的	地域の振興等	被害の軽減
情報提供先	地域住民	被災者
放送マニュアル	準備する	なし
スタッフ	社員及びアルバイト	被災者
ラジオ局認知	通常放送で認知されている	設置のPRが必要
機材操作	習熟	未習熟
アナウンス	習熟	未習熟

（出典）紺野（2010）を参照に筆者作成

づけから開局ラッシュになったと思われる。

#### 1-4-3 コミュニティFMと臨災局の相違点

コミュニティFMと臨災局は、制度化に至る経緯がちがうものの、可聴区域が市町村単位であることや、災害時において災害情報を被災者に提供できるシステムとして注目されたことから、阪神・淡路大震災後に一気に全国に広まった。災害時に情報が迅速に被災者に提供できるという共通点から、コミュニティFMと臨災局が、同じような地域のメディアとして同じ枠組みとして議論されることが多くなっていった。しかし、実際には常設のコミュニティFMと一時的な設置である臨災局には大きな違いがある。

表1-2は、コミュニティFMと臨災局を15項目にわたって比較した表であるが、この表からは、コミュニティFMと臨災局の共通点は周波数波、可聴区域の2項目のみである。そしてコミュニティFMと臨災局のもっとちがう点は、コミュニティFMは経営体として成立しており、臨災局は自治体が免許人ということで臨時であり、一時的な放送局として、災害時に緊急に作られたラジオ局ということから、経営体として曖昧であり、短期で閉局することを前提としている点である。また、当然のことながら、臨災局は災害に特化したものであり、主たる内容は災害に対応するさまざまな情報であるが、コミュニティFMは地域のさまざまな情報をカバーするものであり、その主たる目的の一つとして地域振興があり、災害、あるいは防災情報は放送内容の一部でしかないことである。

## 第5節 東日本大震災後の災害社会学の研究動向

2011年3月11日発生した東日本大震災は、広範囲であり、震災ばかりではなく、津波に加え、福島第一原子力発電所の事故（以下、原発事故）による複合災害であるために、これまでに経験をしたことのない災害であることは間違いない。経験したことのない災害であるが故に、災害社会学においても、新たな理論枠組みが必要とされ、また、それを研究するためにも、詳細な調査が必要であるといわざるを得ない。ここでは、東日本大震災の調査・研究の全体の概要については、現在も次々と新しい研究が輩出していることも鑑み、今後の課題とすることにし、本論に密接に関連する吉原直樹のモノグラフをもとに議論を整理したい。

吉原（2013）は、福島第一原発が立地していた福島県双葉郡大熊町の被災住民についてモノグラフの調査結果を明らかにしている。原発事故によって、「住む場所、人間関係等を掠奪された」大熊町の住民を詳細に調べ、国の政策による自治会のコミュニティを「あるけど、ない」コミュニティと批判的に捉え、その中でそうした自治会ではない住民によって形成された二つの新しいコミュニティに注目した。ここで吉原のモノグラフ調査をもとに、東日本大震災後による原発事故で浮かびあがった地域の問題点や、震災等によって引き裂かれたコミュニティの再生、また阪神・淡路大震災以降のコミュニティ再生政策などについての問題点をここで概説する。まず吉原は、大熊町及び町民の現状について次のように報告している。

2011年3月の原発事故の爆発以降今日にいたるまで、この町がたどった足跡は筆舌に尽くしがたいものがある。自治体としての存立基盤は根こそぎにされ、全町民は被曝リスクをかかえながら着の身着のままで町外に避難した。その結果、住み慣れた土地とそこで培われてきた人間関係を奪われ、最低限の生きる権利さえ満足に補償されない避難民が社会に放り出されることになった。かれ/かの女らは最初から掠奪された難民であった。しかもこうした掠奪された人びとは、今日まで掠奪されている。何よりも、掠奪された人びとの間で亀裂が生じ、分断が進み、対立が深まっている。どうみてもふるさとに帰れそうにない、それでいて行き先も定まらない。ただ漂流するしかないといった状況がこうした事態をいっそう深刻なものにしている。遅々として賠償は進まず、除染をめぐって町民がののしり合い、いがみ合っている。そしてその足元で家族離散が進んでいる。かろうじて職を得た人びととそうでない人びとの間でも距離が広がっている。

る。もはや過去に戻ることはできない、それでいて将来への見通しはあるでたたない、そういった宙吊りの状況に置かれ、もがき苦しんでいる。そういった人びとにたいして、ゼロから出発というのはあまりにもむなしい。ゼロへの復帰もままならないのだから（吉原, 2013, 3）。

吉原は、こうした現状認識を指摘した上で、復興のために明瞭な復興シナリオを描くことができない町当局の苦悩の状況や、掠奪、漂流し、翻弄され続ける町民の現状を明らかにしている。こうした状況の中、被災者が暮らす仮設住宅において、自治会が発足する。しかしその自治会は、震災前に存在していたとされる形骸化したコミュニティをもとにした、上からの押しつけのコミュニティであり、住民不在のコミュニティであると吉原は指摘し、「あるけど、ない」コミュニティと名付けた。この「あるけど、ない」コミュニティが、被災者にとって「遠い存在」であることが、別の調査結果からでも確認ができる。環境防災総合政策研究機構が東洋大学と共同で行った釜石市および名取市の 218 人の被災者に対する「地震後の避難行動調査」によると、防災無線が 43.9%、ラジオとテレビが合わせて 31.8%、消防及び広報車からの呼びかけが 16.8%の人が津波や避難に関する情報を得たが、「近所」からの情報を得た人は 13.1%であった。これらのデータをもとに、「情報源としてみた場合、「町内」はほとんど機能していなかった（朝日新聞, 2011 年 6 月 2 日付）」（吉原, 2013, 82）という指摘がされた。

吉原はこうした「あるけど、ない」コミュニティは、阪神・淡路大震災の教訓であると指摘する。阪神・淡路大震災では孤独死が問題となつたため、元のコミュニティを維持することが重要視され、福島県内の仮設住宅についてみると、2011 年 12 月末の段階で、全部の仮設住宅で自治会が組織されている（厚生労働省『応急仮設住宅の居住環境等に関するプロジェクトチーム審議会資料』）。しかし元のコミュニティといえども、農業や原発関連の企業など様々な収入で生計をたてている人がおり、コミュニティのありようは異なるのが現状である。そのことについて吉原は「原発立地移行進んだ生活の私化の波が大熊町民を多かれ少なかれ呑み込み、コミュニティの基盤を掘り崩したこと、そしてそれが 3・11 および 3・12 に「あるけど、ない」という形で立ち現れた」（吉原, 2013, 100）と、元のコミュニティが理想化され、実態からかい離していると指摘する。こうした中で、新しいコミュニティ形成の動きが表出していることが明らかにする。その新たなコミュニティとは、一つは、2011 年 6 月 16 日に発足した「女性の会」である。避難民の声を広範囲に糾合しながら、それぞ

れが抱える課題やニーズをテーマ化し、国、県、大熊町等に提言という形で打ち出す、いわゆる提案型のアソシエーションである。「あるけど、ない」コミュニティは、どちらかというと「上からの」指示待ちに対して、この女性の会は好対照である。

もう一つがサロンと呼ばれるコミュニティである。このサロンは、8月中旬ころに、町地域包括支援センター主催の「いきいき教室」が仮設住宅の集会所で開かれたのをきっかけに立ち上がった。そこに参加した人を中心に1週間に一回「何かおしゃべりの場が欲しい」という声から発足したものである。サロンは、毎週木曜日10時から12時まで福島、郡山、喜多方、伊達、白河の各市の集会所で開かれている。毎回、仮設住宅の住民10人程度が参加して、気軽なおしゃべりが行われる。主催している人は、参加することによって単に元気になるだけではなくて、自分たちの置かれている位置を確認しようとしているようにみえると、吉原は報告している。「気楽なおしゃべりする」ことから始まり、それに終わらないサロンをめざしている。例えば、サロンを通して様々な活動が見えるようになり、こうしたサロン活動を行うために全国からボランティアが来ている。そのボランティアと住民とが話し合うことで、交流が始まり、いつのまにかその交流が深まり、またいつのまにか自分たちの思いをよその人に伝えるという点で、サロン活動が重要視されるのである。またサロンが受け皿となって、音楽会やマッサージボランティア活動、ハーモニカ演奏会、高校の弁論部との対話集会等が集会所で開かれるようになった。さらには、東京電力による補償金請求書の記入相談会、事故収束に向けた道筋（ステップ2完了）に関する説明会、原子力損害賠償支援機構による弁護士と行政書士による無料訪問相談会、町社会福祉協議会により仮設住宅巡回法律相談会、議会報告および懇談会も、サロンが主催して開いている。単なる週に一回おしゃべりする場が欲しいという発想から、情報提供・伝達の場に発展していったのである。

サロンを主催している人は、「仮設住宅の人びとは地元社会の人びとのやさしいまなざしにいつも勇気づけられている。語り合うことで思いを伝えることができる。同時に先が見えない不安だらけの生活について、地元の人びとに知ってもらうことができる」（吉原, 2013, 130）とし、こうしたサロンという活動を通して、ボランティアとの出会いや離れ離れに避難しているもの同士の間でも無理解を縮減することになるのではないかとしている。

このようにサロンの活動は、人の出会い、情報提供など様々なことが行われ、「あるけど、ない」コミュニティとは違ったコミュニティを形成している。サロンの特徴は、誰もが

気軽に参加できるという柔軟さが参加しやすくなっている。

東日本大震災において設置された臨災局の放送運営が長期化している背景に、上からのコミュニティではない下からの創発的コミュニティの存在がある、あるいはそれと関係している可能性は高いといってよい。東日本大震災において設置され放送運営が長期化している臨災局の背景に、上からのコミュニティではない、下からの創発的コミュニティの存在、あるいはそれとの関係といった問題がどうあるのか。

## 第6節 東日本大震災後の災害情報論の研究動向

廣井は情報伝達体制において下向的伝達と上向伝達があるとし、「①発災期における「要員招集体制」（下向的伝達）、②被害情報の「収集・報告」（上向的伝達）、③災害対応の「指示・指令体制」（下向的伝達）、④住民に対する「避難の勧告・指示の伝達体制」（下向伝達）、⑤放送による「防災情報・安否情報の伝達体制」（下向的伝達）、⑥組織外からの「問い合わせ対策」（下向的伝達）と」（廣井, 1991, 14-15）、その大半が下向的伝達であるにもかかわらず、緊急段階・応急段階においては、上部機関から下部機関へ一防災機関（行政）から住民へだけでなく、災害の被害状況を把握するためにも、下部から上部へ一住民から防災機関へというナガレが活発化することを指摘している。（廣井, 1991, 28）。災害社会学においても、中越沖地震において、柏崎市を中心としたコミュニティFM「FMぴっから」が、災害時において、リスナーとの双方向的なやりとりを行っていたことが指摘されている（松井, 2012, 81）。ところで、臨災局の長期化は、臨災局が復旧・復興段階において、なんらかの役割を果たしていることが想定されるわけだが、復旧・復興のために自治体（行政）が上から下からへと伝達するだけではなく、被災者である人びとからの声、つまりは下から上にその思い、考え、意向を伝達するのに、媒体（メディエーター）としてコミュニティは重要な要素としてあることは間違いない。ここでの問題はそれが弱体化していることであるが、こうした災害社会学の問題意識は、災害情報論の研究としてどのように意識されているのだろうか。また、臨時災害「放送」局が言葉通り、放送である以上、上から下からの一方的な情報伝達システムであるなかで、どう双方向的なやり取りを実現しているのだろうか。メディア研究である災害情報論は、これを問題にしているのだろうか。

平塚は、災害情報の構図という観点から阪神・淡路大震災を分析、調査を行っている。この調査におけるメディアは特定されていない、「どのアンケート調査をみても情報ニーズの経時的变化は共通している」としている（平塚, 2012, 136）。この研究は、緊急時における情

報の経時的变化を取り上げたもので、多種多様な情報が噴出した阪神・淡路大震災を例に、災害情報の構造分類を行い、その情報の経時的变化を明らかにした（平塚, 2012, 136-138）。

概観すると、地震発生直後に求められるのは、被災者の不安を取り除き混乱を避けるための、地震の規模、震源地、津波の有無といった地震情報や余震に関する情報であり、火元注意・怪我防止あるいは避難誘導といった被災者共通の行動指針情報である。ついで救急、救命、死傷者、建物の損壊など被災地の状況を伝える被災情報、知人や親せきの安否確認あるいは無事を知らせる安否情報が続く。

災害発生後一定の時間が経って落ち着いてくると、当座の飲みのものや食料、トイレの場所などの緊急生活情報が必要になる。東日本大震災の地震津波被害地域ではガソリンが重要な緊急生活情報だった。

2~3日目になると水道、ガス、電話などの被害状況、復旧見通し、給水時間と場所などのライフライン生活情報の関心が増え、治療を受けられる病院と診療科目などの医療情報などが求められる。災害直後の安心・行動指針情報に代わって災害復旧期には被災者の社会・経済活動を支援していくための生活情報やボランティア情報を含む救援情報が必要になる。

危機状況が落ち着いてきた段階、心理的にも生活上も多少余裕の出始める1~2週間後になると、営業している風呂屋、理髪店、暖かい食事のとれる店といった一般生活情報、仮設住宅申し込みや住宅融資など各種申請手続きなどの行政情報が大きな位置を占めるようになり、さらに新しい町づくりを目指す復興期の情報がこれに続く。このように、経時的变化をたどると、地震情報、行動指針情報、被害情報、安否情報、緊急生活情報、交通情報、ライフライン生活情報、医療情報、救援情報、一般生活情報、行政手続き情報、復興情報と重なり合いながら变化していくのである（平塚, 2012, 136-138）。

このように平塚は、阪神・淡路大震災を例として、情報の経時的变化を明らかにしているが、期間が2週間程度と短期間であること、また、災害時における双方向なやり取りについてほとんど議論していない。また紺野（2010）も、2004年の中越地震の時のFMながおかを事例として、情報の経時的な変化について議論している。被災者に向けて伝えた具体的な内容については、「避難所情報」、「小中学校、幼稚園、保育園に関する情報」、「避難勧告」、「ライフライン情報」、「被害情報」、「ごみ収集情報」、「各種減免措置情報」、「風呂・美容室情報」、「その他」であるとし、1分後、1時間後、10時間後、1日後、3日後、10日後と、災害時には情報が刻一刻と変化すると明らかにしている（紺野, 2010, 153）。

こうした平塚、紺野の災害情報の経時的变化は、参考になるものであるが、東日本大震災、そしてそれに関わる臨災局のように長期にわたる災害に関する研究としては期間が短すぎると。災害過程サイクルに則って議論すれば、応急段階でしかなく、また行政情報の下向的伝達だけを問題にしているといってよい。

ところで、臨災局の長期化にともなって、臨災局が放送制度の一つとしてあることから、放送制度そのものの見直しが議論されている。

市村（2014）は東日本大震災で設置された臨災局について、「臨時災害放送局が次第に『復興エフエム』となり、それが『次なる災害に備えて』のコミュニティ放送局に転化するという流れの中で、臨時災害放送局の概念、定義は大いに拡散した」（市村, 2014, 26）として、「すべてを法や規則で規定することがよいとは思わないが、一連の経緯で浮上してきた多くの問題、課題を、放送制度としてどう整理していくべきか。その議論をはじめなければならないだろう」（市村, 2014, 226—227）と述べており、放送制度の見直すことを示唆している。また金山智子らによる共同研究、災害とラジオ研究会（2014）は、制度的枠組みの改正ということで「コミュニティ放送局も臨時災害放送局も、放送そのものが目的ではなく、コミュニティのための情報伝達や地域活性化、あるいは復興が目的である。コミュニティのメディアは、そのためのツールであるという本来の意味を再認識すべきである。そうすれば、必要な法整備のイメージも見えてくるに違いない」と放送制度に関する法的な改正を促すとともに、「現行法を大きく変えることなくとも、地域イベントためのイベントFMや災害復旧のための臨時災害放送局があるように、自然災害や人為災害などを理由によるコミュニティの復興や再生のための「復興 FM」を放送法 8 条（臨時かつ一時の放送）に追加することはさほど難しいことではないと思われる」として、現行法のまま臨災局を放送法 8 条に追加するよう指摘している。

松本（2016）は、震災直後から 1 年間のコミュニティ FM や臨災局の動向をまとめている。震災直後は被災者に必要な震災関連情報を提供したもの、時間が経つにつれて情報ニーズがずれることで、放送に携わるスタッフと主体となって放送を継続している自治体との意識のズレなど、事例に基づいて臨災局を継続させていく難しさを浮き彫りにしている。また臨災局からコミュニティ FM に移行した局の事例や臨災局として継続している事例、原発事故に伴い被災地ではなく、避難地に設置された事例、さらに県域局である岩手放送と臨災局との放送連携など、臨災局が制度化されて初めての事例などを列挙している。この先行研究はこれまでになかったものであり、事例も豊富で参考になる点が多い。

しかし、総じてこれらの先行研究は、臨災局の制度について議論がされているが、復旧・復興段階において、臨災局がコミュニティ FM とどう違うのか、あるいは、リスナーである被災者との関係や、情報の下向的伝達や上向的伝達との関係など、そうした実態を明らかにする具体的な番組の内容、及び番組を制作する意図まで踏み込んで議論が行われていない。

吉原は福島県大熊町のモノグラフにおいて、自治会のコミュニティと地元住民による新しいコミュニティ形成について、明らかにした。新しいコミュニティは、上から、指示待ちのコミュニティではなく、提言型のコミュニティ（女性の会）、また気軽に参加できる（サロン型）コミュニティとして、上向的伝達なコミュニティとして紹介した。特にサロンにおいては、気楽な話し合いの場というだけではなく、集会所で開かれる様々なイベントの受け皿にもなっていることも報告されている。避難生活が長期化することで、仮設住宅での生活は、地域住民との間で相互の無理解がひろがり「妬みと軋轢」を拡げ、結果的に仮設住宅の住民の孤立を深めることになる。

それでは臨災局はどうであろうか。設置された目的は、被害の軽減であり、設置期間の設定は臨時であり、一時的である。しかし現実ではすでに 2,000 日以上運営を続けている臨災局は 5 局にのぼっている。こうした現実を考える時に、臨災局の被害の軽減という目的をすでに超え、行政からの情報ばかりではなく、地元住民からの生活情報や避難生活情報等が、放送内容に多くなってきているのが現状である。臨災局の特徴は、送り手と受け手が固定せずに情報を交換できることであり、これにより臨災局を通して住民同士の情報交換が可能である。そういう意味では、メディアでありながら、吉原が大熊町の調査で報告したサロンのような役割を、臨災局が果たしている可能性も否定できない。先行研究においては、ここまで臨災局が長期化しているにもかかわらず、また放送運営が初めて長期化しているケースであるにもかかわらず、詳細な放送内容の議論がなされていないことに、重要な見落しがあるのではないかと思われる。なぜここまで長期化しているのか、長期化していることで被災地ではどのようなことが起きているのか、また臨災局と被災者、さらに地域住民との間でなにが起きているのか。災害情報論として、いまだに足を踏み入れていないと思われる、復旧・復興という側面において臨災局というメディアが、どのような役割を果たし、被災者との間においてどのような放送活動を行っているのか、こうした実態を明らかにするためには、開局からの放送内容、新しい番組制作のきっかけや発想など、詳細なモノグラフ的な調査が必要と考える。

## 第7節 東日本大震災後の臨災局の調査

以上、本論では先行研究の検討を踏まえ、臨災局の長期化を問題にするにあたって、①臨災局とコミュニティとの関係がどうあるのか、②情報伝達のシステムとして一方指向性を有する放送が、どう双方向な形態を取り込んでいるのか、③臨災局の放送制度上の特徴とは何かを議論するために、東日本大震災で長期化した臨災局の実態をモノグラフ的な調査で明らかにする。

そこで、あらためて東日本大震災後の設置された臨災局の特色を概観する(表1-3参照)。運用日数という観点から見ると、500日以下は9局、501日～1,000日が6局、1,001日～2,000日が10局、2,001日以上が5局となっている。2,001日以上の5局は、岩手県釜石市のかまいしさいがいエフエム、気仙沼市のけせんぬまさいがいエフエム、けせんぬまもとよしさいがいエフエム、宮城県山元町のやまもとさいがいエフエム、福島県南相馬市のみなみそうまさいがいエフエムの5局である。

そこで、まず、基本的には2,000日以上の臨災局から選ぶことを考え、東日本大震災は、震災ばかりではなく、津波に加え、原発事故による複合災害であることを鑑み、原発事故に関係する臨災局と関係しない臨災局の二つに分け、それぞれ一つずつ選ぶことにした。

原発事故に関係しない臨災局は4つあるが、県域放送のラジオ放送を経験し一方指向性をもつマス・コミュニケーションとしての放送局のあり方を熟知し、定年退職して山元町に移り住み臨災局を立ち上げた宮城県山元町のやまもとさいがいエフエムを取り上げることにする。臨災局が、放送としての一方指向性を有しつつ、どう双方向的な形態を取り込んでいるのか、明らかにするのに適切だと考えたからである。なお、長期化している臨災局で、原発事故によって影響を受けたものは、福島県南相馬市のみなみそうまさいがいエフエムだけであるので、これを扱うこととした。

そして開局が震災から一年後であるために、放送運営日数が2,000日を超えてはいないものの、原発事故の影響から全町民が避難せざるを得ない状況となり、臨災局が被災地の富岡町ではなく、避難地の郡山市という異例の設置となった極めて特異な臨災局の事例として、福島県富岡町のおだがいさまエフエムを扱うこととした。

表 1-3 東日本大震災後の設置された臨災局の開局一覧と運用日数 2016 年 10 月 31 日現在

みやこさいがいエフエム	岩手・宮古市	2011年3月19日～2013年8月25日	892
しおがまさいがいエフエム	宮城・塩竈市	2011年3月18日～9月26日	924
そうまさいがいエフエム	福島・相馬市	2011年3月20日～2014年3月31日	1099
いしのまさいがいエフエム	宮城・石巻市	2011年3月16日～2015年3月25日	1106
いわぬまさいがいエフエム	宮城・岩沼市	2011年3月20日～2014年3月31日	1108
みやこたろうさいがいエフエム	岩手・田老地区	2011年5月31日～2013年3月31日	1109
なとりさいがいエフエム	宮城・名取市	2011年4月7日～2015年2月28日	1424
とみおかさいがいエフエム	福島・富岡町	2012年3月11日～運用中	1696
りくぜんたかださいがいエフエム	岩手・陸前高田市	2011年12月10日～運用中	1788
おながわさいがいエフエム	宮城・女川町	2011年4月4月21日～2016年3月29日	1805
おおたちさいがいエフエム	岩手・大槌市	2012年3月28日～2016年3月18日	1818
わたりさいがいエフエム	宮城・亘理町	2011年3月24日～2016年3月24日	1828
けせんぬまもよしさいがいエフエム	宮城・本吉地区	2011年4月22日～運用中	2020
みなみぞまさいがいエフエム	福島・南相馬市	2011年4月15日～運用中	2027
かまいしさいがいエフエム	岩手・釜石市	2011年4月7日～運用中	2035
けせんぬまさいがいエフエム	宮城・気仙沼市	2011年3月22日～運用中	2051
やまとさいがいエフエム	宮城・山元町	2011年3月21日～運用中	2052

(出典) 総務省 HP から筆者作成 (<http://www.soumu.go.jp/>)

## 第2章 やまもとさいがいエフエム「りんごラジオ」

### はじめに

この章では、事例として宮城県山元町に設置されたりんごラジオを取り上げる。取り上げる理由は、すでに運用日数が 2083 日と長期化しており、開局からインタビューなどで町民からの意見を積極的に取り入れながら放送を行い、東北放送元アナウンサーということからラジオ放送に精通し、また 1978 年の宮城沖地震では放送人として災害を経験している。こうした災害報道、復旧・復興に関する知識も豊富と読み取れる経歴から、臨災局の特性を生かした放送運営を行うことが期待できると考えたからだ。

りんごラジオは、開局から手書きした放送タイトル『放送記録』を保存している。本稿ではその残されている『放送記録』を開局から 185 日間調査を行い、内容の分析を行った。調査対象となったタイトル数は、14,261 である。これまでの臨災局は 1995 年の制度化以来、長くて 1 年、その他はほとんどが 3 ヶ月程度で廃止している。また、りんごラジオでは、運営が長期化したことから、復旧・復興計画の議論のプロセスを透明化するため、町議会の中継や町長選挙の関連番組を放送した。放送タイトルの分析に加え、開局からの放送運営を時間軸として 3 段階に整理し、長期化とともになう放送運営の実態を明らかにした。二つ目は、山元町がりんごラジオ設置に至った経緯、りんごラジオのスタジオ兼事務所などの実態を明らかにする。

なお、調査は、3 つに方法によって行った。一つはフィールドワーク調査で、りんごラジオには 2012 年 11 月から 15 回ほど訪問した。このフィールドワークの中では、聞き取り調査として放送局長高橋厚の他、斎藤俊夫町長や平間英博副町長、町議議会議員、小学校校長、町の関係者に行った。また放送分析を行うための『放送記録』は、高橋の許可を得て記録ノート一枚一枚撮影した。そしてその撮影した写真をもとに『放送記録』を翻刻した。

二つ目は、放送以外に対する調査である。りんごラジオではホームページで毎日の放送プログラムを公開し、また毎日ではないが町内の出来事などをブログとして情報を発信しているほか、Facebook といった SNS と通じての情報も発信している。このため、こうした放送以外の情報発信についても調査を行った。また『放送記録』以外にも放送自体はインターネットによるサイマルラジオや日本全国のコミュニティ FM ラジオ局の放送、お笑い、アニメ声優番組など、多彩なラジオ番組を楽しめる無料のアプリケーションのリッスンラジオでも町外で聞くことができるため、番組を録音して文字起こしをして分析も行った。三つ目

は、高橋個人の著作物の他、それは講演会やシンポジウム、また学会や研究会での発言に対する調査である。筆者本人がそうした講演会やシンポジウム、学会に同席した場合には、許可を得た上で録音し筆者自らそれを文字起こし、調査資料とした。

## 第1節 山元町の概要

### 2-1-1 東日本大震災以前の山元町

山元町は宮城県の最南端に位置し、東西 6.5 キロ、南北 12 キロの長方形の形をしている町で、南側は福島県と接している。2010 年の住民基本台帳によると人口は 16,892 人、65 歳以上の人口は 6,749 人で総人口に占める 65 歳の割合は 40.0% となっている。山元町の平均気温<sup>1</sup>は 12.3 度、一番寒い 1 月の平均気温は 0.8 度、一番暑い 8 月の平均気温は 24.4 度である。こうした山元町を「東北の湘南」と地元の人たちは呼んできた。

1955 年 2 月 1 日、山下と坂元の 2 つ村が、昭和 28 年に施行した町村合併促進法により合併して山元町が誕生した。そして 1970 年の山元町行政区設置に関する規則により行政区は、八手庭、横山、大平、小平、鷺足、山寺、山下、浅生原、高瀬、合戦原、真庭、久保間、中山、下郷、町、上平、磯、中浜、新浜、笠野、花釜、牛橋の 22 である。この町のほぼ中央には、東京、千葉、茨城、福島、仙台と繋がる国道 6 号が通っている。その国道 6 号をはさんで東側の沿岸を走る県道 38 号沿いはビニールハウスによるいちご栽培が盛んで、沿道には観光農園が点在していたことから、「ストロベリーライン」と呼び、国道 6 号のその反対側の西側を走る丘陵地帯にりんご畠が広がっていることから、「アップルライン」と呼んでいる。

農業の側面から山元町をみると、耕地面積は水田 1,470ha、畑 504ha、樹園地 79ha である。総農家数は 1,193 戸、このうち専業農家数は約 13.7% の 164 戸である。温暖な気象条件と、西部は丘陵地帯、中心部は平坦な水田地帯、東部は砂土の畠作地帯等の多様な立地状況を活かし、米、イチゴ、りんご等が栽培されている。2015 年の農林業センサス<sup>2</sup>によれば、イチゴの作付面積は 29ha で県内トップ、ちなみに 2 位は石巻市 15ha、3 位登米市 10ha となっている。りんごは 21ha で、亘理町の 30ha、登米市の 27ha について 3 位の規模を誇る。農業地域という顔と同時に JR 常磐線で仙台までおよそ 1 時間ということから、山元町は仙台のベットタウンでもある。

### 2-1-2 東日本大震災以後の山元町

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災で山元町は震度6強を観測した。被害は死者636人。死者数は、宮城県内で6番目の多さであった。家屋の被害は、全壊2,217棟でこのうち津波による全壊は、約半分の1,013棟だった。また津波による浸水面積は、総面積の37.2%にあたる24平方キロメートル、浸水域の人口は8,990人、2011年2月末現在の町人口に占める割合の52.4%となっている<sup>3</sup>。数字からも津波による被害の大きさがわかる。この東日本大震災で山元町の姿は一変した。「ストロベリーライン」は津波で壊滅的な被害を受け、ビニールハウス、観光農園はすべて流された。震災後はうす茶色の広大な更地となり、常磐線も駅舎、線路ともすべて流されたのだ。

震災から1年8ヶ月後、初めて調査に訪れた時、広大な更地の中に津波による被害家屋が2~3軒と点在していただけだった。被災した家々の多くは、2階建ての1階部分が津波の通り道になったためか、柱だけが傾いて2階を支えていた。

津波の影響は人口流出にもつながった。町の人口は少子高齢化の影響で、以前から下降線をたどっていたが、2010年の人口16,892人は、2011年の震災によって減少に拍車がかかり人口13,186人（2014年住民基本台帳）になり、大幅な減少となった。2016年5月末現在では、2014年よりもさらに626人減って12,560人（男6,228人、女6,332人）と人口の流出は続いている。

東日本大震災の翌年の2012年は総数で915人が転出し、2013年は801人、2014年は609人とそれぞれ山元町から転出し、3年間で合わせて2,325人が転出した。これを年齢別にみると、60歳以上の人人が2012年231人と一番多く、次いで20歳から29歳の20歳代が200人、30歳から39歳の30歳代が164歳の164人となった。3年間合わせると60歳以上は602人、20歳から29歳の20歳代が544人、30歳から39歳の30歳代が397人、40歳から49歳の40歳代が216人と50歳から59歳の50歳代が210人となっている<sup>4</sup>。

2014年（住民基本台帳）における山元町の年齢別人口は、若年層（0~9歳）で1,836人（13.9%）、成年層（20~59歳）で5,565人（42.1%）、高齢層（60歳以上）5,785人（43.7%）、年齢不詳48人（0.4%）であった。高齢者層が生産を担う成年層より多くなっており、山元町の中心が高齢層であることが分かる。

また産業別の人口では、農業、漁業などの第一次産業では105人（2.9%）、建設業・製造業などの第二次産業では1,486人（41.2%）、運輸業、小売業、サービス業などの第三次産業では2,016人（55.9%）となる。なお、その内、医療・福祉は732人（20.2%）と3割5分以上を占める<sup>5</sup>。

写真 2-1 常磐線坂元駅があった場所（2016年1月27日筆者撮影）



どちらにしても、りんごラジオが山元町のエリアで放送している以上、こうした年齢構成の人々が臨災局の放送を聞いている人々だと想定される。

## 第2節 「りんごラジオ」開局までの経緯

### 2-2-1 津波被害のない町

過去の地震・津波を『山元町誌』でみると、町は「山地は浅く、大河川もなく、太平洋岸には湾口もないで往時から大きな天災地変を被った記録はない」（山元町誌編纂委員会, 1971, 409）と紹介されている。山元町は「災害無縁」（高橋, 2013, 153）の町であった。この『山元町誌』によれば、昭和35年5月23日（1960年）のチリ地震による津波では、死傷者ではなく、田畠の冠水による農作物の被害のみだった（山元町誌編纂委員会, 1971, 411）。このように町誌からも東日本大震災のような1,000棟をのみ込むような津波の記録は見当たらない。それを裏付けるような話がある。りんごラジオが2013年3月に放送した東日本大震災2周年企画「語り継ぐ!私と東日本大震災」<sup>6</sup>に3月3日に出演した桔梗理恵さんは、震災直後をこのように話している。

高橋厚：津波の情報は得ていたんですか

桔梗理恵さん（町内在住）：とにかく、揺れが長くてすごかったので、それだけで頭がパニック状態になってしまったので、たぶんすぐにテレビはつけたと思うんです。NHKを見ていて、情報は目でみていたんです。沿岸部に津波警報だか、大津波警報が出たと

いうのは、見たんです。でもなんか気持ちの中で津波が来る、逃げなきやという、そういうのがどういうわけかなくて、いまお聞きになっている方はなんて馬鹿だと思われるかもしれませんけど、結構、その前にも津波警報が出たことがあって、その近辺、地震とか津波が頻発していた時で、その度に逃げたらいいじゃないとかいって荷物をまとめて、出ようとすると解除とか、そんなことが繰り返しあったので、なんか来たって大したことないんじゃない、そういうことがどこかにあった7。

宮城県の北部や岩手県の沿岸部では、津波に対する言い伝えは残されているが、山元町にはそのような言い伝えはない。町誌によれば、記録にある地震・津波では慶長 16 年（1611 年）10 月 28 日に起こったのが古く、津波は岩沼付近まで達し、男女 1,783 人が亡くなったという記録はあり、山元町においても死者は相当数出たと推測がされるものの、具体的な死者数は記録には残されていない。その後は昭和 8 年（1933 年）の三陸津波では、磯、中浜地区で重軽傷者 18 人が出た。この津波被害では全国からの救援があり、朝日新聞社から寄託された 20 万円の一部で磯と中浜の海岸に建設された二基の記念碑には「地震があったら津波に用心」と記されている。このような記念碑が残されてはいたものの、一番近くても昭和 8 年の三陸津波で、東日本大震災から 78 年も前の津波であり、町民の記憶や町の災害文化としては引き継がれず、今回の津波には教訓を生かすことができなかった。

このように山元町の津波による被害記録をさかのぼると、昭和 8 年の三陸津波からはなく、津波災害は遠く過去のものでしかないというイメージは拭い去れない。一般町民からすれば、桔梗理恵が言うように、津波がくるかもしれないが、これまでの経験から「大したことないんじゃない」というのが山元町民の方々の意見だったかもしれない。いわゆる「正常視バイアス」が働いたのである。船津によれば、「正常視バイアス」とは、事態を異常とは受け取らない人びとの心理傾向で、それによって情報が疑問視され、軽視され、また否定されるというものである。津波の危険が普段から指摘されているような地域であれば、「すぐに避難」ということになるが、山元町はそれまで津波による被害を経験したことがないために、「大したことない」という楽観的な考え方になったのである。「こうした解釈装置は、経験した災害の種類、地域の地理的な位置、防潮堤、避難路・避難場所などの防災施設・設備状況、そして、言い伝えなどの災害文化によって大きく左右する」（船津,1994,156）。結局桔梗理恵は津波に流されたものの、結局近所の人に助けられた。しかし、津波が来る寸前まで家の中にいっしょにいた夫は、5 日後、自宅の敷地内で遺体で発見された。また義母も津

波で流され、亡くなっていたことが後日確認された。山元町で津波によって亡くなった人が多かったという要因の一つには、桔梗のように津波に対する考え方がある。400年さかのぼっても津波による死者のない町であるだけに、津波をどこか他人事のように捉えていたことは否めない。

## 2-2-2 震災直後の山元町

東日本大震災の震災時、高橋厚は役場内で町総合計画審議会の席上にいた。震度6強という揺れで、山元町役場屋上に設置されていた防災アンテナが折れた。そしてその50分後に大津波が、山元町の沿岸地域を襲った。この津波で沿岸地域に設置されていた防災無線設備が流された。さらに電気、ガス、水道等のライフラインはすべてストップしたため、町内部への通信手段、また町の外部への通信手段は途絶えた。通信手段を失った山元町は、陸の孤島と化した。震災から5日間、内部、外部に連絡が取れない状態になった当時の混乱状況を斎藤町長は次のように話す。

どうしても混乱している中にはあります、よく言われる流言蜚語の類ですけども、小さな町なんですが、残念ながらあったのも事実でございます。たとえば、私は県の方とスムーズに連絡が取れない状況が3日間ありました。県知事はそのことを捉えて、山元の町長とコンタクトが取れない。それが地元に伝わってきて、町長が行方不明、あるいは町長がどこかに逃げてしまったようだ。そんな話の展開になるわけです。大半の避難者がこの役場前の周辺の公民館なりの避難所にみなさん避難されていて、私を中心として町の災害対策本部がこの敷地内のテント内で活動していて、私の動きがある程度見えているはずなんんですけど<sup>8</sup>。

震災直後、山元町役場は震災の影響で倒壊の恐れがあるとして、玄関前にテントを張りそこに災害対策本部を設置し、町長はそのテントの中で陣頭指揮をとっていた。役場と避難所となっていた公民館とは、目と鼻の先であり、町長の姿は誰の目には見える状況であったにもかかわらず、町内で連絡がスムーズに取れることから町長行方不明、逃げたという噂がたったという。また平間副町長は、町から被災状況を国等に連絡できなかったために、救援隊が町に入るのが遅れたと、当時の混乱した状況を次のように話す。

報道が無かったので、救急消防隊、レスキュー隊ですけど、2日間は丸々来ませんでした。愛知県の救急消防隊が85人体制で3日目の13日に入りました。この方々は被害状況を見て人命救助を行おうとしたんですが、上からの指示で北へ向かえということを行ってしまいました。次4日目の来たのが兵庫、奈良の部隊でした。そこも同様に上からの指示で、上がって（北へ）しました。5日目に来た別の奈良の部隊が救助にあたってくれました。（中略）どこからも救援物資が来ないので、私は隣の角田市まで車で行って市長さんに被害状況をお伝えしました。当時はまだ行方不明者が2000人くらいいた。市長さんはびっくりされていた。それから内陸の市町村長さんに直接お会いして、山元町の被害状況や毛布や食糧などの支援物資を届けて欲しいということをお願いしました。そしてようやく近隣の市町村から支援物資が届くようになり、消防団も来るようになった。一方被災者は情報に飢えていた。何もすることがない。河北新聞が避難所に届くとむさぼるように読んでいた。いろんな情報を町民たちは欲しがっていた。新聞を読んでも一切山元町のことは書いていない。町民は自分たちの身の回りのことは知っているが、山元町全体のことはわかっていない。情報は入って来ないし、新聞にも書いていない。食べ物も来ない。支援物資が来ないのは町が怠慢だ。（中略）ボランティアも外部から来ない。自分たちで自給自足のような形で過ごしているという部分が、町政の批判みたいな形で来ましたね<sup>9</sup>。

このインタビューは2013年3月1日に行ったものである。平間副町長は、震災直後に情報発信できないことの怖さとりんごラジオができたことで、情報が発信できるようになった時の違いを痛切に感じ、インタビューに応じたと語る。町から外部に情報を発信できない状況に陥ったことから、救援隊の要請も出来ない状態であったことで、町が窮地に陥り、また役場から町民に対する情報発信が、叶わなかったことから町民がきわめて不安な状態になり、町民が役場に怒鳴り込んで押しかけ、一時的に不穏な状態になった。こうした状況を経験することで、平間副町長は「町としては少なくとも外部への情報発信手段はこれから復興に向けて必要だということ、その一方で町民に対しても最新の情報をいかに伝えるかという部分が被災者に対して安心してもらったりする上で重要なあとを感じた」とする<sup>10</sup>。

またこうした町から外部に情報が発信できないことから、マス・メディアにも報道されないことになったことについて、りんごラジオの高橋はその影響について

マス・メディアによる山元町に関する震災直後の情報は、NHK 総合テレビで、震災当日夕方と翌日の午前中の 2 回、ヘリによる上空からの中継が放送されたとのことだが、停電のため、町内では話題にならなかった。その後山元町の情報は NHK スタジオから、「山元町など四つの町と連絡が取れない」という放送があったに過ぎない。

一方、町内から町外へ情報が伝わったのは、愛知県豊川市から夜を徹して駆けつけた自衛隊第 10 特科連隊から衛星電話を町が借り受けて県庁へ連絡したのが最初である。発災 4 日後の 3 月 15 日だった。

県庁から首相官邸にも山元町情報が伝えられた。それまでは、町長の死亡説すら出ていたと聞く。こうしてマスコミもやっと山元町の情報を伝えるようになっていく。情報の無さや遅れが、町民に与えた精神的影響は大きく、その後の支援物資やボランティアの人数などにも影響した。また、町の幹部によれば、県庁への報告の遅れによって県外からの応援救急消防隊は山元町を「素通り」の状態であったと言う。指令本部へ、山元町の状況が届かず指示に繋がらなかつたのが原因であった。こうした震災時の「報道偏重」や通信網の被災は山元町にとって非常に大きかった。

(高橋, 2013, 164-165)

高橋は、情報網の整備が急務だと考えた。正しい災害情報が伝達されることは、流言蜚語が飛び交うことになる。平間副町長がインタビューで明らかにしたように、情報が入らない、食べ物も来ない、支援物資も来ないという厳しい状況の中で、いらだちを隠せない町民らは、そのいらだちと怒りを役場に向けてきたという。そうした精神的に追い詰められた町民のためにも、適正な災害情報の伝達ができるようなシステムの構築が急がれた。そして高橋は、電話が復旧した 16 日に新潟県長岡市の FM ながおかの脇屋に連絡を入れたのである。

### 2-2-3 開局

過去山元町には、コミュニティ FM を開局しようという動きがあった。阪神・淡路大震災があった 1995 年のことである。こうした経緯について高橋は、「話は 8 年前になる。山元町と隣町の亘理町の有志 20 人程でコミュニティ FM ラジオ設立準備会を立ち上げた。そして山元、亘理両町長や商工会など、さまざまな団体などにコミュニティ FM の開局を呼び掛けたが、結局この時は開局には至らなかった。理由は約 4,000 万円の資金だった。意義は理解

されても資金の話になると腰が引けた」(高橋, 2013, 156)。この時、コミュニティ FM 準備会の事務局長であった高橋が「災害とコミュニティラジオ」を企画し、2005 年～2006 年ごろが開催された (市村, 2014, 186)。そのシンポジウムには、当時 JCBA 日本コミュニティ放送協会副会長だった FM ながおかの脇屋雄介がパネリストとして招き、高橋が脇屋と、親しくなったことが、りんごラジオが実現するきっかけになった。

さてそのりんごラジオの開局の経緯であるが、電話が復旧したのは、震災から 5 日後の 16 日であった。高橋は、復旧と同時に FM ながおかの脇屋に電話をかけ、そして臨災局の設置を相談した。臨災局のことは脇屋から話を聞いていた。「私はこの話を相次ぐ余震のなかで、思い出していた」(高橋, 2013, 157)。実は脇屋も高橋には電話をかけていたが、なかなかつながらずにいた。高橋は、FM ながおかの脇谷と連絡がついたことで、すぐに斎藤町長に臨災局の設置を申し入れ、快諾を得た。こうしてりんごラジオは 3 月 21 日、震災から 10 日後に開局する。

スタジオを設置する場所は、町からは 2ヶ所の提案があった。1ヶ所は、雑音の入らない、周囲は壁の役場 1 階の奥の会議室であった。もう 1ヶ所は、人の出入りが激しく、音を遮断するものはないという、1階ロビーの階段下である。ロビーなのでオープンスペースで、広さは約 60 平方メートル、すぐ右側は死亡届の窓口、左は、行方不明の確認コーナーで沈痛な雰囲気が漂っている。高橋は、そのロビーの階段下をあえて選んだ。「何よりも町民の人たちの顔が見えることが大事だと思い、決めた」(高橋, 2013, 157)。音を遮断することは、町民を遮断することになると高橋は考えた。町民がそばにいて、町民の声が聞こえることは悪いことではない。なお、現在の事務所兼スタジオも一切の遮断するものはない。誰もが入れる、入ることができるようになっている。そして実際に情報提供する人、宅配便、郵便局員など誰もが入ってくる。次に、スタッフだが話し方教室や町の総合審議会委員も務めていたため、人集めには、苦労しなかった。高橋は、徹底的に山元町にこだわる放送を行うことを決め、番組も 100% の自主制作で行くことを決めた (高橋, 2013, 158)。ラジオ局の正式名は「やまもとまちりんじさいがいエフエム」である。つまり「やまもとまち」のこと、そして「さいがいラジオ」であること、この 2つをこのラジオ局の放送内容の柱とすることを決めた。そしてラジオ局の愛称も、高橋が決めた。それは、山元町の名産の一つである「りんご」と終戦直後日本中に復興ソングとして大ヒットした「りんごの唄」に、山元町の復興を祈願して「りんごラジオ」と命名した。この「りんごの唄」をりんごラジオでは、地元のコラスグループに歌ってもらい、朝オープンニングソング、夕方のクロージングソングとし

て、放送している。

ところで開局初日を無事に終わらせた、高橋は二日目の朝の様子と、自身の放送に対する心境を 2011 年 3 月 21 日から数日後について、次のように回想している。

3 月 22 日、開局 2 日目は午前 7 時放送開始。午前 4 時起床、5 時にりんごラジオへ到着。誰もいない。暗く寒い。天井の蛍光灯を一つ点けて準備開始。災害対策本部などからの情報の他、山元町情報を新聞やパソコンでもチェック。かける音楽の確認などで、あつという間に放送開始時間が近づく。スタッフが一人、二人と到着。放送開始時は大体男性 3 人であった。ミキサー役も全員未経験で、当初は結構、声が放送されなかったり、音楽がでなかつたりして慌てた。開局当日から町長、副町長、教育長の順に出演してもらった。速報性、機動性、そして声で伝えるラジオの特性を活かしながらの放送を意識した。日を追って情報の内容も広がっていった。支援物資の配布情報、放射線情報、尋ね人、そして迷い犬や猫などのペット情報も悲痛だった。取材範囲も広がっていった。「今日取材した人の体験談には泣けた」と、目を赤くしながら戻ってくるスタッフも増えた。少しづつ被災町民が重い口を開き始めた（高橋, 2013, 165）。

最後の「重い口が開き始めた」という言の意味は、ようやく被災者が、自分の中にしまいこんでいた情報を口に出して話してくれるようになったという意味である。

回想したように高橋は、毎日 14~15 時間休むことなく、4 ヶ月間放送を続けた。「寝ながら原稿を読むという特技も覚えました」と冗談まじりに当時を振り返る時もある。「本当にひどいときは、一日 2 人でやっていたんですね。朝 7 時から夜 7 時まで。毎時間毎時間ですよ。本当にそれは大変な時期がいっぱいありましたね」<sup>11</sup>。開局した頃は、多くのボランティアがスタッフとして放送運営に加わっていたが、ゴールデンウィークを境に学校や企業が始まるようになって 1 人抜け、2 人抜けの状態になり、最後は 2 人になったという。このもう一人というのが、高橋厚の妻、真理子だ。プライベイトということで当時のことを多くは語らないが、おかげで夫婦仲が危うくなつたと、妻の真理子は冗談交じりに当時のことを振り返る。仕事が終わって家に帰つても、なにも食べずに 2 時間ほど寝て、それから起きて食事の支度、食事を終えてから、放送するための取材インタビューの編集。そんな生活だったという。

なお、臨災局の財政的な援助では、日本財団や企業等からの助成金が大きな役割を果たし

た。日本財団が助成した経緯について、以下の通りである。

東日本大震災直後、死亡弔慰金、見舞金を渡すために日本財団の笹川洋一と小澤直が石巻に入ったとき、その配布を知らせるための防災無線をはじめとするライフラインが津波により失われていた。住民に周知するためことができずに途方にくれていたところに石巻災害 FM から声が聞こえてきた。

日本財団では被災地のコミュニティラジオ局に対する助成を決めた。しかし、これまで被災地のコミュニティラジオへの助成経験がなく、かつてのコミュニティ放送研究会メンバーから紹介された FM ながおかの脇屋さんにアドバイスを受けながら助成を決めた。震災発生より 13 日後、日本財団の小澤直さんは、宮城県の山元町と亘理町の臨災局を立ち上げた脇屋雄介の意見をもとに、日本財団の助成申請書を作成した。

東北のコミュニティ放送については、状況を聞いて関係の複雑さと連携の難しさに気づき、財団の支援は臨災局を優先した。自治体の首長が免許申請したからには、その地域で必要とされているに違いないという判断から、最終的には既存のコミュニティ放送局が臨災局に移行した局には開設時 20 万円、運営費として月額 200 万円、自治体申請で新たに開局した臨災局には開設時 50 万円、運営費月額 150 万円とし、これに車両購入費 150 万円の補助を決めた。

臨災局のうち、自治体が予算化した市町村を除き、2012 年 3 月の助成申請の締切りまでに支援を求めてきた 22 局すべてに応えている。これらの局については以下の通りである。

〈コミュニティ放送局から移行した 5 局〉

宮城県石巻市、塩竈市、岩沼市、登米市、福島県いわき市

〈自治体申請による新設された 17 局〉

岩手県大船渡市、釜石市、陸前高田市、大槌町、宮城県気仙沼市、南三陸町、名取市、大崎市、亘理町、山元町、女川町、福島県須賀川市、相馬市、南相馬市、富岡町、茨城県高萩市（災害とコミュニティラジオ研究会編, 2014, 135-136）

この他にも株式会社、パナソニック株式会社、キャノンマーケティングジャパン株式会社の民間 3 社が総務省と協力して、日本フィランソロピー協会が事務局となって、2011 年 12 月から 2013 年 3 月まで資金支援を行っている（災害とコミュニティラジオ研究会編, 2014, 136-137）。こうした助成金を得たことからりんごラジオでは、放送機材の代金や人件費を捻出できるようになった。高橋の方針として、素性の分からぬスタッフを雇ってもチームワークが取れないことから、公募は一切行っていない。

### 第3節 りんごラジオの日常

#### 2-3-1 朝9時から生放送

ここで、りんごラジオの放送局長高橋厚の経歴等に触れておく。高橋は東京都出身の1942年（昭和17年）生まれで、東京農業大学卒業時はオイルショックから就職難だった。伊勢丹でアルバイトをしながらアナウンサーを目指し、就職一浪後、東北放送と四国のテレビ局に合格した。そして東京から近い東北放送を選んだ。そしてその後は、ニュースキャスター、バラエティ番組など多彩な番組をこなし、1997年当時は、「アッチャマン」という愛称でラジオDJの人気ものになったことがある。しかし高橋は、始めからアナウンサーを目指していたわけではなかった。大学3年の時に、人と話すことができず、それでは就職はままならないと、知人の勧めで人と話し方を覚えるためにアナウンス学校に通った。それがきっかけとなって、生涯の仕事になったという<sup>12</sup>。管理職となって現場の仕事から離れてから、アナウンス部長、取締役報道局長を歴任した。そして、定年を機に仙台を離れ、釣りもできる、山歩きもできるということで、山元町に2003年に終の棲家として移住した。高橋が移住したという話はあつという間に町内に広がった<sup>13</sup>。東北放送時代の高橋の顔、声を知らない人は、ほとんどいなかつたからだ。そして高橋は、その経験を生かし町内で話し方教室、そして町からは有識者として、総合計画審議会の委員を任せられた。ところで山元町を訪れた直木賞作家の重松清は、高橋の印象を『希望の地図』の中で「高橋さんは穏やかな口調で話す。発音の一つひとつはくっきりとしているのだが、たっぷりとった間合いの「間」が声ぜんたいに溶け込んで、なんともまろやかな響きになっている」（重松, 2012, 44）と東日本大震災後、慰問のために初めてりんごラジオを訪問して会った高橋の印象を書いている。

ここで、2016年1月26日のりんごラジオの一日を見てみよう。朝8時40分に到着すると、すでにその日の朝番アナウンサーの高橋真理子と夫の高橋厚がいた。妻真理子は、2014年の12月17日に高橋厚が脳梗塞で倒れてから放送局長の代役<sup>14</sup>を務めている。この日もあわただしく放送の準備を行っていた。情報番組は一人で放送することが基本スタイルである。他のスタッフたちは、その8時50分、58分と相次いで出勤してきた。

放送開始は9時ちょっとすぎに始まった。こうした時間に対する緩さがりんごラジオの特徴だ。まず町民歌が流れる。

1 太平洋の朝明けに  
いま湧き来る希望あり  
愛と誠の願いこめて

われらは開くひらく  
しあわせの町を

- 2 阿武隈山の夕映えに  
いま野にえがく未来あり  
汗と力の実りを求め  
われらはひらく拓く  
しあわせの町を  
おゝ山元 やまもと  
幸せの町よ

2 番までのコーラスが終わった後に、「JOYZ2WFM、JOYZ2WFM、こちらは、やまもとさいがいエフエム、りんごラジオです。送信出力 30 ワット、周波数 80.7 メガヘルツでお伝えしています」と予め録音されている声が流れる。ここで高橋真理子アナウンサーは「マイクはいりま～す」と他のスタッフに向けて声をかける。そして「りんごラジオ、この時間から生放送スタートです」と番組『おはよう！りんごラジオです』がスタートした。「きょうは、震災から 17〇〇 日目です。きょうもりんごラジオをよろしくお願ひします」。こうしてりんごラジオの一日が始まる。番組では冒頭に必ず 3 点をコメントすることになっている。

一つは「震災からきょうは何日目なのか」。震災を風化させないためのコールである。二つ目は「町の人口と地区別の人口の増減と世帯数の増減」。山元町では、震災後に人口の減少傾向が続いている。そして三つ目が「放射線量の測定結果」である。

次に番組では、その日までに入っている情報やイベント情報が次々と読み上げられている。情報源は、町から隔週毎プレスリリース用として配布されるものからものがほとんどである。このプレスリリースには、町長の日程や町の幹部が出席するような会議、町主催のイベントなどが掲載されている。この他の情報源は、商工会のスケジュール、その他一般町民からのイベント案内等が直接りんごラジオに届けられる。さて、高橋真理子が読んでいるものを見ると、原稿用紙に書かれたものではなく、自分で書いたメモ用紙、あるものはチラシをそのままを読んでいる。テレビ局等の原稿は縦書きが多いが、高橋真理子は横書き、縦書き両方とも読みこなす。内容は新しいものがなければ、繰り返し放送され、新しいものが情報として入ってくれれば、古い情報から順次差し替える。中には 1 週間同じものが放送される時もある。この『おはよう！りんごラジオです』は 1 時間の番組であるが、見学したその日は、48 分くらいで終わった。そのため「次の放送までは、音楽をおかけします」とマイクの

写真 2-2 朝の生放送の様子



スイッチを切った。そしてお決まりの合図、「マイク切りました」とスタッフに声をかけた。

### 2-3-2 送り手と受け手の距離感

1月 26 日のその日、りんごラジオの記者が、10 時から地元の山下小学校 6 年生 60 人が議場見学を取材した。

取材場所は、隣の役場仮庁舎 3 階の議場である。すでに小学生たちが議場にいた。小学生は議場に入るには、生まれて初めての体験のようだ。わいわいがやがやと騒いでいる。始めに防災服を着た議会事務局員から見学歓迎の挨拶、そして町議会の阿部均議長からの見学歓迎の挨拶と続いた。りんごラジオの記者は、あいさつのたびに小さいな IC レコーダーをしゃべっている人に向けて、録音する。その後、町議会の組織や町議会議員のこと、町長の座る場所、議員の座る場所、議場で一番えらい人議長の座る場所などの説明があった。そしてこの議場で一年に何回、どんなことを話し合っているのかなどの説明を受けた。説明が終わって質問時間になると、議員席に座っていた男子から議員が実際にいつも使用しているマイクを使って「なぜ議会では多数決で決めるんですか」と阿部議長に質問した。これに対して阿部議長は、「学級委員会と同じです。でも決まってしまえば、反対の意見を持っていた人でも、総意ということになります」。りんごラジオ記者は、こうした議場内で話された言葉すべてを IC レコーダーにおさめた。

りんごラジオでは、取材、編集、アナウンスまですべて一人でこなす。スタッフは記者であり、編集者であり、アナウンサーであり、ディレクターでもある。一人 4 役をこなす。この日の小学生議場見学会は、話された内容を短く編集して翌朝の『おはよう！りんごラジオ

写真 2-3 子供たちの議場見学を取材するりんごラジオのスタッフ  
(左阿部議長、中央りんごラジオスタッフ)



です』で放送された。取材者が翌朝の“おはよう！りんごラジオです”の担当だったからだ。ある程度は自分の裁量で、情報のラインナップを決めることはできる。だから翌朝に放送した。筆者は翌日の取材した内容を聞くことができなかつたが、翌々日の朝、再放送で聞いた。どんな取り上げ方をするのか興味深かつた。マス・メディアの放送局であれば、この小学生の見学会の取材は、教育的な背景に焦点を当ててニュースにすることが多い。社会科見学として捉えた内容である。小学生が議場を見学する目的はなにか、毎年行っているのかなど背景説明があつて、その上で当日の議会事務局担当者とのやり取りであるとか、小学生の質問など現場の雰囲気として取り上げる。またタイムリナーな話題としては、選挙権の年齢が18歳まで引き下げられたことなどが盛り込まれることも考えられる。聴いてみると筆者が予想したような、背景説明は一切なく、事務局担当者のあいさつや議長のあいさつ、そして小学生から出された質問と答えなどのやり取りが、放送されていた。りんごラジオの可聴区域は町内であり、マス・メディアの放送局が必要とするような背景や一般的な説明よりも、一人でも多くの小学生の声や小学生たちの様子を伝えることが、優先された内容であった。りんごラジオを聞いている誰かのこども、あるいは誰かの孫なのかもしれない。子どもたちが議場に行き、質問をした。そんな様子がラジオラジオから流れた。小学生の議場見学会は、一般的な情報ではなく、隣近所の子どもたちの行動情報である。りんごラジオは送り手と受け手の距離感が近いのが、特徴である。

同じような番組内容を翌日 1 月 27 日の高校入試の話題でもあった。同行したわけではなかったが、放送内容はりんごラジオのすぐ裏の中央公民館を会場に、仙台市内のある私立高校の入試日だった。りんごラジオでは、入試が行われる直前に取材に行った。ここでも通常のマス・メディア放送局であれば、入試会場の様子と受験生の様子を取材し、その年の受験者数や倍率、合格発表の日程など、その時の入試に関する一般的な情報をニュース内容とする場合が多い。しかし、りんごラジオの取材は、入試会場まで待つ受験生にインタビューを行い、「今の心境は?」。受験生は「緊張しています。勉強したところがでるといいです」という声を放送した。マス・メディアの放送は個々の受験生自身にはほとんどニュースバリューがないため、その日に高校の入試が行われたという季節の話題にバリューをもっていく。例外的に特別な、例えば芸能人であるとか、皇族であるとか、特別な人が試験を受けるということであれば、捉え方は変わるが、そうでない限りは入試の傾向等にバリューを見出す。しかしりんごラジオでは町内の中学生が、きょう高校入試に挑んでいるという捉え方である。捉え方は高校入試の特徴や傾向ではなく、身近さにある。

りんごラジオが取材し放送した、小学生の町議会議場見学は、隣近所の子供たちが学校行事として議場に見学に行った様子を放送し、あるいは隣近所の中学生が、今年高校受験という年齢になったことを話題に放送している。

## 第 4 節 りんごラジオの放送内容を分析する

### 2-4-1 保存された記録ノート

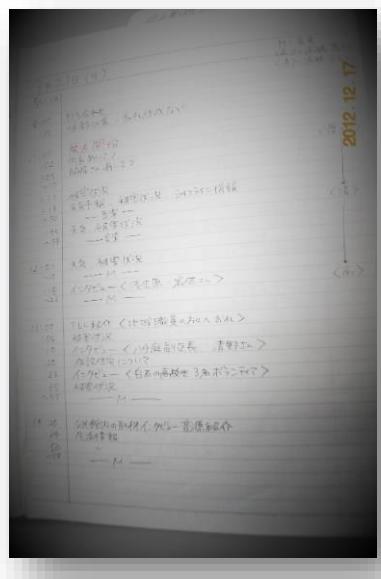
高橋は開局するに当たって、放送記録を残すことを重要視した。高橋がこれまで経験してきた災害時の放送した内容の記録が、重要であるとの認識からだと思われる。そこで放送した記録を残すことをスタッフに課した。放送されたタイトルが記されている学習用のノートの表紙には、資料名『放送記録』とあり、赤字で少し小さな字で、「無線業務日誌」とある。ノートは『放送記録』の文字のあとに No, 1～No, 34 まで番号がつけられ、2011 年 3 月 21 日から 2016 年 5 月 1 日まで 34 冊ある（写真 2-4 参照）。法律的には臨災局はここまで詳細な「業務日誌」は義務付けられてはいない。そしてノートには、放送の開始時間と放送タイトルが鉛筆によって手書きで記録されている。丁寧に書かれているタイトルもあれば、殴り書きのようなタイトルもある。人が少ない中でこうした放送した後のタイトルを書くというのは、大変な作業だったのかもしれない。手書きであるが故にその作業の大変さ、混乱ぶりが文字の乱れから推測できるタイトルもある。ところで、その放送タイトルは、詳細

な内容までは書かれていないため、わからない。しかしタイトルから、どんな情報なのかということはわかる。ここでは2011年3月21日から9月21日までの185日間の放送記録を分析した。なお、記入漏れが4点ある。①6月18日午後1時から午後3時、②7月3日午前8時から12時まで、③7月27日午後3時から午後6時、④8月18日午後3時から午後6時までである。図2-5の写真がノート記載された初日の放送タイトルである。

写真 2-4 『放送記録』 No. 1、No. 11



写真 2-5 2011 年 3 月 21 日初日の放送番組タイトル



## 2-4-2 災害情報の区分

災害時の特徴は、膨大な情報が流され、またその情報内容が目まぐるしく変化することである。そこで本稿では、その変化をわかりやすく整理するために、3つの時期に分けて流れを考える。第1期は、開局の3月21日から5月までのおよそ2ヶ月間とする。震災直後発信した情報内容は行政情報が中心的であったが、それと同時に町民の震災体験や生活状況、避難生活情報も行政情報とミックスさせて情報を発信させた期間であった。震災直後は、山元町は内外とも連絡が取れない状況に陥った。しかし10日後の21日にりんごラジオが開局したことによって、情報が行き渡るようになり徐々に落ち着きを取り戻した。町が設置したりんごラジオは、被害情報、安否情報、避難所の情報を知らない被災者に対し、行政に代わって救援情報、被害情報や避難所情報、生活情報、行政手続きの情報を流し、精神的にも混乱した被災者を落ち着かせた。また震災前にはこうした行政情報は広報誌、口コミなどしかなかった町民に送り手という意識を促し、町民からりんごラジオを通して行政へ、そして行政からりんごラジオを通して町民へという、情報が循環するシステムが構築された。またこの期間は、入ってきた情報をそのまま放送するといふいわゆる緊急放送体制を敷いていた。そのためリスナーにとっては自分の聞きたい放送がいつ放送されるのか、されないのかがわからないという時期であった。

第2期はその同じ年の6月から調査した9月までである。第2期に入ると、りんごラジオは番組体制を敷き、情報内容を時間帯で整理して伝えるというシステムに切り換えた。放送プログラムを作成することで、例えば何時にラジオのスイッチを入れれば町長のインタビューが聞ける、学校の情報が聞ける、町民のインタビューが聞けるといった、リスナーに聞きやすいシステムに切り換えた。第1期の放送システムは、内容は行政情報が中心で、システムは情報として入ってきた順番からその都度流すというものであった。しかし徐々に行政情報がひと段落したことから、町民に聞きやすいシステムを取り入れ、同時に町民の意見をより多く取り入れた情報を番組の中に取り入れるシステムへとシフトさせた。町民の情報は、高橋がりんごラジオの開局から試みてきたことだが、行政情報がひと段落したことからその傾向を強めていった。

そして第3期は、現在に至るまでの期間である。第1期、第2期のようにあわただしさがなくなり、町内は表面的な落ち着きを取り戻すようになる。被害情報や生活情報という緊急性の情報ではなく、仮設住宅や道路、恒久的な災害対策など復旧、復興に対する行政の対応に注目が集まるようになってくる時期である。そこでりんごラジオでは、12月から町議会

の生中継を始める。第2期までは番組化をはかり、町民の意見や考え方を情報発信させた。情報のボトムアップ化をはかった。この町議会中継は、情報の流れがトップダウンという見方もできるが、町議会中継に伴う情報の流れを検証してみると、町議会中継には2つの意味があると考えることができる。一つは、議論のプロセスを明らかにするということである。プロセスとは、町が考え、推進していくこうとする復旧・復興計画等が町議会に提案され、その計画をめぐって議員が町の幹部や町長らと議論を通して、計画の具体的な内容や計画の課題、問題点等が明らかになることである。また議員自体の資質や議員活動等もガラス張りになる。こうした町議会中継を行うことで、町民が復興計画に対して自らの生活目線で実感し、生活者としての意見や賛否を反映するデバイスが組み込まれるのである。第1期から第3期の流れをもう一度整理すると、開局から5月末までは、入ってきた情報をそのまま放送するという緊急速報体制の放送であった。震災直後から山元町は情報が入らず、一時は混乱した状態に陥っただけに、りんごラジオによってその状態を回避するために、情報を日夜問わず流し続けた時期である。2期目となる6月からは、行政からの情報が少なくなる。緊急性の高い情報ではなく、行政情報のような制度的な情報ではなく、生活に密着するような情報が多くなってくる時期である。そのために、行政情報だけでなく、住民から情報収集して、情報を循環させるような双方向の情報交換を行うのである。りんごラジオでは、1期までは五月雨式に情報を出していたが、番組化をはかつて、リスナーに聞きやすく、りんごラジオにとって、情報が出しやすいシステムに切り換えたのである。さらに、9月以降の3期は番組が定番化するなかで、復旧・復興の話し合いが本格化することで、高橋はそのプロセスを町民に聞いてもらうシステムを構築した。それが町議会の中継である。町議会そのものは、公開で行われているが、りんごラジオで中継することで、より身近に復旧・復興を感じることができ、復旧・復興の議論のプロセスを聞けることで町民自らが何らかの意思を示すことができ、さらに議論に参加する意識を促すことにつながることが期待できるというものである。このようなシステムの構築は、放送が長期化しているからこそであり、1期と2期は被害の軽減という臨災局の本来の設置目的に合致した範囲であるが、3期の議会中継は明らかに放送運営が長期化しているからこそ放送ができる企画だと考えられる。

#### 2-4-3 『放送記録』の記述の仕方

ここでは、まず、当事者であるりんごラジオがどのように、自分たちが伝達した情報を考えていたのかを、『放送記録』からまず、2011年3月21日の放送内容みてみる。

11:00 放送開始

:02 町長あいさつ

:05 脇屋さんあいさつ

~10

:11 被害状況

:13 天気予報、被害状況、ライフライン情報

~30 ——音楽——

:45 天気、被害情報

~58 ——音楽——

12:01 天気、被害状況

~10 ——M——

:18 インタビュー<浅生原、岩佐>

~23 ——M——

13:00 TEL 紹介<地域職員の方々へのお礼>

:05 被害状況

:10 インタビュー〈八手庭副区長 清野さん〉

:20 仮設住宅について

:22 インタビュー〈白石の高校生 3名ボランティア〉

:35 被害状況

~50 ——M——

14:00 公民館内の取材インタビュー音源紹介

:24 生活情報

:50 "

~59 ——M——

15:29 インタビュー〈消防団長さん〉

:35 〈陸上自衛隊 豊川駐屯地室長杉浦さん〉

:47 〈伊達市市長奥さま〉

16:00 〈山二小6年 2名〉

~10 ——M——

:30 TEL 紹介 〈東京のサクライさんより〉

## 生活情報

:42 TEL 紹介（衣類提供情報）  
:50 〈仮設住宅、ガソリン情報〉  
~53 ——M——  
17:00 生活情報  
:15 TEL 紹介（4つほど）  
~20 ——M——  
:40 生活情報  
~55 ——M——  
18:31 本日の TEL のまとめ  
FM ながおか脇屋さんから  
19:05 放送終了

初日は分数刻みで放送が行われた。しかし『放送記録』にはタイトルは記載されているものの、それぞれの放送分数は記載されていない。また 11:11 の被害状況とあるが、被害状況の具体的な内容まで記載がない。また 12:18 のインタビュー「浅生原<sup>15</sup>、岩佐」とあるが、どんな内容のインタビューだったのかわからない。つまりこの『放送記録』は原則的に、放送分数と内容の詳細は記載されていないということになる。

放送タイトルを時系列で見てみると、被害情報が 11 時台、12 時台、13 時台の 3 回、その後は生活情報が 14 時台、15 時台、16 時台と 17 時台の 4 回放送されている。さらにインタビューは生出演とは書かれていないが、録音とも書かれてないので、おそらく放送席でそのまま生出演したと推測できるものが、8 回あった。番組タイトルでは「浅生原 岩佐さん」、「八手庭副区長 清野さん」という町民「白石の高校生 3 名ボランティア」、それに「山下第二小学校 6 年生の 2 名」、そして消防団長さんや陸上自衛隊豊川駐屯地室長杉浦さんらという、小学生から自衛隊の人まで幅広い人たちが出演している。内容はわからないが、推測してみると 2011 年 3 月 21 日という震災から 10 日目ということと、防災無線アンテナが震災と津波で破損し、町の全体的な被害情報が町民に伝達できていなかったことなどから、町から出された家屋の全壊状況や津波による浸水情報など全体的被害情報や、消防団や陸上自衛隊からは実際に町内を歩いて被災状況を目の当たりにしている人からの生情報としての被災状況が主な内容だと推測される。また小学生や高校生は、避難生活の状況や学校の

様子などが主な内容だったと思われる。14:00 に放送された「公民館内の取材インタビュー」では誰にインタビューしたのかという記載はないが、当時公民館は避難場所になっていた。そうしたことから、避難してきた人に震災当時の様子や津波の様子、また現在の生活の状況などについてインタビューしたのではないかと思われる。このように、初日の放送タイトルだけをみると、行政情報だけではなく、一般町民や消防団や自衛隊などから被害情報など数字では表すことができないような状況と行政情報をミックスさせながら、震災後の町内の様子を伝えていたことがわかる。

なお、りんごラジオは 2011 年 5 月 23 日から時間帯を区切って、情報を提供するという番組化を図った。このため、それまで五月雨式に情報を流していたが、この時期から何時にりんごラジオを聞けば、どんな情報が放送しているのかといったことが明確になった。そして日毎の出演者や詳細な内容等については、毎日りんごラジオのホームページにて更新されている（りんごラジオのホームページアドレス：<http://ringo-radio.cocolog-nifty.com/>）。午前 8 時からは「ありがとう！りんごラジオです」で、町からの情報やイベント情報、天気予報、朝の町民インタビュー等、午前 9 時からは「情報カフェ」で、地域新聞である河北新聞や全国紙から地域の話題を紹介する番組、午前 10 時からは「健康一番！」で、健康に関する情報番組、午前 11 時からは「ハロー やまと！」という中継番組、12 時からは「ありがとう！りんごラジオです」で、朝の情報のリピート及び新しい情報が入れば新しい情報を伝える、午後 1 時からは「りんご音楽館」という音楽を流す番組、午後 2 時からは「やまと ボイス」というインタビュー番組で、役場の職員が出て町が進めているプロジェクトを説明する、午後 3 時からは「ラジオいろいろ教室」で、町内在住の民話や歴史、俳句、話し方まで様々な講師を招いて教わる番組、午後 4 時からは「学校だより」で、町内の保育園、幼稚園、小中高の関係者、生徒が出演して学校情報を伝える、午後 5 時から「ありがとう！りんごラジオです」で、一日の情報まとめ番組。このようにみると、インタビュー番組が多いことがわかる。

このように 5 月以降りんごラジオの番組は、基本的には 1 時間を基本枠としている。またインタビュー番組が、午前 11 時からの「語り継ぐ！私の 3・11」と午後 1 時からの「ボランティア情報」、午後 4 時からの「学校だより」、午後 5 時からの「ゲストインタビュー及び行政情報」があり、毎日 4 時間が充てられている。こうしたインタビューを中心とした番組編成がりんごラジオの特徴になっている。

#### 2-4-4 放送タイトルの分類

次に、『放送記録』No.1～No.10に記載されていた放送タイトルを書き出し、筆者が分類を試みた。調査は、りんごラジオが開局した3月21日から9月21日までの185日間で、その間に書かれていた放送タイトルの総数は14,261タイトル、そのタイトルをグループ別に仕分けると、198の小項目に分けることができた。放送タイトルには、地域の特色であるとか、災害の特色であるとか、様々なケースバイケースによる言葉が含まれている。そこで、共通性を見出し、グループ別に仕分けすることで、情報種別をわかりやすくするのである。表2-1は、グループ別的小項目と記載されている主な内容タイトル、それに数量を多い順に分類した。

表2-1 放送タイトルの分類

グループ別小項目	記載されている主な内容タイトル	数量
音楽	りんごの唄・オルゴール、青春のフォーク&ポップス	2237
インタビュー	町民インタビュー、インタビュー裾上げボランティア、亘理高校生(女子) 地震の時の話、	817
天気＆ニュース	天気予報、河北新報から拾い読み、楽天結果・桜の話題	687
イベント情報	母と子の山元元気市、大相撲炊き出し等、自衛隊お別れセレモニー	635
放射線量情報	放射能モニタリング、放射能レベルのお知らせ、放射能測定結果	419
義援金情報	義援金情報、義援金協力へのお願い、義援金振り込みについて	375
バス情報	バス予約について、バス運行情報・ぐるりん号運行について	301
仮設住宅情報	仮設住宅について、応急仮設住宅申し込みについて、仮設住宅入居説明会	287
体操	体操エコノミー症候群対策体操、ダンベル体操・体操の時間鈴木玲子	282
写真復元情報	アルバムを発見し心の明るさを(自衛隊)、汚れた写真の洗浄、被災写真の無料補修	281
ジングル	サーカスによるジングル紹介、りんごラジオジングル、ジングル(りんごの唄)	248
ボランティア情報	無料の針鍼灸指圧情報、ボランティア散髪のお知らせ、災害ボランティア	217
ゴミ情報	ゴミ置き場について・ごみの出し方、ごみ収集日程、粗大ごみの受付、粗大ごみ置き場	215
コンサート情報	チャリティーコンサートのお知らせ、コンサートの案内、演奏会のお知らせ自衛隊コンサート	209
がれき情報	がれきの撤去方法、がれきの撤去の意思表示の旗について、がれき撤去清掃について	173
被害情報	被害状況、最新被害状況、坂元・山下地区の状況、被害関係、浸水被害のお知らせ	154
役場職員採用試験のお知らせ	山元町職員採用試験、町初級職員採用試験のお知らせ、上級職員採用試験のお知らせ	146

立入禁止情報	立入禁止区域について、家屋への立入禁止区域について、立入禁止交通規制について	145
心のケア情報	子どもの心のケア巡回相談会、健康セミナーストレスのアドバイス、仙台いのちの電話	143
ハローワーク情報	ハローワーク仙台からのお知らせ、ハローワーク巡回相談のお知らせ	138
あいさつ	朝のあいさつ、町長あいさつ	133
支援制度情報	被災者生活再建支援制度について、被災者支援制度、住宅再建支援制度、災害支援金	131
りんごラジオ案内	りんごラジオ案内、りんごラジオ活動状況、りんごラジオのホームページについて	130
税金情報	自動車税の件、納税期限延長の件、高齢者免税、納税申請について、減免猶予の件	128
アーカイブ情報	3月11日の記録集めています、被災状況のフィルム公募について、写真・映像の公募	131
住宅修理情報	住宅応急修理制度、応急修理制度申請について、住宅修理制度について一世帯52万円	121
見舞金情報	山元町損害見舞金、損害見舞金、負傷見舞金について、再建見舞金、申請について	120
電話番号紹介	電話番号紹介、問い合わせの多い電話番号紹介、電話番号読み上げ、生活情報の電話番号	116
義援金配布情報	義援金配布について、義援金振込について、義援金第一回配分	116
罹災証明書情報	罹災証明書について、罹災証明の申請、申請交付方法、使用の内容について、	108
お風呂情報	自衛隊による仮設お風呂、尾張の湯、尾張の湯の3月28日まで休み29日から、利用状況等	93
水道復旧情報	水道復旧情報、水道復旧状況、23日まで町内7%水道復旧、水道設備復旧状況、	92
役場情報	役場掲示板情報、仮庁舎の件、開閉庁時間について、役場関連情報、土日の役場業務	86
支援物資配布情報	支援物資配布中4月10日～、米・調味料配布について、山元幼稚園衣料配布大人用もある	83
避難指示情報	避難指示区域の墓参りについて、避難指示区域の拡大について、一部解除について	82
復興計画等情報	復興計画について、復興案の説明会開催、復興計画の基本方針住民説明会の開催	81
各種相談会情報	個人事業主の整理相談会、外国人窓口開設、避難所の巡回移動相談会、なんでも相談会	81
支援物資不足情報	物資提供のお願い、野菜ジュース、牛乳、殺虫剤、蚊取り線香、支援物資の協力のお願い	78
貸付制度情報	生活資金の貸付、救援資金の貸付350万円～、災害住宅貸付制度について	77
建物撤去情報	建物撤去の案内、被災建物解体の手続き等について、解体撤去の方法、解体の申請	76
自動車関連情報	車の撤去の方法、自動車学校からのお知らせ、車検の延長、車庫証明について	74
水道情報	水質→安全、水道料金について、水道情報、水道水に関する質問について	74
小学校情報	坂元小学校終了式情報、小学校の始業・入学式、坂元・山下第一・山下第二小学校情報	73
鉄道情報	JRの運転状況、JR復旧状況、JR常磐線増便、JRダイヤ改正、仙石線一部再開	72
地震発生情報	震度4福島県沖、地震のため中断、4月7日の地震について、最近地震が多いので注意	72
支援物資中断情報	支援物資一時中断のお知らせ、支援物資在庫調整のため一時受け入れ中止	72

税金相談情報	22年度確定申告延長、税務避難所相談会のお知らせ、税務の巡回相談会	71
金融機関情報	銀行・信用金庫営業情報、七十七山下支店開始、被災企業への手形・小切手・通帳取り扱い	71
震災復興有識者会議情報	震災復興委員会などについて、震災復興有識者会議の公開について、一般公開について	70
名簿読み上げ	亡くなった人の名前読み上げ、安否未確認の人の名前読み上げ、安否情報のない方の読み上げ	69
公共料金情報	NHK放送料金、NTT東日本電話料金、公共料金について	66
診療情報	歯科診療情報、医療情報について、乳幼児健診の件、避難所歯科診療、避難所の巡回診療	65
疾病情報	風邪インフルエンザ予防方法、エコノミー症候群対策、感染症に注意、感染源対策、熱中症に注意	62
警察情報	貴重品の取り扱いについて、犯罪情報、町内火事場どろぼう→防犯パトロール、路上駐車禁止	62
保育所情報	保育所一時預かり、一時保育について、保育所のお知らせ、東保育所親会開催について	61
避難所情報	避難所の人数、避難所の状況、避難所情報、1945人避難所6ヶ所、	61
臨時職員募集情報	山元町臨時職員募集、役場臨時職員募集、町臨時職員55人募集、臨時災害放送職員募集	58
生活再建支援情報	被災者生活再建支援制度、再建支援制度、家屋生活再建支援制度（罹災証明書必要）	54
安否情報	林いとさん（100歳）震災3日目ヘリコプターで救助町長祝福、ラジオでの安否確認結果について	54
健康情報	健康情報（河北新報から）、健康情報なぜ泣くとすっきりとするのか、健康一口メモ	54
歴史等情報	歴史民話の解説、山元町の歴史散歩シリーズ、町民歌の歴史紹介、	53
買い物情報	買い物状況各販売店について（わたり生協、ヨークベニマル）山元・亘理買い物状況、	53
医療情報	医療情報（開院時間等、土日の開業状況）、医療関係について、	53
町議会情報	山元町臨時議会について、6月議会のこと、町議会始まる、定例議会の様子、町議会報告会	52
消防情報	山火事の防止、山火事に注意、	52
アスベスト情報	被災地の粉塵対策、防塵マスクをつけましょう、アスベスト予防、マスク配布の件、アスベストに注意	52
電気復旧情報	東北電力からのお知らせ、東北電力復旧状況、東北電力復旧の手順	51
避難情報	一次避難の様子（テープ）、県外避難情報、二次避難についての案内（ホテル型、公営住宅型）	51
学校情報	始業式情報、学校関連、学校関係（入学式）、宮城教育委員会より緊急学校支援員募集のお知らせ	50
宅配情報	宅配便情報、宅配便営業情報、ヤマト運輸情報、佐川宅配便情報	49
給水情報	給水場所と時間、給水一役場前給水車2台、各地域給水時間場所案内、給水スケジュール	49
タクシー情報	町内タクシー営業状況、タクシー3社情報、営業状況、	48
運転免許情報	免許センター再開の件、運転免許更新の件、亘理警察署にて免許更新（6ヶ月以内）が受けられる	44
医療費免除情報	医療費免除の件、医療機関支払い免除のお知らせ、被災者医療費免除について	43
幼稚園情報	山元幼稚園の入園式、卒園式、山元幼稚園からのメッセージ（園長先生から）	42

破傷風情報	破傷風に注意、破傷風の予防と対策、破傷風注意（ガレキ、汚水に注意）	41
下水情報	下水道管工事トイレットペーパー使用注意、下水道設備について、下水→1年程度かかる予定	40
ライフライン復旧情報	ライフライン復旧状況、山元町のライフライン関連、ライフライン復旧情報	40
中学校情報	山下中学校の卒業証書発行のお知らせ、学校だより坂元中学校・山下中学校	40
りんごラジオへのメッセージ紹介	激励メッセージの紹介と差し入れ、愛知の自衛隊さんからのメッセージ、お便りの紹介	38
住宅再建支援情報	住宅再建資金取り扱い、被災者住宅再建制度、住宅再建支援金、住宅再建制度	38
行政情報	未払い賃金立て替え制度、新年度について、ふるさと環境事業、山林保全について、転出届け案内	38
保険情報	医療保険証の件、保健福祉料の件、国民健康保険免除について、保健各種のお知らせ	37
放射線影響情報	健康セミナー開催放射能の直理郡への影響について、健康セミナー開催について	37
法務相談会情報	法務局よりお知らせ、法律無料相談について、法務局出張相談、避難所対象による相談会	35
住宅融資情報	被災者の災害復興住宅融資の優遇策、災害復興住宅融資の優遇策	35
ペット情報	犬猫の一時預かり情報、ペットのシェルターについて（岩沼市）、情報紹介犬保護の情報	34
緊急生活情報	生活情報、ラジオ配置先のお知らせ、生活情報のまとめ	34
家屋調査情報	家屋の安全点検について、家屋点検赤→危険黄色→注意、家屋の入居時注意	34
農業情報	稲の作付について、水田塩害対策、営農再開支援について、営農サポート	32
震災からの日数情報	東日本大震災から100日目、震災から3ヶ月目	32
児童通学補助情報	児童通学費補助について、遠距離通学者の補助について、通学補助、通学交通費補助について	32
公営住宅情報	県外公営住宅希望者の件、県外公営住宅申し込みの件、県外公営住宅申し込みの件	31
原発医療情報	甲状腺被曝について、直理郡医師会による講演会放射能の影響、公開講座	29
悪徳商法情報	悪徳商法に注意、震災に乘じた悪徳商法や詐欺に注意	29
外国語放送	英語・中国語で案内、外国語4ヶ国語放送（日本語、英語、中国語、韓国語）	29
避難者情報	避難者数について、避難場所の連絡先お知らせのお願い、避難所の避難者数、避難者相談会開催	28
弁護士相談会情報	弁護士相談会、弁護士会の無料相談会、無料相談電話サービスのお知らせ	27
上下水道情報	上下水道料金について、上下水道料金の徴収内容について、上下水道料金減免について	27
取材情報	町長テレビ出演について、毎日放送からのインタビュー受ける、取材協力のお願い	27
保険センター	保険センターからのお知らせ、保険センターの健康相談、保健センターの育児・離食・予防接種相談	26
土地所有確認情報	町有地民有地のさかい、土地の境界の立会いについてのお知らせ、	26
死亡届情報	死亡届3月13日分、3月30日の死亡届け3名、死亡届けが出された2名のお名前	26
電話情報	NTT ドコモからのお知らせ、NTT 東日本からのお知らせ、案内 NTT 電話回線移動終了	25

自衛隊情報	自衛隊の活動について、1400名自衛隊出動、自衛隊チャリティー支援、自衛隊音楽隊の演奏	25
経営相談情報	中小企業向け経営相談、被災された中小企業経営者対象の経営相談会	24
復旧情報	復旧状況、復旧がおくれている→資材が入らないため、山元町の被害と復旧状況	23
小中学校情報	小学校・中学校の始業式・入学式について、小中学校について、町内小中学校登校状況	23
住宅基準見直し情報	撤去の意思表示の旗について、住宅損壊判定見直し、罹災証明の判定見直し	23
学用品提供情報	学用品の引き渡しについて、学用品等無償提供について、ランドセル運動着学用品の提供について	23
郵便情報	郵便物配達の件、郵便物の避難所配達の件、郵便物の配達窓口時間変更の件	22
放射線説明会情報	放射線無料説明会のお知らせ、放射線基礎知識講演会について	22
年金情報	紛失により年金などを受け取り困難者の方へ、年金相談、国民年金及び年金受給に関する相談会、	22
葬祭費用情報	震災の遺族へ、火葬相談会、町民生活課からのお知らせ、被災によるご遺族への関係費用還付	21
音の絵本	音の絵本（ピノキオつるたまゆ、一寸法師、おやゆびひめ、ピノキオ、かぐや姫、赤ずきん）	21
民話	桜の話、お話玉手箱（うさぎの目はなぜ赤い、天狗の鼻はなぜ高い、花と蝶々の姉妹、）	20
プロパンガス情報	プロパンガス検査について、プロパンガス安全点検、プロパンガス供給開始について	20
生活保護情報	生活保護申請、保健福祉課からのお知らせ、生活保護について	20
人口情報	町の人口情報、人口動態、人口・世帯数、避難所人口の情報、	19
失業労災情報	失業労災について、失業労災関係、社会福協協議会からのお知らせ	19
遺体確認情報	遺体の写真確認について、遺族の方へ遺体の確認関係、遺体確認の閲覧について	19
黙とう	黙とうのお知らせ、14:46の黙とう、あすの黙とうはご一緒に、震災1ヶ月後の黙とう	18
トイレ情報	トイレ使用上の注意、トイレットペーパーの取り扱いについて、トイレ生活雑排水	18
電気料金情報	電気料金について、電気料金の免除について、被災された方の電気料金	18
地域復興組合情報	地域振興組合結成、地域振興組合設立のお知らせ	18
埋葬情報	仮埋葬について、仮埋葬満福寺、遺体の確認仮埋葬、宮城県警から埋葬のお知らせ	18
見舞金配布情報	日本財団の弔慰金配布について、損害見舞金の振り込みについて、	17
床屋情報	散髪のボランティアの案内、町内の床屋さんの営業情報・床屋の案内	16
男女参画相談情報	みやぎ男女参画相談会、みやぎ男女相談室のお知らせ	16
所在確認情報	土地の境界立ち合いについて、境界線立ち合いについて	15
道路情報	国道6号線の情報、国道東側未通し立たず、高速道路通行止め、道路情報、通行規制	14
消毒液配布情報	消毒液散布情報、被災地域の消毒作業について、消毒用消石灰配布オスバン消毒液	14
司法書士会相談情報	司法書士会から実印銀行印紛失者の相談について、法律に伴うトラブル相談について	14

乳幼児健診関連情報	・乳幼児健診のお知らせ・乳幼児健診の案内・乳幼児予防接種の延期	13
災害対策本部情報	災害対策本部より	13
公共施設情報	図書館、美術館、博物館案内、亘理図書館のお知らせ、亘理図書館開館、	13
融資情報	災害復興融資について、社会福祉融資について、生活資金融資について	12
高校情報	亘理高校からのお知らせ（始業式案内）、名取高校入学予定者への連絡、東北高校試合結果	12
行政相談会情報	災害支援特別行政相談会のお知らせ	12
保険事業再開情報	保険事業再開のお知らせ（各種相談、予防注射等）	11
食中毒情報	食中毒の予防、食中毒に注意、魚介類の調理について、腸炎ビブリオ食中毒注意報	11
住宅相談情報	住宅無料相談、被災住宅無料相談窓口	11
国保保険料免除情報	国民健康保険免除	11
健康相談情報	健康相談、便秘に注意、便秘予防について	10
火葬費用免除情報	火葬費用の還付請求について、火葬費用の免除、火葬費用の一部給付	10
仮設店舗貸付情報	中小企業仮設店舗等貸付事業について、説明会の開催	10
介護保険情報	介護保険料について	10
自転車修理情報	自転車修理の活動状況、自転車修理無料について、自転車ボランティア	10
ガソリン情報	ガソリン待ちで死亡事故あり、ガソリンスタンド営業情報、ガソリン供給不足回復しつつある、	9
母子手帳情報	母子手帳交付	9
灯油配達情報	灯油配達、スーパー・生協灯油配達、協同配達、灯油配達今週から通常	9
津波流出物復元情報	流出物保管について・流出物の貴重品引き渡しについて・展示公開の場所や時間	9
救援情報	緊急ラジオの配布について、支援職員の食事作り、高校生8人が自転車で物資運搬してくれた	9
生協情報	宮城生協開店、宮城生協の仮設住宅への商品お届けサービス	8
所得税免除情報	所得税の免税、所得税軽減免除の件、所得税軽減免除の相談の件	8
再建制度情報	生活再建支援制度、被災者再建制度 MAX300万円全壊250万円	8
国保納入期限延長情報	国民健康保険料納入期限延長について、保険料等の延長について	8
空港情報	仙台空港4月3日開港、仙台空港定期便再開のお知らせ、	8
企業支援情報	被災中小企業者の方へ、被災企業への対応	8
一般生活情報	生活一般情報、生活情報のまとめ	8
支援物資情報	支援物資の案内、本日発送の支援物資について	8
病院情報	病院情報、臨時診療所開設について、臨時開業（病院）、医療情報あすは休診	7

土地利用計画情報	土地利用に関する情報、土地利用計画についてのお話し会	7
災害相談情報	災害窓口時間変更、震災相談窓口	7
眼科診療相談情報	巡回眼科診療相談会、目の相談会	7
各種保険事業情報	各種保険事業の変更、各種保険事業の変更等のお知らせ	7
介護保険免除情報	介護保険減免について、介護保険料利用料の減免について	7
遺体発見情報	3月25日3人の遺体が見つかる、4月6日7人の遺体が見つかる、4月9日9人の遺体発見	7
遺体安置情報	遺体の安置所について、遺体安置について、遺体安置情報	7
行方不明者情報提供情報	行方不明者の情報提供のお願い、行方不明者発見のお知らせ	6
清掃センター情報	清掃センター休止中、亘理清掃センター停止中、ごみ清掃センターSTOPの件	6
人権相談情報	人権移動相談会開催、避難所での人権巡回相談、避難所での移動相談（人権、行政相談）	6
常磐道工事情報	常磐自動車道山元工事説明会、常磐道の説明会について	6
し尿汲み取り情報	し尿汲み取り先変更、し尿汲み取り	6
建築制限情報	避難解除地区建築制限について	6
堤防情報	海岸仮堤防について、海岸線の堤防について、仮堤防避難指示区域	5
節水情報	節水の呼びかけ、トイレ等雑用水の節水の協力	5
歯科相談情報	歯科相談について、歯科相談巡回	5
漁協情報	宮城県山下漁協からのお知らせ	5
遺体捜索情報	遺体の捜索目視・がれき除去・重機械で300人で捜索、捜索状況	5
育児相談情報	育児離乳食相談	5
美容院情報	美容院ヴァンティベル再開送迎あり、ラブストーリーへアカット案内	4
雑排水情報	生活雑排水について	4
ガス情報	ガス漏れ点検、ガスのお知らせ	4
お店情報	スーパー・ホームセンター営業状況（アイユー、カインズホーム、スーパードラッグストア）	4
亘理町情報	亘理被害情報、亘理災害対策本部より亘理の被害情報	3
労働相談会情報	雇用労働年金に関する相談会、労働相談会のお知らせ	3
防疫対策情報	防疫対策について、防疫対策薦めの配布について	3
中小企業整備事業情報	中小企業事業整備説明会について	3
地域サポート情報	地域サポートについて、地域サポートセンターについて	3
生活困りごと相談情報	生活困りごと相談会のお知らせ	3

消費者相談情報	消費者相談会、消費生活移動相談会	3
地震情報	地震対策、地震酔い（毎日新聞）	3
眼科診療情報	眼科の診療	3
医療費相談情報	巡回医療相談の廃止、予防接種、個別相談	3
交通情報	交通情報	2
その他	迷い犬のお知らせ、迷い犬の保護、つばめの話、さくらんぼにまつわる話、お盆について	75

#### 2-4-5 分類項目による整理

前節において、示した 198 の小項目をここでは、さらに経時的な分析を行いやすいように 8 の大項目に再分類する。分類した項目は、行政情報、音楽、生活情報、個人に関する情報、イベント情報、インタビュー、学校情報、その他の、8 項目である。その内容は、以下の通りである。

なお分類項目の整理は、まずどんな情報がどのくらいの割合で放送されたのかについて、全体を概観する。そして、次に放送運営が長期化しているという観点から、項目を開局から 5 月までの第 1 期と、6 月から 9 月までを第 2 期として分けて分類整理し、考察する。

行政情報：悪徳商法情報、アスベスト情報、遺体安置情報、遺体確認情報、イベント情報の一部、運転免許情報、介護保険情報、介護保険免除情報、家屋調査情報、貸付制度情報、ガス情報、仮設住宅情報、仮設店舗貸付情報、火葬費用免除情報、がれき情報、義援情報、義援金配布情報、企業支援情報、救援情報、行政情報、行政相談会情報、漁協情報、空港情報、警察情報、下水情報、建築制限情報、原発医療情報、公営住宅情報、公共施設情報、公共料金情報、国保納入期限延長情報、国保保険料免除情報、ごみ情報、災害対策本部情報、再建制度情報、雑排水情報、自衛隊情報（一部）、支援制度情報、支援物資情報、支援物資中断情報、支援物資配布情報、支援物資不足分情報、地震情報、地震発生情報、失業労災情報、自動車関連情報、児童通学補助情報、し尿汲み取り情報、住宅再建情報、住宅修理情報、住宅判定基準見直し情報、住宅融資情報、上下水道情報、消毒液配布情報、常磐道工事情報、消防情報、食中毒情報、所得税免除情報、人口情報、震災復興有識者会議情報、水道情報、水道復旧情報、生活再建情報、生活保護情報、税金情報、税金相談情報、清掃センター情報、節水情報、葬祭費用情報、立入禁止情報、建物撤去情報、男女参画相談情報、地域サポート情報、地域復興組合情報、中小企業整備事業

情報、町議会情報、堤防情報、電気復旧情報、道路情報、土地所有確認情報、土地利用計画情報、年金情報、農業情報、ハローワーク情報、被害情報、避難指示情報、避難者情報、避難情報、避難所情報、復旧情報、復旧計画等情報、防疫対策情報、放射線影響情報、放射線説明会、放射線量情報、保健事業再開情報、保険情報、保険センター情報、母子手帳情報、埋葬情報、見舞金情報、見舞金配布情報、役場情報、職員採用試験のお知らせ、罹災証明書情報、臨時職員募集情報、労働相談情報、亘理町情報

音楽情報：音楽情報、ジングル

生活情報：一般生活情報、お風呂情報、買い物情報、ガソリンスタンド情報、給水情報、緊急生活情報、金融機関情報、交通情報、自転車修理情報、生協情報、タクシー情報、宅配情報、鉄道情報、天気＆ニュース、電気料金情報、電話紹介情報、電話情報、トイレ使用情報、灯油配送情報、床屋情報、バス情報、美容院情報、プロパンガス情報、弁護士相談会情報、融資情報、郵便情報

個人に関する情報：安否情報、遺体検索情報、遺体発見情報、医療情報、医療費免除情報、各種相談会情報、各種保険事業情報、眼科診療情報、眼科診療相談情報、経営相談情報、健康情報、健康相談情報、心のケア情報、災害相談情報、歯科相談情報、疾病情報、司法書士会相談情報、死亡届情報、写真復元情報、所在確認情報、人権相談情報、診療情報、生活困りごと情報、破傷風情報、病院情報、ペット情報、法務相談会情報、ボランティア情報、名簿読み上げ情報、行方不明者情報提供情報、労働相談会

イベント情報：イベント情報、自衛隊情報の一部

インタビュー：インタビュー

学校情報：学用品提供情報、学校情報、高校情報、小学校情報、小中学校情報、中学校情報、保育所情報、幼稚園情報

その他：アーカイブ情報、あいさつ、音の絵本、外国語放送情報、取材情報、震災からの日数情報、その他情報、体操情報、民話情報、黙とう、りんごラジオ案内情報、りんごラジオへのメッセージ紹介情報、歴史話等情報

8つに分類した結果、項目では「行政情報」が全体の 39.2%、5,591 小項目、次いで「楽」の 2,4855 小項目の 17.4%、「生活情報」の 1,785 小項目の 12.5%、「個人に関する情報」の 1,420 小項目の 5.7%、「イベント情報」の 850 小項目の 6.0%、「インタビュー」の 817 小項目の 5.8%、「学校情報」の 324 小項目の 2.3%、「その他」の 989 小項目の 6.9% となった。

表 2-2 放送タイトルの再分類表（単位：%）

大項目	小項目数	割合
行政情報	5,591	39.2
音楽	2,485	17.4
生活情報	1,785	12.5
個人に関	1,420	10
イベント	850	6
インタビ	817	5.8
学校情報	324	2.3
その他	989	6.9

#### 2-4-6 「行政情報」の内容調査

「行政情報」が 3 分の 1 以上を占めるところからさらに具体的な内容にしたがって再分類し、さらに第 1 期と第 2 期に時期を分けて分析を行う。第 1 期と第 2 期に分けるのは、長期化によってどう内容が変化したかを分析するためである。

まず全体として「行政情報」の 5,591 小項目とは具体的にどんな情報なのか、またどんなタイミングで流されたのか、またそうした情報がいつ流されなくなったのかについて分析する。分析するためには、「行政情報」をさらに 4 つに整理する。震災や津波で被災した被災者が、住宅修理に関する情報や融資、支援制度、生活再建制度、仮設店舗貸付に関する情報を「制度情報」とし、また行政が被災者に対して生活に直接必要な避難所の開設情報や仮設住宅の建設に関する情報や入居申し込みに関する情報、公営住宅情報、がれきやごみ処理に関する情報、悪徳商法に関する注意喚起情報、ハローワーク情報、公共料金に関する情報を「生活行政情報」、震災で仮役場庁舎が建設された役場内の案内や開閉の時間情報、役場職員募集情報、盗難空き巣等の防犯情報、町議会に関する情報を「役場情報」、この他、どこにも属さないものや知事や国会議員の来町情報、山火事などの消防情報「その他」とした。

表 2-3 が 4 つの中項目をまとめたものである。4 つのうち多かったのは、「制度情報」で 2,083 中項目で 37.3%、「生活行政情報」は 1,622 中項目で 29.0%、「役場情報」は 1,415 中項目で 25.3%、「その他」は 471 中項目で 8.4% であった。

情報毎にみると、まず「制度情報」は、震災直後から多くの情報が放送され、3 月は 166 (26.7%) であったものの、4 月は 733 (43.2%)、5 月は 435 (43.9%) となった。4 月は、各種の支援物資や義援金に関する情報が多かったことが要因として挙げられ、5 月は、住宅修理や住宅に関する融資の支援制度が情報として多く放送された結果である。こうした支援

制度は、第2期に入ると、徐々に少なくなるが、7月204（35.9%）と9月211（46.4%）に  
が200を超えた。これは3月、4月の支援制度情報が、申し込みや支援制度の案内などで  
あつたが、この7月と9月は支援物資や義援金の受け取りに関する情報のためである。

次に「生活行政情報」だが、特徴は、第1期と第2期の差にある。第1期は1.151（34.8%）  
あるが、第2期は471（20.6%）となり、14.2ポイント少なくなっている。これは、「生活行  
政情報」そのものが、生活に密着する情報が多く、震災直後にニーズが高まることを示して  
いる。

ところで、「役場情報」であるが、3月は79（12.9%）と少なく、4月270（15・9%）、5月  
229（23.1%）と増えてきた。これは、原発事故に伴う放射線量に関する情報、津波によるガ  
レキ撤去のために町内立ち入り禁止区域の案内などが第1期に多かったこと、そして第2期  
に入ると、5月下旬から始まった臨時職員募集に関する情報が多く放送されたことがある。  
また復興計画に関する情報、義援金詐欺に関する警察からの情報などが流された。「制度情  
報」、「生活行政情報」とともに情報量が先細りになる中で、この「役場情報」は6月から9月  
にかけて多くなったのは、常勤の役場職員もしくは臨時職員の募集告知があったからである。  
常勤は6月からであるが、臨時職員の募集は5月から始まっていた。これは国の震災復  
興予算関連で、復興事業が着手されたに伴い役場職員の数が足りなくなり、急きょ職員を雇  
用する必要があったためである。

この行政情報を第1期と第2期の分析からわかるることは、衣食住に関する情報が多く含  
まれている「生活行政情報」と「制度情報」の2つが第1期に多く、中でも4月は「生活行  
政情報」が567（33.4%）、「制度情報」が733（43.2%）と合わせて、全体の76.6%を占めた。  
その後、「制度情報」は2期になると情報量が少なくなるが、これは支援制度や融資関連の  
支援制度に関する情報が少なくなったためである。

その一方で、「生活情報」は第2期になっても、仮設住宅の入居関連情報やごみ情報な  
ど震災後の後片付けに関する情報、そして税金相談や各種の相談会情報などが6月以降に  
も多く発信されるようになり、第1期の衣食住という生活基盤の情報から、第2期の生活

表2-3 行政情報4つの中項目の月別割合（単位：%）

	3月	4月	5月	第1期	6月	7月	8月	9月	第2期
制度情報	26.7	43.2	43.9	40.3	25.6	35.9	27.7	46.4	32.8
生活行政情報	48.9	33.4	28.3	34.8	22.1	18	23.7	18	20.6
役場情報	12.7	15.9	23.1	17.5	39.3	35.9	39.2	30.3	36.7
その他	11.7	7.4	4.6	7.4	13.1	10.2	9.3	5.3	9.9

周辺の情報へと移行していったことがわかった。

こうした情報内容の推移は、臨災局の放送を聞く被災者の必要な情報、問題関心に合わせて、内容が変わっていたことを示している。

## 2-4-7 「インタビュー」 内容の調査

### 2-4-7-1 リスナーの発信者としての萌芽

りんごラジオでは放送タイトルの分類をみると、インタビューなどが約 6% 占める。数多くの人が出演もしくはインタビューによって情報を発信している。開局した初日も、町長、脇屋、インタビュー「浅生原、岩佐」、「八手庭副区長 清野さん」、「白石の高校生 3名ボランティア」、公民館内の取材インタビュー、消防団長さん、陸上自衛隊豊川駐屯地室長杉浦さん、伊達市市長奥さま、山二小 6 年 2 名が出演もしくは、録音で出演した。このように初日にすでに一般町民や消防団員、自衛隊員、またボランティア高校生、小学生など幅広い層から情報が発信された。こうしたことは、初日だけのことではなく、意図的に毎日こうした一般の人たちがりんごラジオを通して、情報を発信していた。高橋はこうした意図について、次のように話している。

一口で言うと、情報慣れをしていなかった。こうした事態になって町民一人ひとりが持っている身の回りのことや考え方や被災やアイディアは、一つの情報になる。A さんの持っていること、体験していることがりんごラジオを通して放送されることで町民の役立つということも大いにありますよ。A さん単独では無理だけれども B さん、C さん D さん同じくらいの意見なり体験なりがあればより強い情報になっていくんでしょうと。（中略）全町民、職員（役場）も含めてわが町のラジオ、俺たちのラジオ、みんなのラジオ意識がやっと芽生えてきた<sup>16</sup>。

高橋の情報が情報を生むというのは、一人ひとりのもつている情報を開示、発信することで次の情報を生み出すことである。またこれまでに気がつかなかつたことを一つの情報がヒントになって次の情報へつながっていくという意味でもある。

こんな事例が二つある。一つは、仮設住宅でネズミが発生しているという事例である。この話は、仮設住宅でねずみが発生していることが、2012 年 12 月の町議会で取り上げられた。そこでりんごラジオは、ネズミが出た仮設住宅を取材し、その実態を明らかにしたとこ

ろ、驚くことにネズミの発生はそこばかりではなく、どこの仮設住宅でも発生していることがわかった。仮設住宅に住む人たちが黙っていたにすぎなかつたのだ。こうしたことから地元の新聞である河北新報<sup>17</sup>でも、仮設住宅のネズミが大量に発生し、糞による被害や洋服がかじられたなどの問題が記事になった。そうしたことから、そのネズミの大量発生問題は、全国に広まった。一時支援物資と全国からネズミを駆除する薬や仕掛けが届いたという。

高橋の言う情報が情報を生むというのは、それまで一人の中でのしかない情報は、点でしかない。しかしその情報が循環すればそれが線になり、様々なところとつながっていくという事例である。

もう一つは、りんごラジオが放送した町民へのインタビューから明らかになった事例である。それは平間副町長への聞き取り調査<sup>18</sup>の中で明らかになった。ある日高橋が（インタビューした日を特定できないが、21日から31日の間だと思われる）、町民がスリッパを履いているのを、高橋がインタビューしたことからその話は始まった。その人は、寒い日にも関わらず、スリッパで歩いていた。そこで高橋がなぜスリッパなのかと問いかけたところ、その人はスリッパのままで避難してきたと打ち明けた。その話を平間副町長が聞いていて、それから靴や長靴を支援物資のオーダー品として加えるようになった、というものである。支援物資といえば、洋服や食糧というのがこれまでの定番となっていたが、しかし実際には靴がないという人がいたというのが、この放送でわかつた。被災者は自ら情報を提示する手段を持ち合わせていなかつた。そこでりんごラジオ（メディア）が積極的に町民らの持つている情報を提示できる機会を作つた。この事例で言えば、町民への街頭インタビューで「スリッパしかなく、靴を持っていない」という情報を引き出し、提示した。そしてその「スリッパしかもっていない」ということが公になることで、情報が役場に伝わり、支援物資の中に靴を注文するということになつたのである。スリッパ、ネズミともに最初は個人的な点でしかなかつた。しかしそのスリッパしかなく靴を持っていない、仮設住宅でのネズミの大量発生という情報が循環されると、結果多くの人が困つてゐたことであつたことがわかつた。つまり情報が循環されることで、多くの人の耳に入り、そして結果多くの知恵が結集されてやがて解決へと導かれていく。高橋の「点と線」というのは、そういう意味である。だから高橋は情報を「点」から「線」に変え、被害や不自由な生活等を解決するべく、町民が情報発信する機会を作つたといえる。

情報組織論、ネットワーク論が専門の金子郁容は、情報には「静的情報」と「動的情報」があるとする（金子, 1996, 121-123）。「静的」はすでにどこかにあるものという概念で、

これに対して「動的情報」とは相互作用の中から生まれてくるものとする。この「動的情報」は、情報を隠すことなく、進んで人に提示し、それに対して、意見を言ってもらう、つまり他人から情報をもらい、そのもらった情報に対して、次はこちらから自分の考え方を提示する。「こうしたやり取りが循環プロセスを生み出し、新たに情報が作り出されていく」（金子, 1996, 122）としている。

金子は「情報というのは、提示されて生かされるのであって、提示されることで情報に意味がつけられ、価値が発見される」（金子, 1996, 123）と述べている。

「支援物資」は服、食料等であるという固定概念がこうした被災者の直接的な情報提示によって覆され、今まで気がつかなかつた新しい情報が生み出される。「情報は与えることで、与えられる」という特性があり、りんごラジオの高橋が言う「町民の持っている情報が他の被災者にとって貴重な情報になる。たくさんの情報が集まり、その情報がさらに有益な情報へと発展していく可能性がある」<sup>19</sup>という考え方はこうした災害における情報のあり方を示したものといえる。

#### 2-4-7-2 インタビューされた本人（出演者）の分類

災害という場において、町民の持っている情報は、大きな広がり、次へつながるという循環プロセスを形成する。小さい情報であっても、人を介することで大きな情報へと発展することもあり得る。スリッパで歩いていたことをことさら問題視しなければ、支援物資の追加ということにつながらなかつたと思えるし、そうした一つの詳細な事柄が被災者とラジオをつないでいくものと思われる。

それでは、実際にりんごラジオはどのくらいの「声」、つまり出演者、インタビュー機会を放送したのであろうか。既述したように全体の 14,261 番組タイトルのうち「インタビュー」の 817 項目、率にして全体の 5.7% である。調査期間が 185 日、そして 817 という機会は、一日 4.4 回の機会があつたことになる。つまり毎日約 4 回のインタビューパン組タイトルがあった。それではどんな人がどのくらい出演していたのか。保存されている番

表2-4 出演者別の項目数と割合

インタビューされた人（出演者）の中項目	回数	割合
町民	245	30. 00%
著名人	149	18. 20%
小中高生	126	15. 40%
ボランティア	93	11. 40%
自衛隊	42	5. 10%
町長	34	4. 20%
教育長	21	2. 60%
学校関係者	20	2. 40%
副町長	18	2. 20%
行政関係者	14	1. 70%
医療関係者	10	1. 20%
国會議員	8	1. 00%
町議会議員	4	0. 40%
その他	33	4. 00%
総数	817	

組タイトルからどんな人がインタビューされ、出演したのかを『放送記録』から抽出し、インタビューされた人（出演者）を 14 の中項目に分類し、その番組タイトル数と割合を計算してみた。（表 2-4 参照）

調査結果をみると、出演者で「町民」が一番多く 245 回、全体の 30.0% であった。この 245 回は毎日 1 回以上、町民が出演していたことになる。次に多いかつたのが「著名人」の 149 回で、全体の 18.2%、そして小中高生が 126 回の 15.4%、ボランティアが 93 回の 11.4%、自衛隊が 42 回の 5.1%、町長が 34 回の 4.2%、教育長が 21 回の 2.6%、学校関係者が 20 回の 2.4%、副町長が 18 回の 2.2%、行政関係者が 13 回の 1.6%、医療関係者が 10 回の 1.2%、国會議員が 8 回の 1.0%、町議会議員が 4 回の 0.4%、その他は 34 回の 4.2% となっている。

さて、全体の出演回数はわかったが、次に月別及び 1 期と 2 期別の出演者の傾向を明らかにする（表 2-5 参照）。

まずは全体を概観する。この表からわることは、「町民」のインタビュー機会の 4 月は、14 回と少なかったものの、3 月は 44 回、5 月は 27 回、6 月は 61 回、7 月は 47 回、8 月は 28 回、9 月は 24 回と、ほぼまんべんなく 1 日に一回以上のペースで出演の機会があった。既述したように、町民が出演する機会が多いということは、それまで受け手だった町民が、出演して情報発信をするということで送り手という立場にも立てるということを実感すること、また自分の持っている情報を発信することで、次の情報を生み出していくと

表2-5 出演者別月毎のインタビュー回数一覧（筆者作成）

	3月	4月	5月	1期小計	6月	7月	8月	9月	2期小計	総計
町民	44	14	27	85	61	47	28	24	160	245
著名人	10	44	40	94	18	15	11	11	55	149
小中高生	7	3	10	20	2	21	83	1	107	127
ボランティア	11	9	21	41	14	19	11	8	52	93
学校関係者	7	2	1	10	3	3	4	0	10	20
自衛隊	12	16	13	41	1	0	0	0	1	42
町長	3	9	8	20	10	3	0	1	14	34
副町長	2	8	5	15	3	0	0	0	3	18
教育長	3	9	5	17	3	1	0	0	4	21
国会議員	1	6	1	8	0	0	0	0	0	8
町議会議員	1	2	0	3	0	0	0	0	0	3
行政関係者	4	3	0	7	0	3	2	1	6	13
医療関係者	5	2	1	8	0	0	2	1	3	11
その他	13	7	4	24	0	4	4	1	9	33
合計	123	134	136	393	115	116	145	48	424	817

いうことを実感できる機会でもある。行政情報は一方向的な面があるが、町民による情報発信は次の情報を生み出し、さらなる情報を生むというつながりをもつ可能性が高い。その意味で、町民が発する情報は、身近な生活情報や避難所の情報など、役場が把握できない情報が循環するという点において、情報発信効果は大きい。また「小中高生」も8月が83回と飛びぬけているが、夏休みで小中高生にアナウンサー体験をしてもらう企画を実施したためである。

この他としては、役場の3役、「町長」、「副町長」、「教育長」の出演回数に注目する。町の幹部という括りで分析すると、3役合わせた出演回数は、3月は「町長」が3回、「副町長」が2回、「教育長」が3回で合わせて8回、4月は「町長」が9回、「副町長」が8回、「教育長」が9回で合わせて26回、5月は「町長」が8回、「副町長」が5回、「教育長」が5回で合わせて18回、6月は「町長」が10回、「副町長」が3回、「教育長」が3回で合わせて16回、7月は「町長」が3回、「副町長」が0回、「教育長」が1回で合わせて4回、8月は「町長」が0回、「副町長」が0回、「教育長」が0回で合わせて0回、9月は「町長」が1回、「副町長」が0回、「教育長」が0回で合わせて0回となった。4月の出演回数が、「町長」、「副町長」、「教育長」合わせて26回であるため、ほぼ毎日出演したことになり、他の月でも2日に1回の割合で出演していたことになる。このように町の幹部がラジオ出演することについて、平間副町長は次のように話している。

紙ベースですと、どうしても行政用語が入ったり、ボリュームが決まっているので、簡潔に伝えたいことをまとめられますが、それを十分理解してもらえるかどうかはクエスチョンです、そういった意味ではりんごラジオの場合だと噛み碎いて放送ができます。（中略）最初の頃はりんごラジオが開局する前は、避難所に行って、肉声で語りかける努力もしたんですが、避難所もかなり多かったので、肉声でお伝えできる限界もあった。すべて回っても限界があり、不十分だった。また避難所におられない方もいる。知人や友人宅に身を寄せている人たちもいるので、こうした人たちには伝える手段がなかった<sup>20</sup>

震災直後、山元町にはメディアが広報誌しか存在していなかったために、全町民に対して町からの情報が行き渡らなかった。そのために混乱や流言蜚語が飛び交ったのである。りんごラジオが開局してから町の情報はりんごラジオを利用することで、その悩みは解決した。加えて、高橋とやり取りをしながら、行政用語を解説しながらの放送なため、被災者にはわかりやすく、丁寧な情報提供となった。

町長、私（副町長）、教育長がほぼ毎日出演させてもらった。いま町がこんな取り組みをしているとか、あるいは町民へのメッセージとか、被災者に頑張って欲しいとかをお伝えするように努力を続けた。こうした出演は1日1回ないし、2回マイクの前にメッセージとして発信した。こういったことで町が取り組もうとしていることが上手に伝わり、（震災以来）初めて徐々に避難所で暮らしている中で、少し安心していただけた感じました<sup>21</sup>

町から提供された情報をアナウンサーが読んで伝えることが、一般的だがこのように町民が混乱している時は、情報の中身もさることながら町長や副町長、教育長が自らラジオに出演して、町民に伝える、また呼びかけるということが混乱を鎮める効果があると、平間副町長は話している。

実際に町長が話した内容が、3月26日の『放送記録』No.1に記載されていた。以下の通りであった。

- ・山元町→仙台へ 直行バスが昨日から

- ・温泉地などへ 国が旅費、宿泊費を援助
- ・災害特別措置法ができる見込み→実現に向けて取り組んでいく
- ・浜通りの瓦礫、車等の撤去→所有者なしで撤去可能にする見込み
- ・福島原発問題、水は大丈夫か、水、牛乳→知事から大丈夫
- ・町内で火事場泥棒 防犯パトロール
- ・震災便乗商法、悪徳商法→うまい話にはのらないように
- ・ハローワーク 29日山元町に来て相談会
- ・一番心配なのは仮設住宅 31日までに仮申し込み、4/1～説明会を開きたい  
一次分は限りなく早く着工、二次分も急いでいる
- ・復旧が遅れている→資材が入らないため
- ・救援物資 情報発信も ばんかい
- ・足りないものは靴、洗濯機確保 (りんごラジオ, 2011)

斎藤町長は、自らラジオに出演することについて、次のように話す

町がどういう状況におかれているのか、いまなにを考えているのか、なにをしようとしているのか、というのを一定程度直接町民の方々にお話しをすることで、安心感をお伝えできるのではないかと思います<sup>22</sup>

自ら出演するという意味は、情報伝達と安心感を伝えるという二つあると町長は話す。事例としてあげた、2011年3月26日の情報提供した内容からもそうしたことが言える。つまり、どの内容もアナウンサーが読めば済むような内容ではあるが、町長自ら話すことで安心感が伝わる。混乱した時期であれば、よりその効果は大きい。

次に、第1期、第2期別に出演回数を分析する。第2期で突出しているのは「町民」の回数である。第1期が85回であったが、第2期は160回とほぼ2倍になっている。りんごラジオでは5月から町民へのインタビュー番組及びコーナー2つ枠を始めている。一つは毎朝町民にインタビューし、現在の生活状況などを聞くという「おはようさんコーナー」、この「おはようさんコーナー」は、町民へのインタビュー番組である。このインタビュー番組もこれまでに放送してきたものをレギュラー化したもので、番組名をつけることで、リスナーにもインタビューを受けた人にも時間帯を明確にでき、わかりやすくなったのである。町民

は悩みや困っていることなど様々なことを抱えている可能性があり、そういう町民の悩みや困り事を掘り起こす意味でも、この番組は効果的であり、放送する時間帯を明確に番組化することで、町民が聞きやすい環境を整えたともいえる。二つ目が「私の3・11」という震災で体験した話をしてもらう番組である。通年のレギュラーパン屋ではないが、震災直後の体験話を聞くインタビューパン屋である。狙いは風化を防ぎ、震災時の体験を共有化、また悩みや苦しみを話すことで、孤独感を和らげる番組である。この「おはようさんコーナー」と「私の3・11」が新枠として増えたことが、第2期において「町民」のインタビューコンサルタントが2倍になった理由である。またこうしたコーナーや番組を立ち上げた背景には、既述したように、行政情報等が徐々に少なくなるなかで、一般町民からの情報を取りれるための工夫として企画されたものである。しかし行政情報が少なくなったから例えば放送時間を縮小するとかという措置を取らずに、むしろ少なくなったことを利用するかのように、新番組を作ったのである。そうすることで、情報の流れがトップダウンで、一方通行だった流れから、町民へのインタビューや体験話を増やすことで、町民からの情報が入ってくるようになり、情報の流れがボトムアップで、双方向に変化していることを示しているのである。こうした流れを作ることで、町民にとっても身近なラジオ局と感じるようになり、情報が情報を呼ぶようなシステムが構築されたのである。

#### 2-4-7-3 「インタビュー」の話の内容調査

インタビューを分析するうえで、内容を把握することは、誰がいつどんなタイミングでどんな話をしたのか、またその話した内容がどんな意味があるのかなどが重要であり、りんごラジオがどんな情報を町民に発信したのか、それを知るための手がかりになる。上記した町長のインタビュー内容から、温泉地へ国が旅費を補助するとか、瓦礫、車の撤去を所有者の許可なく撤去可能になること、火事場泥棒の事件が起きていること、震災悪徳商法が起きていること、救援物資に対する被災者側からオーダー発信すること等であることがわかった。震災直後は情報が大量になり、いつの時点でどんな内容が発信されたかについては、今後の災害時における情報発信の経時的な研究には、貴重な資料にもなり得る。また、りんごラジオ自体がどんな情報を町民に発信したのかなどについて、臨災局としての活動記録を残す上でも重要と考える。

そこで、インタビュー内容の情報を分類し、さらに数量を月別及び第1期、第2期別にする。しかし、保存されているノートには、内容が書かれていないために、内容を推察する必

要がある。その推察の手掛かりの一つ目は、出演者の職務から内容を推察するというものである。例えば、町長、副町長、教育長がラジオに出演すれば詳細はわからないにしても、職務上から考えられる内容は、町の行政内容であることは明らかである。また校長や教諭であれば、学校の状況であることがわかる。このようにその人の職務からあくまでも内容の推察だが、これが一つ目である。2つ目は、コーナーからの推察である。番組や企画コーナーについては後で詳述するが、りんごラジオでは5月中旬から情報を整理し、決められた時間に決まった情報を提供するために、内容毎の番組を始めた。事例としては、5月23日から始まった『語り継ぐ！私の3・11』である。この番組は、幅広い各層から震災体験や津波体験を話してもらうという趣旨で始められた。この番組の内容は、震災体験であることがわかる、これもあくまでも推察であるが2つ目である。3つ目は、開局から18日目の4月7日から始めたブログからである。中には推察ではなく、ブログに話した内容が記載されていること也有った。以上この2点は書かれていないために推察、1点は実際に書かれていることから、月別及び第1期、第2期にわけて考察する。そしてこの推察を含めた3点から得られた内容を「生活情報」「イベント情報」「小中高ラジオ体験」「ボランティア情報」「町行政情報」「震災体験」「被災状況」「学校情報」「医療情報」「県行政情報」「支援情報」「その他」の12項目に分類した。なお、この分類は、先述したように、内容がほとんど『放送記録』に記載されていないため、インタビューをした相手から推測したものである。町民から得られた内容を「生活情報」、被災者慰問のため訪れた芸能人、プロスポーツ選手等は「イベント情報」、りんごっコラジオ夏休み企画からは「小中高ラジオ体験」、町内外からのボランティアからは「ボランティア情報」、町長、副町長、町議会議員からは「町行政情報」、番組『語り継ぐ！私の3・11』からは「震災体験」、消防団や自衛隊員からは「被災状況情報」、教育長、学校長、小中高生からは「学校情報」、医師、看護師、宮城県柔道整復師会からは「医療情報」、大臣や国会議員からは「国行政情報」、宮城県知事、伊達市長、名取市会議員、県教育委員からは「県行政情報」、仙台弁護士副会長、復興支援グロービス大学院副学長からは「支援情報」、カメラマン、インタビュー再放送、インタビューまとめからは「その他」とした。表2-6は、情報を得たと思われるインタビュー相手及び『放送記録』No.1～No.10に書かれていた記載内容をまとめたものである。

まず全体を概観する。全体で一番多かったのが「生活情報」の182回(22.3%)だった。次は「イベント情報」の176回(21.5%)、「小中高ラジオ体験」98回(12.0%)と「ボランティア情報」が99回(12.1%)、「町行政情報」の87回(10.6%)、「震災体験」が49回(6.0%)、

表 2-6 インタビュー内容細目の月別分類表（単位：%）

	3月	4月	5月	1期割合	6月	7月	8月	9月	2期割合	全体の割合
生活状況	35	8.2	13.2	18.3	27.8	25.9	17.2	47.9	25.9	22.3
イベント情報	8.9	37.3	33.8	27.2	18.3	17.2	11	25	16.3	21.5
小中高ラジオ体験	0	0	0	0	0	14.7	55.2	2.1	23.1	12
ボランティア情報	8.9	6	16.2	10.4	13.9	18.1	9	16.7	13.7	12.1
町行政情報	9.8	22.4	13.2	15.3	13.9	6	1.4	4.2	6.4	10.6
震災体験	0	0	5.1	1.8	23.5	12.9	0	0	9.9	6
被災状況情報	13	11.2	9.6	11.2	0	0	0	0	0	5.4
学校情報	11.4	3	0.7	4.8	2.6	2.6	3.4	0	2.6	3.7
医療情報	3.3	1.5	0.7	1.8	0	0	1.4	4.2	0.9	1.3
国行政情報	0.8	4.5	0.7	2	0	0.9	0	0	0.2	1.1
県行政情報	2.4	1.5	0	1.3	0	0	0.7	0	0.2	0.7
支援情報	0.8	0.7	0.7	0.8	0	0	0	0	0	0.4
その他	5.7	3.7	5.9	5.1	0	1.7	0.7	0	0.7	2.8
月毎の割合	15.1	16.4	16.7	48.1	14.1	14.2	17.8	5.9	51.9	100

「被災状況情報」が 44 回 (5.4%)、「学校情報」が 30 回 (3.7%)、「医療情報」が 10 回 (1.3%)、「国行政情報」が 9 回 (1.1%)、「県行政情報」が 6 回 (0.7%)、「支援情報」が 3 回 (0.4%)、「その他」が 25 回 (2.8%) であった。

次に第 1 期、第 2 期別に分けて分析する。長期化することで、インタビュー内容がどのように変化したのかを考察する。第 1 期では、「イベント情報」が 107 回 (27.2%) と一番多かった。次いで「生活状況」の 72 回 (18.3%)、「町行政情報」が 60 回 (15.3%)、「被災状況情報」が 44 回 (11.2%)、「ボランティア情報」が 41 回 (10.4%)、「学校情報」が 19 回 (4.8%)、「国行政情報」が 8 回 (1.8%)、「震災体験」と「医療情報」が 7 回ずつ (1.8%)、「県行政情報」が 5 回 (1.3%)、「支援情報」が 3 回 (0.8%)、「小中高ラジオ体験」が 0 回 (0.0%)、「その他」が 20 回 (5.1%) となっている。

第 2 期に入ると「生活状況」が一番多くなり 110 回 (25.9%)、次いで「小中高ラジオ体験」が 98 回 (23.1%)、「イベント情報」が 69 回 (16.3%)、「ボランティア情報」が 58 回 (13.7%)、「震災体験」が 42 回 (9.9%)、「町行政情報」が 27 回 (6.4%)、「学校情報」が 11 回 (2.6%)、「医療情報」が 4 回 (0.9%)、「国行政情報」と「県行政情報」が 1 回ずつ (0.2%)、「被災状況情報」と「支援情報」が 0 回ずつ (0.0%)、「その他」が 3 回 (0.7%) となった。

第 1 期と第 2 期の特徴は、第 1 期の上位 3 つは「イベント情報」、「生活状況」、「町行政情報」である。2 期の上位 3 つは「生活状況」、「イベント情報」、「小中高ラジオ体験」である。

注目する内容は、「町行政情報」である。第1期では「町行政情報」は60回あったが、第2期では少なくなり、27回と半分以下になった。特に7月は7回、8月は2回、9月は2回と3ヶ月では11回でしかなく、第1期では毎日のように町長、副町長、教育長が出演していたにもかかわらず、第2期では少なくなり、夏休みということもあったかもしれないが、7、8、9月では、1週間に1回程度になった。

こうしたことでのどのようなことが言えるのであろうか。一つ目は情報の流れからの考察である。既述したように放送が3ヶ月を過ぎ、行政情報が少なくなったということで、行政情報が大きなウエイトを占めていたことで、情報の流れが一方向通行だった第1期に比べ、第2期は町民からの情報が多くなり、情報の流れが双方向に変化したと分析できる。

要因は、新しい2つの番組をりんごラジオが新設したからである。スタッフが毎朝、一般町民にインタビューするコーナーの「おはようさんコーナー」、もう一つが震災を風化させないために「私の3・11」という「震災体験」を話してもらうという番組である。こうした番組ができたことで、今まで行政情報に頼ってことでトップダウンだった情報の流れが、町民からの情報収集ができるようになったことで、情報の流れがボトムアップに変化したのである。

二つ目は、内容面からの考察である。2期目は6月からで、すでに開局から2ヶ月半あまり経過しており、これまでの例からすれば臨災局であれば廃止になってしまっておかしく時期である。しかしりんごラジオでは放送運営を続けており、放送運営は長期化の様相を呈していく。こうした中でも町民インタビューであれば、震災から直後のような著名人からのイベント情報ばかりではなく、現在の生活状況というものが、町民の関心事であることは想像がつく。それは町政にとっても町民の生活状況を垣間見ることができる機会であり、また町民個人にとっても、悩みや将来に対する不安などの情報を共有できる機会でもある。インタビューの詳細な内容が明らかではないので、想像の域を脱し得ない面は否めないが、この第2期という時期において、町民のインタビュー内容が、生活状況がトップになっていることが、放送運営の長期化に伴う臨災局としての役割が、被害の軽減から変容していることを指し占めているのではないかと考える。

#### 2-4-8 「音楽」の内容調査

臨災局にとってのメイン情報は、震災や津波など被災者にとって被害に関わるものである。しかし実際に種数を調べてみると、「音楽」の番組タイトルが一番多いことがわかった。

全体で2,485番組タイトルであった。さてそこでりんごラジオでは「音楽」をどのように放送してきたのか。既述した初日の放送タイトル見ても、10回の音楽を放送する機会があった。曲目が記載されていないので、どんな曲が放送されたのかはわからない。それでも保存されているノートにわずかながら、曲目が記載されていることがある。2,485番組タイトルということもあり、リスナーへの影響力も皆無とは考えにくい。なおこうした臨災局と音楽との関係については、先行研究がほとんどない。

まず『放送記録』No.1～No.10に曲目が記載されている曲から、12の中項目「邦楽」「洋楽」「りんごの唄」「クラシック」「童謡」「アニメソング」「オルゴール」「町民歌」「音頭」「不明」「その他」「曲目なし」に分類した。なお便宜上、日本人の歌手の場合は「邦楽」であるとした。

曲目を12に分類したのが、表2-7である。特徴的なのは、曲名の記載のないものが5月以降非常に増えており、第2期では全体の75.8%を占め、その内容を知ることが難しくなっている。その理由は定かではない。その中では、第1期6.7%から第2期10.2%と増えている「りんごの唄」が多い要因は、「りんごラジオ」のイメージソングとして放送されていたからである。高橋は「りんごラジオ」と命名した理由として、山元町が震災から早期に復旧復興が実現するという願いを戦後に大ヒットした当時の「りんごの唄」にかけたためである。このためこの「りんごの唄」はりんごラジオのテーマソングとして、オープニングソングとして、クロージングソングとして、毎日流れる。多分、「町民歌」が第2期でリクエストされているのも、同様の理由ではないかと推定される。

さて第1期で比較すると邦楽は317(28.3%)で洋楽83(7.4%)とで、明らかに洋楽は少ない。「洋楽」が放送されることはなかったのかというと、「洋楽」が「記載なし」の中に埋もれてしまっていることも考えらえるので、多いのか少ないのかはこれだけでは一概には言えない。ただ考えられるのは、山元町は高齢化(2014年山元町の人口は、13,244人で、60歳以上は5,785人で43.7%である。そうしたことから「洋楽」より「邦楽」を好んで放送した可能性も残されている。

『放送記録』No.1～No.10ノートに記載(1行に2人の歌手名が書いてある場合には、それぞれカウントした。曲目は記載なし)されている。歌手名をもとに年齢別人口を念頭におきながら、その年齢構成を推定してみる。主な歌手及び主なグループは「三橋美智也」が2回、「美空ひばり」が11回、「フランク永井」が3回、「石原裕次郎」が5回、「加藤登紀子」が4回、「森山良子」が6回、「小田和正」が6回、「ザザンオールスターズ」が5回、「竹内

まりや」が8回、「松田聖子」が5回、「徳永英明」が7回、「ドリームカムトゥルー」が10回、「SMAP」が6回、「MR. CHILDREN」が15回、「KIRORO」が4回、「嵐」が7回となっている。なお、具体的な曲名が分かっているものは、以下である。

曲名のリクエストからみると、高齢者層のものは少なく、成年層のものが多い。さらに、アニメソングや童謡が、子どもたちのために親がリクエストしているとすれば、ほとんど成年層のものとなる。その中で、具体的な曲で一番多かったのが、アニメソングの「アンパンマンのテーマ」だったことは興味深い。当時りんごラジオのスタッフだった吉田和子さんは「声優の山寺宏一さんや戸田恵子さんが来局してくださったことがきっかけかもしれません」と流したことを話しているが、震災直後の状況を考えると、明るすぎても暗すぎてもだめで、選曲は難しく苦しく、選曲に困った時や小学生が出演してくれた時に「アンパンマンのテーマ」をよくかけたと話している。子どもにとっても親にとっても人を勇気づける歌詞の内容からも流しやすかった曲であったようだ。

ところで、臨災局の役割として説明しにくいものが「音楽」という番組であった。スタジオなどでスタッフの仕事ぶりを観察していくうちに、「音楽」には受け手として聞く普通の音楽という役割と、送り手が放送する「音楽」という2つの役割をりんごラジオが持たせていることがわかった。

役割の一つは、次の番組までのつなぎである。りんごラジオの場合、すべての番組が9時から、10時からといった定時始まりである。例えば、9時00分から始まった番組が、45分で終わってしまえば次の番組まで15分残る。10時00分で始まったインタビューの番組が、10時50分で終われば、残り10分ある。こうした場合に無理に話してその場をつなぐということはせずに、「それで次の番組までここで音楽をお聞きください」と音楽で次の番組までつなぐのである。その間に別番組の打合せを行う場合や別番組の編集をする場合など時間をスタッフは有効的に使っている。これは臨災局のスタッフが、それまでにラジオ運営をした経験がないことに対応しているといってよい。二つ目は、オープニングとクロージングである。朝の放送開始には必ず「りんごの唄」から始まる。歌は山元町のコーラスグループが歌う「りんごの唄」で、放送開始の合図の歌というオープニングを告げる「音楽」としてである。

表 2-7 「音楽」項目の曲目種別分類表（単位:%）

	3月	4月	5月	1期 小計	6月	7月	8月	9月	2期 小計	総計
曲目記載なし	24.8	11.7	39.6	25.2	97.7	93.5	88.7	98.4	75.8	1,564 (60.5)
邦楽	34.6	38.7	21.8	28.3	0.9	0.0	1.2	1.2	0.8	328 (12.7)
ジングル	0.0	15.3	16.6	14.0	10.8	8.2	4.8	2.0	6.7	248 (9.6)
りんごの唄	5.3	8.2	5.5	6.7	6.4	11.3	11.6	11.6	10.2	214 (8.3)
洋楽	6.8	7.4	7.5	7.4	0.0	0.3	0.0	0.4	0.1	85 (3.3)
オルゴール	1.5	7.6	0.6	3.9	0.3	0.0	0.2	0.0	0.1	46 (1.8)
町民歌	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	7.2	5.2	3.2	44 (1.7)
不明	7.5	2.3	0.6	2.2	0.0	0.8	0.7	1.6	0.7	35 (1.7)
童謡	3.0	3.5	1.5	2.6	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	30 (1.2)
アニメソング	6.0	1.8	0.8	2.1	0.3	0.3	0.0	0.0	0.1	25 (1.0)
クラシック	0.0	2.1	2.1	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21 (0.8)
音頭	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	0.4	0.7	10 (0.4)
その他	8.3	7.2	3.4	5.7	1.7	0.8	1.0	2.0	1.3	82 (3.2)

表 2-8 「音楽」の中項目の曲目

放送回数	邦楽	歌手	年代順
	歌謡曲		
1	東京ブギウギ	笠置シズ子	1947 年
1	水色のワルツ	二葉あき子	1950 年
1	上海帰りのリル	津村謙	1951 年
1	夜来香	李香蘭	1951 年
1	津軽のふるさと	美空ひばり	1952 年
1	すみれの花咲く頃	宝塚歌劇団	1953 年
1	高原列車は行く	岡本敦郎	1954 年
1	哀愁列車	三橋美智也	1956 年
1	石狩川悲歌	三橋美智也	1961 年
1	この広い野原いっぱい	森山良子	1967 年
1	ふるさと	五木ひろし	1973 年
1	さくら貝の歌	鮫島有美子	1975 年
1	あなただけを	あおい輝彦	1976 年
1	北国の春	千昌夫	1977 年
1	あなたの空を翔びたい	高橋真梨子	1978 年
1	チャンピオン	アリス	1978 年
1	もう一度	竹内まりや	1984 年
1	100 万本のバラ	加藤登紀子	1987 年
1	みだれ髪	美空ひばり	1987 年
3	別れの予感	テレサテン	1987 年
1	この街	森高千里	1990 年
2	島唄	THE BOOM	1992 年
1	抱きしめたい	Mr. Children	1992 年
1	星のなれたら	Mr. Children	1992 年
1	夕凪	テレサテン	1992 年
1	夢たちぬ	テレサテン	1992 年

2	空と君のあいだに	中島みゆき	1994 年
1	泣きたいような気分で	尾崎亜美	1994 年
1	昭和夢つばめ	石川さゆり	1996 年
1	つつみ込むように	MISIA	1998 年
1	かぶとむし	Aiko	1999 年
1	桜の時	Aiko	2000 年
1	星影の小径	ちあきなおみ	2000 年
2	世界にひとつだけの花	SMAP	2002 年
1	幸せになろうよ	長渕剛	2003 年
2	桜色舞うころ	中島美嘉	2005 年
1	人生という名の列	馬場俊英	2006 年
1	瞳	Aiko	2006 年
1	さくら貝の歌	鮫島有美子	2007 年
1	YELL	いきものがかり	2009 年
2	会いたくて会いたくて	西野カナ	2010 年
1	ありがとう	いきものがかり	2010 年
7	かぞえうた	Mr. Children	2012 年
	アニメソング	アニメ名	
1	鉄腕アトム	鉄腕アトム	1963 年
12	アンパンマンのマーチ	アンパンマン	1973 年
5	となりのトトロ	となりのトトロ	1988 年
1	みんながいるから	みんながいるからプリキュアオールスターズ	2009 年
	童謡		
2	春よ来い		
2	めだかの学校		
1	ずいずいずっころばし		
1	とうりやんせ		
1	七つの子		
1	春の小川		

2	ふるさと		
	その他		
1	花の街		
1	みんな空		
1	あなたへ <sup>23</sup>		
1	お月さんの子守歌		
1	旅立ちの日に <sup>24</sup>		
1	坂元小学校校歌		
1	中浜小学校校歌		
1	山下第一小学校校歌		
1	山下小学校校歌		

また最後もりんごにまつわる歌がかかる。題名は「林檎の木の下で」。「林檎の木の下で～明日また会いましょう～」というディックミネの歌である。この曲は、アメリカ合衆国の作詞・作曲家ハリー・ウィリアムズ (Harry Williams) と作曲家エグバート・バン・アルスタイン (Egbert Van Alstyne) の共作として、1905年に発表された曲である。この曲でりんごラジオの生放送が終わる。このように「音楽」は始まりと終わりを告げるステーションホールの役割を果たしている。

もう一つは放送を続けることが出来なくなった時である。こんな事例がある。それは3月27日、山下中学校に避難している山下第二小学校の児童4人が出演した時のことである。山下第二小学校は、校舎が津波で被災したため、この児童たちは山下中学校で授業を受けていた。その生徒たちに高橋は「校歌を歌ってくれるかなあ」とリクエストした。一瞬戸惑った生徒たちだったが、次の瞬間に大きな声で歌い始めた。歌い終わると、放送席と同じ役場ロビーにいた職員や町民からは涙とともに、大きな拍手が送られた。この場面で高橋は、次の言葉が出なかったという。「私は生放送中にも、数切れなくくらい泣いた。その都度、放送を中断して音楽に逃げた。現役の頃にはなかったことだ。退職して10年、同じ町民の人として、これでいいのだと自分に言い聞かせた」(高橋, 2013, 166)。この話は高橋から幾度となく聞いた。

この高橋が「これでいいのだ」というのは、なにがいいと高橋は話しているだろうか。こ

の言葉の中に臨災局という特徴が表れている。放送の過程を振り返ってみると、まず、高橋が小学生に校歌をリクエストした。この時点で、すでに送り手から受け手という立場に高橋は変わっている。そしてさらに、高橋はその校歌を聞いて涙を流した。この時も高橋は、受け手という立場で感動して、気持ちを表したことになる。つまり高橋の「これでいいのだ」は、ケースバイケースで送り手が受け手になっても、「いいのだ」とコメントしていたということになる。通常の放送（マス・メディア）では、送り手と受け手が入れ替わることはほぼない。高橋が以前勤務していた東北放送では、アナウンサーとして内容をコントロールして、何を流すべきかを判断・選択して放送していた。だから出演者の気持ちを汲んで涙を流すことはなかったし、立場的に流してはいけなかった。ところが、臨災局では、送り手と受け手が固定されていない。このケースで高橋は、送り手である自らの内に受け手としての立場を組み込もうとしていた。だから涙を流してもかまわないと高橋は、考えたものと思う。だから「これいいのだ」とコメントし、「同じ町民の一人として」と付け加えている。この場面で、高橋は送り手と受け手の一人二役を演じた。それと同時に、高橋は元来山元町町民ではなく、移住者である。そうした感覚も手伝って「同じ一人の町民として」という言葉を付け加え、町民に寄り添う気持ちから送り手、受け手ということばかりではなく、一人の山元町民という立場からの情報発信という意識が働いた可能性もある。

音楽の役割はもう一つある。それは深夜の対応のためである。「林檎の木の下で」が終わるとりんごラジオでは、翌朝の生放送開始まで「音楽」をかけている。日替わりで2時間もしくは3時間パッケージに編集されたいろんな歌手やグループの曲の入ったDVD版をリピートで放送するのである。こうした措置は、万が一、深夜に地震や災害等が発生した時でも、緊急放送が瞬時に行えるようにするための措置である。

以上のように音楽の役割は4点と考えることができる。①次の番組へのつなぎ、②オープニングとクロージング、③番組を続けることが困難になった時、④深夜対応——の4点である。なおこの他に「ジングル」というものがある。これは臨災局に限らず、すべてのラジオ局が流しているもので、コーナーの切り替わる時などに流すもので、3~5秒程度の短い音楽である。りんごラジオでも、放送している子どもの声を集めたジングルやコーラスグループのジングルなど様々なものがある。小項目で「ジングル」としてまとめ248タイトルある。

臨災局は被害の軽減という開局目的が明確なだけに、「音楽」という項目は放送内容として軽視しがちな傾向にあるように思われる。しかし実際に放送運営にあたる臨災局にとつ

では、極めて重要な役割を担うものであることがわかる。放送を舞台と例えるならば、「音楽」はいわば緞帳のような存在ですらある。幕と幕の間を務め、次への準備にむけての裏方作業のための耳隠し、最悪な場合の緊急脱出などが「音楽」の存在である。特にスタッフ数が少なく、一人何役もこなさなければ放送が維持できない局であれば、「音楽」は欠かせない存在である。

その一方で、被災者にとっては、音楽を聞けるという当たり前の環境が災害によって奪われているだけに、音楽は癒しを与えてくれる重要な情報という捉え方もできる。

## 第5節 りんごラジオと選挙

### 2-5-1 町議会中継

りんごラジオの開局から9月までの半年間の放送内容を考察してきた結果、第1期は行政が情報源の中心で、情報の流れが一方向で、第2期は町民が情報源の中心で、双方向という情報の流れであることがわかった。

そこで、この節では、りんごラジオが2011年12月から中継を始めた町議会中継と町長選挙に関する番組を放送したことについて、考察していく。

りんごラジオが、町議会生中継をするにあたって、高橋は2011年6月ごろから周辺に調整を始めた<sup>25</sup>。主に町長、議長に相談しながら話を進めていったが、誰も反対するものはないなかったという。2011年12月12日、初めて町議会を中継した日のブログには「災害局での町議会中継は大きな意味があると思っています」と述べているが、その大きな意味とはどのように解釈すればよいのか。

前節でわかったように、第2期においてりんごラジオでは、町民を受け手だけの立場から、情報発信者として捉え直し、インタビューパン組を通じて意見等を聞き、ボトムアップの情報として発信してきた。しかしこの町議会の中継はそうしたものとは、ちがった意味合いがある。この町議会中継には、二つの意味がある。その一つは、町議会の中継を行うことで、復興計画等が決められていく議論のプロセスに透明性が高まり、町民に議論の中身をさらす。そして議論のプロセスが公開することで、町民は復旧及び復興計画に対する意思を示す機会を得ることができ、また議論に参加することを意識することになるのである。

二つ目は、議論のプロセスがオープンになるばかりではなく、町長や副町長、教育長といった町の三役など町の幹部が町民の前で、批判的な視点がそのままオープンになる。町議会中継を受け入れるというのは、こうしたことを町の幹部が容認するということである。特に

防災無線を失った町にとっては、りんごラジオは防災無線の補完機能、広報誌の補完としての役割を十分に果たしてきた。しかし、町議会中継というのは、行政の補完とは意味合いがちがう。この議会中継で発信される情報の中には、町長に対する批判や役場執行部への批判が、そのままラジオから町民に流れる。しかも生中継となれば、編集などで修正することができず、都合に悪いものまですべて包み隠さずに放送されてしまうのである。実際、他の臨災局では自治体の意向から放送内容についての意見が出され、やむなく放送内容を変更せざるを得なくなったという事例がある。市村はこうした事例を明らかにしている。

臨災局といつてもその活動姿勢は一様ではなく、自治体の担当者が運営スタッフの活動に過剰介入し、結果として十分な情報が流せなかつたところもある。

ある臨災局では、商店の開店情報を放送しようとした。震災直後の混乱期、どこで何を売っているかは、被災者にとって大いに価値ある情報である。しかし、自治体の担当者から「民間情報だから」と放送の中止を求められた。自治体担当者の意識は、臨災局は「役所の“お知らせ”を流すもの」という考え方で、みんなのための“放送”という意識が完全に欠如している。また同じ自治体で、避難所で取材し、被災住民のインタビュー放送した時に「何という放送を出すのか」と怒鳴り込んできた。この時は役場に対する意見が数多くあったからであった。担当者は、それが「けしからん」と言うのである。それ以来、取材した住民のインタビュー等は放送前にすべてチェックされることになった。結局、この局はおよそ2年で閉局となった。(市村, 2014, 195-196)

こうした事例は他の臨災局でもある。特に自治体が誘致に深く関与した原発に関しては、福島第一原発事故に関連して神経を使っている臨災局のスタッフは多い。こうした自治体が放送の管理運営権を有していることについて、平間副町長はこう話している。

行政伝達のみというラジオにしてしまえば、報道が偏ってしまいます。ある意味りんごラジオで、行政が聞きたくないような批判的な報道もあってしかるべきですし、すべてが行政主導であるとすると、町民もりんごラジオに耳を傾けなくなることにもなりかねない。行政の怠慢な部分なり、いかがなものかというものがあれば、遠慮なく放送して欲しいと高橋さんにも話している。そういう報道があれば行政はそのことを真摯に受け止め、活かす必要があると思います<sup>26</sup>。

このように平間副町長は、批判も情報のうちという姿勢であることを明らかにしている。結局議会の生中継は特に賛否ではなく、2011年12月の定例会議から始まった。高橋は議会中継はりんごラジオの看板番組であると話す。

今一番りんごラジオで聴取率が高いのは、町議会中継です。これは仮設住宅、町を走るバス、タクシーのドライバーの方、役場・公民館などでは全館ラジオがついています。町長がなにを言うのか、課長がなにを言うのか〈中略〉支援者が聞いているとか、いい反応があって今、聴取率は一番です<sup>27</sup>

議会の中継は2016年11月時点も続いている。議会中継の意味合いを考察すると、一つは復興計画のような町にとっての重要案件の議論プロセスの透明性が高まったこと、もう一つは町長ら町の幹部に対する批判的な意見がそのまま放送されるということで、町長らがりんごラジオを客観的なメディアとして認めたということである。こうした議会中継が実現したことで、議会のムードは一変したと話す議員がいる。2015年10月25日の町議会議員選挙で初当選した町議の橋元伸一は「議会中継は多くの人が関心を持っている。議員も中継していることで、ひきしまる思いを感じる。中途半端なことができないと感じている。〈中略〉議会中継で透明化された。りんごラジオはそういう意味では、知りたいものを放送していると思う」<sup>28</sup>と話す。町議会の定例会議は3、6、9、12月、1年に4回招集される。りんごラジオでは、この年4回の町議会をすべて生中継で放送し、さらにこの定例会議以外に開かれる臨時町議会も生中継している。

## 2-5-2 町長選挙に絡む報道特別番組

りんごラジオは、町議会中継を行うことで、町と町議会が話し合う場面の透明性を高め、例えば復旧・復興計画等の議論のプロセスを明らかにした。さらにりんごラジオは、2014年の町長選挙に関わる事前番組を放送し、町民に対し復旧・復興計画をハンドリングする人を決める選挙に積極的に関わるような番組作りを試みた。

復旧・復興計画をめぐっては、町長選挙の4ヶ月前にこのような騒動があった。町の震災復興計画を巡って町議会と斎藤町長が真っ向から対立したのである。2013年12月町議会でのことである。町長が推し進めるコンパクトシティ構想は人口減少、少子高齢時代を見据え、

車を使わず歩いて暮らせるような商業施設、公共機関などを集約する都市計画である。お年寄りが通院や買い物へ出かけやすくなるほか、自治体はインフラ整備のコストを節約できる利点がある。こうした半ば強制的な移転に反対し、独自の移転を希望する一部の住民が反発し、町議会に独自の移転を認めるよう請願書を提出した。そして町議会はその請願書を全会一致で採択、町長にコンパクトシティ構想の見直しを迫った。これに対して、斎藤町長は、独自の移転は認められないとし、町議会が全会一致で採択した請願書を聞き入れなかつた。こうした町長の態度に今度は、町議会が黙ってはいなかつた。議会軽視、住民無視も甚だしいとして、町議会はその対抗策として、町長の政治的責任を問う問責決議案を町議会に提出した。町長を擁護する意見は出たものの、結局この問責決議案は全会一致で可決された。問責決議案に法的拘束力はないが、前代未聞の全会一致の可決だった。それではこうした町長対町議会という対立をりんごラジオは、どのように放送したのか。臨災局の置かれている立場は既述したが、臨災局の免許人は斎藤町長である。東日本大震災で開局した臨災局の中には、放送内容を事前チェックする自治体もあった。この議会と町長とのやり取りは、一方で免許人と議会との真っ向対立という構造でもある。この様子はりんごラジオで生中継されたが、放送された内容を筆者は、聞くことができなかつた。しかし、問責決議案が全会一致で可決した議会最終日をブログにおいて次のように記載している。

山元町議会 12 月定例会は、補正予算など 10 議案や請願を可決し閉会しました。この中で、町長に対する問責決議案が可決されました。問責決議案の提出議員は、“町民の声をきこうとしない町長の姿勢は今後の町政上、非常に懸念される”という内容を読み上げました。1人の議員が質疑で、“町長は限られた中で精一杯やっており、問責には当たらない”と異を唱えたものの、可決されました。問責決議案の可決は、前の町長以後、今回が 2 度目ということです。法的拘束力はありません。斎藤町長は閉会後、りんごラジオのインタビューに対して、“決議は真摯に受け止めている。今後、復興に向けて町民や議会と共に理解を得られるよう、一層の努力をしていきたい”などと述べました<sup>29</sup>

事実を事実のまま、議会の動きとして伝えていた。さて、こうした背景の中、翌年 2014 年 4 月には任期満了に伴う町長選挙が実施された。町長選挙には、現職の斎藤町長の他に元職が名乗りを上げ、選挙戦は前職と元職の一騎打ちとなった。

一騎打ちとなった町長選は 2014 年 4 月 15 日告示、20 日投開票。この町長選でりんごラジオは初めての試みとして、告示前の事前番組と投開票日の当日夜に開票特別番組を企画した。放送するにあたって、りんごラジオでは町の選挙管理委員会に事前に相談、町もこうした町長選に関する報道は初めてのことなので、県の選挙管理委員会に問い合わせた結果「臨災局といえども、特に選挙の事前報道は何ら問題はないとの見解を示した。ただし、公平・中立が条件であるとした」。こうして事前番組が実現した。

臨災局というのは、総務省が東日本大震災の被災状況を伝えるために認可している。当初は被災情報がメインだった。ところが 3 年経つと復旧情報を通り越して復興情報になってくるんですね。その復興に向けた大きな舵を切る人を選ぶという町長選を伝えるというのは、臨災局の大きな役割だと思っています<sup>30</sup>。

高橋は町長選挙の事前番組及び当日の開票特別番組をこのように意味付けた。この高橋の意味付けは、臨災局の役割が開局直後の被害の軽減から変わって、復興の手助けへの足掛かりについても臨災局が行うという、長期化に伴い臨災局の役割の変化に、高橋自身がはつきりと認識をしていることが、このインタビューからうかがえるのである。そして同時に町長選挙に対する町民への世論喚起を促したものという捉え方もできる。これまで高橋は、町民の意見を多く取り上げることや町の情報を中心にするといった放送運営について言及することはあったが、町民世論の方向性を自ら示すような発言は初めてのことである。高橋の意見を言い換えてしまえば、「伝えることが重要」であると同時に、この選挙を「町民にとっても重要な選挙」と位置付け、それ故りんごラジオとしては特別番組として放送するということを町民にアピールした

ところで、事前番組はどんな番組であったのか、ブログ及びりんごラジオから提供された資料をもとにまとめた。事前番組は告示前の 4 月 7 日から 11 日までの 5 回で、時間は午前 11 時から 12 時までの 1 時間、放送形式は生放送、番組タイトルは『討論！キラリ！やまと』である。それぞれのコーナーの出演者は、第 1 回目の 7 日が 3 地区のまちづくり協議会の会長、第 2 回目の 8 日が沿岸地区の 3 人の区長、第 3 回目の 9 日が町内の若者たち、第 4 回目の 10 日が町内の子育て世代のお母さんたち、そして最終回第 5 回目の 11 日は、立候補を予定していた現職の斎藤俊夫町長と元町長の森久一が出演した。番組の中では、事前に取り決めた質問項目に沿って議論が行われた。この 5 回シリーズの中で、若者と子育て世代

のお母さんたちという出演者が、注目される。それは地区の町づくり協議会の会長や沿岸地区の区長らは、行政に近い人たちである。しかし若者と子育て世代のお母さんたちは、普段はあまり行政との関わりが薄い人たちであるため、こうした番組に出演し、発言を聞いている町民に対しても、アナウンスメント効果として、この町長選挙が重要であると強調することになる。

7日から10日までの討論事前番組は、放送内容はブログ等などでも明らかにされていないので、詳細は不明だが「10日までは日替わりで町内の若者、子育て世代の主婦らをスタジオに招き、座談会形式で町への要望を語ってもらう」（河北新報2014年4月9日付）と新聞報道されていた。また内容についての報道は「8日は、震災で大きな被害が出た沿岸部の行政区長3人が出演した。町政に町民の意見を反映して欲しいなどと語り、町の災害危険区域の見直しや震災後に人口が2割減った町への定住促進策などを求めた」（河北新報、2014年4月9日紙面から）と報道された。このように主な内容は、震災後の復旧、復興に関する町への要望が議題の中心であったようだ。

ところで、事前番組の最終回、第5回目は立候補予定者2人による討論番組である。2人それぞれに、りんごラジオから事前に質問項目が通告され、決められた時間内に回答するという形式で進められた。主な取り決めは以下の通りである。事前に通告された質問は以下の10問<sup>31</sup>である。

①立候補した理由は?、②現在の山元町をどう捉えているのか?、③山元町の課題はなにか、④課題克服するために何をすべきか、⑤これまで様々な町民からご意見を聞いてきたが、言葉のキーワードでお話を伺いたい。一つ目は「交流」。町（行政）と町民との意識の差があるのではないかというご指摘がありました。どのように感じておられますか、二つ目は、「活性化」について、⑥何をもって復興を考えるのか、⑦当選された場合、4年後の山元町の姿は?、⑧お互い質問をしていただきます。2問2答です。斎藤さんから森さんへの質問「いまは有事であり、緊急時であります。この事態をどう対処し、トップとしてのマネジメントに対するご見解をお伺いしたい」、森さんから斎藤さんへの質問「復旧・復興計画の中で移転に無理があつたのではないか。ご見解をお伺いしたい」、斎藤さんから森さんへの質問「私に対するネガティブキャンペーンのような選挙を展開しているが、7年前に不信任で落選<sup>32</sup>したと思っているが（なぜそのようなネガティブキャンペーンを行うのか?）」、森さんか

ら斎藤さんへの質問「人口流出は大きな問題だが、⑨現在の健康状態は、⑩町民への約束は？」

時間はそれぞれ決められた時間内に回答する。時間をオーバーすれば、マイクのスイッチが切られる。答える順番は、前半の5問と後半の5問で順番を入れ替えるというものである。

この他りんごラジオでは、4月12日に開催されたあぶくま青年会議所主催による「山元町長選挙に伴う公開討論会～山元町の未来を考える～」についても、翌日13日1時間15分にわたりノーカットで放送している。

さて選挙戦は、予想通りの激しい熱戦が繰り広げられた。現職の斎藤氏が敗れるようなら、それが、これまで進められてきた復興計画の見直しが行われる可能性もあるだけに、結果が注目された。りんごラジオでは、投開票日の夜8時から町長選開票特別番組を放送した。番組内では、選挙管理委員会から発表される中間開票数を放送するばかりではなく、立候補した2人の選挙事務所と開票所の3ヶ所から生中継で随時開票を伝えたほか、順次入ってくる開票数をりんごラジオのスタジオで解説を交えながら進めていくという開票速報番組であった。町長選挙や町議会選挙の結果は、番組開始約1時間前の午後7時には、すでにスタッフ8人全員が高橋厚を囲んで、番組の進行などについて最終の打合せを行っていた（写真2-6参照）。

企画書「番組の趣旨」には、「震災後初となる今回の町長選挙は、今後4年間の復興等に向け非常に大事な選挙」とこの町長選挙が過去の町長選挙とは異なることが強調されている。また「この選挙を、どのメディアより〈早く・正しく・詳しく〉町民に伝えることは、災害ラジオ（りんごラジオ）が存在する大きな意味を持つ」（りんごラジオ, 2014a）と書かれている。この趣旨は対外向けというよりも、むしろスタッフ向けに作られたものである。高橋がこの番組にかける意気込みが感じられるし、りんごラジオとしての存在意義を内外に示すための番組というアピールも感じる。

りんごラジオの開票番組は、予定通り午後8時から震災直後避難所になっていた中央公民館2階の大ホール入口から、高橋が開票の始まりを告げる中継で始まった。そしてその他立候補者の事務所からのそれぞれの様子や候補者の様子などが中継で伝えられた。そしてその開票所は、票が開くにしたがって、開票の様子を見に来る町民や両候補者の関係者等で埋まった。戦前の予想では、どちらが勝ってもおかしくない、最後の最後までまったく

写真 2-6 開票番組前にスタッフ全員で最終打ち合わせ



写真 2-7 本番中の「りんごラジオ特別番組～キラリ！やまもと町長選挙～」



写真 2-8 本番中は音声担当とアナウンサーと補佐の 3 人体制



くわからない緊迫した選挙戦であった。この町長選挙の争点は、復興計画の是非が問われているだけに、開票結果次第では復興計画の見直し、それとも続行かという計画の今後がかかっている。それだけに、町民の注目は増していた。そして、開票が始まって 30 分後の 8 時 30 分に第 1 回目の開票速報が発表され、選挙管理委員会から両候補とともに 1500 票ずつの中間得票数の状況が発表された。この町長選挙の当日有権者数は、11,164 人、投票率は 70.44%（2010 年の投票率は 68.8%、2007 年は 75.95% だった）であった。開票される票数は 7,000 票あまりである。この 8 時 30 分時点での残りの開票数は 3,000 票あまりで、当落の行方はその 26 分後に発表された。開票結果は、現職の斎藤俊夫氏が 3,983 票、元職の森久一氏が 3,789 票。194 票差という僅差で現職の斎藤氏が再選（町選挙管理委員会開票結果発表、投票者数 7,864 票、有効投票者数 7,772 票、無効投票数 90 票、不受理数 2 票）を果たした。りんごラジオでは、この結果を即座に伝えるとともに、斎藤候補の事務所からの生中継で、再選された斎藤氏の生声を伝えた。

翌日 21 日のりんごラジオのブログには、この町長選挙を次のように記載されている。

20 日（日）、山元町長選挙が投開票され、現職の斎藤俊夫氏（65）が 3983 票（得票率 50.64%）で 2 期目の当選を果たしました。対立候補の元町長、森久一氏との票差は、194 票差の僅差でした。投票率は、70.44% で、前回行われた平成 22 年の町長選挙の 68.80% を 1.64 ポイント上回りました。りんごラジオでは、特別番組で開票速報や両候補事務所からの中継などを交え、午後 8 時～午後 10 時 30 分まで生放送でお伝えしました。5 日間の選挙戦、のどかな光景の中の熱い戦いでした。<sup>33</sup>

そしてりんごラジオでは、22 日と 23 日の 2 日間『新町長に望む』という企画番組を午前 11 時の「りんごラジオスペシャル」のレギュラー番組の中で放送した。22 日の出演は「山元町 3 地区のまちづくり協議会会长」、23 日の出演者は「町内 4 地区の区長」がそれぞれ出演した。また翌週の 27 日（月）には午前 11 時からの『りんごラジオスペシャル』で斎藤町長が生出演して、2 期目の抱負を語った。

翌日、この町長選挙番組について、高橋は次のように振り返った。

必要な情報は、町民のみなさんにお伝えしますし、そのために町がまだ説明なり、表面に出していないものも情報として引き出して町民のみさんにお伝えしていく、ある

いは時には最高のリーダーの人に、町議会なども含めて出でもらう。あるいは、今の町政に不満な人たちにも出でもらう。いろんな形で反対も賛成も喜びも悲しみも怒りもすべての声イコール思いをラジオから発信する<sup>34</sup>

開局以来、高橋の情報発信スタイルは、ありのままを伝えるというスタンスである。町民の意見、町長の意見、その他様々な意見をそのまま放送してきた。第3期に入って、町議会の生中継、そしてこの町長選挙番組を放送し、町民が情報に対して受け身にならずに積極的に町政に参加するよう呼びかけた番組作りであった。それは、町議会では議論のプロセスの透明性を高めて、町民自らが意見持てるような仕組みつくりであり、また町長選挙の事前番組では、討論番組に普段はあまり行政等に参加することのない世代に復旧・復興計画等や町政に対する意見を直接述べる機会を作ることであった。こうした仕組み作りもりんごラジオが長期にわたって放送を行っているからであり、震災からの被害の軽減という臨災局の設置目的から役割が変容していることが表れであり、りんごラジオが震災からの復興フォローの情報提供を町民に行っていると解することができる。

## 第6節 スペース・メディアとしてのりんごラジオ

### 2-6-1 音に無防備なスタジオ

ところで、りんごラジオは、開局した直後は、その役場ロビーにあったが、現在は役場の駐車場の隅、中央公民館前にある。2011年7月23日の役場立て直しより一足早く、引っ越した。グレーのプレハブ小屋が、そのりんごラジオの局舎だ。一見すると、建設現場事務所のようでもあるが、そのプレハブ前には、ひときわ目を引く大きな看板がある。近くに住む人から2011年8月にプレゼントされたものだという。看板は、横127センチ、縦50センチ、厚さ7センチ、材質は栗の木、樹齢は60~70年だという。「りんごラジオ 80.7MHz」と彫り込まれ、浮き出た文字は白く塗られ、両サイドには木製のりんごがぶら下がっている。

このりんごラジオの事務所はスタジオも兼務している。広さは、およそ24坪で、入口はサッシの引き戸、上半分がガラス張り、中を見通すことができる。無人になることはないが、カギは日中かかっていない。この中で放送が行われているとは思えぬほど、誰もが入れて、雑音に対して無防備である。そして事務所兼スタジオには窓がある。概観は建設現場事務所のようだが、見方によってはサテライトスタジオのようでもある。オープンなスペースである。

雑音に無防備な事務所に入る時は、そっと開ける。引き戸を開ける音をマイクが拾って

写真 2-9 りんごラジオのスタジオ兼事務所



写真 2-10 りんごラジオの正面



写真 2-11 りんごラジオのスタジオ兼事務所



しまうかもしれないからだ。入口のすぐそばでアンサーがしゃべっている。放送途中でも引き戸を開ける郵便屋さん、宅配業者、役場職員等もちろんとそれを心得ている。そして中に入つてまず目に入るのは、壁一面に貼られている写真と色紙である。空いているのは天井だけだ。写真や色紙は、数多くの芸能人や著名人で、都はるみ、五木ひろし、竹下景子、糸井重里、星野仙一、白鵬、サンドイッチマンらである。町に慰問のため訪れたのを機会に、りんごラジオに出演人たちである。写真は、その時の出演記念写真で、色紙には、「共に生きて、行きましょう」「全国が応援してます」など励ましの言葉がサインとともに綴られている。写真は200枚あまり、色紙は40枚である。しかし写真は、すでに黄色かったり、黒っぽかったり、赤っぽかったりと色が変色し、劣化している。誰が写っているか判別しにくいようなものもある。その写真と色紙に囲まれているのが、アナウンサー席である。しかしブースのような音を遮断するような囲いなどはない。もう一つ音に無防備なのは、床の作りである。うすいフェルトのようなものが敷いてあるが、普通に歩くと「ドタドタ」と響く。机の上に設置されているマイクにその振動が伝われば、音をマイクは拾い、放送されてしまう。しかしスタッフは、ほとんどそうしたことを気にすることなく、音が出ないような歩き方で、不自由なく本番中も歩き回る。ラジオをよく聞いていると、時々引き戸を開閉する音、電話が鳴る音、FAXの受信音、人の声、なにかを落とした音など様々な音が聞こえてくる。

急ごしらえのスタジオだが臨時であり、一時的なラジオ局であることをそんなところから感じる。しかし聞こえてくる雑音が雑音であればいいが、放送にできない音が侵入する時もある。それは2015年10月20日告示の町議会選挙の期間中のことである。その選挙期間中、街宣カーの音が問題になった。この時の町議会議員選挙は定数13のところ15人が立候補した。りんごラジオは役場の駐車場にあり、日中何度も街宣カーが通る。問題はその候補者が連呼するアナウンスの音である。「こちらは○○候補です」のマイク音がりんごラジオの放送に入ってしまうのである。つまり候補者の名前がそのまま放送されてしまうという、事態になった。そこで、りんごラジオでは、選挙の街宣カーが来た場合には放送を中断して、一時的に音楽に切り換える措置を取ることになり、りんごラジオの2015年10月20日から23日までのブログには「山元町議会議員一般選挙が20日火曜日に告示されました。選挙期間中は、町内を走る選挙の街宣カーの音声が放送に入ることを考慮して番組内容を一部変更させていただきます」と記載された。

さて、放送はどのように行われているのか。マス・メディアの放送局であれば、本番に入る時はアシスタントディレクターが大きな声で「本番まで5秒前、4、3・・・」と秒読み

を行う。が、しかしりんごラジオではそんな本番前のカウントダウンは一切ない。放送を担当するアナウンサーが、みんなに聞こえる程度の小声で「マイク入ります～」と声をかける。これが本番前の合図である。「マイク入ります～」とは、目の前にあるマイクのスイッチを入れて、「これからしゃべり始めますよ」という合図だ。スタッフは、この合図に敏感に反応する。またすぐ近くにある応接セットに座っているゲストや、遊びに来ている町内の人には、スタッフがくちびるに人差し指を立てて、これから放送本番に入ることをゲストらにジェスチャーで伝達する。そして放送が終ったか、もしくは音楽をかけた時には「マイク切りました」と終わりの合図が送られる。これはマイクのスイッチを切ったので、話しても大丈夫ですよという合図だ。するとスタッフの話声は、「マイク入ります」の前の出していた声の音量に戻る。そのタイミングがわからないゲストやお客さんは、終わりの合図があっても、まだひそひそ話のままでいる。

ところで、通常アナウンサーは、原稿の長さを計るためのストップウィッシュは欠かせない。ところがりんごラジオでは見かけることがない。それはなぜか、原稿の読む時間を計る必要がないからだ。通常、放送では原稿を読む時間が決められており、時間枠に収まるのかどうか、下読みながら時間をチェックするという作業が本番前に行われる。どこの放送局でも、そうした風景が見られる。しかし、りんごラジオにその光景はない。りんごラジオの場合、時間制限はあるが、ゆるく枠が設定されているため、時間制限は厳しくない。原稿を読む情報番組は、朝の9時と昼の12時、そして夕方の5時の3回である。その枠はどの番組も1時間である。行政情報が何分、イベント情報が何分、天気予報が何分などと細かく決められているわけではない。全体として1時間で収まればいいという考え方であるようだ。もし時間が足りなくなれば、カットする、余るようであれば、次の番組まで音楽をかけるというシステムである。だから番組は1時間枠のところ、58分だったり、48分だったりと、その日、その時で時間がまちまちである。だからストップウィッシュはいらないというわけだ。こうした番組編成は、熟練したアナウンサーでなくとも、対応できる。読みの時間を守るというのは、ある程度アナウンスの技量を伴うが、読む時間をゆるく設定することで、誰でもが対応できるという方法である。また番組の始まる時間を9時、10時、11時という定時スタートにすることで、リスナーに聴きやすくするということもある。りんごラジオは休日以外、すべて生放送で、そうした生放送にすることで、臨機応変に緊急事態等に対応できる。こうした対応が災害中のラジオ局であることをあらためて感じさせる。

## 2-6-2 町民の公共空間としてのりんごラジオ

りんごラジオは5月23日以降、インタビュー番組が増えることで、出演者も増え、りんごラジオから発信される情報も多岐にわたることになる。様々な人が出入りすることから、電波で流す情報というラジオ本来の役割とは別に、情報のハブ的なもう一つの顔を持つと指摘する声がある。

津波で流された写真等を復元するボランティア団体、思い出サルベージの代表を務める溝口佑爾は、京都府在住で、震災直後からそのボランティア活動のために、3ヶ月に1回程度山元町に滞在している。ボランティア来てもりんごラジオを聞く時間はない。そこで利用するのが、ラジオではないりんごラジオだという。山元町を離れている間に起きた町の問題や復興に関する問題などは、りんごラジオのスタッフの雑談の中で情報が収集できること話す。既述したようにりんごラジオには大勢の人が毎日出入りしており、スタッフはその人たち全員と顔見知りであるので、ラジオで放送できないような情報も洩れてくる。インタビュー番組が終わった後、ゲストが番組終了後もすぐにりんごラジオを立ち去らずに、スタッフと談笑している姿を見かけたことがある。また町長も番組出演の後に、スタッフと談笑している。こうした談笑や雑談の中から様々な情報が発信されているのである。その中にはオフレコ情報、町政の裏話などがないとは言えない。さらに既述したがりんごラジオでは、毎日ホームページで放送プログラムを記載しているので、誰がどの番組に出演するのか事前にわかる。そこで溝口は、番組終了後にそのゲストにりんごラジオに直接会いに行くこともあるという。そこでまたいろんな話が聞けるというわけだ。

鍵もなく、入る時にチェックもない。りんごラジオは音にも人の出入りにも無防備なラジオ局という言い方ができる。しかしその反面、誰もが自由に入り出しができるというメリットもある。コミュニティFMの場合は、ほとんどがビルの中などに入っており、スタジオがガラス張りで作られてオープンなイメージを醸し出す作りになっているところも多いが、局舎の中への出入りが自由ということはない。まして放送スタジオの中と事務所が兼用している局はない。臨災局の場合は、東日本大震災以前でいえば、長くて1年、通常2~3ヶ月で閉局してきた。こうしたことから考えても、緊急時対応ができ、撤収もすぐに可能なプレハブの仮設等という場所が、臨災局の局舎にあてがわれている。

このあり方をコミュニティFMと臨災局を地域メディアを類型化してみる。竹内(1989,7)は地域メディアを「地域」と「メディア」のそれぞれが含意する2つの類型の組み合わせによって、4つのタイプに整理した。①一定の地理的空間に生活する人びと

を対象としたコミュニケーション・メディア②活動や志向の共通性・共同性を自覚する人びとを対象としたコミュニケーション・メディア③一定の地理的空間に生活する人びとを対象としたスペース・メディア④活動や志向の共通性・共同性を自覚する人びとを対象としたスペース・メディアの4タイプである。この分類は1989年当時のものであるが、その分類を浅岡は、1990年代後半急速に発達したものとして、ICT（情報通信技術 information and communication technology）技術によって可能になったコミュニティツールとして、①の中にコミュニティFM、フリーペーパー、地域ポータルサイト、携帯電話での情報サービス、②の中にNPO・諸団体のホームページ、特定地域の電子会議室・ブログ・SNSを加えた。金山（2007, 25）は、コミュニティメディアの役割として、単なる情報を提供する場の創設者ではなく、地域社会の日常の動きや変化を多面的捉えて、地域住民の連帯や社会科を促すようなコミュニケーション活動の場を支えるサポーターとして機能することが期待され、つまりコミュニティメディアは「場」の創設者であり、「場」の活動を支えるサポーターの機能が期待されているとしている。しかし空間としての機能までは述べていない。金山が指摘するように、コミュニティメディアとしてのコミュニティFMは、地域類型では地理的範域をともなった社会的単位として分類され、メディアの類型としてはコミュニケーション・メディアとして属されている。そこで、りんごラジオの事務所兼スタジオはどうであろうか。既述したように思い出サルベージ代表の溝口氏は、情報収集のために、りんごラジオを訪問すると述べている。また放送にゲストとして出演したゲストが番組終了後もそのまま局内に残り、スタッフと談笑しながら雑談している姿がある。こうした会話の中から情報交換が行われていることが考えられる。局舎には鍵が掛けられておらずに出入りが自由になっており、いわゆるオープンスペースな状態になっている、しかもそこに人が集い、情報交換が行われていることを考えると、スペース・メディアとしての機能が備わっていると類型ができる。つまり、竹内が定義した③のタイプで、一定の地理的空間に生活する人びとを対象としたスペース・メディアとなる。つまりりんごラジオがもつ機能は、コミュニティメディアとしての機能と同時に、公民館や図書館、公会堂、公園、ひろばと同じようなスペース・メディアとしても捉えることもできるのである。

## 第7節 閉局

### 2-7-1 2つの選択

これまで幾度となく既述してきたが、りんごラジオは臨時であり一時的な放送局である。コミュニティ FM とはちがい、いつかは閉局する。もしくはコミュニティ FM に移行する。その二つの道しかない。これまで、長くても 1 年程度で、ほとんどの局が 2~3 ヶ月で閉局した。閉局の時期について、総務省では被災地の状況、被災者の状況など総合的な勘案が必要で、その時期はケースバイケースであり、具体的な廃止時期は明記できないとしている。一つの目安は、仮設住宅の被災者が解消されるというものがある。これだけ取り上げても山元町は、まだ仮設住宅を解消してはいない（2016 年 3 月 31 日現在）。閉局するかどうかの判断は免許人次第だが、免許人である斎藤町長は 2012 年 6 月の町議会一般質問で、斎藤慶治議員の質問に、存続させていきたいと次のように答弁した（平成 23 年第 2 回山元町議会定例会会議録 2 日目議事録, 58-59）。

斎藤議員：今回の臨時災害対策用 FM 放送。FM りんごラジオの役割は大きく、生活支援情報、防災情報の提供に多くの町民は高い評価をしています。しかし災害用の FM の国からの支援にも期限があります。本町の今後の復興においてもラジオからの情報を提供し、地域コミュニティの充実に FM 局の存在を図るべきだと思いますが町長の所見をお伺いします。

斎藤町長：東日本大震災発災後間もない 3 月 21 日、新潟県長岡市並びに FM ながおかの協力を得て開局した FM りんごラジオは、臨災局として、発災後の町の応急・復旧関連情報、そして被災者の生活支援に役立つ情報提供において、大きな役割を果たしていただいております。FM 放送局は、町のタイムリーな情報を発信するためには、必要不可欠な存在であり、今後の町の復興に向けても大きな役割を果たしていただけるものと考えております。さらに、長岡市のシステムは、災害発生時において、ラジオを遠隔操作で起動し、緊急放送を伝達できる機能を有しており、今度の災害対策としても重要な手段でありますことから、公設民営方式の導入など、りんごラジオを運営している高橋様を始めとするスタッフの皆様のご協力をいただきながら、存続を図ってまいりたいと思います。

斎藤町長は、このように斎藤議員の「役割は大きく、高く評価されているりんごラジオは、今後の復興、地域コミュニティの充実に存続すべきである」との質問に、斎藤町長は具体的な支援内容は示さなかったものの、存続させることを明言した。しかし運営資金の問題、ス

スタッフ問題など課題も多い。この議会答弁の時点では高橋は「早く、分かりやすく情報を伝えることが、町の発展にもつながる。町全体でりんごラジオを育てて欲しい」（河北新報, 2012年6月17日付紙面）と支援を呼びかけていた。しかし、その後、高橋は「山元町の現状では、コミュニティ放送局になっても、営業活動で自立した経営を維持するのは困難。そうすると永続的に町の財源に頼らざるを得ない。それが本当に正しいことなのか。りんごラジオにかける税源あれば、町としてやらなければいけない仕事はいくらでもある」（市村, 2014, 224）と一転コミュニティFM移行に否定的な考え方を表明した。これを受けた斎藤町長は、2014年12月の議会において、2012年6月のコミュニティFM移行への答弁を撤回する発言を行った（議事録, 11）。

かねがね高橋厚さん等々と担当課を中心にその辺も含めた話など（コミュニティFM局への移行問題）もしてきている経緯もございますが、やはりこの放送局を継続的に一定の期間今後運営していくということになりますと、まずはこの中心的な役割をどなたが果たしていくのかというふうな問題、それから今は交付金を頂戴する中で運営費を賄っているという部分がございますけれども、これをいわゆる恒常的なFM局というふうことになりますと、相当の運営費を確保、捻出しなければならないということになります。一例をあげますと、常時流している音楽関係、これは著作権法の問題もございまして、本来であれば1曲いくらということになるわけでございますけれども、これは今の臨時災害局というふうな特殊な立場を考慮した中での著作権の取り扱いというふうなことで、負担のない形になってあったりというふうな、そもそも課題が多いというようなことで、高橋局長さん自身も一定の時期をもってこれはやっぱり整理せざるを得ないというふうに考えもあるようでございますので、こうした面をトータルを考えますと、なかなか山元町としてFM局として継続させるというのは極めて難しい現実かなというふうに思っております。

この時の答弁で斎藤町長は、りんごラジオがコミュニティFMへ移行する問題として、2点上げている。一つは、りんごラジオの担い手の問題である。高橋が高齢であり、コミュニティFMに移行するには、番組運営等の後継者不在を課題に挙げている。2点目は経費の問題である。臨災局は、国からの補助金で賄われていることからコミュニティFMに移行した場合には、その補助金が使えなくなるという問題、また音楽使用に関わる著作権費用など新

たなに経費が上乗せされるという問題、さらに町としてその経費を恒常に捻出するには、現状に照らせば厳しいという、2点をあげている。一方、運営責任者の高橋は、当初はコミュニティFMへの移行を希望している時期もあったが、維持費を捻出のために税金を投入することが最善なのかについては、疑問であるとしている。そうしたことから高橋は、いったんはコミュニティFMへの移行を表明したものの、資金的な問題から公営住宅への被災者全員入居という段階で閉局という方針を打ち出している。

ところで、コミュニティFMの維持費は年間どのくらいかかるのであろうか。茨城県牛久市<sup>35</sup>が2015年8月にコミュニティFM開設に伴って、全国のコミュニティFMにアンケート調査がある。アンケートでは、86社から回答を得た。そして第3セクター方式によるコミュニティFMの年間経費まとめたのが表14である。5千万円未満が13社、5千万円以上が39社。また1億円以上と回答したのが15社、最低が1,600万円で、最高が7億4,800万円と最低と最高の差は、7億3,200万円大幅な差となった。平均の年間経費は、8,700万円。この調査結果からもわかるように、局舎、スタッフの数、番組制作費、使用機材等によってかなりの差が出る。実際に山元町でりんごラジオがコミュニティFMとして運用を開始した場合、ここに示された年間経費では、幅が大きすぎて目安にしにくい。ちなみに町ではなく市ではあるが、山元町に近い宮城県名取市に2015年2月28日に開局した「なとらじ801」は、人件費等を含めた年間経費は3,200万円と回答<sup>36</sup>している。現在のりんごラジオの年間経費は、議会に提出されている予算書で1,500万円となっているが、コミュニティFMに移行した場合は、町長が議会で明らかにしたように音楽の著作権費用などの経費が上乗せされることが予想される。コマーシャル収入は狭い地域内ということからあまり多くは期待できないことから、運営は現実的にはかなり厳しいと思われる。

こうした流れからりんごラジオの閉局は2016年3月末と一時決まったが、また2015年12月になって、「伝えるべき情報はまだたくさんある。町の復興状況を引き続き発信することで地域の活性化につなげたい」(河北新報,2015年12月10日付)と高橋は話し、斎藤町長に一年だけの運用継続を申し入れ、町長もこれを了承した。こうしてりんごラジオは、とりあえず2017年の3月まで放送を続けることで一件落着した。ところで、りんごラジオの一年間の運営経費だが、地元の河北新報によれば、りんごラジオスタッフ8人分の人件費など1,500万円は、2015年度で終了する国の緊急雇用創出事業補助金に代わり復興交付金を活用する方針だという。

## 第8節 まとめ

この章においては、りんごラジオの放送内容の分析を行った。わかりやすくするために、開局から5月までを第1期、また6月から9月までを第2期とし、放送された14,261項目の分析を行った。さらに長期化という観点から10月から現在までを第3期として、主に番組制作の企画意図、番組内容について、具体的には2011年12月から始まった町議会中継や2014年4月に実施された町長選挙に関する事前番組と投開票日における特別番組などを事例として、考察した。一方ハード面では、局舎の建物や事務所兼スタジオの内部、また放送設備等について検証した。

全体を俯瞰すると、放送内容については、開局直後から5月までの第1期は、行政を主な情報源として五月雨式に入ってきた情報をそのまま流すというシステムで、情報の流れは一方向な放送であった。6月から9月までの第2期では、行政情報が少なくなる中で、情報の流れは一方向ではなく、町民の持っている情報を主とするような双方向の流れにシステムが切り替わり、町民のインタビュー番組や震災の体験を話す番組などが主な放送内容になった。さらに長期化という観点からの考察では、第3期として臨災局の設置目的であった被害に軽減から、復旧、復興が進む中でりんごラジオは、12月から復旧・復興の計画案作成等の議論のプロセスを明らかにするために町議会の生中継を始めた。議会の中継ということでは、国会中継も行われているが、町議会中継と国会中継との違いは、町議会は地域と密着した情報を議論している場であり、議論している内容が町民自ら当事者であるという点にある。また、町長選挙に関する地区長や子育て世代、若者など様々な階層の人たちが自ら今後の街づくりなどフリーに意見を述べるトーク番組を放送、そして投開票日当日は、町長選挙特別番組を放送したことを取り上げた。こうした番組を企画、放送する意図は、復旧・復興に被災者として意思を示す機会を示すことであり、また復旧・復興に対しての議論に参加することを意識づけることと思われる。つまり放送運営が長期化していることに伴い、町民に対して復旧、復興に対する情報提供をおこなっていることであり、臨災局であるりんごラジオの役割が被害の軽減から復興を促進するための役割を果たしているといえる。

## 第3章 みなみそうまさいがいエフエム「南相馬ひばり FM」

### はじめに

この章では、事例として福島県南相馬市に設置されたみなみそうまさいがいエフエム「南相馬ひばり FM」（以下、ひばりエフエム）を取り上げる。南相馬市は、震災と津波に加え原発事故により、放射線量の高低で住める地域と住めない地域と分断された。ひばりエフエムにおいて注目するポイントは、①スタッフ全員がラジオ未経験である（松本, 2016, 118）、②スタッフのほとんどがラジオ運営をするために集まつたのではなく、南相馬市を再生するために集まつた、③放射線量によって、分断された南相馬市を再生するための運営、番組とはどんなものか、以上がひばりエフエムを事例として選んだ理由である。

本章の構成は、まず南相馬市が臨災局を設置に至った経緯、ひばりエフエムのスタジオ兼事務所の内部などの実態を明らかにする。二点目は、開局当時からの番組から数多くの自主制作番組を制作するようになった経緯などを考察することで、放送運営の長期化に伴う臨災局の役割変容について考察する。

調査は、3つに方法によって行った。一つはフィールドワーク調査で、聞き取り調査としてひばりエフエムのチーフディレクターの今野聰他、ひばりエフエムのスタッフ及び関係者に行った。また番組収録にも立ち会い、番組の出演者にも聞き取り調査を行った。二つ目は、放送以外に対する調査である。ひばりエフエムではホームページで番組内容をWEB上で公開しているほか、Facebook、ツイッターといったSNSと通じての情報も発信している。このため、こうした放送以外の情報発信サイトも調査を行った。また放送自体はインターネットによるサイマルラジオやリッスンラジオでも市外で聞くことができるため、市外で番組を録音して、それを活字化して分析も行った。三つ目は、チーフディレクターの今野聰は講演会やシンポジウム、研究会での発言に対する調査である。筆者本人がこうした講演会やシンポジウム、学会に同席した場合には、許可を得た上で録音し筆者自らそれを文字起こし、調査資料とした。

### 第1節 南相馬市の概要

#### 3-1-1 東日本大震災以前の南相馬市

南相馬市は福島県の北部に位置し、福島県内では会津、中通り、浜通りの3つの地域があるが、この南相馬市は太平洋に面していることから、浜通りに属している。面積は398.5Km<sup>2</sup>、

東京からは 292Km の距離に位置している。

気候は、年間平均気温が 13.4 度で、海洋性気象で冬季も比較的温暖である。南相馬市は、2005 年 1 月 1 日にいわゆる平成の大合併によって、原町市、鹿島町、小高町の 3 市町が合併して誕生した。合併協議は、相馬市、原町市、新地町、鹿島町、小高町、飯舘村の 6 市町から始まり、話し合いを重ねたが、結果的に 1 市 2 町が合併した。合併後は地域自治区制が採用され、南相馬市原町区、南相馬市鹿島区、南相馬市小高区として、それぞれの地区に区役所が設置された。

2010 年の福島県調査によると人口は、70,889 人で、福島県内で 6 番目<sup>37</sup>の市であった。2011 年には、66,542 人に減少し、さらに 2014 年には 63,653 人にまで減少している。

2014 年における南相馬市の年齢別人口は、若年層（0～9 歳）は 10,153 人（16.0%）、成年層（20～59 歳）は 27,731 人（43.6%）、高齢者層（60 歳以上）は 25,545 人（40.1%）、年齢不詳 224 人（0.4%）であった。生産を担う成年層は多く、必ずしも高齢者層が中心ではない。

また産業別人口では、農業・漁業などの第一次産業では 140 人（0.61%）、建設業・製造業などの第二次産業では 7,825 人（36.3%）、運輸業、小売業、サービス業などの第三次産業では 13,560 人（63.0%）となり、産業の中心であることが分かる。なお、その内、医療・福祉は 2,476 人（11.5%）で必ずしも多くない<sup>38</sup>。ひばりエフエムをこうした人々が聞いていることが想定される。

### 3-1-2 東日本大震災以後の南相馬市

南相馬市は震災、津波に加え、原発事故で複合的な災害に見舞われた。原発事故による放射能の影響で市外に避難していた人は、4 月から徐々に戻り始めたが、自宅に戻ることができない地域の人たちは、全国各地に避難先を求めた。そしてその避難先は全国津々浦々に及んでいる。

2016 年 6 月 16 日現在で南相馬市が把握している避難先の都道府県は、北は北海道から南は沖縄県まで 9,660 人である。各都道府県別の避難者数は、北海道が 67 人、青森県が 16 人、岩手県が 42 人、宮城県が 1,417 人、秋田県が 47 人、山形県が 545 人、福島県が 3,990 人、茨城県が 520 人、栃木県が 368 人、群馬県が 137 人、埼玉県が 472 人、千葉県が 290 人、東京都が 541 人、神奈川県が 302 人、新潟県が 529 人、富山県が 3 人、石川県が 29 人、福井県が 12 人、山梨県が 57 人、長野県が 64 人、岐阜県が 10 人、静岡県が 37 人、愛知県が 21 人、三重県が 4 人、滋賀県が 9 人、京都府が 16 人、大阪府が 24 人、兵庫県が 23 人、

奈良県が1人、島根県が1人、岡山県が8人、広島県が6人、山口県が2人、香川県が3人、愛媛県が3人、福岡県が8人、佐賀県が3人、長崎県が8人、大分県が5人、宮崎県が4人、沖縄県が12人、海外が10人となっている。中でも福島県内が一番多く3,990人、次いで宮城県の1,417人、新潟県の529人と隣県が合わせて6,000人近くと61.4%と半数を上回っている。

放射線の除染作業が進んだことから、南相馬市小高区と原町区の一部の出されていた居住制限区域及び避難指示解除準備区域が2016年7月12日に解除された。震災前の2011年3月11日では、小高区の人口は12,842人、鹿島区は11,603人、原町区は47,116人と合計71,561人だったが、2016年7月21日現在では、小高区が233人、鹿島区は13,056人、原町区は42,489人、合計で55,778人と震災前の77.9%である。なおこの中には他の市町村からの避難者2,342人が含まれている。

2014年8月、南相馬市が小高区の東部、中部、西部の全住民に帰還意向調査を行ったところ（出典 南相馬市）、小高区に限らず南相馬市内に戻ると回答した人は、1,680人で全体の20.2%、戻らないと回答した人の2,191人（26.4%）を下回った。なおわからないと回答したのが2,395人（28.8%）であった。また戻ると回答した1,680人のうち小高区へ戻ると回答したのが、1,141人で戻るならば半数以上の67.9%が小高区に戻りたいと回答している。

また戻るための条件を聞いたところ、「日常の生活に必要な環境が十分整ったら」が866人で34.1%、「自宅の修復や清掃が終わったら」が725人で28.5%、「空間線量が下がったら」が608人で23.9%、「原発が安全状態になったら」が585人で23.0%、「友人・知人が戻ってくるなら」が348人で13.7%、「働く場所が確保できたら」が209人で8.2%となっており、「空間線量が下がる」ことよりも「日常生活の環境」や「自宅の修復や清掃」を条件として上げている人が上回った。

また戻らないと決めた理由については、「放射能汚染が不安」が450人の17.7%、「商業施設等が元に戻りそうにない」が362人、14.2%、「廃炉の見通しが立っていない」が352人で13.9%、「避難先の生活が落ち着いてきた」が349人13.7%、「家族や友人、知人が戻らない」が315人の12.4%、「戻っても仕事がない」が300人の11.8%、「自宅が損壊・流出」が276人で10.9%、「今の環境で子供の教育をしたい」が208人で8.2%となっている。戻る条件では、日常生活環境等を上げていたが、戻らない理由では原発事故の影響が大きく左右していることがわかる。さらに「避難先での生活が落ち着いてきた」（13.7%）など避難が長期化し、

生き方の選択として移住を決めた人もいる。

### 3-1-2-1 分断された南相馬市

最初に福島第一原発 1 号機の水素爆発があったのは、3 月 12 日午後 3 時 36 分、その後の午後 5 時 39 分に福島第 2 原発から 10km 圏内に避難指示、午後 6 時 25 分に 20km 圏内に避難指示が出され、小高区全域と原町区の一部の地域が 20 km 圏内であるため、住民は避難を余儀なくされた。

同じ南相馬市内に住む市民であっても 20 キロから 30 キロ圏内外によって避難の有無の差が出た。福島第一原発事故後、南相馬市民に対する避難指示等は、段階的に再編成された。2011 年 4 月 22 日には、福島第一原発から半径 20 キロ圏内の小高区全域と原町区の一部が警戒区域となり、立入りを制限するための障害物が設置された。また同時に半径 30 キロ圏内には緊急時避難準備区域、計画的避難区域が設定された。30 キロ圏外には何も指定されないという 3 段階に分けられた。そして 2012 年 4 月 1 日には、警戒区域及び避難指示区域の見直しが行われ、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域となった。

2014 年 8 月に市が実施した小高区全住民への帰還意向調査においては、戻るための条件と回答した人の 3 分の 1 の人が「日常生活の環境」としている。また戻らないと回答した人は「放射能汚染が心配」(17.7%)、「商業施設等が元に戻りそうにない」(14.2%)、「家族や友人、知人が戻らない」(12.4%)、「戻っても仕事がない」(13.7%) と非日常生活を強いられるのであれば、戻れないと回答し、また「避難先で生活が落ち着いてきた」(13.7%)、「今の環境で子供の教育をしたい」(8.2%) と小高区以外の場所で日常の生活を送っていると回答している人もいる。このように市民にとっては除染が進められ放射線量が低くなろうとも、戻ることは「日常」を取り戻せるかどうかが大きなカギなのである。

## 第 2 節 「ひばりエフエム」開局までの経緯

### 3-2-1 震災直後の南相馬市

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、南相馬市内の中高区、鹿島区、原町区高見町で震度 6 弱、原町区本町、原町三島町で震度 5 強の揺れが観測された。南相馬市の沿岸に津波が到達したのは、午後 3 時 35 分ごろと推定されている。南相馬市には津波を観測する地点がないため、最も近い相馬市の観測地点で最大波が午後 3 時 51 分に 9.3m 以上と、気象庁から発表されている。津波による被害面積は、小高区で 10.5km<sup>2</sup>、鹿島区で 15.8km<sup>2</sup>、原町区で 14.5km<sup>2</sup>、

全体では 40.8km<sup>2</sup> となり、市全域のおよそ 10% の広さだった。

津波は第 1 波だけにとどまらず、第 2 波、第 3 波と押し寄せてきたことや、地震による地盤地下に伴い、道路や橋脚との落差が激しく、思うように逃げ道が確保できずに津波に飲み込まれた市民も多く直接死は 636 人、また避難所で体調を崩して亡くなった人や自ら命を絶った人などの災害関連死<sup>39</sup>は 458 人で、直接死と合わせて 2014 年 6 月 18 日現在で 1094 人が亡くなっている。

震災直後の様子を後世に残すために南相馬市では、『南相馬市災害記録』をまとめ、2013 年 3 月に発刊した。内容は①震災直後桜井勝延市長が Youtube を使って情報発信した内容を書き起こしたもの、②災害対策本部会議議事録、市役所職員からのヒヤリング調査結果をもとに時系列でまとめたもの、③地震や福第一原発事故に伴う政府や関係機関などの動きは、新聞社発行資料一の 3 点である。その『南相馬市災害記録』から震災直後の市内の様子を概観してみる。

震災直後は、携帯電話や固定電話がつながりにくくなり、インターネットや府内ネットワークの使用も限られた状況に加え、福島第一原発の水素爆発で市民の安否・所在確認は困難を極めた。避難所は 12 日の朝までに市内 46ヶ所に開設され、さらに 12 日午後の 1 号機の水素爆発による影響で、小高区市民が原町区の避難所へ移動し、また屋内退避指示により密閉性の高い建物へ再避難といった慌ただしい動きとなった。さらに 14 日午前 10 時 2 分ごろ茨城県沖を震源とする最大深度 5 弱の余震が発生した。南相馬市は震度 2 だったが、この地震で津波警報が発令されたことから翌 15 日朝には南相馬市内の避難者数が 8,000 人を超える事態になった。また南相馬市内では、原発事故の影響から支援物資が調達できないという状況になった。震災直後は、南相馬市と災害時協定を締結している業者から食料品などが入ってきたが、原発事故で屋内退避指示が出された 15 日以後は、南相馬市内に支援物資を届けることを業者から拒まれ、福島第一原発から 30 キロ圏外の川俣町まで受け取りに行かなければいけないという状況となった。それに加え、市内の業者自体も原発事故のため避難することになり、物資の調達が一層困難な状況となった。こうした状況から市としては、屋内退避指示区域の市民を対象に市外への集団避難をすることを決めた。一方で、「いったんは市外へ避難したものの避難の疲れ等から戻ってくる市民も増え始めた」(南相馬市, 2013, 34)。そうした人たちのために 3 月末にはコンビニやスーパーなど一部の小売店が再開した。しかし物資の不足感は否めなかった。ガソリンは給油券を必要とし、限られた数量しか給油できない状況だった。4 月になると時間は制限されながらも病院の診療再開、銀

行・郵便局（受付のみ）の業務再開など、徐々に生活のための環境が整い始めた。

この時はまだひばりエフエムに関わっていなかった現ひばりエフエムのチーフディレクターの今野聰は、両親といっしょに新潟や東京の親戚宅をに避難していたが、4月8日に戻ってきた。戻ってきたものの、新聞はまだ配達されている状態ではなく、その後の4月中旬くらいから配達が再開されたのは、4月中旬くらいだった。こうして新聞もなく、物資も品薄、情報網がない中で、今野は市の広報で、南相馬の災害FMが開局しているということを知った。実際にラジオを聞いてみると、生活に必要な情報とか、手続きはこういうことをしてくださいとか、避難所でイベントや励ましのコンサートを開催するとか、そういうお知らせを放送されていて、一日に朝、昼、晩と生放送で一時間ずつ伝えていた<sup>40</sup>。

### 3-2-2 開局

ひばりエフエムは、2011年4月15日に開局した。この時期は原発事故の影響で避難や避難先から被災者が徐々に戻りつつある状況であった。南相馬市は、戻ってきた市民のために行政情報の連絡するために臨災局の設置することを決めた。臨災局の運営は2000年ごろ、2ヵ月間の実験FM放送事業を行ったことある原町区の栄町商店街振興組合が市からの運営委託を受けた（災害, 2014, 82）。開局時のパーソナリティは、沢田貞夫さんと吉野よう子の夫婦が担当<sup>41</sup>、この二人は南相馬市歌謡教室を経営している地元歌手で、栄町商店街が実験事業を行った時にもパーソナリティを務めた二人である（災害, 2014, 82）。放送時間は午前9時、午後1時、午後5時の1日3回、各1時間で、2人だけで毎日放送をしていた。5月12日から1人を常駐させて運営支援に入った日本国際ボランティアセンターの『南相馬日記』によれば、「ミキサーやCDプレーヤーを操作しながら、市の広報誌などをマイクの前で読み、「分かりやすく」というよりも「間違いない」を重視する書類を、リスナーが聞いていただけるように伝えるのは、大変な仕事です」（南相馬日記, 2011年5月14日付）とパーソナリティの二人を紹介している。「書類」と書かれているのは、おそらく「原稿」もしくは「資料」だと思われる。なにが放送されていたのかは、5月15日の「南相馬のFM放送メニュー」（日記の原文のまま）で以下の1から12まで紹介されている<sup>42</sup>。

- 1, 市内の26ヵ所の環境放射線量のモニタリング調査結果
- 2, 商工会議所からのお知らせ
- 3, 福島県弁護士会の法律相談開設

- 4, 避難地域への一時立ち入りの申請の仕方
- 5, 生活小口資金の貸付法
- 6, 罹災証明書の発行方法
- 7, 市民会館のチケット払い戻し
- 8, 津波流出の返還のための公開
- 9, ごみの搬入法
- 10, 災害ボラセンからの募集
- 11, 義援金の申し込み法
- 12, 自主避難者の市への安否確認の要請

12 の放送タイトルが記載されているが、放送された具体的な内容や時間帯は記載されていない。生放送が一日 3 回行われていたので、こうした内容の放送タイトルの情報が繰り返し放送されていたと思われる。日本国際ボランティアセンターの『南相馬日記』には、放送タイトルの中でもっとも市民の関心が高かったのは、1 の「モニタリング調査」だと書かれている。南相馬市内のモニタリング調査結果は、南相馬市立総合病院のヵ所だけで地域ごとの詳細な結果は公表されていなかった。市内の詳細な放射線量のデータはいまでもひばり FM の「環境放射線モニタリング」という番組として残されている。

なお「みなみそまさいがいエフエム」から「ひばりエフエム」と命名されたのは、2012 年 6 月のことであった。50 通あまりの市民からの公募で、一番多かった「ひばり」が決まった。「ひばり」は「舞い上がって、高くさえずる」というところからイメージから決まったものである。なお、ひばりは南相馬市の市の鳥でもあり、また毎年野馬追のイベントが行われる雲雀ヶ原にもちなんでいる。

### 第 3 節 ひばりエフエムの日常

#### 3-3-1 市役所の会議室が仮設スタジオ

ひばりエフエムの事務所兼スタジオは、南相馬市役所内の西庁舎の 3 階にある（写真 3-1 参照）。もとは市役所の会議室兼資料室だった場所である。西庁舎の階段を上って職員ロッカーの間と間に入口がある。廊下にかかっているアクリルの看板は「会議室」のままだ（写真 3-2 参照）。入口ドアに貼ってあるひばりエフエムのステッカーや番組表などがなければ、そこがひばりエフエムの事務所兼スタジオだとは気が付かないかもしれない（写真 4-1 参照）。

照)。

事務所兼スタジオのスペースはおよそ 10 坪程度で、入って左奥に放送機材が並んでおり、その前にパーソナリティ 2 人が対面できるように机が配置されている。その 2 人の周りを囲むようなブースはなく、その脇で FAX や電話があり、新聞や資料を広げてスタッフが様々な調べ物を行い、またその横では番組用の原稿を書いている。市役所内なので、見知らぬ人が入ってくることはないが、本番中はスタッフ同士の打ち合わせやパソコンのキーボードをたたく音をマイクが拾う可能性もある。また周りの壁は外壁を見ることができないほど立錐の余地なく DVD や放送済みの資料や今後の予定などが収納されていて、背丈以上に積み上げられているので、上から覆いかぶさってくるような感じである。棚そのものは地震対策はされているが DVD や資料などは、ぎっしりと詰め込まれているので、今にも飛び出してきそうな危険な状態である。

写真 3-1 ひばりエフエムの事務所兼スタジオ

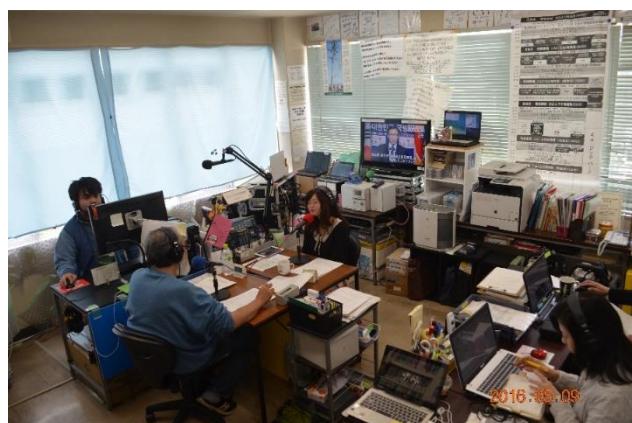
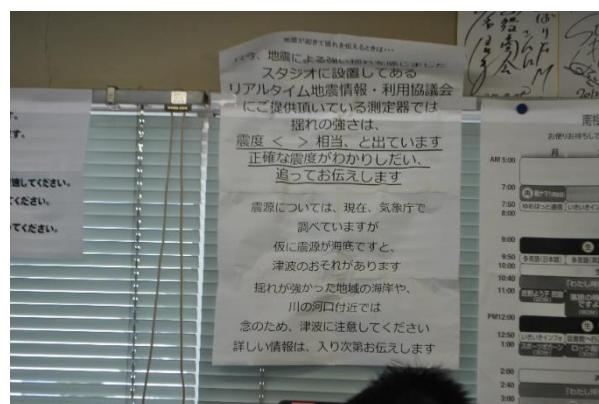


写真 3-2 壁には緊急対応のためのコメントが貼られている



また緊急の場合を想定して、パーソナリティが読みやすいように地震速報用のコメントも大きく張り出されている。

チーフディレクターである今野は「こんなに長く続くとは思わなかった。情報が FM 以外（ひばりエフエム）から取れるようになったら必要なくなると思っていた」<sup>43</sup>と今野が話すように、恒久的なラジオ局という場所ではなく、一時的な場所設定という印象を感じさせる。臨災局の場合、緊急情報がすぐに入手できるようにするために、災害対策本部のそばにスタジオや放送席が設置されることは珍しくない。南相馬市の災害対策本部は、この事務所兼スタジオのすぐ下の 2 階にあったためにこの場所が選ばれたと思われる。

### 3-3-2 一日 3 回の生放送

このひばりエフエムを実質的に取り仕切っているのが、チーフディレクターの今野聰である。彼の経歴に触れておく。今野聰がひばりエフエムに入るきっかけとなったのは、市役所の臨時職員募集の告知だった。以前から今野は、南相馬市が今後どうなっていくのかなど復興に対する興味をもっていた。また放射能関連の説明会などにも自ら足を運んでいた。そんな時に、偶然臨時採用のことを知り、職を探していた今野は「市に必要なものに関わることができることであれば、やってみたいと思った」<sup>44</sup>と応募した。

今野は南相馬市鹿島区出身の 1970 年生まれで、南相馬市内の高校を卒業後東京の大学へ進学、学生の時から土木コンサルタント会社でアルバイトをしていた。仕事は事務的な仕事だったが、手先が器用だったことから、建築模型製作を始めるようになった。その後、家庭の事情から南相馬市に U ターンするが、建築模型製作の仕事は、勤務していた会社から最初は発注があった。しかし経済情勢の悪化とともに、仕事は来なくなった。そこで、実家が兼業農家で土地もあったこともあり、農業の後継者育成事業の候補の研修生として学び、自分で農業をやろうと思っていた矢先に震災にあった。震災の時は、家庭菜園にパイプハウスを作っていた。避難後、3 週間後に戻って来たとき、農業は放射線量の影響もあるとして 10 年 20 年はできない、ひょっとするとずっとできないと思った、という。その時に出会ったのが、現ひばりエフエムのスタッフ公募だった。「臨時で 7 月から雇うという募集が出ていたので、お金をもらつていまの市に必要なものにかかわることができるならば、やってみたいと思って応募した」<sup>45</sup>。今野はラジオという仕事に魅力を感じたのではなく、「市のためになにかやりたい」というのが応募の動機だったと当時を振り返っている。面接したその場で採用が決まり、取材要員として働き始めた。職員は今野をはじめ 10 人ほどのスタッフが集ま

ったが、震災前に勤めていた会社が再開したなどの理由から4～5人くらいはやめたという。

ひばりエフエムでは生放送の情報番組を一日3回放送している。時間は午前9時、お昼の12時、そして午後5時からの3回である。番組はパーソナリティ2人で番組が進行していく。放送内容は市役所からのお知らせやイベント情報、独自で取材したもの、それに福島民友と福島民報の地元新聞2紙からの記事紹介など、音楽をはさみながら50分の放送時間である。

長いもの、短いものもあるんですけど、前半4本入れて、お便り募集、ジングルを入れたり、あとは曲を間に2曲入れるので、その曲次第で調整して、だいたい前半で30分くらいで、そのあと新聞に入る時が40分過ぎの感覚で、終わるのはその人の感覚で、マチマチです。終わる時間は、絶対に50分とは考えていないくて、早めに終わったら、あとは曲を入れるという感じですね<sup>46</sup>

筆者がひばりエフエムに見学に行った2016年5月8日は、朝番組の担当がパーソナリティの荒いづみと小林由香だった。荒は開局してすぐにボランティアとしてひばりエフエムのスタッフに加わり、小林由香は震災前はピアノ教室の先生だったが、震災後家族共々東京に避難して戻ってきた時に、ピアノ教室を再開したものの、生徒がまだ避難先から戻っていないため集まらず、そのためひばりエフエムのスタッフとして仕事をし始めた。チーフディレクターの今野、パーソナリティの荒と小林の3人の共通するところは、ラジオ経験はなく、ラジオ局に興味があったわけでもなく、むしろ復旧・復興になんらかの形で携われればいいとスタッフになったという点だ。筆者がスタジオ兼事務所に着いたのは朝番組の50分前、8時10分くらいだった。すでに番組担当パーソナリティの荒は、原稿など整え放送準備をしていた。もう一人の小林は10分後の8時20分くらいに事務所兼スタジオに入ってきた。ひばりエフエムにはタイムレコーダーがある。出社してすぐに入って左側のタイムレコーダーに自分のカードを差し込んで、出社時間を登録する。

一日常駐するのは、チーフディレクターの今野だけで、他のスタッフはパートタイムとして仕事をしている。小林は、午前中はパーソナリティをこなし、午後からは生徒が地元に戻ってきたのでピアノ教室の先生として震災前の生活に戻っている。8時30分になって、今野が「それではよろしくお願ひします」とミーティングを始めた。特に連絡事項もなく、5分あまりでミーティング終了した。音声担当で、しばらく傾聴ボランティアをやっていてひ

ぱり FM にスタッフとして加わった稻月昭博が「入りまーす」とパーソナリティしか聞こえないような小声で呼びかけると、小林が「こちらは、南相馬ひばりエフエムです。このあと 9 時からはおはよう南相馬をお伝えします。引き続き、南相馬ひばりエフエムをお聞きください」と 8 時 55 分の番組前宣伝が入った。

マイクのスイッチは自分で操作するのではなく、音声担当にまかせており、声をかけられたらそれが合図になってしゃべり始めるシステムとなっている。ひばりエフエムの情報番組では、最初の 10 分間パーソナリティ 2 人による掛け合いフリートークが行われる。番組が始まったころは、いきなり原稿を読み始めていたのだが、2011 年夏ごろに BGM をかけながらフリートークをしていたところリスナーから面白いから長くやって欲しいというリクエストがあって、それから現在の構成になった<sup>47</sup>。

写真 3-3 朝番組の風景



写真 3-4 「おはよう南相馬」本番中



フリートークのネタは決まっていない、その日の担当パーソナリティに任せられている。天気の話や日常の世間話、荒も小林も子供がいるので、子供の話が多くなるという。本番前に簡単な打合せが行われる。時には打合せがない場合、打合せ以外のネタになってしまう時もあるという。このフリートークには台本はなく、すべてアドリブである。実際にその日、昼の12時からの番組では、昼担当のパーソナリティで地元出身でボランティアからひばりエフエムに関わっている新妻裕美と震災後に南相馬市に移住してひばりエフエムのスタッフとなった武藤与志則は、フリートークの打合せはなにも行わずに番組に入った。筆者は番組の準備から見ていたが、なんにも打合せがなく始まり、武藤がトークの主導権を握って天気の話からゴールデンウィーク中にドライブに行き、400キロ走ったという話になった。その間新妻は、打合せがないとは思えぬほどに話に合いの手を入れて、話の流れを作っていた。阿吽の呼吸のようであった。

### 3-3-3 公平が原則

ひばりエフエムではコマーシャルは扱っていない。今野によると、2年（2014年）ほど前に車の販売業者から仙台で展示会をやるので、相双（相馬、双葉地域）地域にコマーシャルを流したいというオファーがあった。そこで今野は市の担当者と話し合ったが、「市の公平性にも関係してくる」<sup>48</sup>という理由から、コマーシャルは扱えないという返事だった。臨災局の免許人は自治体であり、自治体が運営する局が民間業者のコマーシャルを流すことは、なじまないという趣旨の返答であった。

それではひばりエフエムは番組と番組の合間にはなにを流しているのか。時間を調整するために音楽を流すことはあるが、主に番組と番組の間には3種類の情報を流している。時間は1分程度のものである。1点目はリスナーからの情報募集、2点目は各番組の時間と番組内容のお知らせ、そして3点目は緊急時の深夜、早朝時の対応などについてである。この3点目に臨災局だから放送できる内容が含まれている。以下は緊急時の対応に関する放送内容である。

南相馬ひばりエフエムからお知らせとお願ひです。ひばりエフエムでは、ラジオを通して、大地震や津波などの災害発生をいち早く伝えるよう努めていますが、夜間や早朝などの時間帯は、対応が遅れる場合があります。災害に関する放送は、NHKFM83.3MHz、福島 FM78.6MHz、AM放送では、NHKラジオ第一 1226kHz、ラジオ福島 801kHz からも情報

を得てください。また地震を感じなくとも津波警報が発表された時は、ただちに海岸から離れ、高台など安全な場所に避難してください。南相馬ひばりエフエムからのお知らせとお願ひでした。

県域放送やコミュニティFMであれば、番組をスポンサーに買ってもらい、その対価としてコマーシャルを放送としている。従って、他局のラジオを聴いてくださいというコメントは、ほとんどあり得ない。しかしひばりエフエムの場合、市役所が運営し、情報を発信しているため、他の県域局やコミュニティFM等であっても、競合関係にはない。むしろ緊急時にひばりエフエムが対応できない場合に備えて、他の情報ルートを南相馬市が市民に案内するという観点から、安全を確保できるのであれば、それが臨災局であるひばりエフエムの目的であると市では認識している。

### 3-3-4 リスナーからのクレームでリスタート

今野の記憶によれば、はっきりとした日は覚えていないものの、2011年秋ごろだったという。新聞に載っていた記事を放送の中で話している時に「くすっ」と笑ったことで、リスナーからクレームの電話があった。

そのクレームの話というのは、牛の話ですね。ある時に警戒区域からきた思われる牛が、警戒区域外で捕まえられたんです。その牛は子牛を連れていたんですね。そうした記事が新聞に載っておりまして、そのことを話題にして話をしていたんです。そして、その子牛はどこで生まれたのか、つまり警戒区域内で生まれたのか、それとも警戒区域外で生まれたのかというような話ですね。そして逃げている途中で生まれたのかなあなんて話した時に、だれかがあんたおもしろいこと言うわね、と言ってくすっと放送で笑ったんです。そうすると、すぐに電話がかかってきて、牛は繁殖させるのは、すごく大変なことなので、そんなのその辺で生まれるわけねえだろう、おまえらみたいな野良の子じゃねえんだと、私が出た電話口で言われました<sup>49</sup>。

このクレームをどのように捉えたらよいだろうか。二つの考え方がある。一つは、ひばりエフエムの実際のスタッフの対応した考え方である。今野は普段の放送からスタッフには注意をしていたという。「すごくいろんな方がいろんな状況で被災されて、そしていろんな

思いで、復旧、復興に向かっているということを普段の放送の中で意識するように」と呼び掛けていたという<sup>50</sup>。南相馬市は放射線量の高低によって、住居地域が規制され、同じ南相馬市民であっても自宅で生活を送れる市民と仮設住宅などで生活を余儀なくされる市民とに分断されたのである。このクレームをつけた人は、放射線量が高く、仮設住宅等で避難生活を余儀なくしている人であることがわかっている<sup>51</sup>。

すでに既述したが、南相馬市は2005年に3市町が合併して誕生した。しかしこの福島第一原発の事故で、小高区、原町区、鹿島区はまるで南相馬市が合併前に戻ってしまったかのように、20キロ圏内、20から30キロ圏内とそれぞれの地区で避難せざるを得ない地区とそうでない地区に分かれてしまった。南相馬市が誕生して10年もたたないうちのことである。こうしたこと一番敏感に感じているのが、分断された被災者である。ひばりエフエムが放送している場所は、市役所のある原町区である。その原町区は、一部の人を除いて、多くの人が避難する必要はなく自宅で生活のできる区域である。北部の鹿島区は、放射線量が低く自宅で生活ができる区域である。しかし小高区は放射線量が高く、住むことはもちろん、立ち入ることされ許されない地域である。南相馬市は、震災で被災した世帯、津波で自宅が全壊した世帯、原発事故の影響で避難せざるを得ない世帯、またこれらの複合的な災害によって被災した世帯の人たちおり、同じ市民であっても、様々な事情を抱えて人たちがいるのである。同じ情報を聞いても、人によって受け取り方がちがうのである。こうした事情を考慮して放送での言葉遣いには気を使っていたという。このように南相馬市民は、複雑な状況に置かれている。同じ情報であっても受け手の置かれている状況によっては、受け取り方がちがうということである。だからスタッフは慎重を期さなければいけないという考え方である。この考え方には「クレーム」を情報とは考えず、失態と受けとめ、内部で処理し、再発防止に努めるというものである。

もう一つは、「笑い」がひばりエフエムから発信された情報であるならば、一方の「クレーム」はリスナーから発信された情報であるという考え方である。つまり「笑い」という情報がひばりエフエムから発信されたことで、「クレーム」という情報が返ってきたという考え方である。このような構図として考えた場合、ひばりエフエムはそれまで送り手という立場から「笑い」を発信したために、「クレーム」という情報を受け取った、ひばりエフエムが送り手から受け手に立場が転換したという解釈である。臨災局の特性として双方向による情報伝達が一般的だが、であるならば、この「クレーム」をひばりエフエムは情報として受信し、「クレーム」という情報をもう一度リスナーに発信するという、再循環の発想であ

る。そうすることで、その「笑い」と「クレーム」という関係がリスナーに情報として提供され、「クレーム」を発信したリスナーの置かれている立場や状況、考え方、同じ市民であっても、様々な事情を抱えている人がいるということの情報が、共有されるというものである。自らの恥をさらすようなことにつながりかねないが、事例として情報の共有を考えればリナスターにとっては他の人の立場を知ることができる貴重な情報である。

ところで、この動きとは連動しないものの、時期としては一致する動きがあった。それは、震災から半年をメインテーマとした特別番組「震災から半年を考える私たちの南相馬」を2011年9月11日に3時間の生放送したものである<sup>52</sup>。番組内容は、帰還困難地域である小高区出身で避難生活をしている花屋さんの話の事前取材と生出演した南相馬市立病院の院長や市民活動している女性、市役所で除染担当の人に対するインタビューするものであった。

この番組が放送に至った経緯は、今野が「正直、マンネリだったので、なんか特別番組でできること、もう少し震災とか、復興の大変さとかをクローズアップするようなものを作りたかった」<sup>53</sup>と制作した理由を説明している。2011年8月のひばりエフエムは、1日3回の情報番組のみで、内容は行政情報やイベント告知が中心であった。そこで今野は、被災者の声や被災者の生活状況などを盛り込んだ番組を切望していたのである。

この特別番組以降通常の番組も中身が徐々に変わっていきます。（中略）やはりいろんな人の声を届けようということで、一般の人に震災の体験も含めてこうしたことを放送し始めます。また復興に向けた前向きな活動の様子だとか、学校の様子や校歌を放送する、地域のみなさんに親しみのある民謡を紹介する番組を作るなどこうした放送も充実をさせていきます。そして昨年のクリスマスには子供たちの声が元気になるということで声を放送しました。これは（録音したものが会場に流れた）これは幼稚園児50組くらいにクリスマスに何がほしいかを聞いたものです。みなさんにクリスマスの時期にみなさんに元気なってほしいということで、放送しました。また成人式には私たちの局に出演していただいた方や著名の方々からメッセージを放送してこうしたメディアなんだ番組作りの内容にシフトしていきます。<sup>54</sup>。

この2011年9月は、ひばりエフエムにとってこの5年間の中で一つの転機となった時期であった。その後ひばりエフエムは被災者からの情報を取り込みながら、番組を通して情

報を発信していく局へと変わっていった。というよりも変わった象徴が特別番組と位置付けられる。次節では、ひばりエフエムがどんな目的で自主制作番組を増やしていったのかについて取り上げる。

## 第4節 臨災局としてのひばりエフエム

### 3-4-1 自主制作番組

ひばりエフエムが制作している番組時間は、再放送を含め月曜日から日曜日までの1週間の制作時間は89時間で制作比率は、53.0%である（表3-1参照）。ひばりエフエム番組の種別をまとめると、行政情報やニュース、天気、イベントなどの「ひばりエフエムが情報を発信する番組」（1日換算の制作時間2時間20分）、ゲストを招いてのインタビューや被災者にいまの生活状況などをインタビューする番組（1日換算の制作時間）、それにレギュラー出演者によるトーク番組などの「市民が情報を発信する番組」（1日換算の制作時間3時間10分）、原発事故に伴い放射能関連の医療相談に対して答える番組や市が毎日測定している環境放射線モニタリング結果を伝える「原発事故に伴う情報と医療に関する情報情報番組」（1日換算の制作時間50分）の3タイプに分けることができる（表4-2参照）。次節では番組種別ごとに紹介する。

### 3-4-2 市民が情報を発信する番組

#### 3-4-2-1 「柳美里のふたりとひとり」

この「市民が情報を発信する番組」は立場の異なった市民が様々な視点から南相馬市の情報を発信する番組である。1本目は医療者という視点からの番組「医療の放送室」、2本目は南相馬市出身の若者からの視点からの番組「若者RADIO会議」、3本目は震災後に南相馬市に移住してきた人たちの視点からの番組「移住者たちのゆるゆるいくよ～」、4本目は南相馬市に震災後に通うようになった作家柳美里が南相馬市民にインタビューする番組「柳美里のふたりとひとり」、5本目はひばりエフエムのパーソナリティとリスナーとメールやリクエストなどで情報を交換しながら進める番組「おかえりなさい南相馬」である。「若者のRADIO会議」は南相馬市に住む20歳代の若者が、南相馬市の将来等について、語り合う番組である。この番組は、今野が若者の意見が復興に加わっていないと感じて、ひばりエフエムから若者の意見を発信しようと2012年2月から始められた番組である。この番組は長寿番組で、2016年7月末現在で117回放送されている。

表 3-1 ひばりエフエム番組表（2016 年 8 月 1 日現在）

**FM 87.0MHz 南相馬ひばりエフエム2016プログラム**

お便りお待ちしています！ mail : hibari795@gmail.com fax : 0244-24-3210

月	火	水	木	金	土	日	
<b>5</b> am ミ ュ ー ジ ッ ク バ ード	おはよう民謡 (60分)						
<b>6</b>	ラジオ体操～演歌のひととき (60分)						
<b>7</b>	再 前日昼 こんにちは南相馬 (50分) 7:50 いきいきインフォ 7:50 図書館へ行こう 7:50 ゆめはっと通信 7:50 銀閣館/博物館 7:50 医療の放送室						
<b>8</b>	音楽 (60分)						
<b>9</b>	<b>生 情報番組 おはよう南相馬 (50分) 生 週末は朝ナマ!</b> 9:50 「おらほの民話 ふるさと昔ものがたり」 日替わりで語り部が民話を紹介						
<b>10</b>	環境放射線モニタリング 市内110ヶ所・水道水・給食の検査結果 10:30 「わたし坪倉が、答えます」 (15分) 医師による放射能についての番組 10:45 おおきに健康体操 (10分) 10:55 防災マニュアル2016 (5分)						
<b>11</b>	みちのく民謡 うためぐり (20分) 民謡	落語の時間ですよ	ムード歌謡	ママスマイル (30分)	川柳575便	みちのく民謡 うためぐり (20分) 民謡	
<b>12</b>	<b>生 情報番組 こんにちは南相馬 (50分) 再 週末は朝ナマ!</b> 12:50 いきいきインフォ 12:50 図書館へ行こう 12:50 ゆめはっと通信 12:50 銀閣館/博物館 12:50 医療の放送室 12:50 詩の歌 和合亮一 1 ラボラボラジオ ロック裁判所 (30分) 再 マイプレイリスト ロッキンスター 音楽 再 若ラジ/移住者 (30分) 音楽 音楽 音楽 音楽						
<b>1</b>	環境放射線モニタリング 市内110ヶ所・水道水・給食の検査結果						
<b>2</b>	2:30 「わたし坪倉が、答えます」 (15分) 医師による放射能についての番組 2:45 おおきに健康体操 (10分) 2:55 防災マニュアル2016 (5分)						
<b>3</b>	再 情報番組 こんにちは南相馬 (50分) 3:50 いきいきインフォ 3:50 図書館へ行こう 3:50 ゆめはっと通信 3:50 銀閣館/博物館 3:50 医療の放送室 ひばりスペシャル 4 シンケント (30分) 再 ふたりとひとり (30分) 再 若ラジ/移住者 (30分) 音楽 遠江漁アワー (30分) アントキの猪木のわっしょいJAPAN 4:30 週刊ディネード 4:40 キッズソングバラダイス 4:50 おはなし玉手箱 再 週末は朝ナマ!						
<b>5</b>	<b>生 情報番組 おばんすで南相馬 (50分)</b> 5:50 図書館へ行こう 6:50 ゆめはっと通信 5:50 銀閣館/博物館 5:50 医療の放送室 5:50 いきいきインフォ 環境放射線モニタリング 市内110ヶ所・水道水・給食の検査結果						
<b>6</b>	6:30 「わたし坪倉が、答えます」 (15分) 医師による放射能についての番組 6:45 おおきに健康体操 (10分) 6:55 防災マニュアル2016 (5分)						
<b>7</b>	J-POP 洋楽	「おかえりなさい 南相馬」 火曜は夜も生放送! 第2-4火曜日	J-POP 洋楽	洋楽 (30分)	洋楽 (30分) 3:30 横美里の ふたりとひとり		
<b>8</b>	再 情報番組 こんにちは南相馬 (50分)						
<b>9</b>	9:50 いきいきインフォ	9:50 図書館へ行こう	9:50 ゆめはっと通信	9:50 銀閣館/博物館	9:50 医療の放送室		
<b>10</b>	再 ひばりスペシャル						
<b>11</b>	~ひばりエフエム アーカイブ~ 11:05 再 ふたりとひとり 11:35 再 若者たちのRADIO会議 0:05 再 移住者たちのゆるゆるいくよ~						
<b>0</b>	0:40	<b>再 情報番組 こんにちは南相馬 (50分)</b>					
<b>1</b>	1:30	音楽					
<b>2</b>	クラシック (180分)						

みなさまからのお便りや曲のリクエストを募集しています。  
メール、リクエスト用紙、ハガキなどでお気軽に寄せください。

※音楽をお届けしています。  
土曜日 6:00pm → 月曜日 9:00am

南相馬ひばりエフエムは、周波数87.0MHzでお聴きいただけます。また、インターネットの「サイマルラジオ」やスマートフォン向けの無料アプリケーション「リッスンラジオ」でも聞くことができます。1日3回の生放送で、生活、医療、交通、教育などに関する情報のほか、市内で開かれる講演会やイベント情報、インタビュー集などもお届けします。

(出典) 南相馬ひばり FM ホームページ)

表 3-2 市民が情報を発信する番組の概要

番組時間	番組名	番組概要
10 分	医療の放送室	南相馬の医療に関する取り組みや経験談、問題点を医療従事者が発信する番組
30 分	若者 RADIO 会議	南相馬の若者たちによる気ままなトーク番組
	柳美里のふたりとひとり	作家・柳美里が震災の体験や過去の記憶等を被災者にインタビューする番組
	移住者たちのゆるゆるいくよ～	震災後、南相馬に移住してきた人たちによるトーク番組
120 分	おかえりなさい南相馬	ひばり FM パーソナリティが市民に自由気ままに語りかけるトーク番組

「若者の RADIO 会議」が地元の若者という視点からの番組であるならば、「移住者たちのゆるゆるいくよ～」は、震災後に南相馬市にボランティアのために来て、そのまま移住してしまったという人たちの番組で、2012 年 5 月 12 日から始まった番組である。「(出演者は) 20 代から 50 代ですね。最初はそういう移住者がいるというので、びっくりしたんですが、最初のプランはなんで移住したのか、移住してきた人がどんな風に南相馬を見ているのか、移住を決めたこととか、どんな点が好きで移住を決めたのかなど、移住者からの視点で、外部からの視点で南相馬の良さを語ってもらおう」<sup>55</sup>という番組である。

次に、「柳美里のふたりとひとり」は 2012 年 3 月 16 日から始まった番組である（2016 年 8 月 1 日現在番組は継続中）。柳美里は 1968 年生まれ、神奈川県出身で 1997 年「家族シネマ」で芥川賞を受賞した。その作家柳美里が南相馬市民から直接話を聞く番組である。なぜ柳美里がひばり FM に番組を持つようになったのか。震災直後、柳美里は母親が福島県只見町の出身ということから、なにかしなければということで、放射能で汚染された南相馬市に足を運ぶようになり、相馬野馬追を見学しているのをツイッター発信したところ、偶然にもひばりエフエムの今野がそのツイッターをキャッチしてツイートしたのがきっかけで、

連絡を取り合うようになった。「初めてお会いした時に、私は番組をやりたいですと言わされたんです」<sup>56</sup>と柳美里から直接番組制作の申し出があったという。今野からは、ギャラ、交通費は一切出せないと切り出すと、柳美里からは全く心配いりませんと返答があった<sup>57</sup>、その後の話し合いで、およそ半年後に番組化が実現した。「おもしろいと思ったのでやって

写真 3-5 柳美里のひとりとふたりの収録風景



もらうことにした。でもこんなに長く続くとは思わなかった」と一時的な有名人の売名行為であることを否定した。この番組の内容は、柳美里が南相馬市内で暮らす2人に対して、震災前の南相馬市の様子や震災時の体験談、現在の生活の様子や暮らしの様子、今考えていることなどを聞くというものである。柳美里は2015年4月に、長男の高校進学というタイミングに合わせて神奈川県鎌倉市から南相馬市に移住しているが、番組がスタートした時は番組のために南相馬市に通っていた。今野からは月2回くらいのペースでの放送提案をしたが、柳美里は毎週やりたいということで、3~4ヶ月に一回南相馬市に来て一週間もしくは10日ほど滞在して、一回に12本から13本まとめて収録をしていた。収録場所は、スタジオではなく学校や公民館、お寺など様々で、南相馬の普通の人たちの生の声が発信される番組である。

筆者は、2016年8月29日に228回目と229回目の番組収録を見学させてもらった（写真3-5参照）。この日の収録は午前11時から、南相馬市の市民文化会館の練習室という部屋で行われた。ゲストは南相馬市内で市民活動をしている二人だった。ゲストの二人より遅れてきた柳美里は、さっそく二人と名刺交換して、以前イベントで会ったことがあるなどの雑談を交えながら、名前の確認と年齢の確認、家族のこと、南相馬市出身なのか、どこの高校出身など、本番で聴くことなどをまとめていく。打合せは、およそ10分で終わり、隣にいるチーフディレクターの今野に「いいですよ」と収録準備が整ったことを告げた。この番組に台本はない。しかし時間制限なく話せば後々編集が大変で、時間がかかる事から、編集しないでそのまま放送ができるように収録していく。従って、チーフディレクターが残り時間を柳美里に示しながら、生放送と同じように時間を管理しながら進めていくのであ

る。打合せが終わると、すぐに収録が始まった。番組のスタンスについて自著の中で柳美里はこのように話す。

私は 2012 年 3 月から臨災局「南相馬ひばり FM」で、毎週のレギュラーパン組「ふたりとひとり」を始めました。南相馬在住もしくは南相馬にゆかりがある二人（兄弟、姉妹、恋人、友人、職場の同僚、先生と生徒など）に、南相馬の思い出を語ってもらっています。南相馬に縁もゆかりもない人たちに、少しでも南相馬及び南相馬に暮らす人たちのことを身近に感じてもらえればと思っています（柳, 2012, 70）。

ひばりエフエム「ふたりとひとり」のパーソナリティとして、禁句にしているのは、「解ります」という言葉です。痛みは、その人のものです。家族や親しい人が痛みで苦しんでいる姿を間近にすると、代わるものならば代わってあげたいと切望しますが、他人の痛みを痛むことはことはできないのです。ですから、他人の痛みを思い知れ、などという言葉を平気で口にできる人は、他人の痛みを想像する想像力が欠如していると思います。大切なのは、他人の痛みを痛むことはできない、ということに痛みを感じるかどうかなのではないでしょうか。だから私は「聴くしかない」という姿勢で、とにかく話を聴いています（柳, 2012, 32-33）

「柳美里ふたりとひとり」はひばりエフエムのホームページから Podcast<sup>58</sup>でその放送を聞くことができる。第 1 回放送の 2012 年 3 月 16 日（柳, 2012, 80）から 2015 年 7 月 11 日（番組の中で収録日付を明らかにしているが、放送日は不明）までの「柳美里のふたりとひとり」の 165 本のラインナップである。

表 3-3 柳美里のふたりとひとりのタイトル一覧

放送回	放送タイトル	放送日
1回	「ふたりとひとり」どんな番組になるのかを 話します	記載なし
2回	小高区のママ友ふたり、美しい海と白ばら	記載なし
3回	職場で出会った女性ふたり、震災の体験と支援と	記載なし
4回	ピアニスト・ウォン・ウインツァンさんをお迎えて	記載なし

5回	閉館した古きよき映画館「朝日座」で（前編）	記載なし
6回	閉館した古きよき映画館「朝日座」で（後編）	記載なし
7回	南相馬災害FM、初めてのパーソナリティで出会ったふたり	記載なし
8回	姉妹ふたり、幼い頃の原町の想い出。そして老親と震災	記載なし
9回	小学校のマーチングバンド 恩師と生徒	記載なし
10回	小高区のママ友再び。警戒区域解除後自宅で	記載なし
11回	福島県外から新規就職で南相馬に来た、20歳の女性2人	記載なし
12回	原町区のロックバーSHOUTが縁の40代男性の2人	記載なし
13回	日暗所で知り合い、今も続くパッチワーク「ちくちくの会	記載なし
14回	相馬野馬追が結ぶ、40年近いつきあいの2人—前編—	記載なし
15回	相馬野馬追が結ぶ、40年近いつきあいの2人—後編—	記載なし
16回	双葉と浪江から南相馬の高校に通った親友、女性2人	記載なし
17回	市内の小学校の校長先生と教頭先生が話す震災と子供たち	記載なし
18回	小高区「趣味の着物を通して知り合った」女2人	記載なし
19回	小学校の恩師、そして農業を営む教え子の2人	記載なし
20回	小高区で日本舞踊を教えていた先生の女性2人	記載なし
21回	警戒区域の動物保護が縁。愛と南相馬の女性2人	記載なし
22回	津波で兄を亡くし、身寄りのない子どもを引き取った男性	記載なし
23回	よき飲み友達のふたりが再会。津波で弟を失って…	記載なし
24回	詩人・和合亮一さんと教え子の30代男性—前編—	記載なし
25回	詩人・和合亮一さんと教え子の30代男性—後編—	記載なし
26回	相馬野馬追に人生を捧げる父と、その家族	記載なし
27回	角川原仮設住宅で出逢い、暮らす60代、70代の男女3人	記載なし
28回	南相馬市から福島市に転居した12歳と16歳の兄弟	記載なし
29回	甲冑師の夫、介護施設で働く妻のふたり	記載なし
30回	障がい者が働く施設の理事長と友人の女性ふたり	記載なし
31回	小高区の行政区長らふたり、震災の体験と今後	記載なし
32回	生命保険の仕事に携わるふたり	記載なし
33回	浪江町から南相馬市へ避難中、詩人の夫妻	記載なし

34回	南相馬の職場で出逢った小さな子を持つ母と独身女性のふたり	記載なし
35回	塾経営の女性、越してきた精神科医のふたり	記載なし
36回	お便りを通して出逢ったひばり FM リスナーのふたり	記載なし
37回	原町区で中華料理店を営む中国人の夫婦	11月23日
38回	原町高校放送部1年生の女子3人、柳さんへインタビュー	11月30日
39回	癌と闘いながら診療を続ける医師と息子とふたり	12月7日
40回	相馬民謡を踊る会で40年以上の仲、小高区のふたり	12月14日
41回	鹿島区の仮設住宅で開いた忘年会	12月21日
42回	ふたりとひとり、これまでを話す	1月4日
43回	南相馬から鎌倉・柳美里宅へ（新年会を開きました）	1月11日
44回	スナックのママと、津波で被災した女性	1月18日
45回	東京で地元でそれぞれ暮らしていた60代の同級生男性・前編	1月25日
46回	東京で地元でそれぞれ暮らしていた60代の同級生男性・後編	2月1日
47回	仮設住宅へ向けた医療の取り組みを進める二人	2月8日
48回	同じ塾に通い高校受験を控えた中3女子ふたり	2月15日
49回	震災後のママ友、小高区の夫婦ふたり	2月22日
50回	切り絵作家と元消防士、母の葬儀と震災	3月1日
51回	小高区村上に伝わる田植え踊りの二人	3月8日
52回	「だいこんかりんとう」小高商業高校のふたり	3月15日
53回	南相馬に避難する大熊町の親子	3月22日
54回	視覚障害を持つ男性、民謡好きの男性、同級生のふたり	3月29日
55回	小高区から避難、70代男性と50代女性（前編）	4月5日
56回	小高区から避難、70代男性と50代女性（後編）	4月12日
57回	保育園の副所長・副園長、義兄弟のふたり	4月19日
58回	原発から6キロ、大熊町から南相馬市に避難する夫婦	4月26日
59回	鹿島区の神社の宮司、飯館村の神社の禰宜	5月3日
60回	津波で亡くなった兄夫婦の子どもを引き取った男性（第22回にも出演）	6月7日
61回	博物館の学芸員と、南相馬で虫を捕る生きもの好きのふたり（前編）	記載なし
62回	博物館の学芸員と、南相馬で虫を捕る生きもの好きのふたり（後編）	記載なし

63回	茨城から移住した70代の看護師とその病院の看護部長	記載なし
64回	仮設住宅で出逢った鹿島区と小高区の80代男性ふたり	記載なし
65回	市内でホテルを営む男性と30代の男性社員のふたり	記載なし
66回	障がい者を支援する事業に携わるふたり	記載なし
67回	女川さいがいFMスタッフのふたり（女川町で収録）	記載なし
68回	震災後、原町区の屋台村で飲食店を始めた夫婦	記載なし
69回	小高区で洋菓子店を営んでいた50代の夫婦（前編）	記載なし
70回	小高区で洋菓子店を営んでいた50代の夫婦（後編）	記載なし
71回	働き盛りの男性、地元に深くかかわる仕事をするふたり	記載なし
72回	南相馬で働く医師の妻と家族、富岡町自宅跡地で収録	記載なし
73回	原町区、小高区、お寺のご住職ふたり（前編）	記載なし
74回	原町区、小高区、お寺のご住職ふたり（後編）	記載なし
75回	只見町に嫁いだ南相馬の女性と、職場で出会った女性	記載なし
76回	宮城県女川町の女性ふたり（女川災害FMで収録）	記載なし
77回	女川原発で働く南相馬の男性とその妻（前編）	記載なし
78回	女川原発で働く南相馬の男性とその妻（後編）	記載なし
79回	南会津只見町で避難生活を送る70代の南相馬の夫婦	記載なし
80回	小高区で暮らしていた韓国人女性とその姉夫婦	記載なし
81回	高校時代の恩師と、教え子のふたり（前編）	記載なし
82回	高校時代の恩師と、教え子のふたり（後編）	記載なし
83回	両親が南相馬と双葉出身、詩人・木戸朱理さん（前編）	記載なし
84回	両親が南相馬と双葉出身、詩人・木戸朱理さん（後編）	記載なし
85回	井戸川克隆元双葉町長が出演	記載なし
86回	ああふるさと小高を作詞した男性と、踊りをつけた女性	記載なし
87回	若い農家の仲間、20代後半の男友達3人	記載なし
88回	小高区出身の幼なじみ30代女性ふたり	記載なし
89回	子どもの遊び場を通して知り合った男性ふたり	記載なし
90回	自然に囲まれた実家の敷地で飲食店を始めた20代の女性	記載なし
91回	原ノ町運輸区長とその妻	記載なし

92回	小高区で避難者が交流できる場を運営する女性二人	記載なし
93回	津波被害と農業再生、鹿島区八沢の団体職員 3人	記載なし
94回	八沢の干拓地港地区で作業中の皆さんと	記載なし
95回	子供たちをサマーキャンプで応援するふたり	記載なし
96回	43年ぶりに再会した原町高校の同級生、60代の男性二人	記載なし
97回	浪江町出身の民謡歌手、原田直之さんと原町出身男性	記載なし
98回	野馬追を描いた映画「祭りの馬」監督の松林要樹さん	記載なし
99回	高校を卒業。同じ塾で学び、旅立つ二人	記載なし
100回	小高区の幼馴染み、男性ふたり	記載なし
101回	震災とともに中学生活を送った男子ふたりの卒業	記載なし
102回	視覚障害を持つ男性と女性	記載なし
103回	手芸サークルで出会ったふたり	記載なし
104回	小高区で開く料理教室で知り合ったふたり	記載なし
105回	南相馬を訪れたマラソンランナー、増田明美さんご夫妻	記載なし
106回	富岡町の職場で知り合った女性ふたりおだがいさま FMで収録)	記載なし
107回	新潟と郡山出身の30代の女性とふたり（おだがいさま FMで収録）	記載なし
108回	東京で仕事をやめ、南相馬市にやってきた20代と30代の男性ふたり	記載なし
109回	教会のふたり、牧師と副牧師	記載なし
110回	小高区の女性ふたり、ふたたび	記載なし
111回	双葉郡富岡町のふたり、故郷のために	記載なし
112回	南相馬をアートで支援するふたり	記載なし
113回	南相馬に通う、作家とタイターのふたり	記載なし
114回	南相馬を離れて暮らす娘と、その母	記載なし
115回	先生だった、70代と80代の男性ふたり	記載なし
116回	相馬で過ごした同級生のふたり	記載なし
117回	鹿島区に嫁いで来たふたり	記載なし
118回	仮設住宅で避難生活を送る小高区の60代女性ふたり	記載なし
119回	盲導犬とふたりの女性	記載なし
120回	花でつながる、小高区の夫婦と女性	記載なし

121回	小高工業高校の生徒と先生	記載なし
122回	南相馬で活躍した大阪の華道家、被災地に花を	記載なし
123回	元祖・山の神今井正人さんと応援団の女性（前編）	記載なし
124回	元祖・山の神今井正人さんと応援団の女性（後編）	記載なし
125回	「電気を学びたい」生徒と先生	記載なし
126回	仮設住宅からの声「なんじょすっぺ」	記載なし
127回	避難先で開いたカフェ、支援する女性と	記載なし
128回	幼馴染みの40代男性ふたり	記載なし
129回	職場の同僚女性ふたり	記載なし
130回	ラジオ福島のふたり	記載なし
131回	朗読ボランティアのふたり	記載なし
132回	食に関わる仕事でつながる40代の男性ふたり	記載なし
133回	校長先生と、教え子で主婦の女性回	記載なし
134回	障害者支援施設を運営し働く女性回	記載なし
135回	建設会社を営む従兄弟の二人	記載なし
136回	南相馬市初代市長と復興へ活動する男性（前編）	記載なし
137回	南相馬市初代市長と、復興へ活動する男性（後編）	記載なし
138回	原町高校放送部1年生のふたり	記載なし
139回	南相馬市消防団長と分団長のふたり	記載なし
140回	社協のふたり	記載なし
141回	小高駅前にアンテナショップを開いたふたり	記載なし
142回	小高工業高校のふたり	記載なし
143回	小高区でスポーツ施設を管理するふたり	記載なし
144回	消防団の夫と、支えようとした妻（前編）	記載なし
145回	消防団の夫と、支えようとした妻（後編）	記載なし
146回	お寺のご住職	記載なし
147回	幼馴染み60代男性	記載なし
148回	洋菓子店を再開させた男性と、息子	記載なし
149回	おだかのひるごはん	記載なし

150回	柳美里、南相馬に引っ越す	記載なし
151回	南相馬市観光ボランティアガイドのふたり（前編）	記載なし
152回	南相馬市観光ボランティアガイドのふたり（後編）	記載なし
153回	南相馬の若手詩人と、音楽家の妻（前編）	記載なし
154回	南相馬の若手詩人と、音楽家の妻（後編）	記載なし
155回	場の同僚で仲の良い女性	記載なし
156回	陸前高田災害FMのふたり	記載なし
157回	ガソリンスタンドを経営する夫婦	記載なし
158回	福祉に携わる男性二人	記載なし
159回	小高区で工場を経営する夫婦	記載なし
160回	小高区の60代と70代の夫婦	記載なし
161回	食に関する仕事に関わる男性	記載なし
162回	映画プロデューサーと	記載なし
163回	自営業を営む夫婦ふたり	記載なし
164回	津波で母と祖母を亡くした女性と叔母	記載なし
165回	ソウルフラワーユニオン中川敬さん	記載なし

(出典) ひばりエフエム HP

(<http://hibarifm.wixsite.com/870mhz>)

### 3-4-2-2 「柳美里のふたりとひとり」の分析

ここで「柳美里のふたりとひとり」の内容をみてみよう。ここでは、出演者の男女比、年齢層、出演者の間柄、内容ごとの分類を行った。調査方法は、番組の冒頭約5分間を聞いて男女、年齢層を把握するというものである。番組の構成であるが、柳美里が出演者ふたりの関係を聞くことから始まる。その後の話の流れは、出演者同士の間柄が糸口となって、例えば、同じ地区に長く住んでいたもの同士ならば、地域の昔話、震災直後の話、津波の被害の有無、原発事故の影響や、原発事故を想定していたのかどうか。小中高の同級生であれば、南相馬の昔話、学校時代のお互いの印象、部活動の話、その後の進路や経歴などの話。恩師と生徒であれば、昔の思い出話。市外から震災後に南相馬市に来ている人は、来た理由や南相馬市の印象。またボランティアや市民活動のために来ている人には活動内容の紹介など、この番

組は、事前の台本がないだけに、話の内容はその時々で変わる。それ故に、必ず震災の話ありきでなく、原発事故関連ありきでもなく、その時々の話の流れに任せる対談形式である。また番組によっては、前編後編があるが、必ずしも事前に決めたわけではなく、話す時間が足りない場合に臨機応変に後編を作るという場合もある。番組の体裁上は、「先週に引き続き」という形式にしているが、実際はその場で次を取り続けており、次週に取り直しているのではない。興に乗れば2週続けてということもあり得るのである。

まず、出演者別の調査である。出演者は男性が185人、女性が145人で、合わせて330人である。年齢別にみると、一番多い年齢層が、「20歳～59歳代」（生産年齢）の152人で46.0%、次いで60歳以上（老年）の103人で31.2%、10歳代（年少）が19人で5.8%、不詳が56人で17.0%となっている。

また、この番組は原則として出演者はふたりであるため、その間柄を調べてみた。間柄については、当人同士の自己申告もしくは柳美里からの指摘で明らかになったものである。また放送で初めて会った人同士などどれにも属さない間柄を「その他」とした。またPodcastに管理者が音声を残していない5回分の放送については、内容を聞くことができないため、「不明」とした。

間柄をまとめてみると、一番多いのが、上司や部下、仕事仲間の「会社関係」で43組26.1%、次いで幼なじみの「友人関係」が42組の25.5%、夫婦、兄弟、親戚、姉妹などの「家族」が36組で21.8%、先生と生徒、同級生、同窓生の「学校関係」が24組で14.5%、「その他」が15組で9.1%、「不明」が5組で3.0%となっている。

次は、話した内容をテーマ別に分けた。テーマは震災直後の体験や津波被災の体験、原発事故関連の「現在の話」が、83回と一番多く50.3%、思い出話、出演者同士の話、学校の話などの「過去の話」が59回で35.8%、どれにも属さない「その他」は18回で10.9%、「不明」は5回で3.0%だった。

テーマ別にみると、「現在の話」が一番多くなったが、柳美里は、南相馬ひばりエフエムのホームページで、「柳美里のふたりとひとり」の番組について、「南相馬で地震や津波や原発事故から免れたひとはないので、自然にそれらの話になることもあるけれど、それが本題ではありません。わたしが聴きたいのは、「ふたり」の過去から今までの、なにものにも回収されることのない時間の記憶です」<sup>59</sup>としている。また柳美里は第50回目の放送の冒頭で、「かつて被災地の声、かつて福島の声をひと括りにされることが多いですが、地元にある臨時災害局はかつてひと括りにされることを拒否するためのメディアだと思います」

<sup>60</sup>と話している。

番組の中で、震災時のことや津波のこと、また原発事故のことなどを話さないことの方が不自然ではあるが、その中でも柳美里は、自らが番組を始める前に「なにものにも回収されることのない時間の記憶」とコメントしているように、震災以前の思い出話をしてもらい、また聞くことで、柳美里は震災以前の南相馬を知り、また市民は南相馬を津波で流された、放射能で汚染されたという震災で上書きされたイメージから、震災前の南相馬にもう一度再度イメージを上書きし直してもらえるような情報を発信する番組という見方もできる。

なお、地域別の調査では、番組タイトルに小高、原町、鹿島の3つのうち、どの地名が多く使われているのか、タイトルから拾って、明らかにした。さらにタイトル調査では、一番多かった地名は、「小高」で、28番組だった。その「小高」という地名を使った番組は「小高区のママ友ふたり、美しい海と野ばら」、「小高区のママ友ふたたび、警戒区域解除後の自宅で」、「小高区「趣味の着物を通して知り合った」女2人」、「小高区で日本舞踊を教えていた先生の女性2人」、「小高区の行政区長らふたり、震災の体験と今後」、「震災後のママ友、小高区の夫婦ふたり」、「小高区村上に伝わる田植踊りの夫婦のふたり」、「小高区から避難、70代の男性と50代女性（前編）」、「小高区から避難、70代の男性と50代女性（後編）」、「小高区で洋菓子店を営んでいた50代の夫婦（前編）」、「小高区で洋菓子店を営んでいた50代の夫婦（後編）」、「原町区、小高区、お寺のご住職ふたり（前編）」、「原町区、小高区、お寺のご住職ふたり（後編）」、「小高区で暮らしていた韓国人女性とその姉夫婦」、「小高区出身の幼なじみ30代女性ふたり」、「小高区で避難者が交流できる場を運営する女性二人」、「小高区の幼馴染、男性ふたり」、「小高区で開く料理教室で知り合ったふたり」、「小高区の女性ふたり、ふたたび」、「仮設住宅で避難生活を送る小高区の60代女性ふたり」、「仮設住宅で出逢った鹿島区と小高区の80代の男」、「仮設住宅で避難を送る小高区の60代の女性ふたり」、「小高工業高校の生徒と先生」、「小高駅前にアンテナショップを開いたふたり」、「小高工業高校のふたり」、「小高区でスポーツ施設を管理するふたり」、「小高区で工場を経営する夫婦」、「小高区で60代と70代の夫婦」となっている。

次に多かったのは「原町」という地名を使った番組タイトルだが、「小高」に比べ19番組少ない9番組だった。その番組は「姉妹ふたり、幼い頃の原町の想い出。そして老親と震災」、「原町区のロックバーSHOUTだ縁の40代男性の2人」、「原町区で中華料理店を営む中国人の夫婦」、「原町高校放送部1年生の女子3人、柳さんへのインタビュー」、「震災後、原町区の屋台村で飲食店を始めた夫婦」、「原町区。小高区、お寺のご住職の二人（前編）」、「原町

区。小高区、お寺のご住職の二人（後編）」、「浪江町出身の民謡歌手、原田直之さんと原町出身男性」、「原町高校放送部1年生のふたり」である。

一番少なかったのは、「鹿島」の地名を使った番組で、5つ番組であった。その番組は「鹿島区の仮設住宅で開いた忘年会」、「鹿島区の神社の宮司、飯館村の神社の禰宜」、「仮設住宅で出逢った鹿島区と小高区の80代の男」、「津波被害と農業再生、鹿島区八沢の団体職員3人」、「鹿島区に嫁いで来たふたり」であった。

番組タイトルを地名順で拾ってみると、「小高」（17.0%）、「原町」（5.5%）、「鹿島」（3.0%）の順となった。これは、放射線量の高い順と同じとなった。それぞれの地域事情、地域住民の被災状況、避難状況、震災時の状況等をこの番組で話すことで情報の共有化が期待できる。またその情報を共有化することができれば、放射線量によって分断された南相馬市をつなぐことが期待されるのである。

この番組を「年齢層別出演者」、「出演者の関係」、「テーマ別分け」、「地名別」の4点から分析した。結果、あぶりだされた番組の顔は、20歳から59歳までの会社関係つまり、同じ職場の者同士が、震災体験や原発事故、現在の生活状況などについて話し合うことでさまざまなことを確認しあう。その中心的な話題の人や地区は「小高」であったということがわかった。この番組は震災直後からこれまでの南相馬市の地域情報が生産され、発信されていると考えられる。

それではその「地域情報」とはなんであろうか。浅岡は、地域社会内で生産、交換、消費される情報を特に「地域情報」と呼ぶ（浅岡、2006、234）。それは主に地域メディアによって作り出されるが、今日ではメディア産業に属するプロの作り手だけの独占物ではなく、地域住民などさまざまな主体がその生成に関与するようになった。そもそも地域住民が豊かな地域生活を送るためには、質の高い地域情報が提供される、あるいは自身で創り出す必要がある。さらに地域情報はある特定の人にとってだけに役立つのではなく、住民全体に共有されることによって、地域社会を変えていく力を発揮できるのである。個別の地域情報は、断片的な材料であっても、それが集積されて、実際に受容されていく中で、地域としての一体感や地域イメージの輪郭が出来上がってしていく。

この浅岡が言う中で、重要なことは「プロの作り手だけの独占物ではなく」、「地域住民などさまざまな主体がその生成に関与する」、「住民全体に共有されることによって、地域社会を変えていく力を発揮できる」ということだ。つまりこの「柳美里のふたりとひとり」に当てはめて換言すれば、行政が主体となって地域情報を創るのでなく、地域住民などが地域

情報を創ることに関与し、その情報が共有されることで、地域社会を変えていく力を発揮できるというものである。つまりどういうことかというと、「柳美里のふたりとひとり」のような番組に出演した人たちを通して地域情報が創り出されるものであり、また創り出すことに地域住民が他者化せずに、当事者として自覚するという、仕組みや仕掛けが、この番組がすでに3年半以上続いていることから装置化されていると言えるのではないだろうか。

今野は番組を制作することについてこのようにコメントしている。

いろんな人がもっとエフエムを通して参加してほしいというか、難しいことではなくて自分がいまどういうことで悩んでいるとか、なんでもいいんですけど、それぞれが発信して欲しいと思っています。本当はもっとアイディアとしては、育児中の人の番組とか、サラリーマンの人が愚痴を言う番組であるとか、もっと市民参加の番組があってもいいかなと思います。一方的にインフォメーションアナウンスするのではなくて、たとえば復興に向けて取り組んでいる人たちが出演して自分の言葉でしゃべることが、それに感化されたり勇気づけられたり、またちがう意見を言うことで刺激されたりということがあると思います。そういうことで復興に関して、関わっていけるものだなあと思うようになりました<sup>61</sup>。

### 3-4-2-3 生放送

次にひばりエフエムのパーソナリティとリスナーとメールやリクエストなどで情報を交換しながら進める番組「おかえりなさい南相馬」は、なにを具体的にしゃべるのかなど細かく台詞を決めた台本はない。リスナーから来たメールやはがきなどを中心にリスナーに話し掛けながら、また情報を交換しながら進めていくのが特徴である。放送は第2・4火曜日と隔週である。スタジオでの放送に限らず、必要があれば外から生中継もする。筆者は2016年7月12日、小高区が5年4ヶ月ぶりに避難指示準備区域が解除されるという日の生放送を見学させてもらった。この日の放送は南相馬市役所のスタジオからではなく、番組のテーマが、「避難指示準備区域の解除となった小高区」するために小高駅前のワーカーズベースの事務所を借りての小高区からの生中継だった。番組には今野聰と小林由香の2人のパーソナリティと小高区の住民が出演し、震災からの5年4ヶ月を語り合い、また今後的小高区や南相馬市のことなど、避難指示準備区域が解除されたことを祝う番組となった。避難指示準備区域では、自宅に泊まるには事前に市役所に申請書

写真 3-6 小高駅前から生中継するひばり FM



が必要だった。しかしこの指示解除で事前申請がいらなくなつたのである。ひばり FM のある南相馬市役所は原町区にあり、小高区の小高駅前までの距離はおよそ 12 キロあまりである。テレビ中継ならば現地からの映像が必要になり、現場からの映像を届けるために生放送は理解できるが、なぜ音声だけを伝えるラジオ局のひばり FM が、放送機材を持ち込むという手間をかけてでも生放送をするのであろうか。

小高区が避難指示解除という節目を迎えて、12 日という日は小高区の人にとっては特別な日だったわけです。その特別の日の空気感というか、その時のその思いを発信するのには、やはりここで（小高区内）放送しないと、あとからこんな話を聞きましたとか、こんなことを住民の人は話していましたとか、そんな放送するよりもいま現在私たちも小高にいて、放送していますという方が、現実感があると思います。<sup>62</sup>

番組の中で伝える言葉としては、避難指示準備区域が解除されたこと、住民らの喜びの声であることは言うまでもないことだが、それ以上に「現実感」であったと小林は考えていることを明らかにしている。放送はインターネットでも聞くことができるため、県内外に避難している人たちにもひばりエフエムが生中継することで、放送から伝わる空間を共有してもらおうというものが現地からの生放送であった。

### 3-4-3 原発事故に伴う情報と医療に関する情報番組

#### 3-4-3-1 内部被ばく相談番組「わたし坪倉が、答えます」

ひばりエフエムの自主制作番組の番組種別 3 点目は、原発事故に伴う情報と医療に関する情報番組である。

「わたし坪倉が。お答えします」は、福島第一原発事故に伴い内部被ばくの専門医師がリスナーからの質問に答える 20 分の番組で、南相馬市立総合病院で内部被ばく検査を担当する東京大学医科学研究所の医師・坪倉正治医師が検査データの結果をもとに、内部被ばくについて詳しく解説する 15 分間の番組である。番組は 2012 年 6 月 18 日から始まり、2012 年には 17 本、2013 年には 8 本、2014 年には 9 本収録されている。現在はその収録されたストックを繰り返し再放送している。この番組は、ひばりエフエムが坪倉医師の講演会を録音放送したのをきっかけに、始まった。四角に線で囲った下記は、ひばりエフエムのホームページ上で公開されている。2012 年版の第 1 回から第 17 回までの番組タイトルと答えである。放送日は記載されていない。この詳細はひばりエフエムのホームページから Podcast<sup>63</sup> で聞くことができる。

#### 第 1 回

Q 「内部被ばく、体内に入ることによる影響は？」

A 「DNA がダメージを受け、ガンとか身体に障害が表れる可能性があるが、元々我々は放射線を浴びていて、その放射線の量、程度の問題です。ゼロベクトルの環境はあり得ません

#### 第 2 回

Q 「家族で検査、おじいさんだけ検出したのはなぜ？」

A 「セシウムは大人で 3~4 ヶ月で排出。男女の差は筋肉質の影響か。子どもは、15 歳で 2.5 ヶ月、6 歳で 1 ヶ月、1 歳で 10 日で半分になる。大人で未検出なら子ども未検出」

#### 第 3 回

Q 「今後、内部被ばくの検査は続けていくべき？」

A 「WBC 検査で、子どもの 99% は放射性物質が検出されません。10 年後に被ばく量が増えたロシアの事例があり、未検査食品を食べる可能性があるため継続検査は必要です」

#### 第 4 回

Q 「どのくらい内部被ばくしたか？ どんな人が値が高いのか？ ヨウ素への対応は？」

A 「事故直後に摂取したのいは排出されてしまって子どもはほぼ検出されず、検出され

る人は現在摂取している人。要素とセシウム比率はバラバラ」

#### 第 5 回

Q 「八百屋の軒先に並ぶ商品は大丈夫？ 食べ物の基本的な汚染経路は？」

A 「事故前からラドン等による内部被ばくはあった。事故による放射性物質の浮遊は現在ではゼロではないが、殆どない。食品自体の外部被ばくは気にしなくてよい」

#### 第 6 回

Q 「日常生活で現在、マスクは必要ですか？ 蚊を介した内部被ばくはあるのか？」

A 「空中浮遊のリスクは食品のリスクに比べればかなり低く、内部被ばく検査結果でもマスク有り無しでは差がない。蚊対策には蚊取り線香を」

#### 第 7 回

Q 「事前の食品検査と学校給食丸ごと検査の検査制度の違いと微量に検出されたセシウムをどう考えればよいのか？」

A 「それぞれメリット、デメリットがある。セシウム 134 または 137 だけ検出されるのは検査限界で十分低い値」

#### 第 8 回

Q 「屋外プール授業の再開と屋外での活動。雨は現在どうなっているのか？」

A 「現在の内部被ばくのリスクは殆ど食べ物からなので、もしプールの水を飲んだとしても心配はない、裸だからといって  $\gamma$  線が影響するわけではありません」

#### 第 9 回

Q 「梅酒を作ってもよいのか？」

A 「漬けることによって放射性物質が梅から一部はしみ出しが、一般食品の新基準値内であれば爆発的な被ばくにはならないよう基準値を設定している。空間線量計で食品検査をしてはいけません」

#### 第 10 回

Q 「薪を使った風呂は大丈夫？ 甲状腺で腫れて不安」

A 「たき火などでも高温じゃないのでセシウムは気化せず灰に残るので、その灰の取り扱いに注意。チェルノブイリの甲状腺がんは牛乳摂取によるもので日本では殆ど心配ない」

#### 第 11 回

Q 「魚の汚染、高いものと低いものがあるが？」

A 「過去最高とか通常の何倍とか報道されがちですが、継続的な計測が重要です。魚個体による違いは捕獲場所、餌等でも異なる。タコは排泄が早くセシウムは溜まりにくい」

第 12 回

Q 「同じ畑でも土壤汚染に違いがある？」

A 「食品の産地を選んでいてもいなくても、内部被ばく検査結果に違いはなく、未検査食品を継続摂取している方が検出されている状況。家庭菜園でも食品検査をしている方の被ばくは増えていない」

第 13 回

Q 「南相馬市の水道水、井戸水の安全性は？」

A 「水道水からは検出されず、基本的に泥水のセシウムから検出される。厳密には大気圈核実験の影響でストロンチウムがミリベクトルで検出され、ゼロベクトルの水はほとんどない。量の問題」

第 14 回

Q 「ほこりをなめてしまったら？ 傷口から被ばくはあるのか？」

A 「1 ミリシーベルトの被ばくを受けようとするなら数万ベクトルくらい必要なので、ほこりほと舐めはその 1 万分の 1 くらいの超低レベル、水洗いすれば OK です」

第 15 回

Q 「市立総合病院 2012/4~9 月までの市民 8600 人の結果からわかることは？」

A 「セシウム検出が減少している。2011 年に比べ、大人 70%→3%、子ども 60%→ほぼ 0%、殆どの方が慢性的な内部被ばくはない」

第 16 回

Q 「川内村の検査や平田病院での検査からわかることは？」

A 「帰村かどうかに関わらず明らかな内部被ばくの差はない。川内村と南相馬市と比較しても差はない。地産食品を食べているが、しっかり検査することが生活で根付いている」

第 17 回

Q 「薪を燃やして空気からの汚染は大丈夫？」

A 「現在の内部被ばくの殆どは食べ物から、汚染された薪、木炭を燃やすとセシウムは気化せず灰に濃縮して残るので、燃焼空気よりその灰が舞い上がるような環境では注意が必要です」<sup>64</sup>

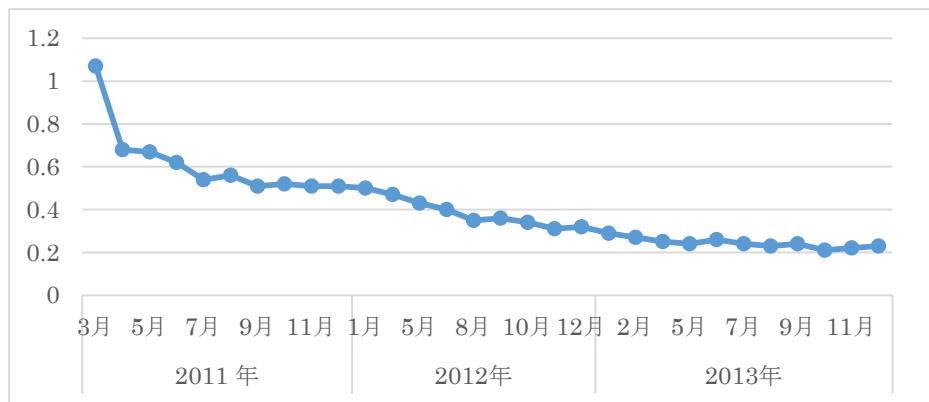
坪倉医師は、医療支援として南相馬市立総合病院の非常勤の医師として勤務している。震災後はチェルノブイリを視察、状況の確認を行ったり、現地スタッフと懇談した。帰国後、南相馬市での内部被ばく検査を実施するなど、放射線知識の普及に努めている（渋井, 2014, 76)。この番組は、素朴な疑問で他人には聞けないことや知っているけどよくわからない、噂話でしか確認したことがないなどとことを、坪倉医師が内部被ばくなどについて説明および解説を放送している。質問も答えも平易な言葉を使って、わかりやすく説明している。例えば、第5回では、生活レベルの話として食べ物の汚染経路についての説明を行い、第6回では、日常生活を送るに際してのこととして、マスクの必要性や蚊については、マスクの有り無しでは差がないとし、さらに蚊対策には蚊取り線香を、とユーモアを交えながら回答している。坪倉医師は回答には大丈夫という言葉を使わず、説明を加える。第9回では「梅酒をつくってもよいのか」といった一般的な生活レベルでの質問に対しては、「漬けることによって放射性物質が梅から一部はしみ出しが、一般食品の新基準値内であれば爆発的な被ばくにはならないよう基準値を設定している。空間線量計で食品検査をしてはいけません」。また第14回では、ほこりをなめた、傷口からの被ばくについてという素朴な疑問に対しては、埃は1万分の1くらいの超低レベルとして水洗いすればOK、と回答するなど、根拠を示している回答している。

### 3-4-3-2 災害 FM を象徴する番組

南相馬市の放射線量は、「最初のころの数値とはだいぶちがいますよ」<sup>65</sup>という。南相馬市の放射線量測定は、職員が手作業で2011年3月27日に南相馬市立総合病院北側入口（外部）一ヵ所（南相馬市原町区高見町二丁目）から始まった。表4-10は、2013年12月までの放射線量数値の推移を示したグラフである。2011年3月では、 $1\mu\text{Sv}/\text{h}$ を超えていたが（正式値は $1,07\mu\text{Sv}/\text{h}$ ）、2013年12月26日には $0.2\mu\text{Sv}/\text{h}$ に近い値であることがはグラフで確認できる（正式値は $0.23\mu\text{Sv}/\text{h}$ ）。

さて、こうした測定値をひばりエフエムでは、番組化して伝えているが、その番組が「環境放射線モニタリング」である。この番組は南相馬市内の放射線量の測定結果データの数値を読み上げるだけの番組である。「最初は30ヶ所、次は40ヶ所、私が入った時は70ヶ所というように、徐々に測定場所が増えて行ったんです」<sup>66</sup>。ひばりエフエムではその市役所の発表データを当時は朝と昼と夕方の情報番組の中で、生放送で読んでいた。そして2012年4月に小高区の警戒区域が再編されたために、測定箇所が129ヶ所になっ

表 3-4 市立総合病院の放射線量（2011年3月～2013年12月）



(出典) 南相馬市 HP から筆者作成

<http://www.city.minamisoma.lg.jp/>

た。そのために、現在の午前10時、午後2時、午後6時の別枠で放送するようになつ表た。現在、データは毎週木曜日に更新して、そのデータを金曜日の午前10時から生で読み上げ、その読み上げた録音を月曜日から木曜日まで放送しているのである。つまり、データは毎日測定しているが、放送されるのは、木曜日のデータのみである。

いまは金曜日だけになりました。この判断はいろいろありました。最初のころは、変動は激しかったんですけど、最近は落ち着いてきたし、市民の関心はどこまであるだろう、だけどこれはきちんと放送しなければだめだろうという考えもあって、(中略) うちの災害局としての売りが放射線量のモニタリング情報なので、これがあるから災害局だろうということなので、やっています<sup>67</sup>

このように今野は、データを知らせる目的の番組ではなく、災害局の存在を示す番組と位置付けている。なぜならば、この測定データを確認できるのは、ひばりエフエムが唯一ではなく、市のホームページ、原子力規制委員会のホームページ<sup>68</sup>福島民報、福島民友の地元新聞でも確認することができるからで、この番組がなくても問題はないのである。さらにこの番組はもう一つの捉え方がある。宇野常寛は、原発事故の影響について「原発事故に関連した計画避難区域については、「日常性の断絶」は現実のものだ。逆に西日本などでは、比較的にだが震災前の日常性はかなり高いレベルで維持されているだろう。そして、問題は日常性が断絶した場所とそうではない場所とに日本社会が分断されてしまったことだ」(宇

野, 2015, 460–461) とする。

宇野が記したのは、日本全体のことであるが、これは南相馬市の縮図でもある。宇野は、つながりや結びつきが切れて絶えることを意味する「断絶」と言う用語を使用しているが、南相馬市の場合は、つながりや結びつきは切れてはいないので、まとまりのあるものを断ちきって別れ別れにすることを意味する「分断」に言葉を置き換えて考えたい。南相馬市鹿島区は比較的に震災前と日常性は維持されているが、原町区と小高区は日常性が分断した場所となっている。南相馬市では、分断されてしまったことで市の再建が他の自治体よりもいっそう難しくしている。「分断」している壁は放射線量だが、その放射線量の値を毎日伝え続けることで、日常性と非日常性の壁が低くなっていることを伝える続けているのとを同じ意味をもつ。つまりこのひばりエフエムが番組として放送している「環境放射線モニタリング」は、臨災局の存在を示す番組であると同時に、分断の壁の高さが変化していることを伝えている番組であると捉えることができる。

2016年1月に原子力規制委員会が南相馬市内の設置した環境放射線モニタリングポスト270ヶ所のうち、市役所の市民生活部生活環境課が270ヶ所に近い場所の110ヶ所についてで、2016年6月23日に放送で読まれた環境モニタリングの結果で、表4-5は原稿からの抜粋である。

表3-5 2016年6月23日に放送された原稿

	測定施設（フリガナ）	測定場所・測定施設	μSv
1	はらまちだいいち・しょうがっこう	原町第一小学校	0.09
2	はらまちだいに・しょうがっこう	原町第二小学校	0.09
3	はらまちだいさん・しょうがっこう	原町第三小学校	0.12
4	たかひら・しょうがっこう	高平小学校	0.08
5	おおみか・しょうがっこう	大甕小学校	0.08
6	おおた・しょうがっこう	太田小学校	0.10
7	いしがみだいいち・しょうが	石神第一小学校	0.09
8	いしがみだいに・しょうがっこう	石神第二小学校	0.11
9	はらまちだいいち・ちゅうがっこう	原町第一中学校	0.12
10	はらまちだいに・ちゅうがっこう	原町第二中学校	0.09

11	はらまちだいさんちゅうがっこう	原町第三中学校	0.08
12	いしがみ・ちゅうがこう	石神中学校	0.11
13	たかひら・ようちえん	高平幼稚園	0.06
14	おおみか・ようちえん	大甕幼稚園	0.09
15	おおた・ようちえん	太田幼稚園	0.13
16	いしがみだいいち・ようちえん	石神第一幼稚園	0.14
17	いしがみだいに・ようちえん	石神第二幼稚園	0.09
18	あずま・ほいくえん	あずま保育園	0.08
19	なかまち・ほいくえん	なかまち保育園	0.10
20	さくらい・ほいくえん	さくらい保育園	0.07
21	ひがし・しょうがいがくしゅうセンター	ひがし生涯学習センター	0.13
22	おおた・しょうがいがくしゅうセンター	太田生涯学習センター	0.19
23	おおみか・しょうがいがくしゅうセンター	大甕生涯学習センター	0.09
24	たかひら・しょうがいがくしゅうセンター	高平生涯学習センター	0.10
25		石神生涯学習センター	0.20
26		ひばり生涯学習センター	0.16
27		中央図書館・情報交流センター	0.18
28		博物館	0.24
29		夜の森公園	0.10
30		雲雀ヶ原陸上競技場	0.15
31		弓道場	0.18
32		原町保健センター	0.11
33		桜井古墳	0.15
34		鹿島小学校	0.06
35		八沢小学校	0.07
36		上真野小学校	0.07
37		鹿島中学校	0.11
38		かしま保育園	0.07
39		鹿島生涯学習センター	0.19

40		鹿島市役所	0.15
41	さくらだいやまこうえん・ぐらうんど	桜平山公園・グランド	0.17
42	かみとちくぼ・せのさわしゅうらく	上柄窪・瀬ノ沢集落	0.29
43	まえかわはらたいいくかん	前川原体育館	0.13
44	よこて・しょうぼうとんしょ	横手消防屯所	0.14
45	おやま・こうかいどう	御山公会堂	0.18
46	こやまだ・しょうぼうとんしょ	小山田消防屯所	0.15
47	かみてらうら・こうみんかん	上寺内公民館	0.15
48	かしまこうみんかん・じさばらぶんかん	鹿島公民館・檍原分館	0.18
49	はらまち・じんがさき	原町陣ヶ崎公園墓地	0.18
50		下太田・多目的集会場	0.15
51	じんがさき2・こうかいどう	陣ヶ崎二・公会堂	0.20
52	やがわら	矢川原公会堂	0.23
53	かたくら	片倉公会堂	0.28
54		馬場公会堂	0.25
55		国見団地中央公園	0.14
56		石神生活改善センター	0.16
57		押釜集落センター	0.16
58	たかのくら	高倉公会堂	0.22
59	おおがい	大谷生活改善センター	0.30
60		大原公会堂付近	0.44
61	しだざわ	信田沢消防屯所	0.20
62	ふこうの	深野公会堂	0.15
63		北信田運動場	0.13
64	かみきたたかひら	上北高平・高松集落	0.19
65		クリーン原町センター	0.12
66	かねざわ・こうかいどう	金沢公会堂	0.09
67		南相馬市役所	0.13
68		市立総合病院	0.15

69	こばま・こうかいどう	小浜公会堂	0.10
70	えねい・しゅうらくセンター	江井集落センター	0.11
71	しもえねい・しゅうらくセンター	下江井集落センター	0.12
72	つつみがい・しょうぼうとんしょ	堤谷消防屯所	0.10
73	おぎさく・せいかつかいぜんセンター	小木サク生活改善センター	0.15
74	つるがい・せいかつかいぜんセンター	鶴貝生活改善センター	0.07
75	おだか・しょうがっこう	小高小学校	0.14
76	おだか・くやくしょ	小高区役所	0.07
77	おだか・しゅうらくセンター	小高集落センター	0.01
78	おだか・ほけんふくしへンタ	小高保健福祉センター	0.16
79	かたくさ・うんどうじょう	片草運動場	0.10
80	かたくさ・しゅうらくセンター	片草集落センター	0.19
81	おだか・ちゅうがっこう	小高中学校	0.07
82	おだか・ほいくえん	おだか保育園	0.12
83	おだか・こうかいどう	岡田公会堂	0.14
84	おおい・かいじょう	大井会場	0.11
85	はんさき・こうかいどう	飯崎公会堂	0.33
86	かなぶさ・ようちえん	金房幼稚園	0.14
87	おだか・しゅうぎょうかいぜんセンター	小高就業改善センター	0.15
88	かくまざわ・しゅうらくセンター	角間沢集落センター	0.28
89	おや・しゅうらくセンター	小谷集落センター	0.16
90	まだつ・しゅうらくセンター	摩辰集落センター	0.30
91	みなみはつばら・こうかいどう	南鳩原公会堂	0.24
92	はつばら・しょうがっこう	北鳩原小学校	0.13
93	きたはつばら・こうかいどう	北鳩原公会堂	0.20
94	はのくら・こうかいどう	羽倉公会堂	0.13
95	おおとみ・しゅうらくセンター	大富集落センター	0.14
96	かなや・こうかいどう	金谷公会堂	0.18
97	かわぶさ・こうかいどう	川房公会堂	0.35

98	おおたわ・こうかいどう	大田和公会堂	0.26
99	こやぎ・しゅうらくセンター	小屋木集落センター	0.12
100	おなば・こうかいどう	女場公会堂	0.12
101	かみえびさわ・こうかいどう	上蛭沢公会堂	0.12
102	ふくうら・しょうがっこく	福浦小学校	0.06
103	しもえびさわ・しゅうらくセンター	下蛭沢集落センター	0.15
104	しもうら・こうかいどう	下浦公会堂	0.11
105	なめづ・こうかいどう	行津公会堂	0.18
106	かみうら・こうかいどう	上浦公会堂	0.19
107	かみやま・こうかいどう	神山公会堂	0.23
108	しもみみがい・こうかいどう	下耳谷公会堂	0.16
109	いづみさわ・しゅうらくセンター	泉沢集落センター	0.16
110	ふくおか・こうかいどう	福岡公会堂	0.12

この原稿には、読みにくい、間違いややすい地名や施設場所には、フリガナが振られている。フリガナの必要な場所は空欄（斜線部分）になっている。放射線量の単位はマイクロシーベルトである。以下は放送<sup>69</sup>の一部である。

この時間は放射線関連の情報をお届けします。市内の環境放射線モニタリング、学校給食、水道水の測定結果を順にお伝えします。南相馬ひばりエフエムでは、市内の環境放射線モニタリング結果を毎週金曜日に更新し、一日3回お送りしています。市内のモニタリングポストの測定データから地域性を考慮し、市内110ヶ所を放送でお伝えします。測定に関しては、モニタリングポストによる地上1メートルのデータとなります。はじめに6月23日に測定しました、市内110ヶ所の環境放射線モニタリング結果についてお知らせいたします。単位はマイクロシーベルト毎時です。

ここまで6月23日に測定しました市内110ヶ所の環境放射線モニタリング結果について伝えました。なお、放送した以外のモニタリングポストのデータは原子力規制委員会のホームページに掲載されています。

番組では放射線量が低いとか、高いとか、また他の地域と比較するような事柄であるとか、

以前と数値を比較するような言葉のコメントはなく、数値を読み上げるだけの番組である。今野は「原発事故後、南相馬市から避難した人、避難せずに留まっている人、それぞれの置かれた状況は様々で、現在の放射能汚染についても多様な考え方があり、そうした個々人の立場や判断を尊重して、放送の中では安易に避難している人に帰還を呼び掛けない」（松本, 2016, p119）と話している。

## 第5節 まとめ

ここまで、南相馬市に設置されたひばりエフエムについて概観してきた。ひばりエフエムが設置された目的は、被害の軽減というよりも、避難先から自宅に帰ってきた被災者向けに、行政情報を提供するために設置された臨災局であった。緊急時の最中に設置された臨災局ではないため、開局時からすでに朝、昼、夕方に情報を提供するための番組が設けられていた。この情報番組は、主に行政情報等を提供するもので、市民との情報交換、市民からの情報提供を受け入れるようなコーナーはなかった<sup>70</sup>。こうした一方向的な情報提供を行ってきたひばりエフエムが双方向の放送を行うように切り変わったのは、リスナーからの「クレーム」だった。そして時期が偶然重なるが、9月にひとりのスタッフの発案から生まれた、震災半年特別番組であった。それまでの一方向的に情報を提供する番組スタイルから、被災者が生出演して、被災状況や生活状況など、被災者自らが情報を発信する番組が、その時に初めて放送されたのである。この番組が契機になって、ひばりエフエムは様々な番組を制作するような臨災局へと変わっていった。

その一方で「コミュニティ FM と変わらない部分もある」<sup>71</sup>と今野が言うように、お知らせやイベント告知といった番組は、放送運営が長期化することで、一般化していることは否定できない。しかしひばりエフエムが臨災局だからこそ放送し続けている番組が、「環境放射線モニタリング」である。この番組を放送し続ける意味合いは、測定データを広報することではなく、放射線量によって分断された地域と地域を結び直すという、いわば南相馬市の復興を促進するという番組と今野は位置付けている。つまりひばりエフエムのここでの役割は、復興を促進することを念頭において放送運営が行われているのである。

## 第4章 とみおかさいがいエフエム「おだがいさま FM」

### はじめに

この章では、福島県富岡町に設置されたとみおかさいがいエフエム「おだがいさま FM」(以下,おだがいさま FM)を取り上げる。富岡町は、震災と津波に加え、福島第一原発の事故により、町全体が原発から 20 キロ圏内にあるため、2011 年 3 月 12 日に全町民が避難せざるを得ない状況となった。こうしたこと、おだがいさま FM は、臨災局の制度化後初めて、被災地ではなく、避難地に局が設置されるという前例のない臨災局となった。そこでおだがいさま FM を注目する点は、被災地ではなく、避難地に設置されたことで、その放送運営と情報提供をどのように行っているかという点である。特におだがいさま FM の開局は、震災から 1 年後の 2012 年 3 月 11 日である。つまり開局した当時はすでに、設置目的の被害の軽減ではないことからのスタートである。そこで臨災局であるおだがいさま FM が、①どのような情報をどのように提供しているのか、②そしてリスナーはその情報をどのように受け止めているのか、③開局が 1 年後という観点から、被害の軽減という役割からのおだがいさま FM はどのような役割を果たしているのかについて考察する。

本章は、まず、最大で 2,800 人余が避難した福島県産業交流館（以下、ビックパレット）に開局したミニ FM の活動内容について触れる。そのビックパレットが閉鎖された後に、被災地ではなく避難地に特例として設置された、おだがいさま FM の開局に至った経緯と、おだがいさま FM が入っている富岡町社会福祉協議会のおだがいさまセンターの内部ならびにその一角に設置されたおだがいさま FM の事務所兼スタジオについて紹介する。次に開局から全国避難している町民のために情報を提供している内容及び提供するために制作されている番組について考察する。

調査は、3 つの方法によって行った。一つは聞き取り調査で、富岡町社会福祉協議会次長 兼いわき所長で、おだがいさま FM のパーソナリティを務めている吉田恵子、パーソナリティの久保田彩乃、及びおだがいさま FM のスタッフ等に行った。また番組収録にも立ち会い、番組の出演者にも聞き取り調査を行った。2 つ目は、おだがいさま FM が被災地ではなく、避難地に異例なケースとして設置されたことに注目して、数多くの新聞、雑誌に掲載された。こうした新聞や雑誌などに掲載された記事の調査を行った。3 つ目は、吉田恵子が講演会やシンポジウム、学会、研究会での発言に対する調査である。筆者本人がこうした講演会やシンポジウム、学会に同席した場合には、許可を得た上で録音し、調査資料とした。

## 第1節 富岡町の概要

### 4-1-1 東日本大震災以前の富岡町

富岡町は、福島県内は、会津、中通り、浜通りの3つの地域があるが、富岡町はその浜通りのほぼ中央に位置し、太平洋に臨んでいる。面積は、69.35Km<sup>2</sup>である。気候は、年間平均気温が12.2度で寒暖の差が少なく、東北の湘南と呼ばれる。2010年は15,967人（福島県調査）であったが、東日本大震災後、2011年には14,847人（福島県調査）となり、減少を続けており、2014年では14,162人（福島県調査）となっている。

2014年における富岡町の年齢別人口は、若年層（0～9歳）で2,591人（18.3%）、成年層（20～59歳）で6,826人（48.2%）、高齢者層（60歳以上）4,573人（32.3%）、年齢不詳172人（1.2%）であった。生産を担う成年層は多く、必ずしも高齢者層が中心ではない。

また2010年ではあるが産業別人口では、農業・漁業などの第一次産業では490人（6.2%）、建設業・製造業などの第二次産業では3,107人（39.8%）、運輸業、小売業、サービス業などの第三次産業では4,210人（53.8%）となる<sup>72</sup>。

### 4-1-2 東日本大震災以後の富岡町

富岡町は、震災と津波に加え、原発事故により、複合的な災害に見舞われた。会津、中通り、浜通りの3区分で死者数を比較すると、中通りの直接死は36人、関連死（復興庁の定義では、「東日本大震災による負傷の悪化などにより死亡し、災害弔慰金の支給等に関する法律に基づき、当該災害弔慰金の支給対象となった者」あるいは、県または市町村が震災を経て災害関連死を認定した者）は69人、死亡届等は3人、合わせて死者数は108人となっている。会津の直接死は1人、関連死は3人、死亡届等はなしで死者数合わせて4人となつた。一方、浜通りの直接死は、1,567人、関連死は2,009人、死亡届等は221人で合わせて3,797人となっている。このように、県内の死者数は、浜通りに偏っていることがわかる。富岡町は浜通りの中では、死者数が18人であるが、関連死は計357人であり、南相馬市の486人、浪江町の390人に次いで3番目となった（出典 福島県災害対策本部 2016年9月12日現在）

それでは、なぜ浜通りに関連死が多いのか。原因を探るべく、復興庁は、2012年3月31日現在において震災関連死者数が多い市町村と原発事故で避難指示が出された市町村の1,263人を対象に、原因調査を行った。全体の原因別（複数選択）では、「避難所等における生活の肉体・精神疲労」によるものが約3割、次いで「避難所等への移動中の肉体・精神的

疲労」と「病院の機能停止による初期治療の遅れ等」が同じく約2割であった。

県別にみると、岩手県及び宮城県の原因別では、「避難所等における生活の肉体・精神疲労」が約3割、「病院の機能停止による初期治療の遅れ等」と「地震・津波のストレスによる肉体・精神的負担」が同じく約2割であった。これに対して福島県では岩手、宮城県のように「避難所等における生活の肉体・精神疲労」が約3割だったが、岩手県や宮城県では約2割だった「避難所等への移動中の肉体・精神的疲労」も約3割となった。こうした結果から考えられる福島県の関連死の多くが、原発事故に伴う避難等による生活の肉体・精神疲労につながっているのではないかと復興庁ではみている（出典　震災関連死に関する検討会資料　2012年8月21日）。

#### 4-1-3 全町民が避難対象

富岡町は、福島第一原発から町内全域が20キロ圏内に入るため、4月14日午前0時に警戒区域に指定され、町内全域で立入りが禁止となった。3月11日から4月22日までの経緯をまとめて列挙する。

3月11日 14:46 三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震（震度6強, M9.0）発生

14:50 富岡町災害対策本部設置

大津波警報が発令され、町内避難所を開設するとともに、防災無線及び巡回パトロールにより沿岸地域住民を誘導

19:03 原子力緊急事態宣言発令（福島第一原子力発電所）

21:23 内閣総理大臣より福島県、大熊町長並びに双葉町長に対して、原子力災害対策特別措置層の規定に基づき指示

- ・福島第一原発から半径3キロ圏内の住民に対する避難指示
- ・半径10キロ圏内の住民に対して、屋内退避指示

12日 5:32 内閣総理大臣の指示により、福島第一原発半径10キロ圏内の住民に対する避難指示

内閣総理大臣より福島県知事、広野町長、楢葉町長、富岡町長に対し、原子力災害対策特別措置法の規定に基づき指示

- ・福島第二原発から半径3キロ圏内の住民に対する避難指示
- ・福島第二原発半径10キロ圏内の住民に対する屋内退避指示

- ・バス、自家用車により川内村への避難実施
- ・その他中通り方面への避難
- ・富岡町、川内村合同災害対策本部設置

10:17 福島第一原発でベント開始

15:36 福島第一原発 1号機で水素爆発

18:25 内閣総理大臣指示

- ・福島第一原発から半径 20 キロ圏内の住民に対する屋内退避指示

13 日 5:22 福島第一原発 3号機の海水注入開始

13:12 福島第一原発 3号機で水素爆発

14 日 11:01 福島第一原発 3号機で水素爆発

15 日 11:00 内閣総理大臣が福島第一原発の避難区域の指示

- ・福島第一原発から半径 20 キロから 30 キロ圏内の住民に対する屋内退避指示

16 日 午前 川内村から郡山市の福島県産業交流館（以下、ビックパレット）へ移動、避難実施

4月 14 日 富岡町役場郡山出張所を避難先のビックパレット内に開設

22 日 0:00 福島第一原発半径 20 キロ圏内を警戒区域に指示、富岡町の町内全域が指定された

写真 4-1 津波に襲われた JR 富岡駅



全町民に避難指示が出されたことで、町が把握している町民の避難先は福島県内で約1万人、県外及び海外で5千人となっている。福島県内59市町村のうち44市町村に富岡町民が避難している。避難者数が一番多いのは、いわき市の6,035人、次いで郡山市の2,757人、福島市の380人、三春町の278人、大玉村の173人、会津若松市の162人、田村市の155人、南相馬市の126人、白河市の103人、須賀川市の88人、広野町の65人、相馬市の56人などとなっている。なお富岡町の応急仮設住宅は、郡山市、いわき市、三春町、大玉村の5市町村に設置されている。また福島県外に避難先を求めた町民は、4,329人で、47都道府県及び海外にも避難している。避難先で一番多い都道府県は、東京都の700人、次は茨城県の641人、埼玉県の532人、千葉県の462人、神奈川県の395人と関東地方に集中しており、全体の72.2%である。この他の都道府県では、新潟県の265人、宮城県の246人、群馬県の168人、北海道の65人、長野県の55人、静岡と愛知の54人となっている。

ところで富岡町は福島第一原子力発電所から半径20km内にあるため2011年4月22日に警戒区域に指定され、その後2013年3月25日に警戒区域の見直しが行われ、空間線量分布図を基に、地域のコミュニティを維持しながら鉄道や道路なども考慮した上で、「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の3区域に分けられた。2016年8月16日現在の、避難指示準備区域、居住制限区域、帰還困難区域の3区別されている。それぞれの区分について説明する。避難指示準備区域とは、年間積算線量が20mSv以下となることが確実なことが確認された地域で、主要道路における通過交通、住民の一時帰宅（ただし宿泊禁止）、公益目的の立入りなどを柔軟に認める、製造業等の事業展開、これらに付随する保守修繕、運送業務などを柔軟に認める、スクリーニングや線量管理など防護措置は原則不要とされている。居住制限区域は、年間積算線量が20mSvを超えるおそれがあり、住民被ばく線量を低減する観点から引き続き避難の継続を求める地域で、基本的に計画的穂柵区域と同様の運用を行う、住民の一時帰宅（宿泊禁止）、通過交通、公益目的の立入り（インフラ復旧、防災目的など）などを認めるとしている。帰還困難区域は、5年間を経過してもなお、年間積算線量が20mSvを下回らないおそれのある、2012年4月時点で年間積算線量が50mSv超の地域で、区域境界において物理的な防護措置を実施し、住民に対して避難の徹底を求める、可能な限り住民の意向に配慮した形で住民の一時立入りを実施、スクリーニングを確実に実施し、個人線量管理や防護の着用を徹底している。

さてそのそれぞれの区分の人口だが、避難指示解除準備区域は1,338人（493世帯）、居

住制限区域は 8,341 人（3,367 世帯）、帰還困難区域は 4,047 人（1,643 世帯）となっており、原子力災害現地対策本部では、帰還困難地域を除く、避難指示解除準備区域と居住制限区域の 9,679 人（3,860 世帯）に、2016 年 9 月 17 日から 2017 年以降、避難指示解除までの間に準備宿泊を実施している。準備宿泊とは、解除された場合にスムーズに帰宅できるよう片づけなどを行う準備期間を設けるものである。

#### 4-1-4 町の意向調査

準備宿泊が進むなど、町内へ戻る環境整備が進められているが、復興庁、福島県、富岡町では、環境整備とは別に環境が整った場合、町民が町に戻る意思を持っている人がどのくらいいるのか、また戻る条件をどのように考えているのかなどを調べるために、震災から 1 年後の 2012 年から復興庁、福島県、富岡町の 3 機関合同で、町民の帰還意向調査を行っている（出典：復興庁、福島県、富岡町）。

調査方法は、2012 年度の調査対象が 13,191 人、回答者は 7,634 人で回収率が 57.9% だった。2013 年度は、対象世帯が 7,151 世帯、回答数は 3,866 世帯 54.1% の回収率であった。2014 年度は調査対象が 7,775 世帯で、回答数は 3,979 世帯で 51.2% の回収率だった。2015 年度は、調査対象が 7,076 世帯、調査時期が 8 月 3 日から 17 日、調査方法は郵送配布、郵送回収で、回答数は 3,635 世帯で回収率は 51.4% だった。

2012 年度は「戻りたい」が 15.6%、「判断がつかない」が 43.3%、「戻らない」が 40.0% であった。翌年度の 2013 年度の調査では「戻りたい」という世帯が 12.0% に減少、さらに 2014 年度でも 11.9% に減少した、しかし 2015 年度の調査では、2013 年度の減少から一転して、13.9% に増加した。

また「判断がつかない」と回答した人及び世帯は、2012 年度は 43.3% あったが、年々減少して 2013 年度は 35.3%、2014 年度は 35.3%、2015 年度は 29.4% となった。そして「戻らない」と回答した人及び世帯は、年々増え続けており、2012 年度の 40.0% だったが、2013 年度は 46.2%、2014 年度は 49.4%、2015 年度は 50.8% と半数を超えた。

それでは、「判断がつかない」もしくは「戻らない」と、決断した理由についてだが、2012 年度一番多かった個人の理由は、「道路・鉄道・学校・病院などの社会基盤の復旧時期の見通し」で 81.9%、2013 年度の世帯における理由は 82.6% と若干増えたものの、2014 年度には 75.7%、2015 年度には 67.8% と減少した。しかし依然として割合は高くなっている。「判断がつかない」とした理由で、次に高かったのは、「放射線量の低下の見通し」が 77.3% だった。

写真 4-2 帰宅困難地域内の家の前にはバリケードは設置されている



しかしその後除染が進んだせいか、年々減少し、2013 年度は 72.0%、2014 年度は 59.8%、2015 年度は 43.4%と徐々に減っている。また「賠償額の確定」も年々減り、2012 年度が 60.3%、2013 年度が 45.9%、2014 年度が 53.6%と 2015 年度が 34.6%となった。そんな中で減少率の少ないのが、「どの程度の住民が戻るかの状況」という項目である。2012 年度の 56.3%という割合は、理由として 4 番目であったが、2013 年度も 56.3%、2014 年度は 53.6%、2015 年度は 55.0%で前年の 2014 年度よりも逆に増えた。この「判断がつかない」という調査結果から分析をすると、理由としては「社会基盤の復旧見通し」が一番多いが、「どの程度の住民が戻るかの状況」が半数を超える世帯が理由として選んでおり、戻る条件として単独で戻るのではなく、隣近所と一緒にコミュニティ単位で戻りたいという意向を持っていることがわかる。

次は「戻らない理由」とした調査結果であるが、2012 年度では、「放射線量が低下せず不安」が 80.7%と一番多く、次いで「原発の安全性」の 70.8%、「家の破損・劣化、住める状況ではない」が 68.0%、「商業施設などが戻りそうにない」が 63.4%、「医療環境に不安」が 56.2%、「仕事がない」が 36.5%、「他の住民が戻りそうにない」が 33.3%、「介護・福祉サービスに不安があるから」が 28.7%、「町外への移動交通が不便だから」が 28.3%、「教育環境に不安があるから」が 26.1%、「営農などができそうにないから」が 14.1%、「避難先で仕事を見つけているから」が 13.6%などとなっていたが、どの理由も年度ごとに減少する傾向を示して

いる。しかし「医療環境に不安」と「介護・福祉サービスに不安があるから」は2013年度と2014年度は増え、2015年度はほぼ横ばいの状態になっている。これは、除染や住居環境の整備は時間の経過とともに、整えることができるが、その一方で、時間の経過とともに高齢化は進んでいること示しており、医療環境や介護・福祉サービスに対する不安が戻るための条件のハードルを上げている。

こうした意向調査の他に、富岡町のおだがいさまセンターに毎年飾る七夕の短冊に、町民の気持ちを垣間見ることできる。震災直後の短冊には、「早く帰りたい」「戻りたい」「小学校に早く通いたい」と戻りたい、帰りたいが多かった。2年目になると、「みんな楽しく過ごせるように」「みんなずっと幸せに暮らせますように」と「みんなが」、「みんなと」に変わった。そして3年目になると、「ゲートボールで優勝したい」「ハワイでフラダンスを踊りたい」「社交ダンスがうまくなりたい」というような、自分が他人に認めてもらいたいというような短冊に変化したという。そして4年目は、「早く家が建ちますように」「病気が治りますように」とすぐにできるような願いに変わったという。震災直後は、早く普通の生活に戻りたいという自己願望が強かったが、2年目になると「みんな」という言葉を使うようになり、自分ばかりでなく家族や友人らを考える余裕が出てきた兆候を見ることができる。そして3年目になると、日常生活が少し落ち着いたのか、日常生活のことではなく、娯楽のことや趣味のことまで広げて願うようになった。そして4年目は、身近な生活ではなく、将来を見据えた生活基盤作りに願いが及んでいることがうかがえる<sup>73</sup>。

## 第2節 「おだがいさまFM」開局までの経緯

### 4-2-1 避難所内でミニFM開局

福島第一原発1号機が12日午後3時36分に水素爆発し、午後6時25分に富岡町を含む半径20キロ圏内の住民に対する屋内退避指示が出され、さらに福島第一原発3号機が14日の午前11時01分に水素爆発した。これにより、屋内退避県内が20キロから30キロ圏内に拡大した。こうした状況から一旦川内村に避難していた富岡町民は、町の判断で郡山市にある福島県産業交流館、通称ビックパレットに避難することになった。このビックパレットは、1998年に開館した多目的ホールで、通常は見本市やコンサート、即売会など大型イベントに使用されている。施設は、多目的ホール、コンベンションホール、屋外展示場のほか、中会議室や小会議室、プレゼンテーションルーム、レストラン、駐車場を有している。

写真 4-3 避難先となったビックパレット



ビックパレットに避難してきたのは、約 2,600 人で富岡町民が中心（朝日、2014a）で、一部が川内村の村民だった。ビックパレットは当初、福島県が開設したわけではなかった。原発事故の深刻化に伴い、バスと自家用車で避難先を求めて富岡町と川内村の被災者が、半ば強引に避難所として利用したもので、それ故に地元の郡山市が支援体制を取ることはなかった（今井, 2014, 123）。当時福島県文化スポーツ局生涯学習課の職員で相馬市の避難所で運営支援を行っていた天野が、県庁避難所支援チームとしてビックパレットに常勤の職員として配置された時に見た時は、目を疑うような状態だったという

その 4 月 11 日、最初に見た光景に我が目を疑いました。段ボールで区切ったしきりと硬いコンクリートの上に毛布を 2,3 枚敷いただけのところに多くの方々がじっと身を横たえている。それも通路部分にまでびっしりで、しかも通路も 50 センチくらいと、すれ違うのがやっと、ビックパレットふくしまは、もともとイベントホールで非常に広い場所なのですが、4 階部分は壊滅的な被害でまったく人が立ち入ることができないほどでしたし、広いホールも危険が大きいということで当初は入れず、結局、1、2、3 階の通路も含めた場所に避難してもらっていたんですね。エレベーターもエスカレーターも止まっていたのですが、2 階、3 階にも障がいをお持ちの方や高齢者、要介護の方に入っていただきざるを得ない状況でした。（天野, 2011, 216）

そして、ビックパレットの運営は、富岡町社会福祉協議会（以下、富岡町社協）に委託され、富岡町社協は全国から集まったボランティアと避難者とをつなぐお互い様という意味の「おだがいさまセンター」を立ち上げた。

「おだがいさまセンター」は、正式には生活支援ボランティアセンターという名前で、これまでのボランティアセンターと似て非なるものなのは、外部支援の要請を行い、団体や機関、個人がボランティアでサービスを提供してくださるだけでなく、もう一方で内部、つまり入所者に向けて働きかけ、交流の場を提供するんですね。「喫茶を運営してみませんか」とか、「おだがいさま FM」という避難所内のラジオ局の「パーソナリティやってみませんか」とか、入所者の方々が入所者の方々にサービスを提供し合うのです。まさに「おだがいさま」なんですね。（天野, 2011, 220）

そして、「おだがいさまセンター」では、「食べる」「並ぶ」「寝る」ことしかないように避難生活中においても、少しでも快適に過ごしてもらうために、館内に「女性専用スペース」を作り、女性の着替え、乳児の授乳、女性特有の悩みの相談などができる場所を確保し、また誰もが利用できる喫茶コーナーも設けた<sup>74</sup>。館内の避難生活の環境を整えながらも、問題はイベント情報や自衛隊との交流といったビックパレット内で行われるイベント情報などの共有化だった<sup>75</sup>。しかし2,500人への情報提供や共有化のシステム作りは容易でなく、緊急措置として広報誌『みでやっぺ』をおよそ2,000部発行したものの、突然の避難で、老眼鏡を持っていないお年寄りが多く、文字が読みづらいというクレームがあつた<sup>76</sup>。館内放送の利用も試みたが、情報の共有化はうまくいかなかった<sup>77</sup>。そこで考えられたのが、ラジオ局だった。ヒントは支援物資の中にはラジオが数多くあったことからだった。館内専用で、微弱の電波で、免許のいらないミニFM<sup>78</sup>の設置が、ふくしまFMに協力で実現、5月27日に開局した。ミニFMのスタジオは、避難者の間仕切りの残りもので作られ、場所は1階の入り口近くのエントランスホールに設置された（写真3-4、3-5参照）。放送時間は平日の午後7時から9時までの2時間のみである。「放送する情報は、ビックパレットの中で行われるようなイベントやお昼時間のお知らせだったり、メニューだった」<sup>79</sup>。しかしこのミニFMは情報を伝えることよりもむしろ避難所の雰囲気を変えることに役立った。

富岡町社協の職員で、ミニFMのスタッフを兼任し、現在ではおだがいさま FM のパーソ

ナリティも兼任している吉田恵子（以下、吉田）は、ラジオと放送を見に来る避難者の間で、コミュニケーションを図ることで、避難者たちの気持ちがわかるようになったと話す。「ラジオは一人一人に配布してありますので、聞くことができるんですが、どういうわけかラジオを見に来る人が多くて、なんだこれという、放送時間になると人が集まってくるんですね。最初ははじめな話をしていたんですが、3日目に笑わせるようなことを誰かが言ったんです。そうすると、大きな笑い声がその会場の中で出たんですね。避難所ですので、みんながしんみり、みんながひそひそ、声をたてないで、他人に迷惑をかけないようにひっそりと過ごすのが避難所だとみんな思っていたんだと思います。ところが、おもしろいことを言ったことからすごい笑い声が起きたというのは、みんな笑いたかったのかと思いました」。

ここで、社協の職員吉田について触れておく。吉田は富岡町出身で、1989年に富岡町社協に入り、本来はパーソナリティの他にボランティアの仲介とケアマネジャーとして働いている。現在は富岡町社協の次長兼いわき支所長の役職に就いている（2016年12月1日現在）。吉田がパーソナリティとして話すことになったきっかけは、当時ミニFMは、ラジオ福島のアナウンサーがパーソナリティを務めていたが、そこにミニFMの裏方スタッフとして働いていた吉田が富岡町出身であり、町のことや富岡の言葉を聞きたいという避難者からの要望もあり、パーソナリティとなった。吉田はパーソナリティの経験はなかったが、「小学校5年生から高校3年生まで放送委員会にいたので、校内放送をずっとやっていました」（いいべ！郡山、2014）とマイクの前に座ることが苦にならないと話す。

それまでのビックパレットの雰囲気について、震災直後から町民の避難のための誘導や移動でバスを運転していた、現在ではおだがいさまFMの番組で、方言を使ってフリートークする番組「なんだっぺトーク」を担当している佐藤勝夫は次のように話している。「富岡町の場合はなにもなかった（情報が）。とにかく逃げろって。でも逃げろって言われても、2～3日で帰ってくると思っていたから、着の身着のままだから、大熊町に人たちは、余裕があって、富岡町の人たちはちがって。ところが、だんだんと状況がおかしくなってしまって、（中略）そしてビックパレットに来た。ビックパレットでは雑魚寝だわな。そしてけんかは絶えない。けんかの仲裁に入った、役場職員にも「なにやってんだ」って、食ってかかる」<sup>80</sup>。佐藤が話すように、ビックパレットに来た時は、ストレスが頂点に達していたかのような状態で、酒を飲んで大声を出す人もいたり、警察が来てけんかの仲裁にはいるようなこともあったという。

5月27日に開局したミニFMの放送は、最初笑わせるような娯楽に特化したものではなか

った。元々このラジオ局を立ち上げた目的は、情報を共有化であった。それでも最初は、ラジオ局自体が珍しいことなどから、スタジオの前に人が集まった。そこで、「笑い」が起きるような情報交換が行われたのである。以来日を重ねるごとに、間仕切りで急造されたスタジオの前には人が集まるようになった。1階の入り口近くの場所というスペースに設置されたこともあるって、放送時間になると人が集まってきたという。時には、パーソナリティが地名などを言い間違えると、ヤジが飛んだり、さらには前遠藤勝也町長<sup>81</sup>が出演した時には「何年後に町へ戻れるのか」という放送中にも関わらず、その場で直に町長に質問する人も出た<sup>82</sup>。スタジオの前がパーソナリティや出演者とのコミュニケーション広場となっていたのである。

写真 4-4 入所者の前で放送するミニ FM



(写真提供) 富岡町生活支援復興支援おだがいさまセンター

写真 4-5 放送席は避難所の仕切り壁で製作



(写真提供) 富岡町生活支援復興支援おだがいさまセンター

写真 4-6 郡山市内に設けられた富岡町役場の仮庁舎



写真 4-7 おだがいさまセンター



ミニ FM と避難者との間で、どんなやり取りがあったのか、整理をしてみる。まず送り手のミニ FM が、「笑い話」を電波で情報発信、その情報を聞き手である避難者が受け、次にその「笑い話」をこれまで受け手であった被災者が送り手となって、避難所の中のスタジオへ「笑い声」という形で発信したという情報のサイクルが発生したのである。送り手であったミニ FM と避難者との間で、双方向の情報交換が行われたということは、広報誌を配布していた時にはなかったことである。またミニ FM が設置された場所が、会議室のようなクローズドな場所でなかったことも情報交換が可能となったと思われる。こうした情報を交換す

ることによって、情報に対する意思の確認も可能になり、また被災者がどんな情報を欲しているのかというニーズの発掘にもつながった。こうしたミニ FM の放送活動から、おだがいさま FM の吉田は、情報の共有化ばかりではなく、一方向に情報を伝えるようなラジオ局ではない運営を目指し、その後に設置される富岡町の臨災局であるおだがいさま FM の設置場所も双方向に情報を伝えるような運営にこだわった。

#### 4-2-2 「町をもたない自治体」の臨災局が開局

2016 年 7 月 17 日現在、富岡町、大熊町、浪江町の 3 町が全町民避難となっている。こうした現状から富岡町は、役場を町内に設けることができず、郡山市内に郡山事務所（郡山市大槻町字西ノ宮 48-5）と称して、仮庁舎を設けている。富岡町という区画が存在するにも関わらず、町民という集合体がその区画に存在しないという現状がいまの富岡町を始めとする原発事故で全住民が避難している自治体の存在である。

ところで、避難場所となっていたビックパレットは、2011 年 8 月 31 日で閉鎖となり、避難者はそれぞれの仮設住宅等に入居した。ビックパレットの閉鎖に伴い、ミニ FM も閉局となった。ビックパレットの生活支援ボランティアセンターは、「おだがいさまセンター」は福島県郡山市富田町若宮前の応急仮設住宅内に建設された。この応急仮設住宅は、富岡町の他、川内村、双葉町の住民約 500 世帯が生活をしている。「おだがいさまセンター」は、その仮設住宅のほぼ中央に位置し、敷地面積約 100 坪、建物の中には富岡町社協の事務所、調理実習室と交流スペースが設けられている。

その交流スペースでは、ビックパレットで定期的に交流イベントとして開かれていた喫茶が開かれる他、体操教室など趣味のサークルなどの各種イベントが行われる（天野、2012）。富岡町社協が活動するイベント等は、ビックパレットからこの「おだがいさまセンター」の活動として引き継がれたが、ラジオ局は閉局したままだった。ミニ FM でパーソナリティを務めていた富岡町社協の吉田のもとに、ビックパレット当時のミニ FM を懐かしんで、ラジオ局の再開局を望む声が多く届いていた<sup>83</sup>。吉田は、ミニ FM ではなく、新聞等から臨災局という災害 FM の存在を知っていた。そこで電波を管理する総務省に直談判して設置を求めたが、被災地以外での臨災局設置は事例がなく、東北通信局は設置には消極的だったが、原発避難の特例<sup>84</sup>として、法的に問題はないという判断から被災地ではなく、初めて避難先での臨災局が設置されることとなった。開局したのは、震災から 1 年後の 2012 年 3 月 11 日だった。そして設置場所は、吉田が被災者と交流することが可能で、被災者が集まる場所

という要望の通り、「おだがいさまセンター」内の設置が決まった。こうして「町をもたない自治体」（市村, 2014, 200）に異例な臨災局が設置されることになった。

### 第3節 おだがいさま FM の日常

#### 4-3-1 交流スペースの中にスタジオ

おだがいさま FM のスタジオは、「おだがいさまセンター」の一角に設けられた。広さはおよそ 5 坪あまりで、ゲスト席が 2 席、パーソナリティ席と音声卓兼用の席が 1 席である。事務所とは壁で仕切られているが、交流スペースとは開閉できるガラス戸である。だから放送中であっても気軽に声をかけることが可能だ。避難所のビックパレットで設置されていたミニ FM は、1 階のエントランスホールにスタジオが設けられ、放送中であっても見学に来た入所者たちとコミュニケーションする場面もあった。だからこのおだがいさま FM も同じように交流スペースに来た人たちと放送中であっても話すことができるようになされている。

写真 4-8 約 5 坪のスタジオ



写真 4-9 交流スペースからみたスタジオ（右奥）



#### 4-3-2 一日3回の生放送

おだがさま FMは、富岡町社協が町から委託され、運営している。番組は、月曜日から金曜日までの朝8時から9時までの「おだがいさまさわやかモーニング」、昼12時から12時30分までの「お昼だよ！おだがいさま！」、夕方5時30分から午後7時30分までの「おだがいさまラジオランド」で、1日3時間半の放送時間である。また土曜日は昼の12時から1時までの1時間「わが町、とみおか 76.9（セブンロック）」がある。開局した当初は、夜の午後7時から9時までの2時間番組のみであったが、3ヶ月後に朝番組が始まり、そして2014年4月から昼番組が始まった。番組は曜日ごとにそれぞれのパーソナリティが担当し、朝の「おだがいさまさわやかモーニング」の担当パーソナリティは、月曜日が今泉静香。火曜日が平岡知子、水曜日がROCO、木曜日が久保田彩乃、金曜日が今泉静香、久保田彩乃と金曜日だけ2人となっている。昼の「お昼だよ！おだがいさま！」の担当は、月曜日から金曜日まで久保田彩乃と松本愛梨の2人となっている。また夜の「おだがいさまラジオランド」の担当は、月曜日は青木淑子と吉野明日香、火曜日が永瀬真理子と佐藤正彦、水曜日が吉田、木曜日がぺんぎんナッツ、金曜日が松本愛梨で、金曜日だけが1人となっている。そして土曜日の「わが町、とみおか 76.9（セブンロック）」は吉田恵子1人がパーソナリティを務めている。このパーソナリティのうち、久保田彩乃と佐藤正彦は富岡町社協の臨時職員として雇用されているが、その他は番組ごとに雇用契約を結んでいるパーソナリティである。番組の内容はそれぞれのパーソナリティにすべて任せられている。

なお、録音番組は、水曜日午前11時から11時30分までの「昼の森」（パーソナリティ：渡辺俊美のインタビュー番組）と金曜日午後7時30分から40分までの10分間の「おみみのそばに」（朗読者：宗方和子、福島県に伝わる民話）がある。

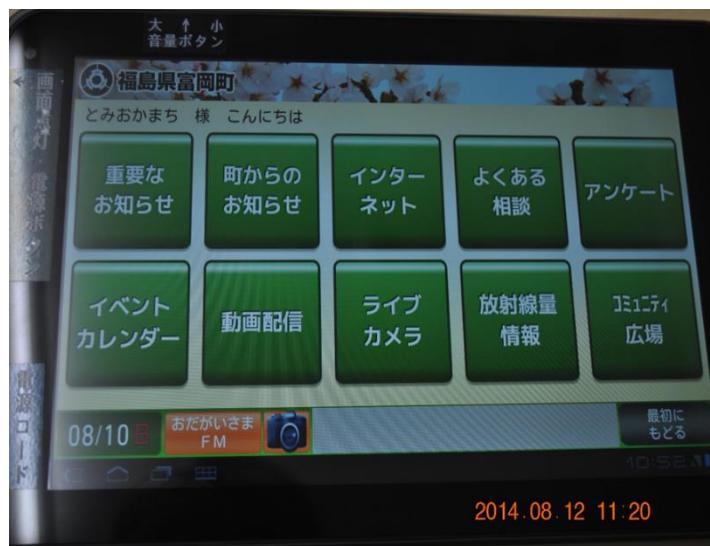
#### 4-3-3 全国どこでも聞けるタブレット端末の導入

震災後時間の経過と共に、「町の情報をリアルタイムで求める声が日増しに高まっていた」<sup>85</sup>。こうした被災者からの要望に応えるためには、福島県内の仮設住宅であれば町の広報誌を配布することが可能だが、全国に避難している町民に広報誌を配布するのは、不可能に近い。そこで、町では浪江町が先行実施していたデジタル・フォトフレームに行政情報を乗せる方式を検討した。通常フォトフレームに行政情報を乗せるには、電話回線を使用して画面に写真を送信するものだが、浪江町では画面に写真ではなく広報誌のよう

な掲示板を乗せる方式を採用していた。これであれば全国どこでも見ることができるのである。ところがこのデジタル・フォトフレーム方式を調べてみると修理や維持管理等が困難であり、メカニック等に弱い高齢者では、大変なことがわかった。そこで富岡町では、原発事故からの復興計画を勘案すると短期間では終わらず、長期にわたると考えていたことから、手間がかかるものは作業上無理と判断し、結局修理や維持管理が容易で、取り扱いが簡単なタブレットの導入を決めた<sup>86</sup>。このタブレットは、デジタル・フォトフレームと同様に電話回線を使用するもので、携帯電話が使用可能な場所であればどこでも使うことができ、高齢者向けに文字も大きくなっている。タブレット端末機器メーカーからの寄付で台数を揃え、ソフト開発などの経費は総務省「ICT 地域のきずな再生・強化事業」の補助金を利用した。配布は 1 世帯あたり一台とし、約 3700 台（2014 年 7 月現在）が配布されている。このタブレットの初期画面では、①重要なお知らせ②イベントカレンダー③町からのお知らせ④動画配信⑤インターネット⑥ライブカメラ⑦よくある相談⑧放射線量情報⑨アンケート⑩コミュニティ広場の 10 個のメニューが備えられている（写真 3-10 参照）。

例えば、町への質問等を整理した FAQ 集「よくある相談」、町の行事やイベントの予定を一覧できる「イベントカレンダー」、タッチパネルで回答できる「アンケート」、町民同士の交流サイト「コミュニティ広場」、町の 25 ヶ所の様子をリアルタイムで見ることができる「ライブカメラ」、各地の放射線量が分かる「放射線量情報」、議会の様子を見ることができる「動画配信」といったメニューがある。さらにこの 10 メニューの他に画面下部におだが

写真 4-10 タブレットの初期画面



いさま FM のボタンがあり、電話回線で全国どこからでもリアルタイムでおだがいさま FM を聴くことができる機能が備わっている。富岡町の情報やおだがいさま FM はパソコンや SNS で聞くことが可能である。にも関わらず操作がパソコンや SNS よりも簡単なタブレットを用意するのかというのは、町の高齢化が背景にあることは言うまでもないことである。

## 第 4 節 臨災局としてのおだがいさま FM

### 4-4-1 「町を失った町民」への情報提供

番組の具体的な内容は、原則それぞれのパーソナリティに任せられているが、吉田がパーソナリティとして担当する番組は次のようなことを念頭に置いている。「まずは富岡町を思い出せる。忘れさせないために話す。それが一つですね。風景や場所だったり。あとは人を思い出せる放送。わざと人の名前を出させる。誰かといっしょにどこかに行ったならば、他のどんな人と行ったのか、すると誰かと行ったと人の名前を出してもらう。すると元気で生活していることがわかる。あとは言葉。富岡の言葉を残していく。大阪と福岡とかバラバラなので、言葉がちがうと孤立しているように思う人が多い」<sup>87</sup>と話し、①富岡町のことを思い出してもらえる番組であること、②人の名前を出すことで安否情報につながる放送を行う、③富岡の言葉を使うことで、孤独感を解消してもらう—この 3 点に留意して放送をおこなっているという。

「人の名前を出す」とした時の事例として、こんなことがあった。それは、2013 年 5 月 3 日のゴールデンウィークの特別番組で行った、全国各地で避難する富岡町民に電話でつなぎ、近況を訪ねるというコーナー<sup>88</sup>で、場面は、パーソナリティの久保田が、埼玉県春日部市に避難している富岡町社協で元介護ヘルパーをしていた大野春香と話している時だった。その放送を仮設住宅で聞いた瀬田川ツヤ子が突然スタジオにやってきた。

瀬田川 「ラジオを聞いていたら、春香ちゃんって思ってぶつ飛んできたんだ」

大野 「ありがとうございます」

瀬田川 「私も埼玉にいたんだよ。春日部も通ったわよ」

大野 「ああ、そうですか」

瀬田川 「でも、さみしくて、1 年ほど前、この仮設住宅に帰って来たの、元気そうでなによりです」<sup>89</sup>

おだがいさま FM は仮設住宅群の「おだがいさまセンター」内にあり、仮設住宅に暮らしていた瀬田川は、生放送で知人の声を聞いたため、慌ててスタジオのある「おだがいさまセンター」に来たのである。そこで富岡町社協の職員に事情を話して、スタジオの中に入れてもらい、それに気が付いたパーソナリティが急きょ電話口に瀬田川につないだというものだった。この再開は、埼玉県春日部市に避難している大野とおだがいさま FM のパーソナリティが、話したことが放送されたことが発端になっている。吉田が言うように、「人の名前を出す」ということは、名前という情報を提供することであり、その情報を知人が受け取り、そこでおだがいさま FM を通じて、新たな情報が双方向に動いたという現象であった。

しかし一方で、こんな声もある。郡山市出身で、2008 年から 2011 年まで秋田放送でパーソナリティを務め、2013 年 3 月から富岡町社協の臨時職員でおだがいさまエフエムのパーソナリティを務めている久保田彩乃は、フリーアナウンサーのころ、郡山コミュニティ放送<sup>90</sup>でパーソナリティをしていたころと比較して、最初は戸惑ったと明かす。「郡山のコミュニティ放送は、郡山の情報を郡山市民に届けることを大前提にやっている。この富岡の FM は、富岡町民のために富岡の情報を届けるのだが、しかしラジオ局は郡山にある。聞いている人も少なからず、タブレットで聞いており、全国各地にいる。最初にわからなくなつたのは、例えば、郡山で開催されるイベント等を、全国で聞いている町民に向けて発信したところで、それがどのくらいの意味があるであるのか、それがわからず、また例えば、郡山で地震が起きた時、大雨でも洪水にしても、災害が郡山で起きた時に、ここでなにを放送すれば意味があるのか」<sup>91</sup>と話す。久保田が指摘するように、富岡町の災害ラジオ局でありながら、場所は郡山市内である。ラジオを聞いている人は全国に散らばって避難しているという現状がある。であるならばなにを伝えればいいのか。この点が通常のコミュニティ FM と全く違う点である。天気予報も同じである。どこの天気予報をやればいいのか。久保田は「熊本県内にも富岡町民が避難しているので、この郡山市から熊本地震のことを流そうと思いました」<sup>92</sup>と話す。今では吉田と相談して、福島県内震度 4 以上の地震の時は放送内で対応しようと話しているという。「町をもたない自治体」のラジオ局が、「町を失った町民」への情報提供の悩みである。

#### 4-4-2 方言番組が意味するところ

おだがいさま FM では、方言による番組が 2 番組ある。方言番組は、既述したように吉田

が番組制作の念頭においている「富岡の言葉を使うことで、孤独感を解消してもらう」<sup>93</sup>という趣旨から考えられたものである。「大阪に住んでいる北村さんという人が周りの人が、全部、当たり前ですが関西弁で、寂しくてしょうがないという電話がおだがいさま FM にあったんだそうです」と方言番組を担当している遠藤祝穂（以下、遠藤）は、吉田から 2012 年 7 月ころ番組出演を依頼された時のエピソードとして覚えている。

方言番組の一つが、番組表には載っていないが、2013 年 8 月からの「んだっぺトーク」という番組である。毎月第 3 水曜日の午後 5 時 30 分から午後 7 時 30 分までの「おだがいさまラジオランド」のスペシャル版として放送している。担当パーソナリティは吉田と NPO 富岡町さくらスポーツクラブ理事で、仮設住宅の集会場を回りながら体操教室を開いている佐藤勝夫の 2 人である。番組では、富岡の方言を使って進められていく。吉田も佐藤も生まれも育ちも富岡町出身だ。佐藤が開いている体操教室では、「んだっぺ」「んだなあ」「そうだべえ」と方言が飛び交い、笑いが溢れる。体操を習うことよりもそうした佐藤の話や巧みな会話で楽しみにしている人が多いという<sup>94</sup>。体操よりもお年寄りたちには、方言などで笑わせてくれると評判の先生でもある。その佐藤が、町の昔話やイベント紹介などを富岡弁で、吉田と共にフリートークする生番組である。

おだがいさま FM の吉田から「んだっぺトーク」という番組があるんだけどしゃべってくれと言われた。俺でいいのか言ったら、いいって。始めてみると、体操教室に行くと、「佐藤さん聞いているよ」なんてね。「ながながおもしれって」訛っているからとか、そのまんまの言葉なんで、堅苦しくなく、しゃべっているのが、やっぱ恋しいと思う。（中略）昔の話をすると、「いがったぞ」って言ってくれる。私はずっと富岡から出たことがないので、もう 60 歳になりますが、その辺が吉田君の目の付け所がいかつたなんて。

（中略）富岡町のいまの状況、難しい政治の話はしないんです。下ネタもタブーです。そこは気をつけてないと、やっぱこうなると旦那さんのいない人、奥さんのいない人、それは十分気をつけないと。<sup>95</sup>

おだがいさま FM のもう一つの方言番組は、毎朝 8 時から 9 時までの「おだがさいさわやかモーニング」の中で放送される『ノリオの昔話』である。この番組は、元富岡町消防署員で、福島県民俗学会会員の遠藤<sup>96</sup>が富岡町の民話や昔話、伝説話、季節の話、生活様式、苗字の

歴史、名字の歴史などを一人で話す番組である。毎回テーマはちがうが、時間はおおよそ3分である。遠藤は現在、福島県喜多方市に避難しており、この番組を録音するため郡山市に出向いている。1日に3~5の話を録音する。その1日に録音する話を遠藤は原稿に残している。現在（2016年9月30日現在）この番組は、録音する時間が遠藤ではなく、これまでに録音されたものを繰り返し放送している。表4-1はこれまでに録音された『ノリオの昔話』のタイトル一覧である。遠藤はこの『ノリオの昔話』を原稿に書いており、遠藤自身はその原稿に「FM郡山放送原稿」としている。録音する時は、この放送原稿を自分で読んでいる。なお遠藤から借りた原稿には放送した日は書かれてはいないので、放送日まで特定することはできない。

表4-1 「ノリオの昔話」 タイトル一覧

録音話番号	タイトル	分類	
0	たすき石	B	昔話
	火消し稻荷	B	昔話
	タカト餅伝説	H	伝説
1	双葉郡の成立ち	D	由来
	大倉山	H	伝説
	小良ヶ浜湾洞物語	K	偉人伝
	大原（おおばら）の 大吉きつね	H	伝説
	原っぱだウォーク	K	偉人伝
2	町の成立ち	D	由来
	富岡に住んでいた 童謡詩人	K	偉人伝
	馬車挽き、ソリ挽き	A	生活様式
	言葉のあや	E	言葉
3	ドジョウとり	A	生活様式
	イナゴ捕り	A	生活様式
	お月見	A	生活様式

	タカト餅ヴァージヨン	A	生活様式
	道・峠の休憩所	B	昔話
	言葉の面白さ 1	E	言葉
	言葉の面白さ 2	E	言葉
	歌の・その効能	A	生活様式
4	塩梅	A	生活様式
	もっくもっくタンク	D	由来
	県高校野球史に残る放棄試合	K	偉人伝
	富岡偉人伝	K	偉人伝
	和算の大家・・・関根・大熊	K	偉人伝
	高津戸城の金の鶏 (にわとり)	H	伝説
5	相城の桜	F	民話
	びんだいら	H	伝説
	縁起物	A	生活様式
	たまげた爆弾の穴	L	その他
	学校の変遷	D	由来
6	鉄道開設物語②夜ノ森駅開設	D	由来
	地名	D	由来
	高田島の話	D	由来
	ほめる、おだてる	E	言葉
	湯	C	季節話
	俳句の話	K	偉人伝
7	戸廻り如来	H	伝説
	閑話休題	L	その他

	風邪のくすり	A	生活様式
	あずきとぎ	B	昔話
	遊び	A	生活様式
	履物のこと	A	生活様式
8	節分	A	生活様式
	地名の話・梅木下	D	由来
	七粒の銀杏	B	昔話
	富岡・俳句の話	K	偉人伝
	木炭自動車	A	生活様式
	標葉町	D	由来
	雷様の子	F	民話
	ディゴとゴンボ	B	昔話
10	ムグロばたけの金平 六（こんぺいろく）	F	民話
	麓山神社のお祭り	B	昔話
	恵みの水	K	偉人伝
	道の名前	D	由来
	北向き八幡	B	昔話
11	名字・猪狩の先祖	G	苗字の歴史
	トロッコ	D	由来
	ガッチャンポンプ	D	由来
	白沢の大蛇	F	民話
	帆解け浜	F	民話
12	富岡仙境日談	C	季節話
	アネ	E	言葉
	戊辰戦争	B	昔話
	糠塚長者	B	昔話
	小浜代	J	遺跡
	前田の大杉	F	民話

13	田圃の代搔き	A	生活様式
	鉄道唱歌	D	由来
	オート三輪	A	生活様式
	富岡の詩歌	B	昔話
14	モリアオガエル	C	季節話
	ローソク岩	L	その他
	メシコの銀蔵	B	昔話
	天狗様の下駄	B	昔話
	ヒットした物差し	K	偉人伝
15	ゲンコ坂	D	由来
	紅葉川由来	D	由来
	報徳	E	言葉
	民俗学	E	言葉
	田植え	A	生活様式
16	『風呂もし』	A	生活様式
	梅の実	A	生活様式
	山	B	昔話
	警察署	D	由来
	冠婚葬祭	B	昔話
17	大永騒動	D	由来
	馬頭観音	J	遺跡
	早苗振り	A	生活様式
	バカにされた鋳掛屋	F	民話
	度量衡	A	生活様式
	芭蕉の句碑	B	昔話
18	カネグツ屋	A	生活様式
	ことわざ	E	言葉
	一里塚	J	遺跡
	古代遺跡	J	遺跡

	天王山	B	昔話
	一揆	E	言葉
19	磐城の五関	J	遺跡
	切浜の武士	F	民話
	手岡鉄山騒動	B	昔話
	味噌作り	A	生活様式
	新田開発	D	由来
	龍髯の松	F	民話
20	醸造①醤油づくり	A	生活様式
	醸造②酒づくり	A	生活様式
	うどんぶち	A	生活様式
	納豆作り	A	生活様式
	暑さ対策	A	生活様式
	ウナギとり	A	生活様式
21	ことば・方言	E	言葉
	かまいたち	F	民話
	古代遺跡・石器時代	J	遺跡
	乗り合い自動車	D	由来
	建舞い	E	言葉
	盆踊り	B	昔話
22	名字・磐城氏の流れ	G	名字の歴史
	家紋	D	由来
	化かんされた郵便屋	F	民話
	雷様の子	F	民話
	言葉・夕方の挨拶	E	言葉
23	食糧難	L	その他
	県の出先機関	D	由来
	名字・渡辺さん	G	名字の歴史
	名字・横田さん	G	名字の歴史

	花の蜜	A	生活様式
	古代パート1・古代の駅舎	J	遺跡
	古代パート2・郡衙	J	遺跡
24	地名の話・ちゅうか	D	由来
	江筋	A	生活様式
	大津辺山	H	伝説
	古代パート③・郡山	J	遺跡
	乳酸菌	A	生活様式
	昔の遊び・ペッタ、おはじき	A	生活様式
	スカッパダ	E	言葉
	昔の仕事・たばこのし	A	生活様式
26	旧町村の変遷・檜葉	D	由来
	旧町村の変遷・富岡	D	由来
	川内、区の由来	D	由来
	旧町村の変遷・大熊	D	由来
27	旧町村の変遷・双葉	D	由来
	官衙公署	D	由来
	旧町村の変遷・浪江1	D	由来
	旧町村の変遷・浪江2	D	由来
	化かんされた郵便屋	F	民話
	旧町村の変遷・葛尾	D	由来
	火消し稻荷・リニューアル	B	昔話
28	名字の話・佐藤さん	G	名字の歴史

	名字の話・鈴木さん	G	名字の歴史
	ウン・トイレの神様	B	昔話
	奥州日の出の松	H	伝説
29	戊辰の戦い	B	昔話
	正月飾り	A	生活様式
	ことば・昔	E	言葉
	名字・佐々木	G	名字の歴史
	季節・晦日、大晦日	A	生活様式
30	お正月の神様	F	民話
	決戦料理	B	昔話
	名字・大和田さん	G	名字の歴史
	村役あれこれ	B	昔話
31	七草	A	生活様式
	天狗の枯れ木倒し	B	昔話
	出初め	D	由来
	名字・松本, 氏	G	名字の歴史
	水飴つくり	A	生活様式
32	屁とゲップ	A	生活様式
	昔の大根	A	生活様式
	焼物	B	昔話
	甘酒	A	生活様式
	名字・坂本さん	G	名字の歴史
33	日の出と日没	C	季節話
	駅伝	D	由来
	鳥追い	A	生活様式
	名字・高橋さん	G	名字の歴史
	安心な食べ物	A	生活様式
34	神様・稻荷様	B	昔話
	狸の腹鼓	F	民話

	遊び・罠掛け	A	生活様式
	名字・林さん	G	名字の歴史
	食卓の一品	A	生活様式
39	単位・物差し	A	生活様式
	生活・はなかみ	E	言葉
	脱線	L	その他
	山鳩	B	昔話
	ことば・夜なべ	E	言葉
40	砂糖	A	生活様式
	砂糖Ⅱ	A	生活様式
	甘味料	A	生活様式
	名字・宇佐美さん	G	名字の歴史
	ジャガイモ蒔き	C	季節話
	御仕法	B	昔話
41	ことわざ・カマキリ の卵	B	昔話
	写真	A	生活様式
	手當て	B	昔話
	ウグイス	B	昔話
	ウシとベゴ	B	昔話
	家の光	L	その他
42	生活・酢	A	生活様式
	名字・井戸川氏	G	名字の歴史
44	発酵・味噌造り	A	生活様式
	名字・三瓶氏	G	名字の歴史
	さなぶり	A	生活様式
	山菜・野草	A	生活様式
45	神様の話	B	昔話
	鼻どり地蔵	F	民話

	カッコウとホトトギス	C	季節話
	グミ	C	季節話
	かぼちゃ	B	昔話
	山椒みそ	B	昔話
46	生活・豆腐	A	生活様式
	片葉の葦	H	伝説
	熱中症	C	季節話
	神様・事代主神	F	民話
	名字・遠藤氏	G	名字の歴史
	子安觀音	B	昔話
	アジサイの花	C	季節話
47	狐火と螢	C	季節話
	狐の嫁入り	B	昔話
	神様・権現様	F	民話
	地名・双葉の郡名の由来	D	由来
	ミミズとモグラ	B	昔話
	タカトモチ・ヴァージョンⅡ	A	生活様式
48	生活・とろろ昆布	A	生活様式
	名字・大和田さん	G	名字の歴史
	うなぎ	A	生活様式
	再び、片葉の葦	D	由来
	孝子・孝右衛門	B	昔話
	方言・おっこむ・おばんかだ	E	言葉
49	神様・熊野様	F	民話
	ムラの起こり	B	昔話

	竹・その一生	B	昔話
	名字・鎌倉さん	G	名字の歴史
	雨乞い	C	季節話
50	道・その変遷	B	昔話
	生活・暑さ対策	A	生活様式
	季節・キュウリ	A	生活様式
	名字・磯野さん	G	名字の歴史
	季節・鮎	C	季節話
51	もつきり	E	言葉
	言葉・どうどう	E	言葉
	神様・八幡様	F	民話
	民話追憶・タスキ石	F	民話
	生活・ぶんず	A	生活様式
	生活・秋立ち	A	生活様式
52	生活・秋の雲	A	生活様式
	名字・鈴木さん	G	名字の歴史
	生活・秋祭り	B	昔話
	果物・梨	A	生活様式
	生活・カボチャ	A	生活様式
53	生活・太る食べ物	A	生活様式
	高校野球史に残る放棄試合	J	遺跡
	報徳の言葉	F	民話
	七五三	C	季節話
	クルミ	A	生活様式
54	人は、いざ	L	その他
	落花生	A	生活様式
	秋の錦	C	季節話
	地鎮祭	H	伝説

	苗字・斎藤さん	I	苗字の歴史
55	ススキ	C	季節話
	サンマ	A	生活様式
	火消し稻荷	F	民話
	初時雨	C	季節話
56	生活・いたずら遊び	A	生活様式
	モロコシ	A	生活様式
	富岡湾洞物語	J	遺跡
	映画館	B	昔話
	町名の変遷	D	由来
57	節目	E	言葉
	木枯し	C	季節話
	もろみ	A	生活様式
	七粒の銀杏	B	昔話
	隧道と水の確保	D	由来
58	檜葉標葉の古 の・・・	D	由来
	アレ	E	言葉
	アメ（飴）	A	生活様式
	道・脇道その1	B	昔話
	苗字・伊藤さん	I	苗字の歴史
59	しめなわ	B	昔話
	ヤキトリ	A	生活様式
	リンゴ	A	生活様式
	中世の城と館	B	昔話
	タワラ	D	由来
60	ことば・ゼニ	E	言葉
	苗字・鎌田さん	I	苗字の歴史
	言葉・てかでか	E	言葉

	若菜	B	昔話
	生活・モチ	A	生活様式
	生活・フグ	A	生活様式
	苗字・菅野さん	I	苗字の歴史
	季節・春はの名のみ の・・・	C	季節話
61	生活・爪切り	A	生活様式
	天狗の枯れ木倒し	B	昔話
	養護老人ホーム・東 風荘由来	D	由来
	苗字・飯島さん	I	苗字の歴史
	生活・馬耕	A	生活様式
	地名・梅木下	D	由来
62	行政区分の沿革	D	由来
	自然・雄と雌	L	その他
	生活・下駄雑談	A	生活様式
	カエルの卵	C	季節話
	生活・三月三日	B	昔話
	酒飲み	A	生活様式
	生活・おじぎ	A	生活様式
63	季節回顧	C	季節話
	警察署の沿革	D	由来
	春の雪	C	季節話
	猫まんま	A	生活様式
	田起こし	C	季節話
64	農学校創立の夢	B	昔話
	苗字・杉本氏	I	苗字の歴史
	夜の森駅の開業と花 の駅	B	昔話

	埴生の宿	B	昔話
	愛・直江兼次の思い	E	言葉
66	大倉山のびんダライ	B	昔話
	卯の花	C	季節話
	神様・田の神	H	伝説
	アヤメとショウブ	C	季節話
	木の芽	A	生活様式
67	しろつめくさ	C	季節話
	ツバメ	C	季節話
	青梅	C	季節話
	さなえ	B	昔話
	水無月	B	昔話
68	苗字・イデさん	I	苗字の歴史
	手岡鉄山	L	その他
	楮・延べ紙	B	昔話
	言葉の変遷・じっち ぱっぽ	E	言葉
	どうづき	A	生活様式
69	田の草取り	A	生活様式
	妖怪・天狗	F	民話
	ことば・んだ	E	言葉
	アスパラガス	C	季節話
	トンボとり	B	昔話
70	狸八化け	F	民話
	やまびこ	F	民話
	熱中症	C	季節話
	パイナップルの思い で	B	昔話
	ユリの花	C	季節話

71	ソウメン	A	生活様式
72	にじ	L	その他
	月見草	C	季節話
	蚊取り線香	C	季節話
	カミナリ	C	季節話
	ウリ	A	生活様式
	雨乞い	C	季節話
73	ジュウネン	A	生活様式
	フキ	A	生活様式
	苗字・田中さん	I	苗字の歴史
	お化けと幽霊	H	伝説
	あじさい	C	季節話
74	苗字・大内さん	I	苗字の歴史
	お盆	C	季節話
	秋立ち	C	季節話
	稲の出穂	C	季節話
	あさがお	C	季節話
75	食物・ソバ	A	生活様式
	星の名前	L	その他
	地域の共助	B	昔話
	風の盆	F	民話
	キキョウ	C	季節話
76	栗のイガ	A	生活様式
	かまぼこ	A	生活様式
	露	C	季節話
	十五夜の楽しみ	B	昔話
77	赤トンボ①	B	昔話
	赤トンボ②	B	昔話
	ヒガンバナ	C	季節話

	桐一葉	C	季節話
	ミノムシ	C	季節話
78	ヘチマ	L	その他
	案山子	A	生活様式
	野菊	B	昔話
	えびす講	H	伝説
	天ぷらそば	A	生活様式
	下駄の話	A	生活様式
79	シカ	C	季節話
	○○と秋の空	C	季節話
	ヒヨドリ	B	昔話
	クズ	B	昔話
	コオロギ	C	季節話
	菊の酒	A	生活様式
80	米	A	生活様式
	方言・ししゃ！	E	言葉
	秋のめぐみ	C	季節話
	鉄山昔話	B	昔話
	ザクロ	C	季節話
	苗字・皆川さん	I	苗字の歴史
81	後の月	B	昔話
	私の思いでばなし	L	その他
	秋の暮れと沢目のばけ石	B	昔話
	思いでばなし・ダンプの宣伝カー	L	その他
	滝川のモミジ	B	昔話
82	館山の存在①	D	由来
	館山の存在②	D	由来

	苗字・田中さん	I	苗字の歴史
	ちゅうか地名考①	D	由来
	ちゅうか地名考②	D	由来
83	キノコ	A	生活様式
	ラッカセイ	A	生活様式
	小春日和	C	季節話
	言葉・逆転語	E	言葉
	畑の肉	A	生活様式
84	クシャミ	H	伝説
	季節雑話・冬至	C	季節話
	苗字・高木さん	I	苗字の歴史
	大晦日	C	季節話
	双葉の脱線事故	L	その他
85	鉄道昔話	B	昔話
	タカトもち	B	昔話
	お正月様	C	季節話
86	鉄道昔話・車両の違 いその1	B	昔話
	鉄道昔話・車両の違 いその2	B	昔話
	数の子	C	季節話
	守り本尊	H	伝説
	あざ・駅	B	昔話
87	民俗・火のこと	B	昔話
	縄文土器	B	昔話
	成人の日	B	昔話
	遊び・小鳥捕り	B	昔話
	大寒	C	季節話
88	早春賦	C	季節話

	梅見月	C	季節話
	フキノトウ	C	季節話
	地名・タニ	D	由来
	苗字・飯島さん	I	苗字の歴史
89	早春の花・ツバキ	C	季節話
	苗字・井戸川さん	I	苗字の歴史
	植物・ハコベ	C	季節話
	田こぎり	B	昔話
	凧	A	生活様式
90	鮭鱈鍋	A	生活様式
	狐の恩返し①	F	民話
	狐の恩返し②	F	民話
	お彼岸	C	季節話
	やまくじら	A	生活様式
91	竹の燐	A	生活様式
	さくら	C	季節話
	苗字・宮本さん	I	苗字の歴史
	カスミとオボロ	C	季節話
	弥生	C	季節話
	弥生	C	季節話

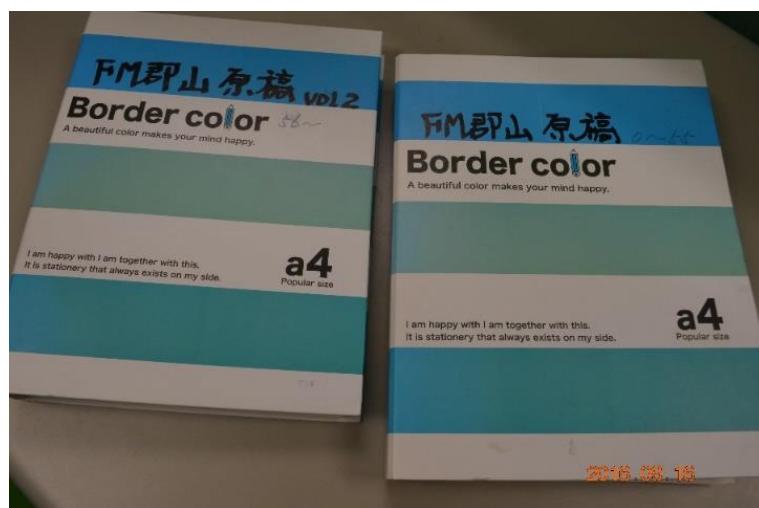
(出典)『FM郡山』から筆者作成

『ノリオの昔話』はタイトル通り、富岡町などの昔の話などが中心で、震災のことや津波のこと、原発事故ことは一切触れられていない。なお録音話数「0」から「91」であるが、途中の話数「9」「25」「35」「36」「37」「38」「43」「65」の8話は遠藤が原稿を紛失したために、抜けている。このため、録音話数は「91」あるものの、実際は83話で話の数としては442タイトルである。

この番組について吉田からあったのは、「2012年7月ころ」<sup>97</sup>で、きっかけになったのは「大阪に避難している人から周りが関西弁で寂しいという一本の電話」<sup>98</sup>だった。

それではこの『ノリオの昔話』はどんな内容の話なのか、この 442 タイトルを以下の 12 項目に福田の昔話の分類に基づいて分けた（福田、2000）。遠藤は、昔話の分類について明確に定義をしているわけではなく、例えば、原稿の冒頭に「今日は、富岡を代表する昔話～」などと原稿に書かれている場合は、内容面と照らし合わせて、分類を行った。Ⓐ生活様式（生活状況、慣習、規範、生活行事等）、Ⓑ昔話（世間話とともに民間に伝えられてきた説話（福田、2000）及び遠藤自身が本文の中で昔話と記述しているもの）、Ⓒ季節話（季節にまつわるもの等）、Ⓓ由来（何から起り、どのようにして今まで伝えられてきたかのか等）、Ⓔ言葉（方言等）、Ⓕ民話（民間に口頭伝承されてきた散文形態の口頭伝承または口承文芸の話の総称（福田、2000）及び遠藤自身が本文の中で民話と記述しているもの）、Ⓖ名字の歴史（名字の由来及び遠藤自身が本文の中で苗字と区別して記述しているもの）、Ⓗ伝説（言われ、言い伝えなどと称され、土地に根ざした形で伝承されてきたもの及び遠藤自身が本文の中で伝説と記述しているもの）、Ⓘ苗字の歴史（苗字の由来及び遠藤自身が本文の中で名字と区別して記述しているもの）、Ⓙ遺跡（町の遺跡に関する記述）、Ⓛ偉人伝（偉人の伝記及び遠藤自身が本文の中で偉人と記述した人の関するもの）、Ⓓその他（どれにも属さないもの）となっている。一番多かったのは、「生活様式」の 101 で 22.9% だった。次いで、「昔話」の 86 で 19.5%、「季節話」が 67 で 15.2%、「由来」が 46 で 10.4%、「言葉」が 28 タイトルで 6.3%、「民話」が 27 で 6.1%、「名字の歴史」が 19 で 4.3%、「伝説」が 17 で 3.8%、

写真 4-11 『ノリオの昔話』のファイル



※「FM 郡山」とあるのは、郡山にある FM つまり「おだがさまエフエム」のことである

「苗字の歴史」が16で3.6%、「遺跡」が10で2.3%、「偉人伝」が9で2.0%、「その他」が16で3.6%となっている。

遠藤は、この話を文字化している。方言を文章で書くというのは、限界もあるが遠藤はできるだけ忠実に残している。そして録音では、その原稿をもとに自分で読んでいるのである。ここで例文として、3編を取り上げる。1編目は、この番組のタイトルが「ノリオの昔」であることをかんがみ、「昔話」「民話」「伝説」を一つの括りとすると全体の29.4%となる。そこから1編とし、2編目は次に多かった「生活様式」から1編、3編目は、共通している方言性に注目して「言葉」の中から1編を紹介する。なお放送日、原稿執筆した日は書いていないので、不明である。最初は「民話・ムグロばたけの金平六」である。

みなさん。どうも～元気でいっぱいがな。手岡の大倉三郎です。今日は、前に話したことあつかどうがわがんにえげんちょも、まだ狐の話で手岡の有名な狐の話、「ムグロばたけの金平六」<sup>こんべいろうく</sup> つちゅう昔<sup>せき</sup>話喋ってみつかんない。昔<sup>せき</sup>～し、手岡のムグロばたけつちゅうどごさの金平六<sup>こんべいろうく</sup> つちゅう、えれい狐の親分がいだったんだ。金平六<sup>こんべいろうく</sup> はいらぐ化げんのがんまくて、ほっちこっちさいって人ごど化がしたり、化くらべの試合<sup>しえい</sup>なんかしていだったんだ。

ある時、金平六<sup>こんべいろうく</sup> は仙台<sup>せんだい</sup>の竹駒<sup>たけこ</sup>様の狐さ<sup>ぎよれづ</sup> 試合<sup>しえい</sup>申し込んだんだ。竹駒様の狐は「ほんじエは、オラは仙台さまのお行列<sup>ぎよれづ</sup> さ化げでんからまつてでケロ」っていってよごしたもんだがら、「よ～し、ほんじやゆっくりどまつてで試合<sup>しえい</sup>しっか」って言って待つていだんだ。ほんだげんちょも、いずまでたつてもこねいもんだがら、金平六<sup>こんべいろうく</sup> は「ヤロ！おれごどおつかなぐなつてこねのがな」って言つていだら、ほのうじ来ただしけな、仙台さまのお行列<sup>ぎよれづ</sup> が。

金平六<sup>こんべいろうく</sup> は、「いやいや」、よおやつと来たわい」 どつてほの行列が目の前さくんのをまつちえで、「いや～、いやんでまつちえだげんちょも、来ねのがどもつた」って言ってほの行列の前さ出でいいたら、「無礼者」って言わつちえ金平六<sup>こんべいろうく</sup> はたまげつちやつたんだ。ほれ、ほの行列は、ほんとの仙台さまのお行列だったんだ。んじやらがら、金平六<sup>こんべいろうく</sup> は竹駒様の狐さ、ばがんさつちやつていうがほの試合<sup>しえい</sup>さ負たんだった話だ。ほん時に金平六<sup>こんべいろうく</sup> は斬らっちやちゅう話もあっけんよもな。

いや～、金平六こんぺいろうくもたまげだつタッペナ～。まさが、本物のお行列ぎよれいづだどは思わねがつたっぺがんな。

ほれ、んだがら、あんましいい気になって調子こぐとひどい目さらって駄目なんだわな。ほんじや、今日も聞いてくれてありがとございました。（遠藤、不明）

「手岡の大倉三郎」の手岡とは遠藤の富岡町の住所で、「大倉三郎」はペンネームである。この原稿は、遠藤本人がおだがいさま FM の放送のために書いた原稿である。他の人が読むわけではないにも関わらず、忠実に方言を表現しようと丁寧にフリガナが漢字に振られている点。またフリガナ以外では、本文の上から 3 行目の「昔~」に漢字に濁点が振られている。これはミスプリントではなく、「む~がじ」と濁音で読む印である。また漢字のルビにおいても、試合は「しえい」、仙台は「せんでい」、行列は「ぎょれづ」と発音するようにフリガナが振られている。方言を文章にするにはイントネーションが表現できないため、方言のもっているニュアンスを伝えるには限界があると思われる。濁点や言葉を方言に忠実に変化させて書いても、言葉としての変化は通じるかもしれないが、方言特有のイントネーションが遠藤のように富岡の人が読んだ場合がまったくちがうので、この文字以上に富岡町民には、富岡の方言らしい音になって聞こえていると思われる。

次に「生活様式」の中から「味噌造り」である

みなさん元気にしてっぺな～。わだしも喜多方で、植木屋だり畑の手入れだり毎日いろいろなごど適当にやってつから、適当にいいやんべ～に」やってんのがストレスもたまんねいでいいみでいだな。これ。

ところで、今日は、ほれ、今までだったど、いつも今ごろは味噌の仕込み、味噌つぎやっていだったどな。家んの前ででつけい釜で豆を煮て、イイヤンベになったころに、臼でついだり、記載さいっちはついだりしていだったもんだわな。

ほ～して、ほのついだ味噌を丸めたり四角くしたりして、ほれ、味噌玉っていっていだったものよ。ほんなふうにしてほのまましばらくおくとほの味噌玉さ青いカビがはってきて、今度はほれおをほぐして塩と混せてねかせてたもんだったげんちょも、あど、糀を混ぜてねかせる方法なんかもあるわな。今の時季、こんなごどもやっていだったげんちょもな。なつかしぐ思うな。

ところで、先に行ったあの「あおかび」張らせるやづよ。今は、かび生いてしまつたってゆって嫌う人がいっけんちょもよ。あれは、味噌の発酵になくてはなんねいものなんだよな。青とか白カビよ。あれ黒いやづだとだめなんだわな。これは、食べ物の昔話としては、ちんと昔何ていうものではなく、もう何千年も大昔から行われてきたことで、ちんと難しい言葉でいうと微生物を利用した微生物学、発酵学という、ほれ、大学できちんとべんきょうしないと出来ないようなことですが、私たちの先祖様は、別にほんな学なんかなくても、経験と知識でこうした味噌づくりをしてきたし、今に伝えているんですよね。こうした微生物を利用した発酵食品は、味噌ばっかりでなく、醤油、酒なんかもありますよね。ほういえば、今流行の「塩こうじ」なんていうものもありますね。こうして、昔の人たちは自然に学んで健康食品をつくり、それをたべて健康を維持してきたものなんですね。

この、発酵食品といわれる食べ物や、大豆製品を毎日食べることによって私たちの健康も維持されるということを、檜葉町出身の食文化、長寿研究家の永山久男先生や、小野町出身で東京農大の教授で微生物発酵学の小泉武男先生もいっています。私たちも、こうした発酵食品をなるべく多く摂って健康管理をしていくようにしたらいでねいべがな。

ほんじえは、まだな。 (遠藤、2012～)

遠藤は、震災後喜多方市に避難している。避難先では味噌造りをすることはできないが、昔の富岡町のことを思い出しながら、昔と今の生活様式を比較、また昔の人たちの生活の知恵を紹介している。次に「言葉」から「夕方の挨拶」である。

みなさんど～も～。いつもお世話になっております。手岡の大倉三郎です。なんてが！どれ、ホンジェは。きんによも前にゆった話のリニューアルしたのをゆったげんちょも、今日もいつだったが、わっせだげんちょも、言葉っちゅうが、方言だげんちょも、夕方のあいさつで『お晩かだ、お晩です』っていうのをしゃべぐったのおぼえでっぺがな。もう1回、そのごどについてしゃべってみつからナイ。

この『お晩かだ』ど『お晩です』って、ほれ、富岡ばっかりでなくて、この放送をきいている川内どが双葉の人たちもゆっていだつど思うげんちょも、まったく暗くなんねいこと、今の時期は特にそうだと思いますが、『まだあかるい夕方』っていう

かその時刻ですよね、その時間には『お晩かだ』ってゆつていだつたペ。んだげんちよも、いまは6時すぎつちど『こんばんは』ってゆつてんだわな、これ。テレビなんかでもこういう風に言つてるので間違ひではねいど思うげんちよも、おれはちんとつていうが、ちんとどこでねいぐ違和感をおぼえんだげんちよもよ。これ、『しょうじゅんご』では、夕方になった時にあいさつ言葉はこの『こんばんは』しかねいのがなんだがよっくわがんねいげんちよも、この時間的な区分というかとらえ方では、これまで自分の土地で使つていて、いわゆる方言の夕方のあいさつの方がうんといいでねいがど、わだしは思つていんだげんちよもな。くどいようだげんちよも、喜多方あたりでも、会津のズーズー弁を使つてゐるくせによ、またお天道様ギラギラしてつどきでも「こんばんは」なんてゆつてんだわな、これ。ときときウゲわりぐなつときもあんだ。これ～。こんなごど感じでいんの、オレたげがなんておもつたりもしていつとごだげんちよもよ。

つちゅうごとで、今日はことばの方言の使い方についてグダグダしゃべぐつてみましたが、皆さんはどう思ひますか？こうした私たちが昔から使つてゐた言葉、方言をもう一度見直して、忘れないように今いる場所でも使つていつてほしいものですね。ほんじや、今日はこんなどごでおわっぺな。ごめんなんしょ。（遠藤、2012～）

この話は、夕方のあいさつの話で、暗くなる前を富岡町では「お晩かた」とあいさつし、暗くなると、「こんばんわ」という言い方をするという。「このおがんかたは、富岡町特有の言い方で、現在住んでる喜多方市では通用しない言葉の一つ」<sup>99</sup>。遠藤はこの番組依頼があつた時、方言を残したいと思っていたので、ちょうどいいきっかけになると思ったと同時に、自分の中でも富岡弁が使えないことに寂しさがあつたとコメントしている<sup>100</sup>。

#### 4-4-3 方言という音と富岡町の風景

故郷を懐かしんで、東北出身者が方言を聞きに上野駅に行ったという話がある。この話は、上野駅で東北の方言を聞けば、自分の故郷である東北地方を思い出し、寂しさを紛らわすというものであると思われる。そこからおだがいさまFMの二つの「んだっぺトーグ」と「ノリオの昔」の方言番組によって、全国に避難している富岡町民が、富岡町を思い浮かべるのかどうかについて検証する。

まず方言学の観点から方言の機能を概観すると、①方言が自己を中心としたウチなる世界のことばであることを意味し、同じ方言を共有する集団から他から積極的に区別し一体化を図る効果を生み出す。その点で、近年の方言は一種の「集団語」としての性格を担う。②会話の雰囲気作りに関わるものであり、方言の使用は打ち解けた会話場面の形成に役立つものを考える—以上の2点である（小林, 2007）。しかしこの2点から検証するには、違和感がある。それは、方言学と異なっておだがいさま FM から放送される方言を、直接人が発した言葉を聞くのではなくラジオを通して聞こえてくる「音」だからである。「音」を論点にすることが、方言学とメディア研究との相違点である。富岡弁という「音」を大阪に避難している町民が聞いている。また福岡に避難している町民が聞いている。そういう環境下で音として富岡の方言を聞いているというシチュエーションがこの場合の議論の対象である。大阪に避難している町民は、関西弁を日常的に聞こえてくるという環境下で、おだがいさま FM から放送された富岡弁を聞くことで、富岡弁を心象的に捉え、富岡の風景を思い出す。こうして考えると、方言と風景が一体になっているのではないかと考えられる。そこで、方言を人が発する音として捉え、その音と風景が一体であるのかどうかをサウンドスケープ理論から援用する。

このサウンドスケープ理論は、カナダの作曲家で音楽教育者のマリー・シェファーが1960年代から1970年代にかけて生み出したものである。この「サウンドスケープ」は、SOUND（音）と～scape（～の眺め/名詞語句）の複合語で、若宮眞一郎は「サウンドスケープ」の考え方について次のように説明している。

都市の音、人工の音、記憶やイメージの音まであらゆる音を一つの風景として捕らえるというものである。サウンドスケープの思想は、「地球規模の自然界の音から、都市のざわめき、人工の音、記憶やイメージの中の音まで、我々を取り巻くありとあらゆる音を、一つの風景として捕らえる」という考え方である。つまりサウンドスケープは、音を物理的存在として捕らえるだけではなく、さまざまな社会の中で生活する人々が、どのような音を聞き取り、それらをいかに意味付け、価値づけているのかを対象とする概念である。例えば、水の音を聞いて、ただ水の音と認識するだけではなく、水音から涼しいというイメージや清涼感を覚える。音は、単に、聴覚的印象を感じさせる、物理的現象ではなく、音は、意味を喚起、触発する、一種の媒介としての機能を持つのである<sup>101</sup>。

このようにサウンドスケープは、音を物理的な存在として捕らえるだけでなく、音の意味付けを行う概念である。若宮が水の音を事例として上げているように、物理的現象ではなく、「清涼感」という意味を喚起するという触媒機能を持つと述べている。

こうした音の触媒機能は、日本文学の世界においては、以前から音と風景を一体のものとして捉える傾向にあったと、山岸美穂は、森鷗外を父として、東京市本郷区千駄木町に生まれた作家、森茉莉の幼い日々の「耳の記憶」を引用している。

素晴らしい音楽を聴いて育ったという人は少なくとも、子供の時に聴いたいろいろな楽しい音の思い出は、誰でも数え切れない。晴れた朝、木々の梢を揺すった風の音。烈しく落ちる水の中で、草や葉は穴が地におしふせられ、またざわざわと立ちさわぐ暴風雨の庭。思い出したようにこまやかな水の礫が硝子戸を打つ。暴風雨を見ていた子供が、ふと我にかえって駆け出して行く廊下のゆくてに、台所の灯火が差し、小刻みな早い、俎板の音がする。（中略）これらの音は、音楽ではないけれども、有名な音楽よりも、私達の心の奥に結びついた音だった（森、1957, 199-200）

また山岸は、サウンドスケープ“フーテンの寅”こと車寅次郎を主人公とする映画『男はつらいよ』でシリーズの舞台となった葛飾区柴又の音の風景に注目して、帝釈天参道にある、創業明治17年の天麩羅屋、大和家の主人の大須賀のコメントを引用している。

帝釈天参道にある、創業明治17年の天麩羅屋、大和家の主人、大須賀氏は、柴又で好きな音は、帝釈天の鐘の音と風の音だと語る。東京から柴又へは、隅田川、荒川、中川を超えて来るのだが、それぞれの川を超えると風の音が違うし、柴又の風には、あ、ここならいいんだ、という安心感、安定感があるという。（中略）ある土地で生活することは、そこにある建物や道、あるいはそこに住む人々を体験するのと同様に、その場所の音や感触を体験することでもある。また旅先で体験した音や音のイメージを通して、その場所を懐かしく思い出すことも私たちにはあるのである。（山岸、1999, 129-130）

このように山岸が調査した中で、創業明治17年の天麩羅屋の大和屋の主人、大須賀が

言う「川を超えると風の音に安心感と安定感を覚える」と、また山岸が最後に述べている「旅先で体験した音や音のイメージを通して懐かしく思い出す」ということの2点は、既述した若宮が指摘した「音の触媒機能」が働いていることを表している。

この「音の触媒機能」をおだがいさま FM から聞こえてくる富岡弁に援用してみると、富岡弁が、おだがいさま FM から放送されることで、避難している富岡町民がその富岡弁を「音」として認識し、そして触媒機能から「富岡町の風景」を思い出すことになる。

吉田は遠藤さんに番組出演依頼をした時に「祝穂さんの富岡弁がいい、中身よりも」と話している。富岡町民にとっては、遠藤の昔話は内容よりも方言としての音を聞いているのかもしれない。

#### 4-4-4 除夜の鐘と運動会

方言を音として捉えて、方言音と風景の関係を考察したが、おだがいさま FM では音の番組を他でも放送している。

その一つが、2013年12月31日の新年特別番組である。この中では、居住制限地域に指定され、リアルタイムで聞くことのできない町内の龍台寺の鐘の音を事前に収録して、全国に避難している町民に、除夜の鐘として、故郷の年越しを思い出してもらおうという趣旨で、録音放送されたものである。この除夜の鐘の企画は、吉田が番組制作で念頭においている「富岡町のことを思い出してもらえるような番組」に基づいたものである。発想はパーソナリティの久保田彩乃であった。久保田彩乃は、おだがいさま FM 以前に秋田放送に勤務していた。その時に月曜日から金曜日までの毎日一日3回、生中継を行い、毎日ということもあってネタの困ることが多かったが、その時に思いついたのが音で聞かせる風景だったという<sup>102</sup>。例えば、波の音、町の工場の音など様々な音を拾って町の音として放送した。そんなことが発想の原点になって、吉田と話している時に、大晦日に鐘の音を流したら面白いという話になった<sup>103</sup>。そしてその年の2013年の大みそか特別番組で、事前に収録した富岡町小浜中央の龍台寺の鐘の音が除夜の鐘として放送された。

この他、音の番組としての試みは、震災後初めて屋外で行った、2016年5月の富岡町第一・第二小中学校と富岡幼稚園の合同運動会の様子や小中学校を訪問しながら子供たちへのインタビューや校歌を歌ってもらった放送である。仮設住宅に暮らす人々の反応について久保田彩乃は次のように話す。

町の中で学校はひとつ大事な交流の場であったりとか、地域の人たちにとって大事な場所であるはずなので、ばらばらになってしまっている中で、町のこどもたちの声が大人に届かない、町のこどもたちがいま学校でどうしているのか、という状況の中でインタビューに行って、こどもたちの声と校歌を流したんです。するとこのセンターの多目的ホール（交流スペース）でラジオを聞いていたじいちゃんがめちゃめちゃ喜んで、でも人数すくなくなったなあと感想を漏らしたんです。もとは何百人もいた学校だったらしいんですが、いまは20人未満くらいしかいないので、校歌をみんなで歌っても音のボリュームとか、声の量がちがうし、わかるんじゃないですか。少ないけど、やっているんだなあってじいちゃんが言っていた。そのじいちゃんは、子どもの声は年寄りを元気にしますからと言っていた<sup>104</sup>。

除夜の鐘による触媒機能は、方言と同じように風景を思い出す機能を果たしていると思われるが、子どもの声は、自分の子どもでなくとも、富岡町の風景と子どもの声が一体化していると思われる。

## 第5節　まとめ

ここまで、富岡町に設置されたおだがさまFMについて概観してきた。おだがさまFMが設置されたのは、2012年3月11日で震災から一年後であり、被災した町民はそれぞれの仮設住宅及び全国の避難先にバラバラになった時点での開局である。しかも被災地ではなく、避難地での設置である。臨災局がこうして設置されるのは、初めてのケースである。そもそも当該自治体である町が放射線量の影響で出入りすることができなくなり、富岡町のように異なった市町村（富岡町の場合は郡山市であるが）に移転するという自治体の方は、現在の法制度では想定されていないのである（今井、2014）。おだがさまFMでは、この4年半の間に、被害情報などこれまでの臨災局が、被災者に提供してきた被害の軽減を目的とした放送内容とはちがい、方言や除夜の鐘、子供たちの声など避難者に町の風景を思い出してもらうための情報を提供してきた。その放送する目的が、被害の軽減という枠ではなく、「人と人、富岡町と人をつなぐこと」、「コミュニティの再建」に変容している。1995年に制度化された臨災局が長期化することで、このように臨災局の役割が変容しているがわかった。

## 第5章 臨災局の長期化の実態

### 第1節 長期化する臨災局の段階分け

#### 5-1-1 りんごラジオ

長期化する臨災局として、第2章では宮城県山元町のりんごラジオ、第3章では福島県南相馬市のひばりエフエム、第4章では福島県富岡町のおだがいさまFMを取り上げた。次に、放送期間を災害過程サイクルに分け、設置時期がどのような段階であったのか、また長期化する中で復旧・復興段階にいつどのような過程を経て移行していったのかを整理する。

まず、りんごラジオの開局からの放送運営の経過を概説する。りんごラジオが開局したのは、2011年3月21日と震災から10日目であった。震災当時町は情報が不足しており、流言蜚語が飛び交い、混乱していた時期であった。この時期が災害過程サイクルでみた場合、緊急段階であったと思われる。山元町はこうした情報不足を補うために、りんごラジオを設置した。この設置時期は、救命、被害の拡大を防ぐという緊急段階から、避難、避難所開設という応急段階へと移行した時点とみられる。

りんごラジオの放送運営を担当した高橋は、開局当初から町の情報提供とともに、町民のインタビューを交えながら情報を提供した。このように開局と同時に町民の持っている情報を引き出していたことは注目される。行政情報は与える情報として、一方向的な情報であるが、高橋は同時に町民からの情報をインタビューなどで引き出し、行政情報という一方向的な情報に町民からの情報という双方向的な要素を加えながら、ミックスさせて被災者の要望に応え情報を提供していたのである。ラジオ局に勤務していた高橋の経験が生かされたといえる。

山元町が復旧・復興へと進むにつれて、被災者のりんごラジオへの要望は変わる。高橋は復旧・復興の段階に入り、山元町の住民（被災者）が何を一番求めているかを考え、2011年12月から町議会の中継を始める。この中継の意図は、復旧・復興に関する話し合いのプロセスを町民に提供しようというものであろう。それと同時に、高橋は復旧・復興は人任せではなく、自分たちで考えることが重要であり、議会での議論を透明化することで、住民による住民のための復旧・復興になっているかをチェックし、またこうした復旧・復興の議論に参加する意識と、意見を表明する当事者意識を暗に訴える意図があったと思われる。当然のことながら、12月前には山元町全体は復旧・復興段階に入っていたことは間違いないが、ラジオ放送として自覚的に番組を企画したという意味でも、12月の町議会中継は復旧・復興段階に移行した指標といえる。その後も、2014年7月に行われた町長選挙に際しては、

事前及び投開票日に特別番組を放送した。事前番組においては、若者、子育て世代、地区長までの各層から、山元町の将来像などについて意見を聞き、復旧・復興計画を立案し、実行する将来の町長に意見を述べるという趣旨で放送された。

第2章では、りんごラジオの放送運営をわかりやすく議論するために、3つの時期に分けた。あらためて災害過程のサイクルに照らし合わせると、第1期が震災直後であるため緊急段階から応急段階であり、町民に情報が足りない時期であったので、一方的な行政情報に軸足を置いた放送運営であった。りんごラジオの開局は、震災から10日後の21日であり、電話が復旧した後になってからの開局であることを考えると、緊急ではなく応急段階での開局ということが言える。第2期は、混乱が収まってきたこともあり、また行政からの情報が徐々に少なくなる中で、町民の持っている情報を軸にしながら、インタビュー番組や町民が体験した震災、津波の経験を共有する番組を放送するようになった過渡的な時期といえる。そして、第3期は、復旧・復興に関する情報提供に積極的に着手した時期である。2011年12月から町議会の生中継を始めることで、町から提案されている予算案や復旧・復興計画案について、町民に議案の透明化、議論の透明化を図ったものである。また2014年7月の町長選挙の事前及び投開票特別番組は、復旧・復興計画案の是非を問う選挙と位置づけ、町民が自ら考えている町作り、将来の山元町を、それぞれの世代、立場からの意見を吸い上げる機会となった。

### 5-1-2 ひばりエフエム

ひばりエフエムの開局は、2011年4月15日である、震災から1ヶ月以上経つからであった。南相馬市の災害過程サイクルにおける緊急段階は、12日と15日に福島第一原発で2回の爆発事故があり、こうした事態からガソリンや支援物資を運ぶ業者が市内に入つて来なくなり、市民の日常生活が危ぶまれると判断したことを受け、「市は全市民に対して市外への避難勧告を出した」（東日本大震災南相馬市災害記録、2013, 61）時期であり、ひばりエフエムの設置時期は、次の応急段階からである。

南相馬市がまとめた「南相馬市災害記録誌」によれば、原発事故により、鹿島区、原町区、小高区のうち、小高区全域と原町区の一部が福島第一原発から半径20キロ圏内であるため、当該住民が避難を余儀なくされるなど混乱状態に陥った。こうした影響から支援物資を運ぶ業者が市内に入らなくなるという状況となり、市が市民全員を避難させるという事態となつた。こうした事態からおよそ一ヶ月後の4月中旬ころから、避難生活に疲れた市民が戻

り始めてきたのを契機として、市からの情報などを提供するために臨災局の設置を決め、ひばりエフエムは4月15日に開局した。このときのひばりエフエムのスタッフは、ラジオ放送を運営する興味から集まったわけではなく、南相馬市の復旧、もしくは復興について関わることが目的であり、その手段がたまたまラジオであったということである。

開局からしばらくは行政からの情報を提供していたが、秋ごろ、放送の中で、警戒区域から来たと思われる牛が警戒区域外で捕獲され、その牛が子牛を連れていたという話から、その子牛は区域内で生まれたのか、それとも区域外で生まれた子牛なのかをめぐって、クスッとスタッフが笑ったことに聴取者から、「牛を繁殖させるのは、大変なんだ」というクレームの電話があり、市民の中にはいろんな立場の人がいるということをあらためて認識したことをきっかけに、一方向的という情報の流れが、市民の意見が反映するような双方向への情報の流れへと転換するようになった。それ以降、復旧・復興に関する番組や市民それぞれが提案する番組など、一方向的な情報提供に偏らずに、市民目線から捉えた情報、つまりボトムアップから吸い上げた意見の提案番組を制作するようになった。復旧・復興段階への移行時期ははっきりとは見えないものの、ひばりエフエムが復旧・復興への情報提供を始めるのは、行政情報を主とした時期から、市民の意見を交えた偏りのない情報を発信するようになった時点といえる。

### 5-1-3 おだがいさま FM

富岡町の緊急段階は、町民の町外一斉避難時期である。応急段階は、3月16日富岡町民およそ2,600人が原発事故に伴いビックパレットに避難した時点であると思われる。そこで、イベント案内や昼食などの案内を行うために、ミニFMが開設された。このミニFMはその後に開局するおだがいさまFMの前身である。

最初はビックパレットの館内放送のためのミニFMであったが、ビックパレットの入り口付近に段ボールなどで作られた放送席の前に被災者が放送を見に来るようになり、そこで放送で話した内容から被災者の間に、笑いが起きて、一方向的な放送から双方向的な放送に事態が変化していった。この時からミニFMと避難者との関係の距離が縮まり、スタジオの前はミニFMのパーソナリティや出演者と避難者がコミュニケーションする広場が形成されていった。事例としてあげた町長が出演すれば、放送中にもかかわらず町長に直接質問が出されたり、スタッフが読み間違えばヤジが飛んだりと、コミュニケーションが成立するようになっていた。その距離感のまま、ミニFMのときにパーソナリティを務めていた富岡町福

協の吉田が、パーソナリティや出演者とリスナーが交流できるような場所を望んだことから、郡山市に新しく建設された富岡社協の中におだがいさま FM は設置されたのである。

富岡社協が管理するおだがいさまセンター内には、被災者が交流できるようなイベントスペースがあり、その一角におだがいさま FM のスタジオが作られた。つまりミニ FM のように顔の見える放送ができる、また交流可能な放送を実現させたのである。おだがいさま FM は、全町民が避難せざるを得ない状況となり、帰ることが困難だという現実をつけられたところから、復旧・復興の時期が始まったといってよい。

このように 3 局の事例を災害過程サイクルで考えた場合、りんごラジオとひばりエフエムの 2 局が応急段階での設置であり、おだがいさま FM は、前身のミニ FM が応急段階で行われ、その後、被災地ではなく避難地での設置ということからも復旧・復興段階での設置であると位置づけることができる。

臨災局の長期化は当然のことながら、災害サイクルの応急段階から復旧・復興段階へと移行し、当初の被害の軽減から復旧・復興へと役割を変えながら、展開していったことを示す。ここで、第 1 章で問題提起した①臨災局とコミュニティとの関係がどうあるのか、②情報伝達のシステムとして一方向を有する放送が、どのように双方向の形態を取り込んでいるのか、③臨災局の放送制度上の問題とは何かに従いながら、議論をまとめていこう。

## 第 2 節 臨災局とコミュニティの関係

### 5-2-1 「サロン」的コミュニティ

第 1 章で述べたように、吉原は、福島第一原発が立地していた福島県双葉郡大熊町の被災住民について、モノグラフ調査を明らかにしている。原発事故で、「住む場所、人間関係を掠奪された」大熊町の住民を詳細に調べ、国の政策による自治体のコミュニティを「あるけど、ない」コミュニティつまり国策自治会と批判的に捉え、コミュニティが存在しながら機能していないことを明らかにした。その中で、そうした自治会ではない、住民によって形成された二つのコミュニティに注目した。一つは、「女性の会」ともう一つは「サロン」である。吉原が注目した二つのコミュニティは、下から持ち上げていくようなコミュニティであり、批判的に捉えている国策自治体は「上から被災者に降ろしていく行政末端組織」（吉原, 2016, 185）と位置づけている。

ここで、吉原は東日本大震災の現実を受け、従来の社会学のコミュニティ論が例えれば、R・M マッキーヴァーは『コミュニティ』で「コミュニティとは村とか町、あるいは地方や国と

かもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指す」と述べている通り (MacIver, 中久郎, 松本通監訳, 1975)、「地域性」をもとにした生活の「共同性」を元にして議論してきたことに対して、「移動を余儀なくされた住民」である被災者にとって「まず（コミュニティが）一定の場所を前提とする『地域性』の要件を欠くようになっていることを確認する必要がある」とする。そして、「ここで重要なのは、場所が『領域的なもの』から『関係的なもの』へと移行している」(吉原, 2016, 215) ことだと新たな問題提起をしている。つまり、上からの自治会はコミュニティの「地域性」を根拠にし、その正当性を前面に押したて設置され制度化される。しかし、「移動を余儀なくされた住民」は「地域性」ではなく、「関係性」に根拠を置き、新たな「創発するコミュニティ」を現実化しているという。こうした観点から、ここでは、本論に深く関わる「サロン」に注目する。

吉原のサロンの定義は、人との出会い、情報提供など様々なことが行われ、「あるけど、ない」コミュニティとはちがったコミュニティを形成している。サロンの特徴は、誰もが気軽に参加できるという柔軟さにある。

吉原は事例として、会津若松市に立地する 12 の大熊地仮設住宅自治会の一つ、F 自治会から立ちあらわれた F サロンを取り上げた。F サロンは自治会結成からほぼ 2 週間後の 2011 年 9 月の中旬に立ち上がり、1 週間に 1 回「集まろう」ということがきっかけとなって始まった。そして「おしゃべりの場」として、仮設住宅の集会所を拠点としているが、おしゃべりばかりではなくサロン活動では、生活支援ボランティアセンターを経由して入ってきた、全国各地からのボランティアとの交流を深めてきたことで、一見、内に閉じ込められた求心的な場のように見える「サロン」に「よその人の目」が息づくとともに、自分たちたちの思いを「よその人」に伝えることが可能になったというものである。

ところで、臨災局は放送であり、情報の伝達を通して、様々な人々をメディアとして結びつけている。こうしたメディアによって作られる「情報コミュニティ」は「地域性」のない「地図のないコミュニティ」(Gary Gumpert, 石丸正訳, 1990) といえる。「情報コミュニティ」は場所の共通性ではなく、情報の共有性によって、人と人とを結びつけるものであり、災害、さらには復旧・復興段階において、こうした特定の問題を共有する情報の取得、さらには様々な問題に対して人々がどう対応し、どういう考え方をもっているかなどを知る手掛かりを必要とする人々を結びつけるものである。つまり、こうしたメディアとして、ラジオ（放送）は一方向なものであるが、被災者に限らず地域住民も聞くことでき、また一面では、ラジオを聞いていたとしても、聞き流しても構わないものであり、時には慰安であり、気軽に

様々な話題がとりとめなく流されるものとしてある。実際、こうした「サロン」のような気軽な語り合いの番組が臨災局において作られている。

例えば、りんごラジオが制作する番組の特徴は、町民が毎日出演することにあり、番組名でいえば「ハローやまもと」と「やまもヴォイス」の2番組である。「ハローやまもと」は、町内在住の様々な職業人、特技を持った人などが出演し、インタビュー形式で番組が進められる。番組自体にテーマがあるわけではなく、人を紹介する番組である。山元町役場に他の都道府県から派遣されている臨時職員がいるが、こうした臨時職員が帰還するときは送別会のように、任期中の印象に残った仕事や町の印象や食べ物などの話になる時もあり、また新しく赴任するときは歓迎会のように、これから仕事に対する希望などについて進行する時もある。二つ目の番組「やまもとヴォイス」は、民話や昔話の話者やお寺の住職らが出演する教養的な色合いが強い番組である。しかし内容は、教養番組のような堅苦しい話ばかりではなく、生活の知恵やお寺の裏話などもある。いずれも生放送であるので、テーマに沿ったものばかりではなく、その時々の話題になるような気軽なおしゃべり番組である。

こうした気軽な会話を実現するために、りんごラジオのスタジオは意図的に、日中は鍵をかけず、たとえ放送の本番中でも自由に誰もが入り出しができるようにしている。

一方ひばりエフエムでは、2011年9月ごろに聴取者からのクレームによって、一方向的な番組から市民が参加して意見を述べ合うような番組を制作するように転換したが、その一つは「若者のRADIO会議」(30分の録音番組、毎週水曜日午後4時、再放送あり)である。この番組は、南相馬市に住む20代(当時)が、南相馬市の将来について、語り合うというものである。番組で話し合われたことが結論として導出されるわけではなく、ただ語り合うということが目的の番組である。もう一つは、「移住者たちのゆるゆるいくよ～」(30分の録音番組、毎週金曜日午後10時、再放送あり)という、南相馬市から震災を契機に移住してきた人たちによるトーク番組である。この番組のコンセプトも何かを決めるためのものではなく、語り合うということが主たる目的の番組である。

また、「柳美里のふたりとひとり」という番組では、作家の柳美里が南相馬市内で暮らす二人をゲストに、震災前の南相馬市の様子や震災後の南相馬市の様子、現在の暮らしなどをインタビュー形式で進めていく。この番組もコンセプトが特にあるわけではなく、気軽なおしゃべりの番組で、放送はすでに165回を超えていている。こうした番組は回数を重ねることで、南相馬市民がどんなことを考えているのか、何を悩んでいるのかなどが自然に発信されるところがある。また出演者の年齢、性別、職業などが多種多様である。

実際にこうした番組を可能にするために、スタジオは南相馬市役所の 3 階という誰もが立ち寄れるような場所にある。

おだがいさま FM では、その前身でビックパレット内に設置されたミニ FM の放送を毎日見学できるようになると避難所内の雰囲気が変わっていったと紹介したが、そのスタジオ前に被災者の集まり、コミュニティが形成されていったとみえる。あるときに笑いが起り、それ以来放送中に話しかけたり、読み間違えば野次ったり、町長が出演したときには直に質問したりと、一体感がそこで生まれた。こうした被災者とパーソナリティと出演者とのやり取りが、ミニ FM を通じてなんらかの場を形成したことが想像できる。このときは復旧・復興の段階ではなく、応急段階ではあったが、パーソナリティの吉田は、こうした聴取者と一緒にになれるような臨災局を郡山市内に建設されおだがいさまセンター内に設置することを希望し、その通りに実現した。このセンターの広場では、毎日のように被災者同士の交流イベントが開かれている。おだがいさま FM のスタジオはそこに隣接しているのである。また放送運営においては、方言番組を放送することで、町に対する求心力を維持している。町民が全国に散らばって避難していることから、サロンのような場を他の臨災局のように作り出すことは容易ではない。しかし方言を使うこと、除夜の鐘を流すこと、また子どもたちの運動会を放送することは、避難先と町との精神的な距離を埋めるためのものと解釈ができる。

このように 3 局ともにスタジオは、放送を発信する現場としてだけではなく、住民交流のスペース・メディアとして機能していることがわかる。

臨災局はこうした吉原のいうサロンのコミュニティと親縁性があるだけでなく、近似した機能を有するものであり、あるいは、こうした機能を有するが故に復旧・復興期において長期化したといえる。

### 5-2-2 上からの復旧・復興と下からの復旧・復興

ところで、吉原は、上からの復旧・復興と下からの復旧・復興という枠組みを指摘している。こうした観点から見たとき、臨災局は明らかに自治体が主体であり、上からの復旧・復興の政策の一環としてある。それでは、実際に臨災局が長期化した復旧・復興と関わる中で、その実態はどうであったのか、りんごラジオ、ひばりエフエム、おだがいさま FM の 3 局の事例から照らし合わせてみる。

まず、りんごラジオである。指摘したようにりんごラジオにおける復旧・復興段階への移

行時期は、2011年12月から放送を開始した町議会中継からとみている。町議会そのものは、りんごラジオが中継しなくとも公開が原則であるために、誰もが傍聴することは可能である。しかし、その町議会を臨災局というラジオ局自体が中継することは、アナウンスメント効果という大きな意味がある。当然のことながら、中継することで、町議会における町側と町議会議員との議論、町が計画案を作成している復旧・復興計画案が明らかになる。そしてその過程において、町民が議論に参加もしくは、参加できる機会を得ることができるというものである。さらにりんごラジオは、2014年7月の町長選挙においては、選挙の告示前の事前番組で、若者、子育て世代の母親、地区長や町作りの有識者の各層が生出演して、将来の山元町、町長に対する意見などを話し合う番組を放送した。こうした番組は、各層の意見を発信することで、吉原が指摘する「上から」、つまり町側からの意見の押しつけばかりではなく、「下から」つまり住民自らが考えている意見を発信することに意味がある。こうした「上から」押しつけられるものと対峙しつつ、「下から」自分たちの置かれている現実との対話について、事例からみよう。

町議会の中継、町長選挙において、りんごラジオは自治体が経営するメディアであるものの、町が決める復旧・復興などの計画案等について対峙していく。それは、復旧・復興計画が、町長や行政一部の人によって決められる性格のものではなく、町民が考え、町民の意思によって決めていくものであるからである。そこで、高橋はどのようなプロセスを経て復旧・復興の計画が話し合われて決まっていくのか、また実行していくのかということを、当事者である町民に復旧・復興作成に参加してもらうため、町議会を中継することで対話する構造を作ったのである。

次にひばりエフエムであるが、放射線量のデータを読み上げるだけの「環境放射線モニタリング」という番組を、1日朝、昼、夕方の3回、30分放送している。データは毎週木曜日に収集して、金曜日の午前10時の生放送でデータを読み上げ、その録音を翌週の木曜日まで放送するというものである。番組内容は、市内110ヶ所で測定された放射線量のデータと水道水、給食の放射線量の検査結果について、数字のみを放送している。徐々に放射線量は減少しており、また放送しているデータは市のホームページなどでも見ることができ、ひばりエフエムだけが情報源ではない。しかしひばりエフエムは、臨災局という災害時のラジオ局であり、原発事故による影響と対峙しなければならない。しかしそうした中でも、放射線量のデータを毎日読み上げる番組を放送しながら、その放射線量によって分断された地区と地区との間に築かれた放射線量という壁を乗り越えていくきっかけが必要であり、その

きっかけとなるのが、この放射線量のデータのみを読み上げる番組なのである。

おだがいさま FM が設置されている富岡町の町民は、原発事故の影響で全国に避難を余儀なくされている。町は近い将来には帰還できるように除染を進めている。しかし町民の意向はどのようなであろうか。国、福島県、富岡町の 3 機関合同で、2012 年から町民の帰還意向調査を行っている。それによると、「町に戻りたい」と回答していたのは 2012 年度で、15.6%、2013 年度は 12.0%、2014 年度は 11.9%、2015 年は前年度より 2.0 ポイント増えて、13.9% となった。しかしいずれも「町に戻りたい」という割合は、20%に満たないのが現状だ。おだがいさま FM の免許人は富岡町である。おだがいさま FM はその帰還政策と対峙しなければならない。しかし「上から」の情報を放送することで問題が解決できるわけではなく、町民の気持ちをどこかで慮る必要がある。そこでおだがいさま FM は、その帰還政策と対峙しながら、方言を使用したフリートーク番組、また方言で語る富岡町の昔話や民話の番組、さらに大みそかには、町内で事前録音した除夜の鐘、そして子どもたちの運動会の様子を放送することで、町民に町の帰還政策と対話することを促しているのである。つまり、方言を使用した番組や方言で語る富岡町の昔話や民話の番組、除夜の鐘、子どもたちの運動会の放送は、帰還政策と前向きに向き合うための、サロン的な要素を兼ね備えた番組といえる。

### 第3節 臨災局の中の双方向性（対面性）

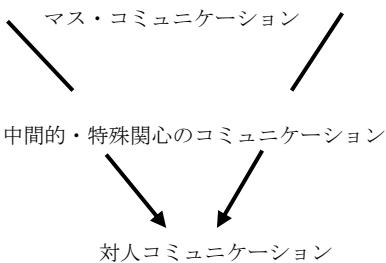
#### 5-3-1 中間的・特殊関心のコミュニケーション

臨災局が復旧・復興の場で生み出している「サロン」的なコミュニティは、メディア研究においてどう捉えることができるだろうか。ここでは、臨災局が放送している特殊な内容を捉るために、放送という枠組みではなく、社会的コミュニケーションのレベルから捉え直す。そこで、まず臨災局がどのようなコミュニケーション構造を有し、どのような構造を有しているのかを検証していく。ここでは、その構造を明らかにするために G・D・ウィーベのコミュニケーションの V 字型モデルを援用する。

図 5-1 に示したのが、G・D・ウィーベの V 字型モデルの図で、矢印と矢印の間の間隔は、受け手の人数を示す。したがって、一番下の対人コミュニケーションから中間的・特殊関心のコミュニケーション、マス・コミュニケーションと上に行くにしたがって、矢印と矢印の間隔が広くなっていく。それは、①受け手の人数が増えていくとしている、②受け手の人数が多くなるにしたがって、伝達されるメッセージの性質がだんだんと私的なもの、特殊なものでなくなり、公共的で一般的なものになる、③コミュニケーション内容

の対処性の範囲が徐々に狭くなる、④受け手の関心を示すことが難しくなり、関心を引き起こすための刺激を与えてやらなければならない、⑤コミュニケーションの受け手は一般

図 5-1 コミュニケーションのV字型モデル



(出所) (岡田, 1992, 9)

に送り手にすぐに近づきにくくなる (Wiebe, 1955, 163-164) としている。

こうしたマス・コミュニケーション、中間的・特殊関心のコミュニケーション、対人コミュニケーションの3層構造について岡田は、3層構造は連続体として捉えられるとして、次のように分析している。「(1) 個人→不特定多数という受け手の連続的な量的増大、(2) メディア接触の直接性・対面性→間接性・非人格性、(3) フィードバックの即時性→遅延性、(4) コミュニケーション内容の私人性→公共性、あるいはコミュニケーション内容の多様性・独立性→画一性・没個性化、(5) チャンネルの非公式性→公式性、(6) コミュニケーション空間の狭域性→広域性、(7) コミュニケーション技術・手段の低次性・単純性→高次性・複合性、(8) 送り手の私人性→集団性・組織性など」で (岡田, 1992, 11) コミュニケーション・メディアの特性や相違を具体的に分析し、特性を浮かび上がらせている。

実際の被災地におけるコミュニケーションをこの3層に構造化して考察してみると、すでに災害情報論で指摘されているように、マス・コミュニケーションは、災害が発生したときに広域的、画一的に、一般化して伝達することができ、広域な状況が把握できるような情報を提供できるため、メディアとしては、効果的とされる。

中間的・特殊関心のコミュニケーションは、受け手はマス・コミュニケーションよりも少なくなり、特定の人々となり、災害時に例えるならば各被災地の被災者と想定ができる。そしてその被災者が必要とするような、家屋の倒壊、人的被害などの被害情報や避難所開設などの避難所情報、給水情報や炊き出しや仮設風呂などの緊急生活情報といった、地域内の情報を提供することに効果的である。災害時でなければ、ミニコミ誌などがあげられる。

一番下の対人コミュニケーションは、災害時であるならば、家族や知人の避難状況や安否

など個人的なコミュニケーションになるので、会話、電話、手紙などのメディアがあげられる。

しかし、こうした災害情報論の議論に見落としがあるとすれば、実際の災害において、中間的・特殊関心のコミュニケーションでは、双方向的なやり取りが活発であり、マス・コミュニケーションの一方向性の中にパーソナル・コミュニケーションの双方向性が内包され展開していることがある。これを説明するために、ここでは竹内の社会的コミュニケーション回路を援用する。

### 5-3-2 社会的コミュニケーション回路からの分析

竹内の社会的コミュニケーションの基礎単位というものは、人間の個体ないし集合体が、自ら内部で処理した情報を何らかのチャンネルを媒介して相互に伝達し合う、開かれたものとしてモデル化できるとする。そこで、3つの観点をあげている。

一つ目は、情報媒体としてのチャンネルの性格に関するもので、「パーソナルな回路」と「媒介的回路」である。社会的コミュニケーションの回路は、記号搬送体の種類によって類型化することが可能で、人間それ自身を記号の搬送体とする「対面的回路」あるいは「パーソナル回路」と、何らかの工夫された媒体を通じて記号が搬送される「媒体的回路」と大きく分けることができる。

二つ目は、回路の社会的位置づけに関するものとしての類型である「公的回路」と「私的回路」である。つまり社会的コミュニケーションの回路は、「公的」なもの、「私的」なものと類別することができる。ところで、災害など社会や組織体が危機状態にあるとき、「公的回路」に対するコントロールは強化される。しかし、危機状態であればあるだけ、社会や組織体の成員は情報を欲し、適応の手掛かりを求めようとする。こうした背景のもとで、「公的回路」による空白を埋めるための「私的回路」が形成され、流言が発生する。流言はたしかにアノーマルな報道形態である。しかし、もともと「公的回路」がノーマルな機能を果たさないが故にこそ、それを補完するものとして流言が発生するのである。

三つ目は、情報の流れの方向性に関するもので、「直流回路」と「交流回路」である。社会的コミュニケーションは、原理的には、二つ以上の「情報処理体」の間における、メッセージの交換過程であるが、現実の回路はその相互性の程度にかなりのバラエティがある。比較的均等にメッセージ交換が行われている回路もあれば、特定の「情報処理体」がほとんど一方的にメッセージ伝達の機会を独占している回路もある。ここでは仮に前者を「交流回

路」、後者を「直流回路」と呼ぶことによって、社会的コミュニケーションの回路を類型化するならば、現実の回路はそれぞれの差を持ちながらも、二つの類型のいずれかに属することになる。

従来、マス・コミュニケーションとパーソナル・コミュニケーションとの決定的なちがいとして、メッセージ交換の相互性の有無ということが指摘されてきた。つまりパーソナル・コミュニケーションの場合には「送り手」と「受け手」の役割交換が自在に行われ、コミュニケーションの当事者は、お互いに相手からのメッセージをフィードバックしながら、自らのメッセージを伝達するという双方向性が存在する。中間的コミュニケーションも同様に、「送り手」と「受け手」が固定化せずに、「受け手」が「送り手」になることで、双方向性が実現する。これに対して、マス・コミュニケーションの場合には、「送り手」と「受け手」の役割が固定化され、メッセージの流れも一方的となり、「受け手」の反応を「送り手」にフィードバックすることは、きわめて困難である。

以上の三つが、社会的コミュニケーションの回路を類型化するための観点である。

こうした社会的コミュニケーションの回路類型から、臨災局について考察する。臨災局は被災地という地域内の情報を特定の人、つまり被災者に情報を伝達し、被害の軽減を目的とする。伝達する受け手は被災者が中心であり、伝達は自治体やマス・コミュニケーションのように一方向的である。しかし、災害に対して適切な対応をするためには、現場の実態をフィードバックする必要がある。その意味で、災害におけるコミュニケーションは、常に双方向性を必要とする。災害の緊急段階、応急段階、復旧・復興段階において、こうしたフィードバックは常に求められる。当然のことながら、臨災局が設置されたときは、当面は行政情報を提供しているが、その後に被災者からの情報を取り入れ、被災状況などを提供するために、双方向性による情報提供へと切り替わるのである。

次に事例から考察をする。まずりんごラジオであるが、りんごラジオは設置されたときから町民のインタビューを交えながら、バランスのとれた情報を提供していた。つまり、行政からの情報といっしょに町民と対面しながらの情報収集を行い、一方向的な情報提供だけではなく、双方向的に情報を収集し、情報をミックスさせていたのである。この状態を社会的コミュニケーション回路に置き換えると、高橋は、最初から、りんごラジオの放送席を、役場ロビーに設置し町民とのフェイス・トゥ・フェイスの対応が可能なようにした。つまり、スタジオが町民のスペース・メディアとして、役割を果たすことができるようと考えていたことがわかる。そして開局初日から行政の情報ばかりではなく、町民のインタビューを取り

込み公的回路からの情報だけではなく、私的回路からの情報をバランスよく取り入れて双方の情報を初日から提供した。

ひばりエフエムは、マス・コミュニケーションのように一方向的な情報を伝達していたが、リスナーからのクレームと今野チーフディレクターの発案で、市民の意見や経験を盛り込んだ番組を制作したのをきっかけに、一方向的な情報伝達から双方向的情報の伝達システムへと切り替えた。またひばりエフエムが 2016 年 7 月 12 日に 5 年 4 ヶ月ぶりに小高地区の避難指示準備区域の解除と常磐線の再開を祝する特別番組では、通常放送している南相馬市役所（原町区）のスタジオからの放送ではなく、およそ 12 キロ離れた小駅前から生中継を行った。そうした中継において、小高区に在住するゲストを招いて、将来の小高地区について語る企画が放送された。放送自体は、原町区の南相馬市役所のスタジオに小高区のゲストを招いて放送することも可能であるが、そこはあえて現地で放送を行い、そこで対面しながら、その場を共有することが重要な意味をなすものと解することができる。

社会的コミュニケーションに照らし合わせると、公的回路による情報提供に偏っていたが、聴取者のクレームから私的回路を生かした放送運営に移行した。そしてその後は、一方的な放送から双方向的な放送を織り込んでいったのである。

さらに、おだがいさま FM は全国に町民が避難している現状を考えると、どのようにして双方向性を担保するのかは難しい面があるものの、パーソナリティと富岡町福協職員を兼任する吉田は、番組の方針について 3 点をあげている。①富岡町のことを思い出してもらえる番組であること、②人の名前を出すことで安否情報につながる放送を行う、③富岡の言葉を使うことで、孤独感を解消してもらう——この 3 点に留意しているという。この 3 点に共通していることは、マス・コミュニケーションのような一方向的な情報伝達ではなく、対人的なコミュニケーションに近いということである。おだがいさま FM はリスナーが全国に避難しているというハンディがあるものの、こうした放送方針から、双方向的な放送を担保しているのである。

以上、臨災局の「サロン」的特徴をメディア研究の局面から捉えたとき、その実態は、中間的コミュニケーションに位置し、被災者の問題関心に特化したものであるといってよい。こうした被災という特殊関心のコミュニケーションから分析すると、臨災局は、自治体が被害を最小限にとどめるために設置するラジオ局であることから、最初は地震であれば、震度やマグニチュードや余震などの災害情報、そして行動指針を示す避難勧告等の避難情報、避難所の開設情報、道路、鉄道など公共交通機関の情報などが続く。そして、復旧・復興段階

においては、直接的な被害軽減情報より、復旧・復興における様々な問題を解決するための場の提供へと臨災局の役割は、時々刻々と変化していく。こうした過程の中で、臨災局の存在そのものが、復旧・復興における問題のありようを示すものとなっている。

#### 第4節 放送制度としての問題点

臨災局は阪神・淡路大震災を契機に、被災者に被害情報や生活情報などを提供し、被害を軽減するために制度化された、臨時であり、一時的なメディアである。つまり公共電波を使用するにしても、一時的な緊急避難の要素が強いラジオ局である。にもかかわらず閉局の時期や閉局を勧告するなどの規定がないのが現状である。

補足すると、臨災局は、災害時におけるラジオ局であり、緊急性を要するために開局に向けての書類等は後日という措置がとられる。そして、総務省としては災害に関するラジオということからラジオ局と被災者との問題であるために、閉局に関することは「所期（期待しているところの）の目的」が達成された時としている。

このように、臨災局は特殊なメディアといわざるを得ないが、放送が長期化することで、地域復興と向き合い、被災住民を復興への意識に目を向けさせ、そして国、自治体主導というトップダウンではなく、住民自ら考え議論を重ねていくようなボトムアップの復興を促す放送活動をすることができるメディアとも、いえるのである。それは、被害の軽減という設置目的から逸脱したとしても、閉局という定義があいまいなことから許される逸脱であり、その逸脱が地域にとっては、むしろ役立つことになったメディアなのである。

事例としてあげた宮城県山元町のりんごラジオ、福島県南相馬市のひばりエフエム、福島県富岡町のおだがいさま FM の 3 局は、いずれもスタジオ兼事務所は、すぐに閉局できるような作りになっている。りんごラジオは役場駐車場に建てられたプレハブが事務所兼スタジオで、またひばりエフエムは、震災直後、市の災害対策本部近くということから市役所の会議室が充てられ、5 年半以上そのまま事務所兼スタジオとして使っている。おだがいさま FM は原発事故の影響で被災地に設置できず、富岡町の仮設住宅群の中に建設された富岡町社協の事務所の中に、事務所兼スタジオが設けられた。

この 3 局とも、ここまで長期化することを考慮して事務所兼スタジオが用意されたわけではなかった。それだけにラジオ局とは思えぬほど、事務所とスタジオと分けられず、防音装置もほとんどない状態で放送が続けられている。

さらに、こうした急ごしらえの状態は、スタジオだけではない。事業体としても同様であ

る。臨災局は、緊急時もしくは応急時に企業体として整える時間がなく、設置され免許人が自治体であるということから、自治体の職員が行政無線の代替として情報等を読み上げるケースがある。一時的な期間であればそうした措置も可能であるが、東日本大震災のように長期化した場合には、専従職員が必要である。事例に照らし合わせれば、りんごラジオ、ひばりエフエムともボランティアであった。しかしその後、2011年4月からの日本財団の支援によって、開局補助金20万円、運営補助金200万円、車両購入費150万円など、1局あたり最大で800万円が支援金として支給された。また国からは市町村を通じて、緊急雇用創出事業補助金が臨災局の運営、人件費に充てられている。

また事例としている3局は、実質的には経営は別のもしくは関連する団体が自治体から委託されている。りんごラジオは、2012年3月から新潟県長岡市のFMながおかの事業会社である長岡移動電話システム会社が、山元町から業務委託を請け負っている。したがって、りんごラジオの職員は、この同会社の職員という資格で働いている。またひばりエフエムは、1996年ころにコミュニティFMの試験放送をしたことから南相馬市の栄町商店街振興組合が、市から委託を受けている。またおだがいさまFMは、ビックパットで開局したミニFMからの引き継ぎから、富岡町社会福祉協議会が町からの委託を受けている。このように臨災局の運営は、本体とはちがう団体もしくは、会社に委託されているのが現状である。こうしたことから、今は特に問題が浮上しているわけではないが、今後はこうした放送現場の雇用等を自治体が直接管理していない状態が続ければ、雇用問題、労働条件などについて、トラブルが発生しないとは否定できない。こうした点においても、組織としての雇用等に関する管理のあいまいさが指摘される。

こうしたあいまいな体制そのものが、東日本大震災という大災害に対応可能な余地を作ってきたともいえるが、こうした余地を生かすだけの被災者の知恵がそこにあったともいえる。本稿において、3局の開局から様々な事例に基づき事象について言及してきたが、吉原が指摘するように、復旧・復興においてフェイス・トゥ・フェイスの関係は重要である。臨災局は、長期化することでこうしたフェイス・トゥ・フェイスの関係を重視する双方向的な形態を放送に織り込んでいった。それだけが、復旧・復興という局面に向き合えるメディアとして、長期化することにつながったといえる。つまり、長期化したから復旧・復興に関わったのではなく、双方向的な放送運営など被災者自身の創意と工夫が行われたから復旧・復興にメディアとして関わり得たのである。

その一方で、長期化していることから臨災局をめぐる様々な問題が浮上する可能性も否

定できない。この3局の臨災局を3年余りにわたって調査してきたが、復旧・復興に関わるなど、地域にとって放送運営は機能的であるが、長期化していることで問題点が内在化しており、見えなくなっている。一つは、放送運営が税金によって賄われている点である。今の状況では、臨災局について異議を唱えにくい状況であるが、そうした公的資金使用についての指摘は、臨災局としての役割が終わりつつあるにもかかわらず、NPOなどの民営化は経済的に目途が立たないために移行できないとするなら問題といえよう。もう一つは、ジャーナリズムとしての機能である。臨災局は、本来一時的で臨時であり、被害の軽減というだけのために創設されたものであるが、放送が長期化することで、自治体の末端機関の要素が強くなりすぎ、表現の自由を奪うことになりかねない。特に南相馬市や富岡町は原発事故の影響を受けているだけに、一般化した放送局の使命として国政や市政、町政に対する矛盾を指摘する機能を待ち望むことも考えられる。

今後の臨災局に関する議論についてだが、先行研究において、市村（2014）は東日本大震災で設置された臨災局について、「臨時災害放送局の概念、定義は大いに拡散した」（市村, 2014, 226）として、「一連の経緯で浮上してきた多くの問題、課題を、放送制度としてどう整理していくべきのか。その議論を始めなければならないだろう」（市村, 2014, 226-227）と述べ、放送制度の見直しを示唆している。また金山智子らによる共同研究、災害とラジオ研究会（2014）は、制度的枠組みの改正ということで「コミュニティ放送局も臨時災害放送局も、コミュニティのための情報伝達や地域活性化、あるいは復興が目的である」と放送制度に関する法的な改正を促すとともに、自然災害や人為災害などを理由とするコミュニティの復興や再生のための「復興FM」を放送法8条（臨時かつ一時の放送）に追加すること」ことを指摘している。

長期化は放送運営の方針に基づいた結果であることが前提であり、長期化したから復旧・復興という解釈には違和感がある。さらに先行研究においては、この臨災局の長期化を放送制度のみから議論していることがあげられる。この問題をこうした狭い枠の中でしかみていないために、出口が見えない議論になっているのではないだろうか。災害情報論、災害社会学と関連づけながら、本稿は論じてきたが、こうした広い視野に立った議論が、必要だと考える。

東日本大震災で設置され、長期にわたって放送を続けてきた臨災局、もしくはいまだに放送を続けている臨災局が、これまでに積み重ねてきた放送内容や番組の企画意図、番組内容、被災者との交流等は、今後起きるであろう災害からの復旧・復興に関わるメディアもしくは

それに代わる情報提供システムにとって、きわめて貴重な災害復旧・復興における資料となりうる。それだけに、放送制度という狭い枠の中での議論に終わらせずに、さらに広い視野からの議論が必要といえる。

## 注

- 1 仙台管区気象台「宮城県気象月報」「地域気象観測年報」「気象統計情報（気象庁ホームページ）」<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>（2016年4月16日最終確認）
- 2 農林水産省が、農林業・農山村の現状と変化を的確に捉え、きめ細かな農林行政を推進するために、5年ごとに農林業を営んでいるすべての農家、林家や法人を対象に調査を実施しているもの
- 3 山元町災害対策本部 2015年2月17日現在
- 4 宮城県住民基本台帳
- 5 宮城県経済センサス
- 6 この「語り継ぐ!私と東日本大震災」は2013年3月1日から11日までに、1日は平間英博副町長、阿部均町議会議長、2日は磯区町星新一、菊池八朗町議会議員、3日は岩佐海苔屋 岩佐志津子、桔梗長兵衛商店 桔梗恵理、5日は中浜小学校 井上剛校長、6日は山元町消防団伊藤由信団長、平間英博副町長、徳本寺 徳泉寺住職 早坂文明和尚、9日は、森憲一教育長、阿部均町議会議長、10日は平田外科病院 平田一夫院長、11日は斎藤俊夫町長。これはりんごラジオのブログで公開している番組プログラムからの引用である。同じ人が2回出演したのか、それとも再放送なのかはブログには記載がない。
- 7 りんごラジオ 2013年3月3日放送「東日本大震災2周年企画「語り継ぐ私と東日本大震災」④桔梗長兵衛商店 桔梗理恵さん」からの聞き取り。りんごラジオでは、放送したものを録音しているが、一切公開していない。この記録は筆者が、この企画に合わせ、自分のパソコンを使用してサイマルラジオから録音し、文字起ししたものである。
- 8 斎藤俊夫山元町町長聞き取り調査（日時：2015年3月11日午後4時半から、場所：山元町公民館）
- 9 平間英博山元町副町長聞き取り調査（日時：2013年3月1日午後1時から、場所：山元町役場副町長室）
- 10 平間副町長聞き取り調査
- 11 NHK 東日本大震災 音声アーカイブス 高橋厚 取材日 2012年3月  
<http://www.nhk.or.jp/voice311/interview/index.html?itemid=22>
- 12 高橋厚（b）に対する聞き取り調査（日時：2013年3月1日 時間：午後2時 場所：りんごラジオ）
- 13 岩佐孝子町議会議員聞き取り調査（日時：2015年5月12日、場所：山元町自宅、時間：午前10時から12時）
- 14 高橋厚りんごラジオ放送局長は、2014年12月17日に自宅で倒れ、脳梗塞のため入院、手術を行った。およそ半年後の5月1日に退院し、リハビリを行っていたが、7月24日に復帰した（河北新報、2014年12月29日付）まだ言葉に少し障害が残っている（2016年1月26日時点）、徐々に回復してきている。妻真理子さんは夫厚さんが入院したため、厚さんの代役として局長代理を務めている
- 15 山元町の地区名
- 16 高橋厚聞き取り調査（a）（日時：2012年11月19日、時間午後1時30分、場所：中央公民館）
- 17 2013年1月24日午前6時10分配信（河北オンラインニュース）  
<http://www.kahoku.co.jp/>
- 18 前掲平間副町長聞き取り調査
- 19 高橋厚聞き取り調査（b）
- 20 前掲平間副町長聞き取り調査
- 21 前掲平間副町長聞き取り調査

- <sup>22</sup> 宮城県山元町斎藤俊夫町長に対する聞き取り調査（日時：2015年3月11日、時間：午後4時30分、場所：山元町中央公民館）
- <sup>23</sup> 混声合唱
- <sup>24</sup> 合唱
- <sup>25</sup> 市民メディア集会にて行われたシンポジウム「災害を超えて日常を支える継続可能なコミュニティ放送のあり方とは？」からの発言（開催日時：2012年10月28日、場所新潟県上越市）
- <sup>26</sup> 前掲平間副町長聞き取り調査
- <sup>27</sup> 前掲市民メディア集会にて行われたシンポジウムでの発言
- <sup>28</sup> 橋元伸一町議会議員聞き取り調査（日時：2016年1月27日午後1時、場所：橋元商店にて）
- <sup>29</sup> 2013年12月14日付けりんごラジオブログ  
<http://ringo-radio.cocolog-nifty.com/blog/2013/12/post-c4a0.html>
- <sup>30</sup> 高橋厚聞き取り調査（C）（日時：2014年4月20日午後9時～午後9時30分、場所：りんごラジオ）
- <sup>31</sup> 2014年4月11日「討論！きらりやまもと」から採録
- <sup>32</sup> 森久一氏は町職員出身で1995年から2007年まで3期12年町長を務めた。しかし4期目を狙った2007年2月の町長選挙で落選した。
- <sup>33</sup> 2014年4月21日付りんごラジオブログ  
<http://ringo-radio.cocolog-nifty.com/blog/2014/04/post-1b63.html>
- <sup>34</sup> 高橋厚聞き取り調査（日時：2014年4月21日 午前9時30分～午前10時、場所：りんごラジオ）
- <sup>35</sup> [http://www.city.ushiku.lg.jp/kouhoushi/2004\\_02\\_15/03fm.htm](http://www.city.ushiku.lg.jp/kouhoushi/2004_02_15/03fm.htm)
- <sup>36</sup> 中澤勝巳聞き取り調査（日時：2015年1月22日 午後1時～午後2時30分、場所：エフエムなとり）
- <sup>37</sup> 福島県には13市ある。人口別順位は以下の通り。①郡山市328,816人②いわき市326,169人③福島市283,145人④会津若松市122,715人⑤須賀川市76,940人⑥南相馬市⑦白河市62,724人⑧伊達市62,185人⑨二本松市56,386人⑩喜多方市49,819人⑪田村市37,833人⑫相馬市35,472人⑬本宮市30,482人となっている（2010年国勢調査）
- <sup>38</sup> 南相馬市統計集  
<http://www.city.minamisoma.lg.jp/index.cfm/8,4226,c,html/4226/20150318-100346.pdf>  
最終更新2016年11月18日
- <sup>39</sup> 復興庁では、東日本大震災による負傷の悪化などにより死亡し、災害弔慰金の支給等に関する法律に基づき、当該災害弔慰金の支給対象となった者としている
- <sup>40</sup> 2012年10月31日放送 京都三条カフェ「被災地支援ラジオ」ポッドキャストからの引用 <http://797podcast2.seesaa.net/category/14334054-1.html> 2016年7月25日最終更新
- <sup>41</sup> 日本国際ボランティアセンター 南相馬日記  
<http://www.ngjvc.net/jp/projects/touhoku-msdiary/> 2016年7月6日最終更新
- <sup>42</sup> 前掲日本国際ボランティアセンター 南相馬日記
- <sup>43</sup> 前掲今野聰聞き取り調査（B）
- <sup>44</sup> 前掲今野聰聞き取り調査（B）
- <sup>45</sup> 前掲今野聰聞き取り調査（B）
- <sup>46</sup> 南相馬ひばりFMパーソナリティ小林由香聞き取り調査（日時：2016年5月9日、午前10時から10時30分、場所：南相馬ひばりFM事務所兼スタジオ内）
- <sup>47</sup> 今野聞き取り調査（C）（日時：2016年5月9日、午後12時から午後1時、場所：南

- 相馬ひばり FM 事務所兼スタジオ内)
- 48 前掲今野聞き取り調査 (C)
- 49 前掲今野聞き取り調査 (A)
- 50 前掲 2012年10月31日放送 京都三条カフェ
- 51 前掲今野聞き取り調査 (C)
- 52 2012年10月29日新潟県上越市にて開催、市民メディア全国集会くびき野メディアフェス「災害を超えて日常を支える継続可能なコミュニティ放送のあり方とは?」、シンポジウムからの引用、
- 53 前掲今野聴聞き取り調査 (A)
- 54 前掲 2012年10月29日
- 55 前掲今野聞き取り調査 (A)
- 56 前掲今野聞き取り調査 (B)
- 57 前掲今野聞き取り調査 (B)
- 58 <http://hibari-fm.blogspot.jp/> 2016年8月15日最終更新
- 59 南相馬ひばり FM ホームページ (<http://hibarifm.wixsite.com/870mhz/yuumiri>) 最終更新 2016年9月10日
- 60 前掲南相馬ひばり FM ホームページ
- 61 前掲今野聞き取り調査 (B)
- 62 ひばり FM パーソナリティ小林由香と荒いすみ聞き取り調査 (日時: 2016年7月15日、場所: ひばり FM スタジオ、時間: 午前11時から午前11時30分)
- 63 <http://hibari-fm.blogspot.jp/> 2016年8月15日最終更新
- 64 <http://together.com/li/447219>からの引用 最終更新 2016年10月9日
- 65 前掲小林、荒聞き取り調査
- 66 前掲今野聴聞き取り調査 (A)
- 67 前掲今野聴聞き取り調査 (B)
- 68 原子力規制委員会ホームページ: <http://radioactivity.nsr.go.jp/map/ja/area.html> (最終更新 2016年8月30日)
- 69 2016年6月23日午前10時からの「環境放射線モニタリング」を録画したものからの引用
- 70 前掲今野聴聞き取り調査 (A)
- 71 前掲今野聴聞き取り調査 (A)
- 72 町勢要覧資料編 統計とみおか平成22年度版
- 73 富岡町社会福祉協議会主幹兼業務係長 (調査時点) 吉田恵子聞き取り調査 (日時: 2015年7月11日、時間、午後3時30分、場所: おだがいさま FM)
- 74 おだがいさまセンターホームページ <http://www.odagaisama.info/> 最終更新 2016年9月23日
- 75 朝日新聞 2014年12月16日付『プロメテウスの罠』
- 76 WEB サイト『いいべ!郡山』 <http://e-be.info/> 2016年11月20日最終更新
- 77 WEB サイト『いいべ!郡山』
- 78 数百m前後しか届かないような微弱な電波を使って行なう小規模の FM 放送。電波法の規制外の電波強度のため、電波監理局の免許はいらない。
- 79 2014年2月1日開催のフォーラム「防災・復興・まちづくりとコミュニティラジオの底から」の講演から引用
- 80 NPO 法人富岡町スポーツクラブ佐藤勝夫聞き取り調査 (日時: 2014年7月19日、時間: 午前10時から午後12時、場所: 福島県大玉村 富岡町仮設住宅内集会場, )
- 81 1997年から4期16年富岡町町長を務め、2013年の町長選挙で敗れた。2014年7月死去
- 82 朝日新聞 2014年12月17日付『プロメテウスの罠』

- <sup>83</sup> 朝日新聞 2014年12月18日付『プロメテウスの罠』
- <sup>84</sup> 福島県折込広告社発行『あ・ら・か・る・と』2012年12月号
- <sup>85</sup> 富岡町企画課長補佐兼広聴広報課係長植杉昭弘聞き取り調査（日時：2014年8月12日、時間：午前10時～午前11時30分、場所：富岡町郡山事務所）
- <sup>86</sup> 前掲富岡町企画課長補佐兼広聴広報課係長植杉昭弘聞き取り調査
- <sup>87</sup> 富岡町社会福祉協議会次長兼いわき支所長 吉田恵子聞き取り調査（B）（日時：2014年5月3日、時間午後2時から午後4時、場所：おだがいさまセンター）
- <sup>88</sup> 朝日新聞 2014年12月22日付『プロメテウスの罠』
- <sup>89</sup> 前掲 2014年2月1日開催のフォーラムでの講演からの引用
- <sup>90</sup> 株郡山コミュニティ放送（福島県郡山市清水）2010年1月開局
- <sup>91</sup> おだがいさま FM パーソナリティの久保田彩乃 聞き取り調査（日時：2016年6月24日、時間：午前10時から11時、場所：おがだいさま FM）
- <sup>92</sup> 前掲久保田彩乃聞き取り調査
- <sup>93</sup> 前掲富岡町社会福祉協議会次長兼いわき支所長 吉田恵子聞き取り調査（B）
- <sup>94</sup> 前掲 NPO 法人さくらスポーツクラブ理事 佐藤勝夫聞き取り調査
- <sup>95</sup> 前掲 NPO 法人さくらスポーツクラブ理事 佐藤勝夫聞き取り調査
- <sup>96</sup> 1944年3月17日生まれ
- <sup>97</sup> 遠藤祝穂聞き取り調査（日時：2016年9月15日、時間：午後2時から午後3時30分、場所：喜多方市絆交流サロン、）
- <sup>98</sup> 前掲遠藤聞き取り調査
- <sup>99</sup> 前掲遠藤聞き取り調査
- <sup>100</sup> 前掲遠藤聞き取り調査
- <sup>101</sup> <http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~iwamiya/timbre/soundscape.htm> 最終更新 2016年9月30日
- <sup>102</sup> 前掲久保田彩乃聞き取り調査
- <sup>103</sup> 前掲久保田彩乃聞き取り調査
- <sup>104</sup> 前掲久保田彩乃聞き取り調査

## 引用文献

- 秋元律郎 (1982) 「災害期における緊急社会システムと組織対応」秋元律郎編『現代のエスピリ 181 都市と災害』至文堂
- 天野和彦 (2011) 「「おだがいさまセンター」が生まれた理由」『生きている 生きてゆく ビックパレットふくしま避難所記』「ビックパレットふくしま避難所記」刊行委員会
- 浅岡隆裕 (2006) 「道具としての地域メディア」丸田一、國領二郎、公文俊平編『地域情報化 認識と設計』NTT出版
- 遠藤祝穂 (2012) 『FM 郡山原稿』
- 福田アジオ、新谷尚紀、湯川洋司、神田より子、中込睦子、渡邊欣雄編 (2000) 『日本民俗大辞典』
- 船津衛 (1994) 『地域情報と地域メディア』恒星社厚生閣
- Gary Gumpert,1987,Talking tombstones and other tales of mediaage,New York:Oxford University Press,1987 (=1991,石丸正,『メディアの時代』新潮選書)
- 平塚千尋 (2012) 『新版 災害情報とメディア』リベルタ出版
- 廣井脩 (1991) 『災害情報論』恒星社厚生閣
- 市村元 (2014) 「被災地メディアとしての臨災局—30 局の展開と今後の課題—」吉岡至編『地域社会と情報環境の変容』関西大学出版部
- 今井照 (2014) 『自治体再建 原発避難と「移動する村」』筑摩書房
- JCBA 東北コミュニティ放送協議会,特定非営利活動法人 東日本地域放送支援機構,東北総合通信局編 (2012) 『今後に備えて 臨災局等の手引き ~東日本大震災の経験を生かすために~』特定非営利活動法人東日本地域支援機構
- 金子郁容 (1996) 『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波新書
- 北村順生 (2013) 「社会情報学と地域メディア」『社会情報学 第1巻3号 2013』
- 紺野望 (2010) 『コミュニティ FM の進化論』ショパン
- MacIver,Robert M.,1917-1924,Community,a Sociological Study:Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life,London:Macmillan(1975,中久郎・松本通晴監訳『コミュニティー社会学的研究:社会生活の性質と基本法則に関する試論』ミネルヴァ書房)

- 松井克浩（2012）「防災コミュニティと町内会」吉原直樹編『防災の社会学—防災コミュニティの社会設計に向けて〔第二版〕』東信堂
- 松本恭幸（2016）『コミュニティメディアの新展開』学文社
- 松浦さと子（2008）「非営利放送とは何か」松浦さと子・小山帥人編『非営利放送とは何か』ミネルヴァ書房
- 南相馬市（2013）『東日本大震災 南相馬市災害記録』南相馬市
- 宮原浩二郎（2006）「『復興』とは何か—再生型災害復興と成熟社会」『先端社会研究』  
(5) 関西学院大学出版会
- 森茉莉（1957）『父の帽子』筑摩書房
- 岡田直之（1992）『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会
- 渋井哲也（2014）「南相馬で暮らす市民を支えた医師達」渋井哲也,村上和巳,渡部真,太田伸幸編『震災以降』三一書房
- りんごラジオ（2011）『放送記録』
- りんごラジオ a（2014）『りんごラジオ特別番組『きらり！やまもと・町長選挙』』
- りんごラジオ b（2014）『進行表 「りんごラジオ特別番組～きらり！やまもと町長選挙～」進行表』
- 災害とコミュニケーションラジオ研究会編（2014）『小さなラジオ局とコミュニティの再生』大隈書店
- 坂田謙治（2012）『「声」の有線メディア史—共同聴取から有線電話を巡る〈メディアの生涯〉』世界思想社
- 高橋厚（2013）「小さな町のラジオ発—臨災局」『国語 中学2年生』光村図書
- 高橋厚（2015）「地域住民が立ち上げたラジオ局—宮城県・山元町「りんごラジオ」」  
丹羽美之・藤田真文編『メディアが震えた』東京大学出版会
- 竹内郁郎（1990）『マス・コミュニケーションの社会理論』東京大学出版会
- 田中淳（2007）「災害情報と行動」大矢根淳、浦野正樹、田中淳、吉井博明編『災害社会学入門』弘文堂
- 田中角栄（1972）『日本列島改造論』日刊工業新聞社
- 宇野常寛（2015）『リトル・ピープルの時代』幻冬舎文庫
- 浦野正樹（2007）「災害社会学の岐路」大矢根淳、浦野正樹、田中淳、吉井博明編『災害社会学入門』弘文堂

山岸美穂（1999）「サウンドスケープの社会誌」山岸美穂・山岸健『音の風景とは何か』  
日本放送出版会

山元町誌編纂委員会編（1971）『山元町誌』第1巻

山元町誌編纂委員会編（1986）『山元町誌』第2巻

吉川忠寛（2007）「復旧・復興の諸類型」浦野正樹、大矢根淳、吉川忠寛編『復興コミュニティ入門』弘文堂

吉原直樹（2013）『「原発さまの町」からの脱却』岩波書店

吉原直樹（2016）『絶望と希望』作品社

柳美里（2012）『沈黙より軽い言葉を発するなけれ』創出版

Wiebe,G.D., (1955) : "Mass Communications,"in E.L. Hartley and R.E.Hartley ,Fundamentals of Social Psychology,Knopf